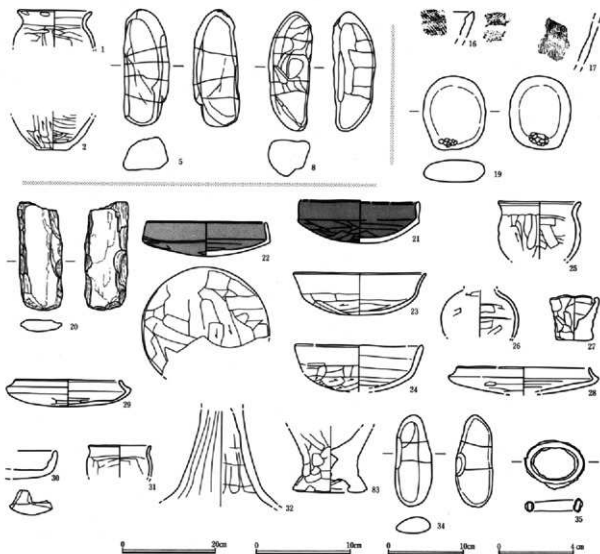


第3章 発見された遺構と遺物



第167図 H-83号住居出土遺物

カマドは東カマドで、東壁中央やや南寄りに造られている。このカマドは住居の掘り方面まで掘削される楕円状のプランを呈する掘り方を有する。この掘り方を黒褐色土やローム等の土壌で埋め戻して燃焼面を造っている。燃焼部手前側の左側には1個、右側には左右に重ねた2個の礎を立てて袖材としているが、この袖石は燃焼面の埋め戻しと併せて埋め

られており、細かいローム粒を主体とする土壌で袖を造り出している。尚、燃焼部は奥行きが深いので奥側は煙道部に当たる可能性を有している。

床面は南壁寄りの中・東部に浅い落ち込みが見られる。この床面に於いてはカマド右側に隅丸方形プランを呈するピット様の貯蔵穴が掘削されていたが、柱穴・周溝等は確認できなかった。

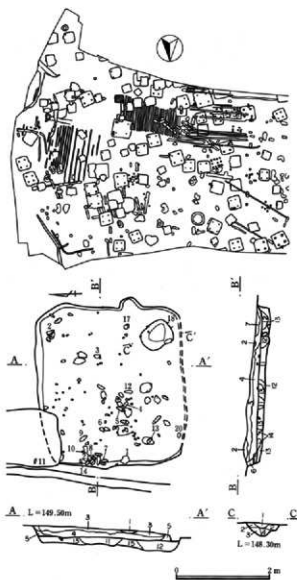
H-84号住居（古墳時代後期、第168～169図、図版31～32・77・95）

概要 本住居はB区南東部の緩斜面手前の平坦部際

を若干削り込んでいる。

に位置する、小型の竪穴住居跡である。本住居の北西隅部は4号土坑に切られて壊されており、また西壁付近はAs-A下品が若干絡んで上位

本住居の出土遺物のうち本住居に伴うと判断されるものには石皿からの転用品らしい台石(1)があり、住居の北東部・中央部・北西部にはそれぞれま



カマド覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

1: 淡赤褐色土: 弱い焼土化の漸移層下層土に灰・炭土・ローム混入。 2: 明茶褐色土: 弱い焼土化の漸移層下層土とロームの混入。焼土・灰混入。 3: 茶褐色土: 漸移層上層土。灰・ローム混入。

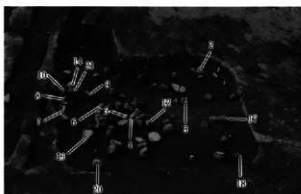
カマド掘り方覆土

4: 淡赤明茶褐色土: 弱い焼土化の見られる漸移層土。 5: 暗褐色土: 漸移層上層土。 6: 茶褐色土: 漸移層土に暗黄色ローム混入。 7: 暗茶褐色土: 漸移層土上層土に暗黄色ローム多く混入。 8: 明褐色土: 暗黄色ロームに漸移層下層土混入。 9: 茶褐色土: 漸移層土に黄色ローム混入。 10: 暗褐色土: 漸移層上層土に黄色ローム混入。 11: 明褐色土: ローム漸移層上層土混入。 12: 暗褐色土: 黒色土とロームの混入。

第168図 H-84号住居及びカマド

りを持つこも編み石 (2~14) の出土が見られた。

一方覆土中からは 6 世紀後半期の特徴を示す土師器の壺 (15,16) や小型壺 (18)、7 世紀後半期の特徴を示す土師器胴張壺 (17) が見られた他、土鏝 (19)



住居覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

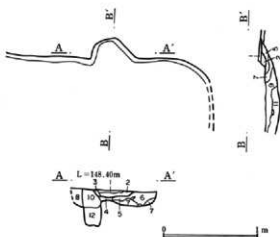
1: 暗褐色土: As-A 含む漸移層土。現耕土に似る。 2: 茶褐色土: 漸移層土ブロック層。 3: 褐色土: 漸移層下層土ブロック層。 4: 暗褐色土: 黒色土・漸移層土・ロームブロックの混入。 5: 明褐色土: 漸移層下層土とロームブロックの混入。 6: 茶褐色土: 漸移層土とロームブロックの混入。 7: 暗褐色土: 2 層土に似るがロームブロック混入する。

住居掘り方覆土

11: 淡茶褐色土: 暗黄色ロームと淡褐色シルトブロックの混入。漸移層上層土ブロック混入。 12: 淡茶褐色土: 11 層土に漸移層土ブロック・黒色土粒多く混入。 13: 明褐色土: 黄色ロームと暗黄色ロームブロックの混入。 14: 褐色土: 漸移層下層土ブロック。 15: 明褐色土: 13 層に似るが漸移層土ブロック混入。

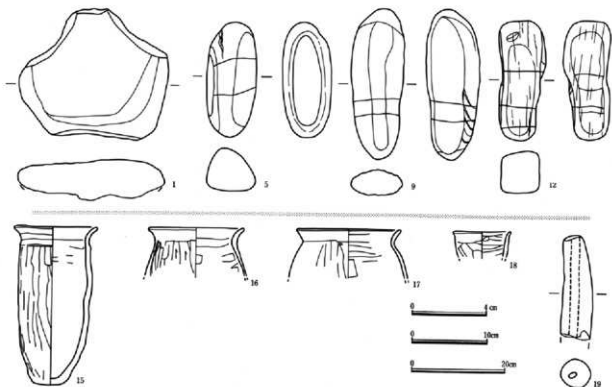
貯蔵穴覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

1: 明褐色土: 漸移層土に少量の黒色土ブロックとローム粒を混入。 2: 黄褐色土: ローム層土と漸移層下層土ブロックの混入。黒色土ブロック混入。 3: 明褐色土: 漸移層土に黒色土とロームブロック混入。 4: 褐色土: 漸移層土に黒色土ブロック・ローム粒混入。



やこも編み石 (20,21) の出土も見られた。

以上のように本住居に伴うと判断された遺物からの遺構の時期特定は不可能なのであるが、本住居がカマドを伴い、6 世紀後半期の特徴を持つ土師器壺



第169図 H-84号住居出土遺物

(15, 16)が比較的低い位置に見られことから本住居の埋没経過の早い段階で投棄されたものと思慮されるため、本住居は6世紀段階(中・後葉か)の所産と推察される。

規模 長軸:345cm 短軸:314cm 深さ:27cm

カマド 残存幅:51cm 残存奥行き:26cm

貯蔵穴 径:68×58cm 深さ:27cm

構造 本住居は隅丸方形のプランを呈するものと思慮される。

本住居は掘り方を有しているが、掘り方には特段の構造等を認めることはできなかったのであるが、住居中央付近に径27×23cm、その南西カマド左袖側手前の位置に径64×51cm、そして北西コーナー付近に径35×20cmの範囲で粘土の分布が認められた。特に前2者は、カマドの構築に伴うものではないかと

思われる。床面は、このような掘り方をシルトやローム或いはローム漸移層土で埋め戻して造り出しているが、貼り床等は施されていない。

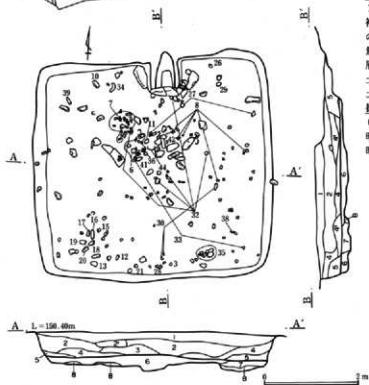
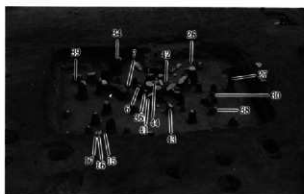
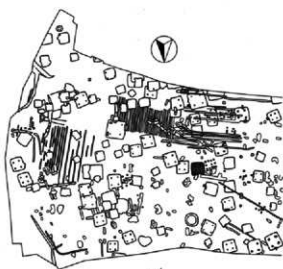
カマドは東カマドで東壁中央やや南寄りの位置に設置され、よく壊されていて平面的にその形態をほとんど知ることはできなかったが、断面観察によってカマドは平底の浅い掘り方を有し、これを黒色土・ローム漸移層土で埋め戻して燃焼面を造り出していることを確認している。また、袖形成に伴う掘り残らししいものを確認し、燃焼部が東壁ラインの内側に設置されていたらしいことは確認している。

床面に於いてはカマド左側手前の位置に、隅丸方形様のプランを呈する丸底の貯蔵穴を確認した。しかし、床面に於いても掘り片面に於いても柱穴等の構造を確認することはできなかった。

H-85号住居(古墳時代後期, 第170~173図, 図版32・77~78・95)

概要 本住居はB区中央部の平坦面やや西寄りに位置する、B区に於いては中型のものに属する竪穴住居跡である。

本住居付近はビットや土坑耕作等の遺構や掘乱が入り、或いは本住居を壊してはいるものの、本住居の掘り込みが深かったために全体としてその遺存状



第170図 H-85号住居

況は比較的良好な状況にあった。本住居の出土遺物はさして多とは言えなかったが、このうち本住居に伴うと判断されたものには6世紀後半～7世紀前半期の特徴を示す土師器の環(1, 2, 4, 3)や高環(5)、甕(6, 7)があり、その他、土師器の小型甕(9)や異形の脚付甕(8)が見られた。また、住居南西コーナー付近にまとまりを持つものなど、こも羅み石(10～20)の出土も見られた。

一方、覆土中の遺物の多くは摺鉢状の分布を以て

住居覆土

1: 暗褐色土・褐色土・炭化物を若干量含む。 2: 暗褐色土: 1層より全体に明るさが増し、褐色土・炭化物の混入は減少する。(2': くすんだ褐色土ブロックが微量に混入する。) 3: 暗黒褐色土。 4: 暗褐色土: 2層土と3層土の混土。(4': 4層よりも黒味が増し、褐色土の混入も少ない。) 5: 暗褐色土: 均質な層で、褐色土ブロックが微量に含まれる。

掘り方覆土

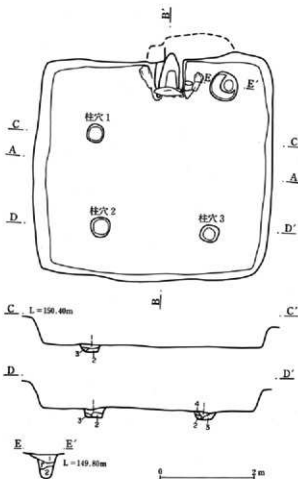
6: 暗黒褐色土: 炭化物が極く微量に混入する。 7: 暗黒褐色土: 黒色土と暗褐色土と褐色土の混土。 8: 暗黄褐色土: 暗黄褐色土中に黒色が少量混入する。

出土して来ているが、特にその底部に当たる住居中央の低いレベルに集中して出土するのが見られた。これらは古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての土師器甕片を中心としており、の中には縄文土器片(22～24)や石器・石製品(21, 25, 26)など縄文時代の遺物が含まれ、また6世紀中葉から7世紀後半期にかけての土師器環(28, 27, 29, 30, 31)、7世紀前半期の土師器高環(32, 33)や6世紀後半期の土師器脚甕(34, 35)が見られた。

須恵器蓋(36)や異形の脚付甕(37, 38)やこも羅み石(40～43)、台石(44)なども見られた。

以上のような出土遺物の所見から、本住居は凡そ西暦600年を前後する時期の所産と判断される。また覆土中の遺物の状態から本住居の廃絶後早い段階で本住居とほぼ同時期の遺物が投棄され、少なくとも奈良・平安期頃までは窪地として本住居の痕跡が残されていたものと思慮されるのである。

第3章 発見された遺構と遺物



規模 長軸：508cm 短軸：480cm 深さ：60cm
 カマド 幅：83cm 奥行き：93cm 左袖 幅：34cm 長さ：79cm 高さ：26cm 右袖 幅：24cm 長さ：73cm 高さ：23cm 燃焼部 径：24×27cm 深さ：0cm 煙道 幅：27cm 長さ：25cm
 柱穴1 径：37×37cm 深さ：14cm 柱穴2 径：41×40cm 深さ：28cm 柱穴3 径：40×36cm 深さ：26cm

貯蔵穴 径：61×58cm 深さ：76cm

床下粘土坑 径：157×122cm 深さ：19cm

構造 本住居はやや丸みを持った方形に近いプランを呈している。

本住居には、西半部の壁際に幅86~140cm、深さ9cm程を測る周溝状の幅広で浅い掘り込みが見られる浅い掘り方を有する。掘り方には周溝状の掘り込みの他に幾つかのピット・土坑様の掘り込みが認められ、住居中央には隅丸方形様のプランを持つ床下土

柱穴覆土

1：暗褐色土：夾雑物見られず。 2：暗茶褐色土：暗褐色土と暗茶褐色土の混土。 3：暗黄褐色土。 4：暗黒褐色土。

貯蔵穴覆土

1：暗黒褐色土：褐色土粒微量に含む。(1'：1層に比し褐色土粒の混入が減少する。) 2：黒褐色土：褐色土粒若干量含む。

カマド覆土

1：暗褐色土：白色土粒微量に含む。(1'：焼土粒と白色土粒を微量に含む。) 2：暗褐色土：1層と近似するが焼土粒が若干量混入する。(2'：焼土粒を微量に含む。) 3：暗赤褐色土：焼土ブロックを若干量含む。 4：赤褐色土：焼土ブロックを多量に含む。

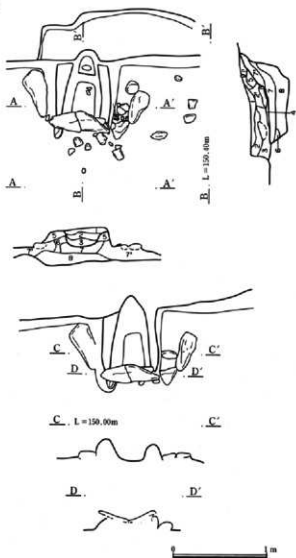
袖溝壁材

5：赤黄褐色土：焼土ブロックと黄褐色土の混土を基本とする。

6：赤色土：焼土ブロック。

カマド廻り方覆土

7：赤黄褐色土：くすんだ灰黄褐色土中に焼土ブロックが若干量混入する。(7'：焼土ブロックは見られない。) 8：黒色土：ロームブロックが微量に混入する。



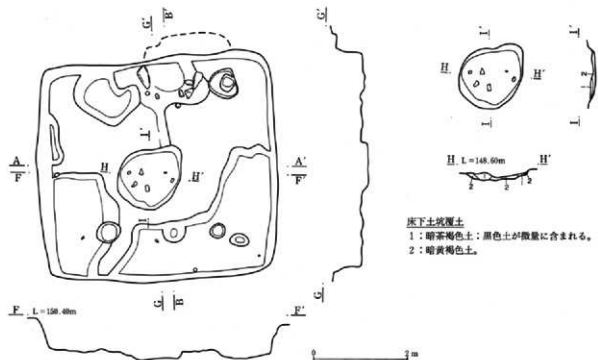
第171図 H-85号住居及びカマド

坑が掘られているが、その性格は特定できない。床はこうした構造を持つ掘り方を黒色土や褐色土、暗黄褐色土等の土壌で埋め戻して造っているが、特に貼り床等の構造は施されていない。

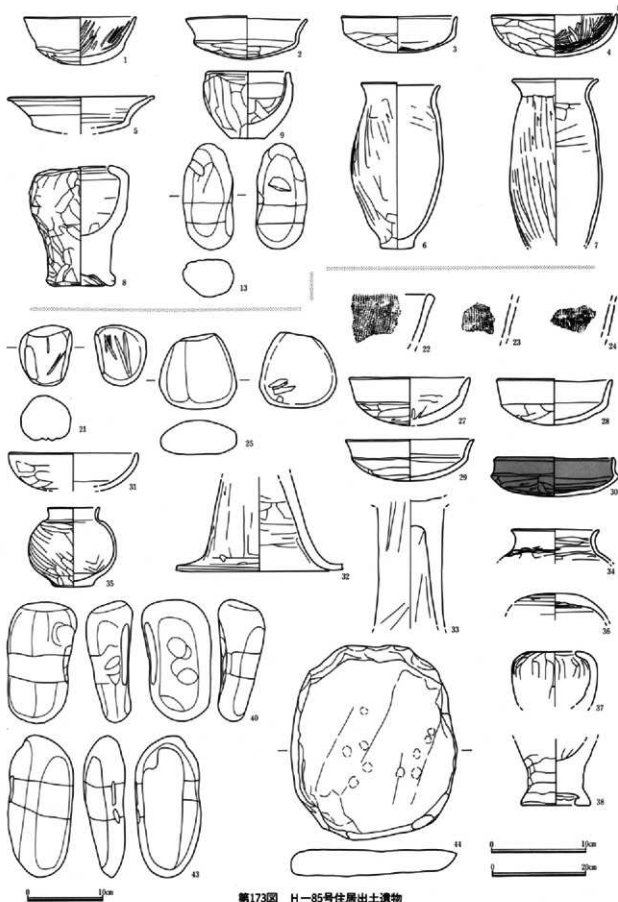
カマドは東カマドで東壁中央の若干南寄りに設置されている。カマドの上位は土坑に切られて15~30cm程削られているが、幸い上述のように遺構が深かったため比較的良好な状態で観察することができた。カマドは幅74cm以上、奥行き46cm程の範囲で深さ14cm程のやや不定形な隅丸方形様のプランを呈する掘り方を有しているが、この掘り方は住居の掘り片面を掘り抜いている。このようなカマド掘り方を黒色土や灰黄褐色土等の土壌で埋め戻して燃焼部と煙道部が造り出されている。このうち燃焼部は東壁面より23cm以上内側に設けられ、床面から見てほぼフラットな状態にある。煙道は燃焼面から15cm程高い位置から設けられているが、煙道の底面は緩傾斜を呈して奥側に僅かに昇っているが、東壁の壁面より10cm奥側のところで奥壁が立ち上がっているため、煙道は燃焼部に接して東壁付近で垂直に昇るような構造を持っていたものと想定される。この燃焼

面と煙道を挟み込むようにその左右に袖が設けられている。この袖は概ね平行な位置関係にあるが、やや膨らみを持ち、奥側で主軸は内側に向かっている。袖は左手前側先端に自然礫を立てて袖材とし、これを黄褐色土や焼土で固めて袖を造り上げている。また、二切していたが袖石の上には横位に天井石が渡されていた。またカマドの左右には大型の礫が置かれており、カマド構造との関係が考慮される。

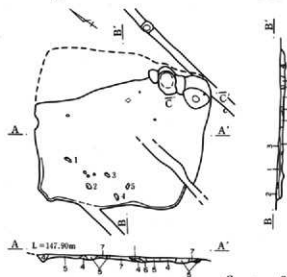
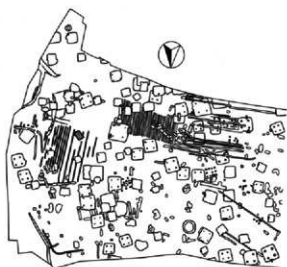
床面に於いては北東・北西・南西の3基の柱穴と貯蔵穴1基を確認している。このうち柱穴は円形のプランを呈するものであるが、その掘り込みは何れも浅いものであり南東側の柱穴については床面に於いても掘り方面に於いても確認できなかった。一方、貯蔵穴はカマド右側に掘削され、上下二段の構造を持っている。このうち上位のものは隅丸方形を基本とする土坑様のもので径60×59cm、深さ10cm程を測る。下位のものは隅丸方形のプランのビット状の形態で上位のものの中南部に径36×30cm、深さ57cmの規模で掘り込んでいる。尚、その主軸は住居の主軸に対して上位のものは若干左に寄る程度であるが、下位のものはかなり右側に振れている。



第3章 発見された遺構と遺物



第173図 H-85号住居出土遺物



H-86号住居(古墳時代後期~平安時代, 第174~175
図, 図版32・78・96)

概要 本住居はB区東部の近世削平面に連なる平坦
面部に位置する、小型の竪穴住居跡である。

本住居は削平によって破壊が進行しており、壁面



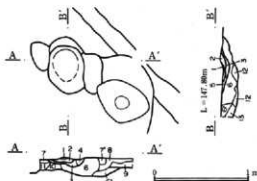
住居覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

1: 暗褐色土: 上層土を中心の漸移層土の混入。 2: 茶褐色土:
1層土にローム・灰白色シルト混入。 3: 明黄褐色土: ローム中心、
掘り方覆土

4: 明褐色土: ロームと漸移層土の混入。 5: 明茶褐色土: 漸移
層土にローム混入。(5': 青灰色シルト混入。) 6: 暗褐色土: 漸
移層土上層土に黒色土・ローム混入。7: 明黄褐色土: ロームブロッ
ク層。漸移層土を若干混入する。

貯蔵穴覆土

1: 淡茶褐色土: 下層土中心の漸移層土にAs-BP混入。 2: 茶褐
色土: 漸移層土の混入。As-BP混入。 3: 褐色土: 2層に似るが
漸移層下層土が多い。 4: 暗褐色土: 漸移層土層土中心。カーボ
ン混入。 5: 明褐色土: 漸移層土とローム層土の混入。 6: 茶
褐色土: 漸移層土とローム層土の混入。 7: 明褐色土: 漸移層下
層土とローム層土の混入。黒色土粒とAs-BP混入。



カマド覆土

1: 赤色土: 焼土ブロック層。天井部の崩落土。
燃焼面(2層は最終燃焼面、3~5層は当初燃焼面)
2: 暗褐色土: 漸移層土に焼土・灰等混入。 3: 茶褐色土: 漸移
層土にローム混入。 4: 明褐色土: 漸移層下層土にシルトとローム
混入。 5: 暗褐色土: 黒色土と漸移層上層土の混入主体。

掘り方覆土

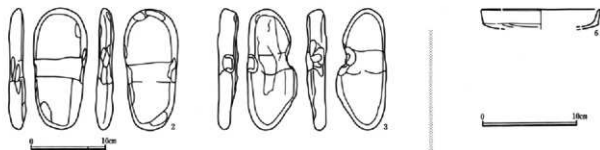
7: 茶褐色土: 漸移層土とロームの混入。焼土・青灰色シルト混入。
(7': 焼土・シルトは含まない。)

カマド及び住居掘り方覆土

6: 黒褐色土: 黒色土にローム多し。(6': 黒色土多し。) 8: 茶
褐色土: 漸移層土にローム多し。 9: 暗茶褐色土: 漸移層土と
ローム・シルト等混入。 10: 明茶褐色土: 6層に似るが黒色土少
ない。 11: 暗褐色土: 漸移層土と黒色土。ローム混入。 12: 黄
褐色土: ロームに漸移層土混入。 13: 明茶褐色土: 住居5層に同
じ。

第174図 H-86号住居

第3章 発見された遺構と遺物



第175図 H-86号住居出土遺物

も東部を中心にその過半が滅失し、更に現在の耕作溝も掘り込まれて床面の検出も苦慮するなど、遺存状況は極めて不良であった。

こうした住居の状況もあって出土遺物も少なく、遺物は覆土も含め土師器を中心に土器片17片とこも編み石5点が出土したに過ぎない。このうち本住居に伴うと判断された遺物は5点のこも編み石(1~5)のみであり、これらは何れも住居西部の床面上に出土した。この他住居東部の中央付近に粘土の分布も見られた。尚、覆土中からの出土遺物は7世紀中葉の所産かと思われる土師器環(6)を図示した。

以上のように出土遺物によっては、本住居の時期を特定はできず、覆土中からの出土遺物から推定することも難しかったため、本住居の時期特定はできなかった。かろうじてカマドを伴うことから、古墳時代後期から平安時代という範囲の中で捕らえることができるに留まった。

規模 長軸:369cm 短軸:332cm 深さ:9cm
 カマド 幅:74cm 奥行き:61cm 左袖 幅:18cm
 長さ:32cm 高さ:0cm 右袖 幅:18cm
 長さ:47cm 高さ:0cm 燃焼部 径:38×52cm
 深さ:6cm 掘り方 径:68×86cm 深さ:11cm
 貯蔵穴 径:48×43cm 深さ:18cm

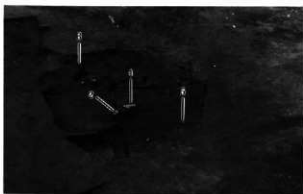
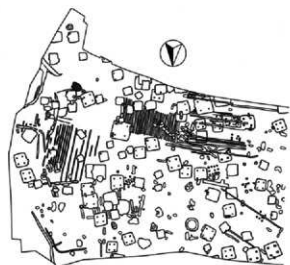
構造 本住居は遺存状況が悪かったのであるが、それに反して以下のような構造に関する一定の所見を得ることができた。

本住居のプランはやや方形に近い隅丸方形を呈している。浅い掘り込みの掘り方を有しているが、掘り方には大きく見ると北壁沿いには幅60cm内外で深さ7cm以下の周溝状の掘り込みが見られ、本住居と

の関連性は特定し得なかったが径24~30cm、深さ30cm以下のものを中心とするピットが北部を中心に多く見られた。また、貯蔵穴周辺も径64×66cm以内の範囲で10cm以内の深さに掘り窪められており、カマド手前部分には径52×63cmの範囲で粘土の分布も見られたが、後者については次に述べるカマド構造とも併せて床下粘土坑と同様の性格を持つものと思慮される。床面はこのような掘り方をロームとローム漸移層土を中心とする土壌で埋め戻して造られているが、貼り床等の構造は見られなかった。

カマドは東カマドで東壁の南部に設置され、住居掘り方面を更に掘り窪めた掘り方を有している。このカマド掘り方は隅丸方形を基本とするらしいプランの浅い掘り込みで、これを黒色土やローム漸移層土・ローム層土等で埋め戻して燃焼面を造り出している。燃焼部は東壁ラインの内側を中心に設定されているようであるが若干東壁ラインを越えて認められる。燃焼部の両側には袖が造られるが、袖の基底部は左右共にローム漸移層下層土・ローム・灰白色シルト(粘土)・焼土粒・黒色シルトの混土によって造られている。この右袖は東壁ラインを越えて設けられており、H-82若しくはH-83号住居と似たような構造を持っていたものと推定される。

床面に於いては、カマド右側に凡そ隅丸方形のプランを呈する貯蔵穴が確認された。貯蔵穴の掘り方は丸底を呈するが、断面観察から或いは底部を埋め戻して平底状にし、径30cm程の筒状の容器等を設置していた可能性も考えられる。尚、柱穴等他の構造物は床面に於いても掘り方面に於いても確認されなかった。



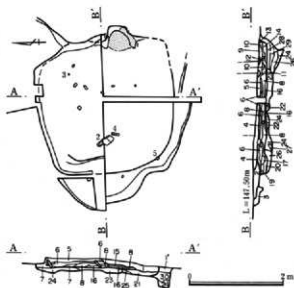
錆作土等（以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする）
 1：耕作土等の埋土。（1'：黒色土とローム。）2：暗褐色土：漸移層土の混土主体。3：茶褐色土：ロームと漸移層土の混土。

住居層土及び貼り床

4：茶褐色土：漸移層土。炭化物やや多し。5・15：茶褐色土／9：暗茶褐色土：漸移層土。6：明褐色土：下層中心の漸移層土主体。7：暗褐色土：漸移層上層土。8：褐色土：漸移層土にローム混入。10：明黄褐色土：ロームに漸移層土・青灰色シルト混入。11：明褐色土：5層に似るがローム多し。12：明褐色土：ロームと青灰色・淡黄色シルト。13：茶褐色土：漸移層上層土にAs-BP多し。14：明褐色土：12層に似るがAs-BP多く含む。16：明黄褐色土：ローム層土中心に漸移層土混ざる。（貼り床）17：茶褐色土：漸移層土にAs-BP混入。19：明褐色土：漸移層上層土・ローム。20：明褐色土：黒色土・漸移層上層土・ローム。

住居掘り方等

21：明黄褐色土：ロームと漸移層土。22：茶褐色土：黒色土とローム。23：明黄褐色土：ロームと漸移層下層土。白色シルト等混入。24：明黄褐色土：ローム主体。25：茶褐色土：漸移層上層土。26：暗褐色土：黒色土と漸移層上層土とローム。27：褐色土：ローム混入。28・29：淡茶褐色土：黒色土と漸移層土とローム。28層は青灰色粘土等混入。30：褐色土：漸移層土にローム等混入。

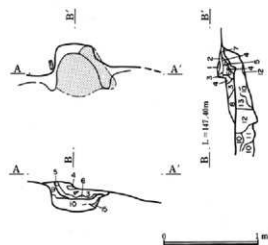


カマド覆土（以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする）

1：褐色土：漸移層土にローム混入。2：淡赤茶褐色土：弱い焼土化見る黒色土・漸移層土・ローム。3：淡赤褐色土：弱い焼土化見る漸移層土にローム・焼土混入。4：赤褐色土：3層に似るが焼土化深く焼土多い。青灰色シルト混入。5：明褐色土：漸移層土とロームの混土。6：暗赤褐色土：焼土化した漸移層土に焼土等混入。7：淡赤黄褐色土：弱い焼土化部の漸移層土にローム混入。8：淡黄褐色土：漸移層下層土に6層土・シルト等混入。9：黄褐色土：ロームに漸移層下層土混入。燃焼部側焼土化。

カマド掘り方覆土

10：明褐色土：ロームに漸移層土・黒色土混入。11：黒褐色土：黒色土と漸移層土の混土にローム混入。12：淡茶褐色土：漸移層土に黄色・暗黄色ロームと黒色土混入。13：明褐色土：ロームと漸移層下層土の混土。焼土混入。15：淡灰褐色土：青灰色シルトに漸移層上層土等混入。燃焼部側やや焼土化し焼土含む。

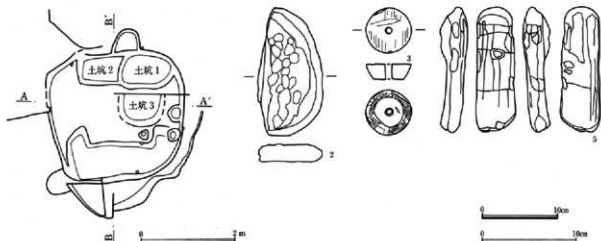


第176図 H-87号住居及びカマド

H-87号住居（古墳時代後期～平安時代、第176～177図、図版33・78・96）

概要 本住居はB区南東部のH-23・28号住居など

9軒の重複住居群のうちの1軒で、小型の竪穴住居



第177図 H-87号住居掘り方及び出土遺物

跡である。本住居はH-23号住居と切り合い関係にあり、これに切られている。

本住居は上面を削平されており、特に南東部は壁面も滅失し、これを確認することができなかった。全体としてかなり確認しづらい遺構であり、サブ・トレンチを施して確認し乍ら調査を進めていった。

本住居の出土遺物は少なく、古墳時代後期から奈良・平安時代頃にかけての土器器片21片と須恵器片2片、そして石製品5点を確認したに過ぎなかった。これらは何れも本住居との関係を特定することができなかった。これらのうち転用品を含むこもろみ石(1,2,4,5)と紡錘車(3)を取り上げた。

このように、本住居に伴うと判断される遺物は無く、従って本住居の時期を特定することはできなかったのであるが、カマドを有すること、そして本住居を切るH-23号住居が8世紀中頃の所産と判断されることから6世紀以降、8世紀中頃以前の所産ということになる。本住居の上部がかなり削平されて残存高が短い中で、その出土遺物の中に奈良・平安期頃の土器器片が見られることから、8世紀前葉前後の時期を推定することもできよう。

規模 長軸：292cm 短軸：254cm 深さ：24cm
カマド 幅：75cm 奥行：56cm 左袖 幅：12cm 長さ：16cm 高さ：17cm 右袖 幅：12cm 長さ：24cm 高さ：8cm 燃焼部 径：46×45cm
掘り方 土坑1 長軸：119cm 短軸：72cm 深

さ：11cm 土坑2 長軸：100cm以上 短軸：60cm

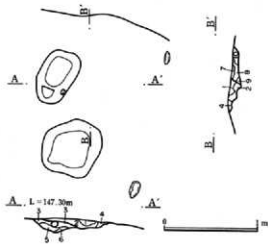
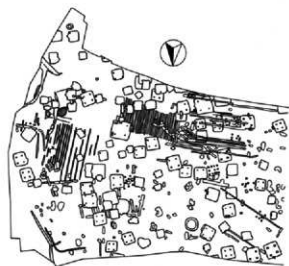
深さ：5cm 土坑3 長軸：98cm 短軸：70cm以上 深さ：4cm

構造 本住居は隅丸方形のプランを呈している。

本住居は掘り方を有する。掘り方の南北両コーナー部分を含む西壁際に幅75cm以下、深さ6cm以内の浅い幅広の掘り込みが見られる。この他、東壁際南西隅部には隅丸方形プランの土坑1、やはり東壁際の土坑1の北側にはこれに切られる方形プラン土坑2、中南部には隅丸方形のプランを呈するらしい土坑3の何れも浅い掘り込みが見られた。また、南壁付近には径21~35cm、深さ25cm以下のピット3基が見られた。こうした構造を持つ掘り方を黒色土・ローム漸移層・ローム等で埋め戻し、この上にロームを中心とした土壌で中央部に貼り床を施している。

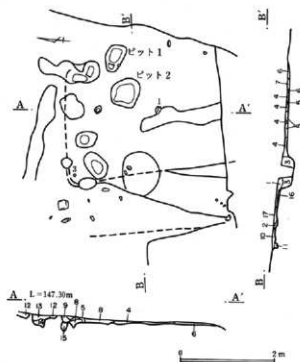
カマドは東カマドで、東壁中央やや南寄りに設けられている。平底状の掘り方を住居掘り方の覆土中に掘り込んで、これを黒色土・ローム漸移層・ローム等の土壌で埋め戻して燃焼面を造っている。燃焼部はほぼ東壁ラインを跨ぐ位置に設けられ、床面とほぼ同レベルである。この燃焼部を挟み込むように短い袖が造られている。尚、削平の進行により、袖・天井の構造を詳しく知ることはできなかった。

床面に於いては貯蔵穴或いは柱穴等の構造を確認することはできなかった。また、こうした構造物は掘り方面に於いても確認することはできなかった。



カマド廻り方型土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

- 1: 暗褐色土: 漸移層土と黒色土の混土主体。部分的に弱く焼土化。
- 2: 茶褐色土: 漸移層上層土主体。上位中心に弱く焼土化。
- 3: 褐色土: 漸移層土主体。
- 4: 淡赤茶褐色土: 焼土化見られる漸移層下層土主体。部分的に層上面が焼土化。
- 5: 暗褐色土: 漸移層上層土主体。極く弱く焼土化。
- 6: 黒色土主体。極く弱く焼土化。
- 7: 淡赤茶褐色土: 4層に似るが焼土化見られる黒色土含み。層上面で部分的な焼土面形成。
- 8: 明褐色土: 5層に似るがローム粒多く混入。
- 9: 明黄褐色土: ローム主体。1層に接する部分に弱い焼土化見る。
- 10: 淡赤茶褐色土: 弱い焼土化見る漸移層土主体。
- 4・7層に近いが焼土化弱い。



擾乱層及び住居(掘り方) 覆土

- 1: 暗褐色土: ローム漸移層土 (以下「漸移層土」とする) にロームと若干の黒色土の混入するブロック層。若干のAs-Aを混入する。
- 2: 茶褐色土: 下層土を中心とする漸移層土にロームの入る細粒のブロック層。
- 3: 茶褐色土: 漸移層土ブロックに暗黄色ローム・黒色シルトとAs-BPの小ブロック混入。
- 4: 暗褐色土: 漸移層土に黒色土・ローム入るブロック層。
- 5: 明黄褐色土: ロームに若干の漸移層土入るブロック層。自然体積の可能性あり。
- 6: 明褐色土: 漸移層下層土ブロックにローム・黒色土粒混入。
- 7: 淡赤褐色土: 6層に似るが焼土化認められる。
- 8: 明褐色土: 漸移層土とロームブロックの混土。
- 9: 明褐色土: 8層に似るがローム粒多く混入。
- 10: 暗褐色土: 漸移層上層土にローム粒混入。
- 11: 明褐色土: 漸移層下層土ブロックにローム粒混入。
- 12: 茶褐色土: 漸移層上層土に粒径の大きなロームブロック混入。
- 13: 茶褐色土: 12層土に似るがロームの粒径小さく。若干のAs-A混入。
- 14: 暗褐色土: 漸移層土・黒色土・ロームブロックの混土。
- 15: 暗黄褐色土: 暗黄色ロームに黄色ロームブロック混入。
- 16: 黒褐色土: 漸移層上層土と黒色土にロームの入るブロック層。極く少量の軽石を混入する。
- 17: 黒褐色土: 漸移層上層土と黒色土にロームの入るブロック層。極く少量の軽石混入。

第178図 H-88号住居

H-88号住居 (古墳時代後期~平安時代。第178~179図。図版33・78・96)

概要 本住居はB区南東部のH-23・28号住居など9軒の重複住居群のうちの1軒であり、小型のものに比定される竪穴住居跡で、上面は床面が特定できないほどに削平され、更に幾つかの耕作溝や土坑等が絡んでいるため遺存状況は悪く、遺構の確認作業も難しく東側の境を認識することはできなかった。

さて、本住居は南にH-28号住居と接して切り合い関係にあるが、本住居を確認した段階が遅かったこともあって、新旧関係を特定することはできなかった。

本住居からは縄文時代から奈良・平安時代頃までの遺物の出土が見られた。しかしその量は少なく、

第3章 発見された遺構と遺物



第179図 H-88号住居出土遺物

更に攪乱や削平による掘り込みも多いため断定はできないのであるが、このうち本住居に伴う可能性を持つ遺物としては転用品を含むこも編み石(1,2)や有孔の石製品(3)が考えられる。

一方覆土中からは、古墳時代後期の土師器甕片を中心に7世紀前半期の特徴を示す土師器環(4)や、縄文時代の石器(5,6)も見られた。

以上のように本住居の出土遺物は少なく、またその時期を特定できるような遺物も認められなかった。覆土中の遺物も攪乱等に伴って入り込んだ可能性があつて、そこからの推定も困難な状況にあつた。かろうじて本住居がカマドを有することから、古墳時代後期から平安時代の間の所産と把握されただけであつた。

規模 長軸：328cm以上 短軸：推定240cm(掘り方面までの)深さ：5cm

カマド 残存幅：75cm 残存奥行き：97cm

ピット1 径：60×37cm 深さ：14cm ピット2
径：60×60cm 深さ：15cm

構造 本住居は上述のように残存状況が不良で、且つその東部と南部を別遺構に切られているので、全

体的構造を知ることはできず、その情報量も少なかったのであるが、本住居のプランは横長の、やや角の丸まった方形を呈するものと想定される。

本住居は床面が特定できず掘り方の覆土から掘り方面に当たるものを調査したのであるがこの掘り方に於いては特段の全体的構造は認められなかった。また住居北部を中心に幾つかの溝・土坑・ピット様の掘り込みが見られたが、これらの多くは本住居に伴わないか、関係を特定することができなかった。

カマドは東カマドで掘り方を有し、これをローム漸移層土等の土壌で埋め戻して燃焼面を造り出しているものと思われるが、燃焼部・袖・煙道等の上部構造は一切残存していないようである確認できなかった。尚、このカマドとの位置関係から、掘り片面に見られたピットのうちピット1はカマド袖材の抜き痕、ピット2はカマド構築に拘わる床下粘土坑である可能性を考慮できよう。

本住居は床面が認識できなかったのでその存在の可能性を否定することはできないが、掘り方面に於いては本住居に伴う柱穴・貯蔵穴等を確認することはできなかった。

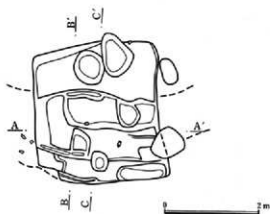
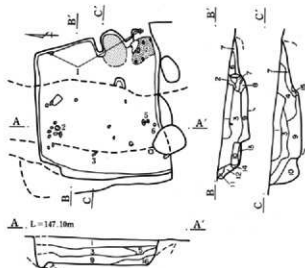
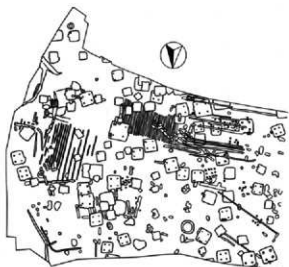
H-89号住居(古墳時代後期, 第180~181図, 図版33・79・96)

概要 本住居はB区南東部のH-23・28号住居など9軒が重複する住居群の1軒で、小型のものに属する竅穴住居跡である。

本住居は4号溝の覆土中に中心を置いて東の地山面にかけて掘削して造られ、西側にはH-28号住居と接して切り合い関係にあつて、これを切っている。また、地形が東に向かってやや強く傾斜しているため、西寄りでは掘り込みは深いものの、東寄りでは

かなり浅くなっており、本住居の主体が4号溝の覆土中に造られているために底面が4号溝に沿って10cm程陥没するなど、その形態には変形も見られ、遺存状態はあまり良好とは言えない状況であつた。

本住居からの出土遺物は少く、このうち本住居に伴うと判断されたものは僅か4点で、7世紀中葉から後葉にかけての特徴を示す土師器環(1,2)と、2点のこも編み石(3,4)が挙げられる。



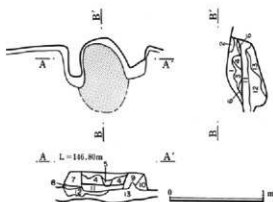
一方覆土中からの出土遺物には、縄文時代から奈良・平安時代にかけてのものが見られ、この中には、燃糸文系の縄文土器片 (5, 6) や石皿 (7)、或いは7世紀前半期の土師器甕 (8) などが含まれていた。

以上のように本住居の出土遺物は少なかったので



住居覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

- 1: 灰褐色土: 現耕土に似るがAs-A含まない。中世ゆ。
- 2: 茶褐色土: 漸移層上層土に漸移層下層土混入。
- 3: 茶褐色土: 2層に似るが漸移層下層土やや少ない。
- 4: 黄褐色土: ロームと漸移層土の混土。
- 5: 褐色土: 漸移層上層土。
- 6: 明茶褐色土: 漸移層下層土主体。
- 7: 茶褐色土: 漸移層土主体。
- 8: 茶褐色土: 2層土に似る。
- 9: 暗褐色土: 漸移層上層土又は黒色土主体。焼土等含む。
- 10: 黒褐色土: 黒色土と漸移層土の混土。ローム混入。
- 11: 茶褐色土: 漸移層上層土。As-BP混入。
- 12: 淡黄褐色土: 漸移層下層土に灰黄色シルト等混入。
- 13: 明黄褐色土: ロームと漸移層土の混土。ロームは地山の可能性あり。
- 14: 明黄褐色土: ローム。
- 15: 淡赤灰色土: 灰黄色シルトと焼土の混土主体。
- 16: 暗褐色土: 漸移層上層土に漸移層下層土等混入。



カマド覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

- 1: 暗褐色土: 漸移層土主体。
- 2: 暗赤褐色土: 焼土化認められる黒色土・漸移層土主体。
- 3: 淡赤褐色土: 弱い焼土化見える漸移層土。
- 4: 暗赤褐色土: 焼土化見える漸移層土に焼土多く含む。
- 5: 明褐色土: 弱い焼土化見える漸移層土主体。
- 6: 黒褐色土: 黒色土と漸移層土の混土主体。

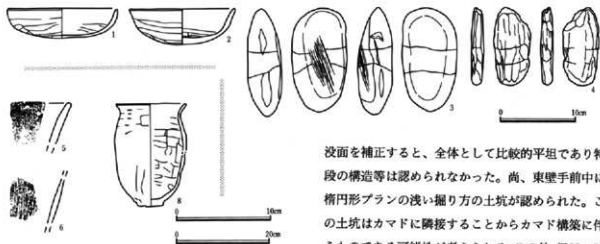
袖溝壁材

- 7: 淡茶褐色土: 暗黄色ロームに漸移層土混入。燃焼面に向かって焼土化進行。
- 8: 暗茶褐色土: 黒色土と漸移層上層土にローム混入。
- 9: 茶褐色土: 7層に似るが漸移層土・焼土多く混入。

掘り方覆土

- 10: 暗茶褐色土: 漸移層上層土に焼土等混入。
- 11: 茶褐色土: 漸移層上層土。焼土等含む。
- 12: 黒褐色土: 黒色土にローム混入。
- 13: 明黄褐色土: ロームに黒色土混入。

第180図 H-89号住居



第181図 H-89号住居出土遺物

あるが、本住居は7世紀後半の所産として把握されよう。また、覆土中の遺物の状況からは、本住居が奈良・平安期頃まではその痕跡を留めていたことが窺われるのである。

規模 長軸：301cm 短軸：270cm 深さ：43cm
 カマド 幅：95cm 奥行き：47cm 左袖 幅：21cm 長さ：45cm 高さ：15cm 右袖 幅：24cm 長さ：36cm 高さ：14cm 燃焼部 径：41×41cm
 カマド掘り方 径：71×91cm 深さ：9cm
 床下土坑 径：77×64cm 深さ：10cm

構造 既に述べたように本住居は4号溝の覆土中に造られていた関係から、住居中央が南北方向に140cm以上の幅で陥没し、更に南・北及び西側の壁面が乱れて検出しにくいなど、その形態は(東部分を除き)少なからぬ変形が認められたが、本住居のプランは概ね方形を呈するものとして推定される。

本住居は掘り方を有するが、その形態は前述の陥

没面を補正すると、全体として比較的平坦であり特段の構造等は認められなかった。尚、東壁手前中に楕円形プランの浅い掘り方の土坑が認められた。この土坑はカマドに隣接することからカマド構築に伴うものである可能性が考えられる。その他、径38～56cm、深さ10～48cmを測るピットが3基見られたが、何れも本住居との関係を特定できなかった。床面はこうした構造を持つ掘り方をローム漸移層土やロームを使って埋め戻して造られている。

カマドは東カマドで東壁の南寄りの位置に設置され、住居掘り方面を更に掘り込む西洋梨状のプランの掘り方を有し、これを黒色土やローム漸移層土・ローム等で埋め戻して燃焼面を造り出している。燃焼面は東壁ラインの内側に設定されている。が、確認された焼土面はで確認されている。袖は燃焼部の両側に設けられるが、袖材等は持たず、黒色土・ローム漸移層土・ローム等の土壌で造られている。尚、燃焼面に伴う焼土面が前後73cm、幅53cmという袖に囲まれた範囲より西側に突出して分布し、これがカマド掘り方と重なるため、袖はもっと長いものであった可能性も考えられる。

尚、床面に於いても、掘り方面に於いても、貯蔵穴・柱穴等の構造を確認することはできなかった。

H-91号住居(古墳時代後期～平安時代、第182～183図、図版34・79)

概要 本住居はB区南東部の2号谷に落ちる斜面手前に位置する小型の竪穴住居跡である。遺構確認段階でおぼろげに認められ、21号土坑から続く一連のサブトレンチの中で確認し、拡張・調査を行った。

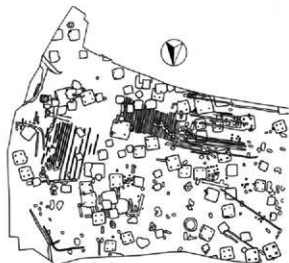
本住居付近は削平が著しく、特に東部は壁面が失われるなど遺存状況は不良であった。

出土遺物は僅かで、何れも本住居に伴うもので

はなく、古墳時代後期の土師器壺を中心としていたが、縄文土器片(1)も見られた。

このような遺物の状態であったので、本住居の時期の特定できなかったが、カマドを有することから古墳時代～平安時代の間の所産として把握される。

また、本住居の北側には第183図に示した住居棟の落ち込みが見られたが、その覆土に当たるものの質

**住居覆土**

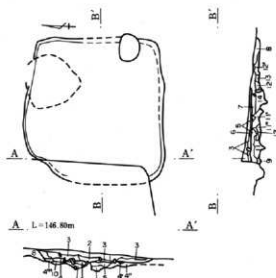
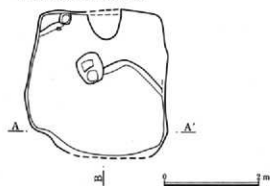
- 1: 茶褐色土: 現耕土に近い土にロームや多く、若干のAs-A混入。
 2: 暗褐色土: ローム漸移層土(以下「漸移層土」とする)と黒色土の混土主体。 3: 茶褐色土: 漸移層土主体。 6: 暗褐色土: 5層土に似るが焼土混入。

陥り床

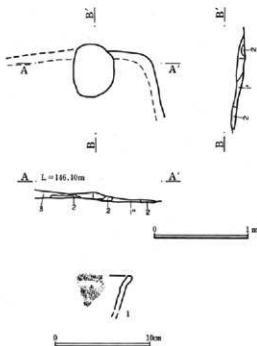
- 4: 明黄色土: 漸移層土とローム。上位でローム水平堆積。(4': 明黄色土: ローム中心の水平堆積。よく締まる。 4'': 茶褐色土: 水平堆積無く、黒色土混入。 4''': 漸移層土主体。) 5: 暗褐色土: 漸移層土にローム混入。14層に比し暗色。やや締まる。

掘り方覆土

- 7: 黄褐色土: ロームと漸移層土。やや締まる。 8: 茶褐色土: 漸移層土層土にローム・黒色土や多く混入。カマド3層に同じ。 9: 暗褐色土: ローム・漸移層土・黒色土。5層に比し締まりに欠。 10: 黒褐色土: 漸移層土層土にローム混入。 11: 明黄褐色土: ローム主体。(11': 10層に比し混入物少なく細粒。 11'': 10層に比し混入物少ない。) 12: 明褐色土: 漸移層下層土にロームと若干の黒色土の入るブロック層。(12': 11層に似るがローム・黒色土の混入が多い。) 13-14: 明茶褐色土: 漸移層土ブロックに層。

**カマド(掘り方)覆土**

- 1: 淡赤茶褐色土: 黒色土とローム漸移層土粒に焼土・ローム粒多く混入する。(1': 暗茶褐色土: 1層に似るがローム・焼土粒少なく、ローム・黒色土ブロックが混入する。 1'': 暗茶褐色土: 1層に似るが焼土粒含まない。) 2: 暗黄褐色土: ローム・暗黄色ロームブロックの混土。 3: 茶褐色土: ローム漸移層土層土にローム・黒色土粒を混入する。住居7層に同じ。



第182図 H-91号住居及び出土遺物

は地山的で、堅穴住居になる可能性は少ない。

規模 長軸: 300cm 短軸: 244cm以上 深さ: 20cm

カマド 残存幅: 45cm 残存長: 55cm

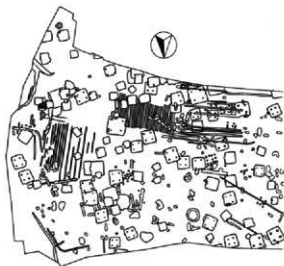
床下土坑 径: 63×56cm 深さ: 44cm 掘り方

ピット 径: 24×22cm 深さ: 18cm

構造 本住居は東半部分が方形、西半部分が隅丸方形のプランを呈している。

本住居は掘り方を有するが、面全体として特段の

第3章 発見された遺構と遺物



構造は認められず、住居中央付近に土坑様の、東壁際北部にビット様の掘り込みが見られた。床面は、こうした構造を持つ掘り方を黒色土・ローム漸移層土・ローム等の土壌で埋め戻して造られ、この上にローム漸移層土とロームで貼り床を施している。

カマドは東カマドで東壁の南寄りの位置に造られる。掘り方を有し、焼土を含むローム漸移層土やローム等の土壌で埋め戻して燃焼面を造るようである。

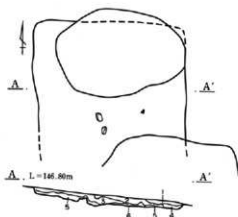
H-92号住居（古墳時代後期～平安時代、第184図、図版34・79）

概要 本住居はB区中南部の平坦部に位置する、B区に於いては中、或いは小規模のものに属する竪穴住居跡である。

本住居付近は耕作溝や土坑等が多く入り、住居南東隅部には土坑2基が絡み、また住居北東部では土坑が本住居を切り、住居中央付近を耕作溝が東西に横切って本住居を壊している。

本住居のカマドは明確な形で認められなかったが、本遺跡の他の竪穴住居の例から想定されるカマド位置が耕作溝が東壁を削る位置に当たり、この位置の北側に、南部を耕作溝に切られたカマドの痕跡の可能性を持つ凹部が見られたことなどから本住居はカマドを伴っていたものと判断される。

さて、本住居の出土遺物は土器器・須恵器を中心に見られたが、その量は少なく、この中には本住居に伴うと判断される遺物は全く認められなかった。



H-91号住居北側落ち込み覆土

1：灰褐色土：現耕作土、As-Aを含む。 2：暗褐色土：黒色土とローム漸移層土の混土。ローム若干混入。 3：茶褐色土：ローム漸移層土。プライマリ。 4：茶褐色土：3層土にローム・黒色土混入。 5：黄褐色土：ローム漸移層下層土とロームの混土。地山の可能性が高い。 6：明黄褐色土：ロームにローム漸移層土若干混入。地山と思われる。

0 3m

第183図 H-91号住居北側落ち込み

尚、燃焼部・袖等の構造は確認されなかった。

また、柱穴・貯蔵穴等の構造は、床面に於いても掘り方面に於いても確認することができなかった。

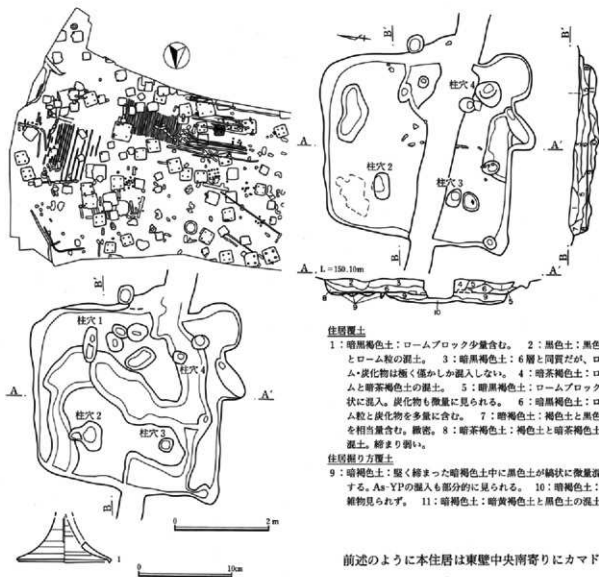
また61片を数える土器類は破片のみであり、このうち須恵器高坏の脚部片(1)を図示した。

この他建築部材と考えられる炭化材の出土も見た。これらは位置等から概ね垂木材と判断されるが、最も北よりのものは若干方向が異なり、棟材または柱材の可能性を持つものと判断される。これらの炭化材の存在から本住居は焼失家屋であると判断される。

以上のように、出土遺物からは本住居の時期を特定できなかったのであるが、カマドの存在が想定されることなどから、古墳時代から平安時代の間の所産であろうと考えられる。

規模 長軸：407cm 短軸：370cm 深さ：33cm

柱穴1(掘り方面) 径：73×30cm(床面よりの)深さ：55cm 柱穴2 径：56×34cm(掘り方面径：65×46cm) 深さ：68cm 柱穴3 径：40×28cm 深さ：48cm 柱穴4 径：33×32cm 深さ



第184図 H-92号住居及び出土遺物

: 51cm

貯蔵穴 径: 55×55cm 深さ: 72cm

構造 本住居は東南コーナーは失われていたものの、やや南に開く概ね隅丸方形のプランを呈する。

本住居は掘り方を有している。あまり明瞭ではないが掘り方には壁際に幅十数cm～70cm程を測るテラス状の掘り残しが廻っている。この他に幾つかのピットが認められたが、性格等は特定されなかった。床はこうした構造を持つ掘り方を暗褐色土等の土塊で埋め戻して造り出しているが、9層の暗褐色土は貼り床の可能性を示している。

住居層土

1: 暗黒褐色土: ロームブロック少量含む。 2: 黒色土: 黒色土とローム粒の混土。 3: 暗黒褐色土: 6層と同質だが、ローム・炭化物は極く低くしか混入しない。 4: 暗茶褐色土: ロームと暗茶褐色土の混土。 5: 暗褐色土: ロームブロック帯状に混入。炭化物も微量に見られる。 6: 暗黒褐色土: ローム粒と炭化物を多量に含む。 7: 暗褐色土: 褐色土と黒色土を相当量含む。緻密。 8: 暗茶褐色土: 褐色土と暗茶褐色土の混土。締まり弱い。

住居掘り方層土

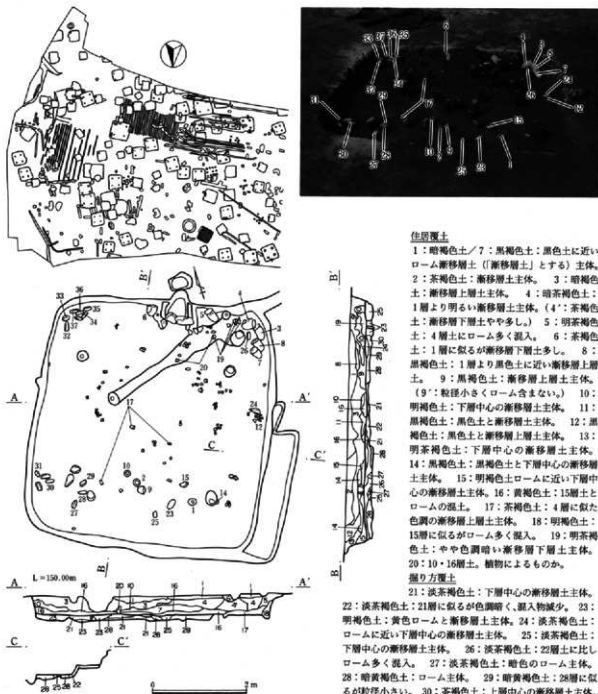
9: 暗褐色土: 堅く締まった暗褐色土中に黒色土が網状に微量混入する。As-Ypの強も部分的に見られる。 10: 暗褐色土: 夾雑物見られず。 11: 暗褐色土: 暗黄褐色土と黒色土の混土。

前述のように本住居は東壁中央南寄りにカマドを造っていたものと思慮される。

床面に於いては幾つかの掘り込みが認められたが、このうち主柱穴と判断されたものは柱穴2～4である。このうち柱穴3・4の径は小さい。北東隅のものは認められなかったのであるが、掘り方面に於いて比定されるもの(柱穴1)が確認されている。また柱穴2の掘り方は、床面に於けるものより掘り方面に於ける者の方が平面的には多かった。尚、貯蔵穴は南東コーナー近く、柱穴4の南東、推定されるカマド位置の右側手前を確認されている。

前述のように本住居は焼失家屋と判断したが、炭化材の出土状況から、本住居は土置き屋根が屋根全体に施され、炭化材遺存部分を除き、焼失経過の比較的早い段階で鎮火していたものと思慮される。

第3章 発見された遺構と遺物

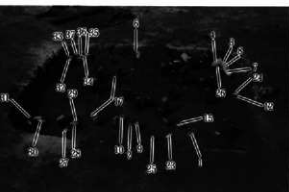


第185図 H-93号住居

H-93号住居 (古墳時代後期, 第185~188図, 図版34~35・79~80・96)

概要 本住居はB区南西部に位置する、B区に於いては中~大型のものに属する竪穴住居跡である。

本住居周辺は耕作溝や耕作に伴うと考えられるものを中心とするピットが多数入っていたが、遺構への影響は少なく、北東コーナー付近から入った耕作溝が一部床面を痛んでいた程度であった。



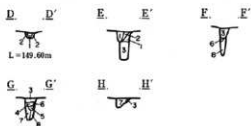
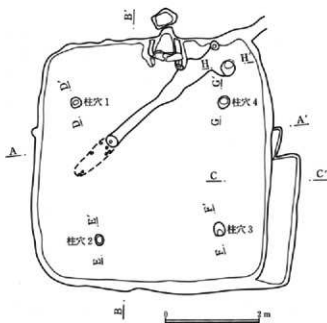
住居層土

1: 暗褐色土/7: 黒褐色土: 黒色土に近いローム漸移層土(「漸移層土」とする)主体。
 2: 茶褐色土: 漸移層土主体。 3: 暗褐色土: 漸移層上層土主体。 4: 暗茶褐色土: 1層より明い漸移層土主体。(4': 茶褐色土: 漸移層下層土やや多し。) 5: 明茶褐色土: 4層土にローム多く混入。 6: 茶褐色土: 1層に似るが漸移層下層土多し。 8: 黒褐色土: 1層より黒色土に近い漸移層上層土。 9: 黒褐色土: 漸移層上層土主体。(9': 粒径小さくローム含まない。) 10: 明褐色土: 下層中心の漸移層土主体。 11: 黒褐色土: 黒色土と漸移層土主体。 12: 黒褐色土: 黒色土と漸移層上層土主体。 13: 明茶褐色土: 下層中心の漸移層土主体。 14: 黒褐色土: 黒褐色土と下層中心の漸移層土主体。 15: 明褐色土ロームに近い下層中心の漸移層土主体。 16: 黄褐色土: 15層土とロームの混土。 17: 茶褐色土: 4層に似た色調の漸移層上層土主体。 18: 明褐色土: 15層に似るがローム多く混入。 19: 明茶褐色土: やや色調暗い漸移層下層土主体。 20: 10・16層土。植物によるものか。

掘り方層土

21: 淡茶褐色土: 下層中心の漸移層土主体。
 22: 淡茶褐色土: 21層に似るが色調暗く、混入物減少。 23: 明褐色土: 黄色ロームと漸移層土主体。 24: 淡茶褐色土: ロームに近い下層中心の漸移層土主体。 25: 淡茶褐色土: 下層中心の漸移層土主体。 26: 淡茶褐色土: 22層土に比しローム多く混入。 27: 淡茶褐色土: 暗色のローム主体。 28: 暗黄褐色土: ローム主体。 29: 暗黄褐色土: 28層に似るが粒径小さい。 30: 茶褐色土: 上層中心の漸移層土主体。

第2節 B区遺構と遺物



柱穴・貯蔵穴覆土

1: 暗黄褐色土: 下層土中心のローム漸移層土 (以下「漸移層土」とする) にローム・黒色土やや多く混入。 2: 明褐色土: 下層土中心の漸移層土主体。 3: 黄褐色土: ロームに下層土中心の漸移層土混入。 4: 褐色土: 上層土中心の漸移層土主体。 5: 黒褐色土: 黒色土に近い漸移層土にローム混入。 6: 明黄褐色土: 黄色ローム主体。 7: 暗黄褐色土: 下層土中心の漸移層土。 8: 下層土: 上層土中心の漸移層土主体。

耕作土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

1: 黒褐色土: 漸移層上層土主体。As-Aらしき軽石混入。

カマド覆土

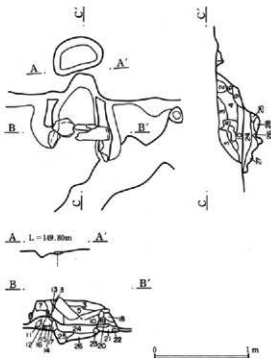
2: 暗褐色土/8: 明褐色土: 漸移層上層土主体。 3: 暗褐色土: 漸移層土の強土主体。 4: 明茶褐色土: 焼土化見る漸移層土主体。 5: 明褐色土: 焼土化見る漸移層下層土主体。 6: 赤茶褐色土: 焼土化見る漸移層上層土主体。 7: 黒褐色土: 黒色土に近い漸移層上層土主体。 9: 暗茶褐色土: 僅かに焼土化見る漸移層上層土主体。 10: 暗黄褐色土: 若干焼土化見るロームに近い漸移層下層土主体。

袖籠築材

11: 茶褐色土: 極く弱い焼土化見る漸移層下層土主体。 12: 黒褐色土: 黒色土と漸移層土の強土主体。 13: 茶褐色土: 17層に似るが焼土化運行。 14: 暗褐色土/18: 褐色土: 上層土中心の漸移層土主体。 15: 暗褐色土: 14層に似る。 16・19: 明褐色土: 漸移層下層土主体。 17: 茶褐色土: 下層土中心の漸移層土主体。 20: 褐色土: 19層に21層入る。 21: 黒褐色土: 黒色土主体。 22: 明褐色土: 19層に似るが焼土化認められない。

カマド掘り方覆土

23: 茶褐色土: 漸移層土主体。 24: 茶褐色土: 漸移層土主体。焼土化見る。 25: 黒褐色土: 21層に似るが、焼土燃焼面に集中。 26: 茶褐色土: 上層土中心の漸移層土主体。 27: 明茶褐色土: 漸移層上層土主体。 28: 暗褐色土: 黒色土に近い漸移層上層土主体。



第186図 H-93号住居及びカマド

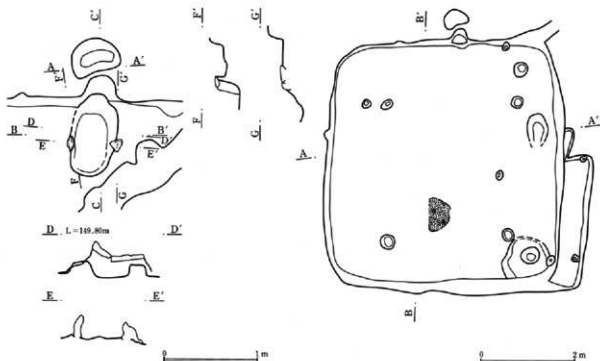
ものと思われる。また、これらの遺物の北側は耕作溝の攪乱を受けているが、覆土中出土の壺 (19) にこれに続いて置かれていた可能性があり、更にコーナーを曲がったカマド左袖籠にも土師器壺 (5) が立てかけられていた。この他、本住居に伴うものには住居中南部に正位若しくはそれが転倒したような状態で須恵器の坏 (2)・甗 (9)・小型壺 (10) 並んで出土する他、土師器の坏 (1) や壺 (6) も見ら

れた。尚、以上の土器のほとんどは6世紀後半期の特徴を示している。

一方、覆土中の遺物には縄文時代の遺物 (11~15) や6世紀後半期の土師器坏 (16・17) の他、土師器の碗 (18) や甗 (20)、白玉 (21, 22)、そして転用品を含むこも編み石 (23~37) が見られた。

以上の出土遺物の状況から、本住居は6世紀後半の所産と判断される。

第3章 発見された遺構と遺物



第187図 H-93号住居掘り方

規模 長軸：538cm 短軸：506cm 深さ：50cm
 カマド 幅：89cm 奥行：87cm 左袖 幅：31cm 長さ：61cm 高さ：20cm 右袖 幅：18cm 長さ：71cm 高さ：20cm 燃烧部 径：39×71cm
 カマド掘り方 径：50×89cm 深さ：12cm
 柱穴1 径：24×23cm 深さ：21cm 柱穴2 径：22×19cm 深さ：57cm 柱穴3 径：30×23cm 深さ：26cm 柱穴4 径：25×24cm 深さ：65cm
 貯蔵穴 径：33×32cm 深さ：68cm
 掘り方ピット 径：39×36cm 深さ：70cm

構造 本住居は隅丸方形のプランを呈する。

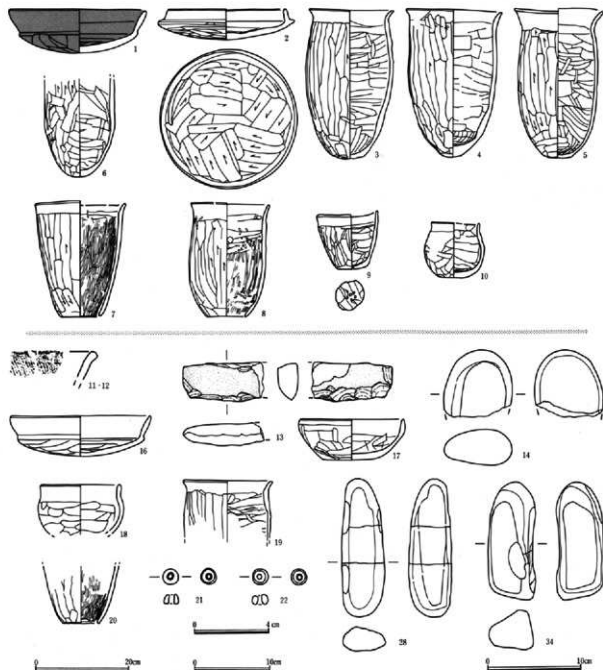
掘り方を有するが、掘り方面には面全体としての特段の構造は認められなかったが、幾つかのピットが見られた。このうち特に南西隅部のピットは、径104×83cm、深さ10cm程の掘り込みが見られ、この中横付近には深いピット様の掘り込みが掘削されていた。また、住居中心ラインのやや南寄りには径72×49cm以上の範囲で粘土の分布が見られた。こうした構造を持つ掘り方をロームやローム漸移層土で埋戻して床面を造り出している。

カマドは本遺跡では数少ない北カマドで、北壁の

中程に造られている。カマドは楕円形プランの掘り方を北壁ラインの内側に設けており、これを上位層を中心とするローム漸移層土等で埋戻して燃烧面を造っている。燃烧面は床面とほぼフラットであった。この掘り方の前後方向の中程の左右両側肩付近に礫を立てて袖石とし、これを漸移層土等の土壌で固めて袖を造り上げている。尚、袖材のやや内側には大型の礫を用いた天井石を乗せている。

床面に置いているのは柱穴4基と貯蔵穴1基を確認している。このうち柱穴については個々の掘り込みの深さにはばらつきが見られたが、一樣にプランは円形を呈し小型である。断面観察等から、柱材の径は10cm程の細いものだったことが窺われる。一方、貯蔵穴はカマド右側に設けられるが、その形態は柱穴様でプランは小さく、掘り込みは深い。

さて、本住居の掘り方面に於いては南東隅部に柱穴様の掘り込みがあることは上述した通りだが、この形態は床面に於いて確認された貯蔵穴と似ており、その掘削位置から貯蔵穴であったのではないかと考えられる。従って本住居には立て替えが行われたものと想定されるのである。



第188図 H-93号住居出土遺物

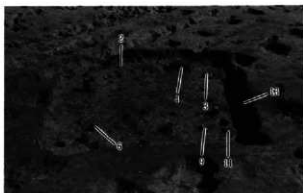
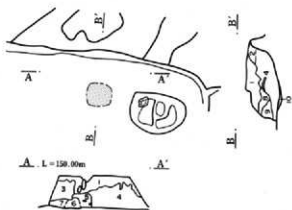
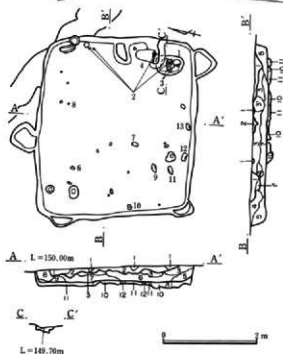
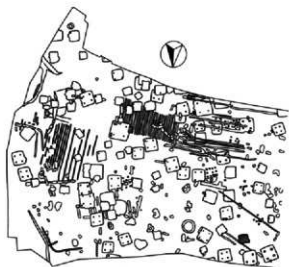
H-94号住居（古墳時代後期，第189～190図，図版36・80・96）

概要 本住居はB区北西部の、1号谷に向かう緩斜面上に位置する小型の竪穴住居跡である。

本住居は他の竪穴住居との切り合い関係は無いが、耕作によるピット群が南東-北西方向に規則的に並ぶ位置にあり、掘削にあつているが、幸いこれらのピットは床面までは達していなかった。尚、本住居のカマドはかなり壊れていたが、左袖に甕(4)

が倒れ掛かっていたため、充分なカマドの記録化が行えず、また掘り方面は検出に失敗したため、一部を除き掘り過ぎてしまい記録化を行えなかった。

本住居の出土遺物はさして多くはなかったが、この中で本住居に伴うと判断された遺物には7世紀前半期の特徴を示す土器器坏(1~3)があり、6世紀後半期の特徴を持つ土器の甕(4)がカマド位置に



耕作土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

1 : 茶褐色土 : 現耕土。As-A含む。(1' : 暗褐色土 : 漸移層上層土にAs-A混入。) 2 : 茶褐色土 : 漸移層上層土主体。

住居覆土

3 : 茶褐色土 : 上層土中心の漸移層土主体。(3' : 黒色土多く混入。) 4 : 茶褐色土 : 漸移層上層土主体。 5 : 黒褐色土 : 黒色土に漸移層上層土多く混入。 6 : 黒褐色土 : 5層に比し黒褐色土少量。 7 : 茶褐色土 : 4層に似るが漸移層下層土混入。 8 : 明茶褐色土 : 漸移層上層土主体。 9 : 明褐色土 : 漸移層下層土主体。

住居掘り方覆土

10 : 暗褐色土 : 黒色土・漸移層下層土・ロームの混土。 11 : 黄褐色土 : ロームに漸移層土主体。 12 : 黒褐色土 : 黒色土主体。

貯蔵穴覆土

1 : 茶褐色土 : 漸移層土に若干の黒色土とローム混入。

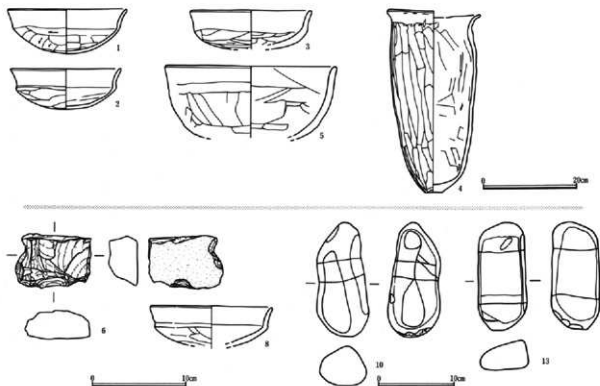
カマド覆土

1 : 茶褐色土 : 上層土中心の漸移層土にローム・As-YP・黒色土粒やや多く含む。 2 : 明褐色土 : 漸移層下層土主体。 3 : 黒褐色土 : 漸移層土と黒色土の混土主体。 4 : 暗黄褐色土 : やや焼土化するロームに近い漸移層土主体。 5 : 赤茶褐色土 : 焼土化見る漸移層土に硬質の焼土等混入。 6 : 黄褐色土 : ローム主体。弱く焼土化。 7 : 暗褐色土 : 3層土にローム混入。 8 : 褐色土 : 漸移層土にAs-APやや多く混入。 9 : 暗黄褐色土 : 漸移層土にAs-YPやや多く混入。

カマド掘り方覆土

10 : 暗赤褐色土 : 焼土化見る漸移層上層土に焼土と若干のローム混入。

第189図 H-94号住居及びカマド



第190図 H-94号住居出土遺物

南側に倒れて出土し、土師器鉢(5)も見られた。

一方、覆土中の遺物には縄文時代の石器類(6, 7, 9, 10, 13) やこも編み石(11, 12)が見られ、土器類では7世紀前半期の土師器環(8)等、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけてのものが見られた。

以上のような出土遺物の状況から、本住居は西暦600年を前後する時期の所産と判断され、少なくとも奈良・平安期頃までは産地としてその痕跡が残されていたものと思慮されるのである。

規模 長軸：378cm 短軸：336cm 深さ：30cm

カマド 幅：108cm 奥行き：58cm 左袖 幅：

32cm 長さ：53cm 高さ：4cm 右袖 幅：34cm

長さ：62cm 高さ：12cm 燃烧部 径：36×48cm

カマド掘り方 径：52×48cm 深さ：6cm

貯蔵穴 径：60×42cm 深さ：24cm

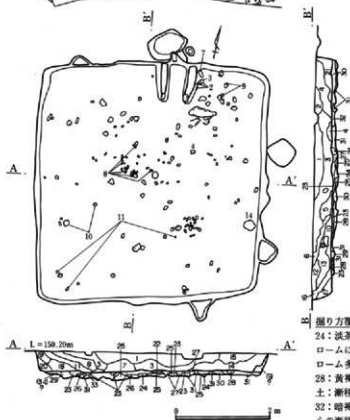
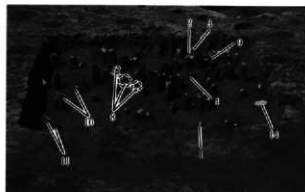
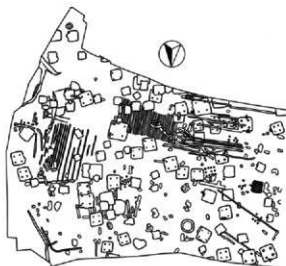
構造 本住居はややコーナーの丸まる方形のプランを呈する。

本住居は掘り方を有するが、掘り過ぎのために掘り方面の状況は明らかにできなかったが、面的検出を行い得た南東部やベルト部分の状況から、面全体

として特段の構造は設けられなかったものと推察される。床面は掘り方を黒色土・ローム漸移層土・ローム等で埋め戻して床面を造っている。

カマドは東カマドで東壁南部に造られる。壁面から10cm程離れた位置に円形プランの浅い掘り方を掘削し、これをローム漸移層上層土で埋め戻して燃烧面を造っている。カマドの上部構造は遺存状況が不良であり、僅かに袖の痕跡が認められたが遺物の存在もあって調査の進行に伴って滅失してしまうなど充分な観察・記録化等はい行得なかった。尚、燃烧部は方形プランを呈し、比較的短い袖がその両側に設けられていたようで。また、カマドには土師器甕1個がかけられていたものと推定される。

床面に於いては幾つかのピットと貯蔵穴を確認した。このうちピットは径27cm以下、深さ24cm以下の小型のもので、何れも本住居との関係を特定することはできなかった。貯蔵穴はピット様の形態を呈し、カマド右側に掘削されるが、一部が当初確認されたカマド右袖部分に重なるので検出されたカマドとは時期差を持って掘削されていた可能性もある。



住居層土 (以下「ルーム漸移層土」は「漸移層土」)

- 1: 黒褐色土: 黒色土に近い漸移層上層土主体。
- 2: 暗褐色土: 2層に似るが色調暗い。
- 3: 茶褐色土: 下層土に近い漸移層上層土主体。
- 4: 暗茶褐色土: 2層に似、色調2層と3層の間。
- 5・18・19・21: 茶褐色土/10: 暗茶褐色土/16: 暗褐色土: 漸移層上層土主体。
- 6: 茶褐色土: 5層に似るが黒色土含まない。
- 7: 明茶褐色土: 漸移層上層土とルームに近い漸移層下層土の混土主体。
- 8: 黒褐色土: 黒色土と漸移層上層土の混土主体。
- 9: 茶褐色土/11: 暗茶褐色土: 上層土中心の漸移層土主体。
- 12: 茶褐色土: 漸移層土主体。
- 13: 暗褐色土: 11層に似るが下層土に向け黒色土多く含む。
- 14: 淡茶褐色土: 漸移層下層土主体。
- 15: 褐色土: 漸移層上層土と14層土の混土。
- 17: 黒褐色土: 1層に似るが漸移層下層土多く含む。
- 20: 暗茶褐色土: やや色調子明るい漸移層上層土主体。

盛り土

- 22: 暗褐色土: 漸移層上層土主体。
 - 23: 黄褐色土: ルーム主体で良く締まる。
- 掘り方層土**
- 24: 淡茶褐色土: 漸移層上層土主体。
 - 25: 暗黄褐色土: ルームとルームに近い漸移層下層土の混土。
 - 26: 黄褐色土: 23層土に似るがルーム多し。
 - 27・29: 暗褐色土: 上層土中心の漸移層土主体。
 - 28: 黄褐色土: 23層に似るがルームブロック中心。
 - 30: 明褐色土: 漸移層土とルームの混土。
 - 31: 黄褐色土: ルームブロック層。
 - 32: 暗褐色土: 27層土とルームの混土。
 - 33: 黒褐色土: 上層土中心の漸移層上層土主体。
 - 34: 明褐色土: 30層に似るが脆土化認められる。

H-95号住居 (古墳時代後期。第191~194図。図版36~37・80・96)

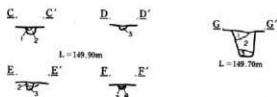
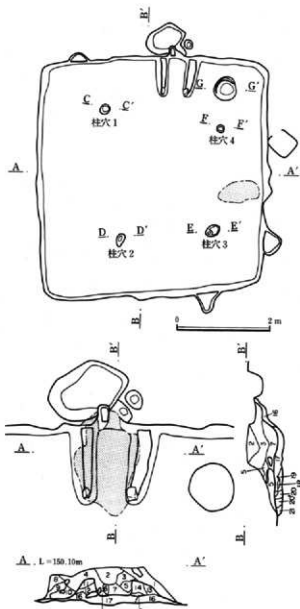
概要 本住居はB区北西部の1号谷に向かう緩斜面部に位置するB区に於いては中規模のものに属する竪穴住居跡である。

本住居付近は耕作に伴う規則的なピットが多く入っているものの、あまり大きな影響は受けず、遺構の遺存状況は比較的良好であった。尚、本住居に

第191図 H-95号住居

は新旧のカマダが確認されたことから、建て替えの行われたものと判断される。

本住居の出土遺物はさして多いたとは言えなかったが、この中で、本住居に伴うと判断されたものには7世紀前半期の特徴を示す土師器(1)や6世紀後



柱穴覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

1: 茶褐色土・漸移層土主体。 2: 明褐色土・下層土中心の漸移層土主体。 3: 茶褐色土・上層中心の漸移層土。 4: 暗黄褐色土・黒色土・漸移層下層土・ロームの混土。

貯蔵穴覆土

1: 明褐色土・下層土中心の漸移層土主体。 2: 茶褐色土・漸移層土の混土主体。 3: 明褐色土・漸移層下層土主体。

カマド覆土

1: 茶褐色土・8: 暗黄褐色土・漸移層の混土主体。 2: 茶褐色土・漸移層とロームの混土。 3: 明褐色土・下層中心の漸移層土主体。 4: 明褐色土・漸移層下層土とロームの混土主体。 弱い焼土化。 5: 淡赤褐色土・3層に似、焼土化進行。 6: 暗黄褐色土・漸移層土主体。 7: 淡赤褐色土・焼土化見る漸移層中位層土主体。 9: 淡茶褐色土・10: 暗黄褐色土・上層中心漸移層土主体。

焼燻築材

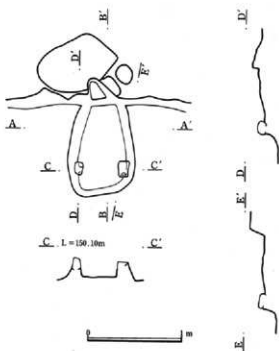
11: 淡茶褐色土・部分的に弱い焼土化の漸移層下層土主体。 12: 淡茶褐色土・11層に似、弱い焼土化。 13: 黄褐色土・ローム主体。 西下傾焼土化。 14: 淡赤黄褐色土・ロームと漸移層下層土の混土。 焼土化。 15: 淡茶褐色土・弱い焼土化の漸移層下層土主体。

カマド掘り方覆土

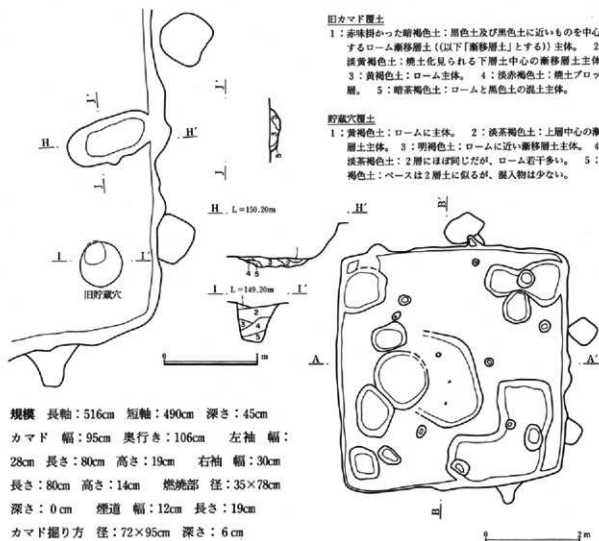
16: 暗黄褐色土・21: 明茶褐色土・下層中心の漸移層土主体。 17: 暗黄褐色土・16層に似るが焼土化。 18: 明赤褐色土・焼土層。 19: 暗黄褐色土・ロームと下層土中心の漸移層土主体。 20: 茶褐色土・上層中心の漸移層土主体。(20': ベースは20層と同じ。) 21: 明茶褐色土・下層中心の漸移層土主体。

半期の特徴を示す土師器の小型壺 (2)、そして土師器の壺 (3) や脚付壺 (4) の出土が見られた。一方、覆土中の出土遺物には縄文時代の土器片 (5) や石器 (6,7)、6世紀後半期の土師器壺 (8,11) の土師器の壺 (9) や胴張壺 (10)・脚付壺 (12,13) の他、こも編み石 (14) など縄文時代から平安時代にかけての遺物の出土が見られた。

以上のように、本住居の時期を示す出土遺物は少なかったが、凡そ西暦600年を前後する時期を与えたい。また、覆土中の遺物の状況から少なくとも平安期頃まではその痕跡が残されていたと思慮される。



第192図 H-95号住居及びカマド



旧カマド覆土

1: 赤味掛かった暗褐色土: 黒色土及び黒色土に近いものを中心とするローム漸移層土(以下「漸移層土」とする)主体。 2: 淡黄褐色土: 焼土化見られる下層土中心の漸移層土主体。 3: 黄褐色土: ローム主体。 4: 淡赤褐色土: 焼土ブロック層。 5: 暗茶褐色土: ロームと黒色土の混土主体。

貯蔵穴覆土

1: 黄褐色土: ロームに主体。 2: 淡茶褐色土: 上層中心の漸移層土主体。 3: 明褐色土: ロームに近い漸移層土主体。 4: 淡黄褐色土: 2層にほぼ同じだが、ローム若干多い。 5: 茶褐色土: ベースは2層土に似るが、混入物は少ない。

規模 長軸:516cm 短軸:490cm 深さ:45cm
 カマド 幅:95cm 奥行き:106cm 左袖 幅:28cm 長さ:80cm 高さ:19cm 右袖 幅:30cm 長さ:80cm 高さ:14cm 燃焼部 径:35×78cm 深さ:0cm 煙道 幅:12cm 長さ:19cm
 カマド掘り方 径:72×95cm 深さ:6cm
 旧カマド掘り方 径:44×89cm 深さ:11cm
 柱穴1 径:23×21cm 深さ:19cm 柱穴2 径:29×17cm 深さ:22cm 柱穴3 径:34×23cm 深さ:45cm 柱穴4 径:17×16cm 深さ:10cm
 貯蔵穴 径:50×44cm 深さ:69cm
 旧貯蔵穴 径:47×46cm 深さ:68cm

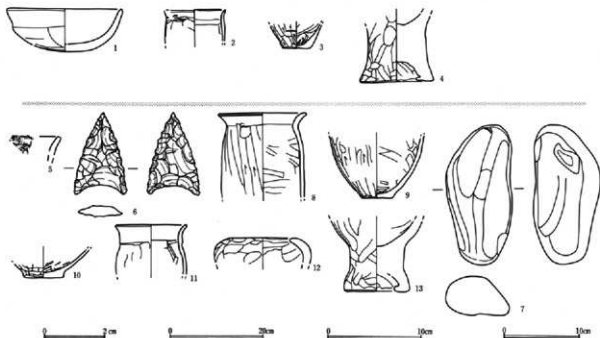
構造 本住居は方形プランを基本として造られる。

本住居は掘り方を有する。南東コーナー付近に高さ10cm以下の掘り残しを有するが、全体としての規則性は認められなかった。しかし、幾つかの土坑或いはピット様の掘り込みが見られたが、その中心を成すのは径55~120cmを測り、深さは5cm内外と浅い掘り込みのものであった。また、後述する旧カマド・旧貯蔵穴も確認された。こうした構造を持つ掘り方をロームやローム漸移層土等の土で埋め戻し、ロー

第193図 H-95号住居旧カマド及び掘り方

ムを主体とする土壌を締めた貼り床を施している。

カマドは新旧2基が見られた。このうち旧カマドとしたものは東カマドで、東壁中央僅かに南寄りに造られている。発見のきっかけは東壁面への若干の掘り込みが見られたことと、床面に於いて隅丸長方形に焼土の分布が見られたことであった。焼土の分布範囲は東壁際から内側に在り、焼土部分への掘削の結果、この位置には縦長の隅丸の長方形プランを呈する掘り方が発見された。この掘り方をローム漸移層下層土やローム等で埋め戻して燃焼面は造られるようであるが袖等の構造は認められず、新カマド築造時に破壊されたものと思慮される。一方、新カマドは北カマドで北壁中央やや東寄りに造られる。



第194図 H-95号住居出土遺物

下彫れの隅丸方形様のプランを呈する浅い掘り方を有し、掘り方の手前側の左右両側には袖石となる礎を立てている。この掘り方をローム漸移層下層土やロームを中心とする土で埋め戻して燃焼面を造っているが、燃焼面の範囲は旧カマドで想定されたものと同様、壁面の内側に限定される。袖は上述の袖石を先端部として、ロームやローム漸移層下層土等で造っている。煙道は燃焼部の奥壁の、燃焼面から10cm程の高さで奥側に北壁面を掘り込んで造っており、掘り込みから直上方向に掘削して設けられている。

床面に於いては主柱穴4基と貯蔵穴1基が確認された。主柱穴は円形プランを基調とし、その規模は小さく掘り込みは浅い。その規模等から、これらは柱材そのものの痕跡ではないかと判断される。また、貯蔵穴はカマド右側、カマド右袖と東壁との丁度中程に掘削されている。その掘り方は北から西にかけて床面より10cm程の高さで若干のテラスを有するものの、全体的形態は柱穴様である。一方、旧カマド右側の南東コーナー付近には旧カマドに伴うと判断される、柱穴様の掘り方を有する貯蔵穴が見られた。

H-96号住居（古墳時代後期、第195～197図、図版37～38・81・97）

概要 本住居はB区西部に位置する、B区に於いては中型のものに属する整穴住居跡である。

本住居付近は耕作による規則的配列のピット群や耕作溝が入り、特に後者は本住居の北西部から南東部にかけて深く切り込んで本住居を壊している。

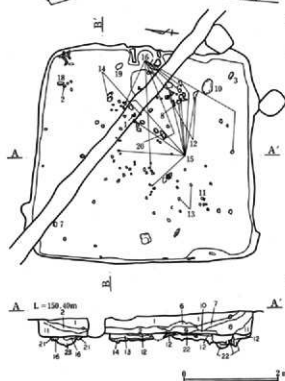
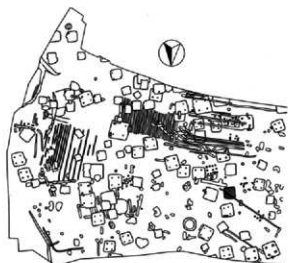
出土遺物のうち本住居に伴うと判断された遺物は土師器甕片(1)とこも編み石(2～4)のみで、掘り方からは土師器胴張甕片(5)が出土している。

一方、覆土中からは縄文時代の遺物(6～10)や7

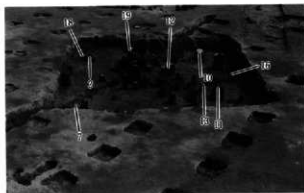
世紀前半期の特徴を示す土師器杯(11～13)、6世紀後半期頃の土師器の高杯(14)・胴張甕(15)・甕(16)の他、異形の土師器脚付甕(17)や転用品を含むこも編み石(19～21)の出土が見られた。

出土遺物の状況からは本住居の時期は特定できなかったのであるが、覆土中の遺物の多くが住居中央部の床上10～20cmの比較的床面に近い位置に集中して出土することから、本住居廃絶後早い段階で遺物の投棄が始まったことが考えられ、その時期は西暦

第3章 発見された遺構と遺物



第195図 H-96号住居



住居覆土（以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする）

- 1：暗褐色土：漸移層上層土主体。（1'：漸移層下層土あまり含まない。） 2：暗茶褐色土：漸移層上層土主体。
- 3：黒褐色土：黒色に近い漸移層上層土主体。（3'：焼土等含む） 4：暗褐色土：漸移層上層土主体。 5：黒褐色土：4層土に似るが色調暗い。 6：茶褐色土：漸移層土主体。 7：淡茶褐色土：色調異なる漸移層土主体。
- 8：黒褐色土：黒色土と漸移層上層土主体。 9：暗茶褐色土：下層土中心の漸移層土主体。 10：茶褐色土：漸移層土主体。 11：暗褐色土：漸移層上層土主体。

盛り床

- 12：黄褐色土：ロームと漸移層土の混土。部分的にAs-YP多く含む。部分的に水平地盤の分離可能。

掘り方層土

- 13：茶褐色土：漸移層上層土主体。 14：やや灰色掛かった茶褐色土：13層に似るが、13層に比し締まる。 15：淡茶褐色土：下層土中心の漸移層土主体。 16：淡茶褐色土：15層土に黒色土混入。15層土に比し締まりに欠ける。 17：明黄褐色土：ロームブロック層。 18：黄褐色土：ローム主体。 19：淡茶褐色土：18層土に黒色土又は漸移層上層土主体。 20：黄褐色土：組成は18層土に似るが、締まり欠ける。 21：明褐色土：黄色ロームと漸移層土の混土。 22：明褐色土：ローム主体。 23：明黄褐色土：黄色ローム主体。 25：暗褐色土：漸移層上層土主体。

600年を前後する時期と推定される。従って本住居はそれ以前の所産として把握されるものと思われる。

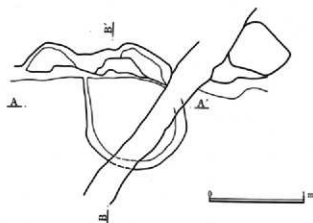
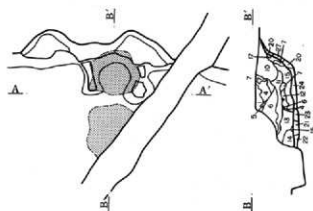
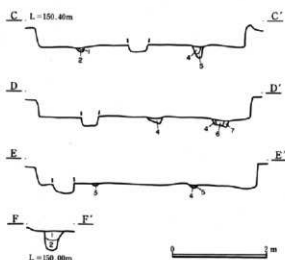
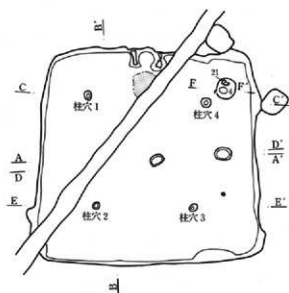
また住居の北東及び西側から炭化材の出土を見ることから、本住居は焼失家屋と判断され、壁面近くを除き比較的早く鎮火したことが想定される。

規模 長軸：488cm 短軸：461cm 深さ：51cm
 カマド 幅：77cm 奥行：49cm 左袖 幅：23cm 長さ：35cm 高さ：16cm 右袖 幅：33cm 長さ：40cm 高さ：18cm 燃焼部 径：34×31cm

カマド掘り方 径：106×97cm 深さ：6cm

柱穴1 径：20×16cm 深さ：31cm 柱穴2 径：14×13cm 深さ：43cm 柱穴3 径：18×15cm 深さ：71cm 柱穴4 径：25×19cm 深さ：65cm
 構造 本住居は概ね方形のプランを呈する。

掘り方を有する。掘り方に面全体としての規格性は見られなかったが、径128cm以下、深さ15cm以下の土坑様の掘り込みが幾つか掘削されていた。こうした構造を持つ掘り方を黒色土・ローム漸移層土・ロー

**柱穴・ピット層土**

1: 茶褐色土: 上層土中心のローム漸移層土(以下「漸移層土」とする)主体。 2: 暗黄褐色土: ロームと漸移層土の混土。 3: 茶褐色土: やや色調明るい漸移層上層土主体。 4: 茶褐色土: 3層土に似るが炭化物多く混入。 5: 茶褐色土: 4層土に似るが色調明るい。 6: 明褐色土: 2層土に似るが、炭化物・黒色土混入。 7: 茶褐色土: 1層に似るが炭化物等混入。

貯蔵穴層土

1: 茶褐色土: 上層土中心の漸移層土主体。 2: 暗褐色土: 漸移層上層土主体。

カマド層土

1: 茶褐色土: やや焼土化見る漸移層土主体。 2: 明茶褐色土: やや焼土化見る下層土中心の漸移層土主体。 3: 茶褐色土: 若干の焼土化見る上層土中心の漸移層土焼土化。 4: 明褐色土: 焼土化見る漸移層下層土とロームの混土主体。 5: 茶褐色土: 漸移層上層土。 6: 暗褐色土: 黒色に近い漸移層上層土主体。 7: 明赤褐色土: 焼土主体。 8: 淡茶褐色土: 焼土化見る漸移層下層土主体。 9: 茶褐色土: 上層土中心の漸移層土主体。 10: 茶褐色土: やや焼土化見る漸移層上層土主体。 11: 黄褐色土: 4層土に似るが部分的に焼土多く含む。 12: 赤茶褐色土: 焼土化見る漸移層下層土主体。 13: 明茶褐色土: 黒色土と下層土中心の漸移層土の混土主体。 14: 暗褐色土: 上層土中心の漸移層土主体。 15: 赤茶褐色土: 12層土に似るが色調暗く、焼土化進行。 16: 茶褐色土: 9層に似るが若干のローム含む。 17: 淡黄褐色土: 色調やや暗いローム。 18: 淡黄褐色土: 焼土化強いものを含む17層土主体。

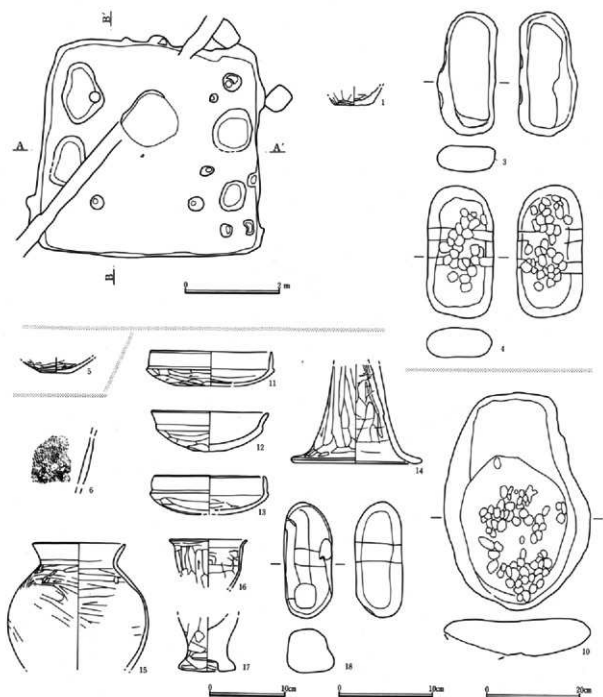
焼機器材

19: 暗赤褐色土: 焼土化見る漸移層土主体。 20: 茶褐色土: 弱い焼土化見る下層土中心の漸移層土にローム多く混入。 25: 明茶褐色土: 黒色土と上層土中心の漸移層土の混土主体。

カマド層り方

21: 赤褐色土: 焼土主体。 22: 淡茶褐色土: 焼土化認める下層土中心の漸移層土主体。 23: 暗赤褐色土: 20層土と下層土中心の漸移層土の混土。 24: 明茶褐色土: ロームと下層土中心の漸移層土の混土。 26: 淡茶褐色土: 19層に近いが焼土化弱く混入物少ない。 27: 明褐色土: 全体に極弱く、部分的に著しく焼土化するローム。

第196図 H-96号住居及びカマド

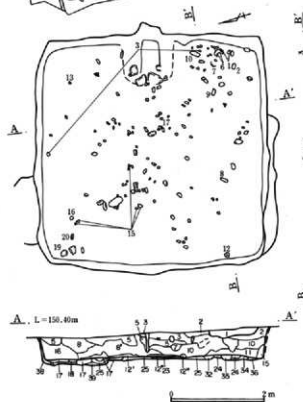
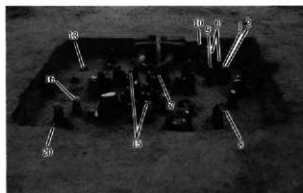
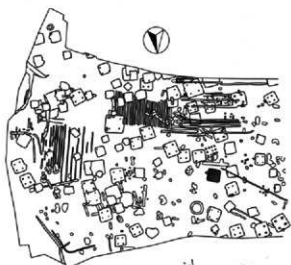


第197図 H-96号住居掘り方及び出土遺物

ム等の土壌で埋め戻し、その上にロームとローム漸移層土を縮めた貼り床が施されている。

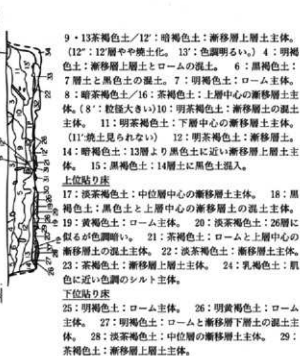
カマドは東カマドで東壁中央付近に設けられ、浅い掘り方を持ち、これをローム漸移層土等で埋め戻して燃焼面を造り出している。袖は燃焼部の両側に設けられるが袖材は用いられず、ローム漸移層土を中心とする土壌で造り出している。

床面に於いては主柱穴4基と貯蔵穴1基を確認している。このうち柱穴は円形プランを呈する小型のもので、柱穴2・3の径が掘り方でそれぞれ30×27cm、33×30cmと床面のそれに比べて大きいため、床面で確認されたものは柱痕であろうと想定される。また、貯蔵穴はカマド右側に設けられ、柱穴状を呈するしっかりした掘り方を有している。



住居覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」)

1: 暗褐色土: 現耕作土。 2: 暗褐色土/3・5: 暗茶褐色土/



9・13茶褐色土/12': 暗褐色土: 漸移層上層土主体。
 (12': 12層やや焼土化。 13': 色調明るい。) 4: 明褐色土: 漸移層上層土とロームの混土。 6: 黒褐色土: 7層土と黒色土の混土。 7: 明褐色土: ローム主体。
 8: 暗茶褐色土/16: 茶褐色土: 上層中心の漸移層土主体。(8': 粒径大きい) 10: 明茶褐色土: 漸移層土の混土主体。 11: 明茶褐色土: 下層中心の漸移層土主体。(11': 焼土見られない) 12: 明茶褐色土: 漸移層土。
 14: 暗褐色土: 13層より黒色土に近い漸移層上層土主体。 15: 黒褐色土: 14層土に黒色土混入。

上位貼り床

17: 淡茶褐色土: 中位層中心の漸移層土主体。 18: 黒褐色土: 黒色土と上層中心の漸移層土の混土主体。
 19: 黄褐色土: ローム主体。 20: 淡茶褐色土: 26層に似るが色調暗い。 21: 茶褐色土: ロームと上層中心の漸移層土の混土主体。 22: 淡茶褐色土: 漸移層土主体。
 23: 茶褐色土: 漸移層上層土主体。 24: 乳褐色土: 肌色に近い色調のシルト主体。

下位貼り床

25: 明褐色土: ローム主体。 26: 明黄褐色土: ローム主体。
 27: 明褐色土: ロームと漸移層下層土の混土主体。 28: 淡茶褐色土: 中位層の漸移層土主体。 29: 茶褐色土: 漸移層上層土主体。

住居掘り方

30: 明褐色土: ローム主体。 31: 茶褐色土: 21層土に似るが軟質。
 32: におい黄褐色土: ロームとロームに近いもの中心とする漸移層土の混土主体。 33: 淡茶褐色土: 22層に似る。 34: 淡茶褐色土: 漸移層土主体。 35: 茶褐色土: 漸移層上層土主体。 36: 乳褐色土: 24層に似る。 37: 黒褐色土: 黒色土主体。 38: 明黄褐色土: 黄色ローム主体。 39: 明褐色土: 17層土と25層土混土。

第198図 H-97号住居

H-97号住居 (古墳時代後期, 第198~201図, 図版38・81・97)

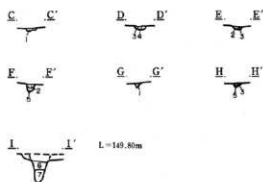
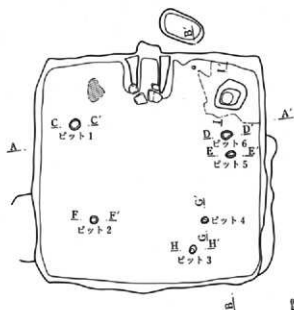
概要 本住居はB区中西部に位置する、B区に於いては中規模のものに属する竪穴住居である。

本住居西半部は規則的配列を示す耕作によるピット群が入っているが、本住居への影響はほとんど無

く遺構の遺存状況は良好であったが、南東隅付近の床面は15cm以下の深さで掘りすぎてしまった。

本住居の出土遺物は比較的多かったが、このうち本住居に伴う可能性を持つと判断されたものには6

第3章 発見された遺構と遺物



柱穴・貯蔵穴・ピット層土

1：淡茶褐色土：下層中心の漸移層土主体。 2：茶褐色土：漸移層土主体。 3：暗褐色土：黒色に近い漸移層土主体。 4：黒褐色土：黒色と漸移層土主体の混土主体。 5：黄褐色土：ロームと漸移層土・黒色の混土。 6：淡茶褐色土：1層に似る。 7：暗褐色土：上層中心の漸移層土主体。

住居層土（以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする）

1・4：明褐色土：漸移層下層土主体。弱い焼土化。 2：明褐色土：漸移層下層土主体。 3：明茶褐色土：上層中心の漸移層土主体。 5：茶褐色土：漸移層上層土主体。弱い焼土化。 5'・6：5層に比し明るい。 7：暗茶褐色土：6層に比し色調暗い。漸移層上層土主体。（7'：色調暗い。） 8：明褐色土：ロームと漸移層上層土の混土。

カマド層土

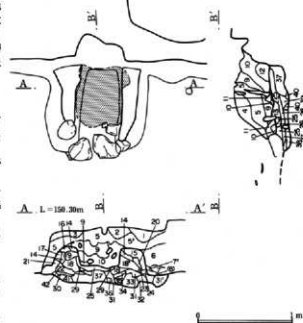
9：黄褐色土：ローム主体。 10：橙色土：焼土化ローム主体。 11：暗茶褐色土：漸移層土主体。 12：淡赤褐色土：弱く焼土化する漸移層下層土主体。 13：暗赤褐色土：焼土化漸移層上層土主体。

焼燻材

14：明黄褐色土：ローム主体。 15：淡黄褐色土：下層中心の漸移層土主体。弱い焼土化。 16：暗茶褐色土：漸移層上層土主体。 17：茶褐色土：14層土と16層土の混土。 18：黄褐色土：暗色ローム主体。（18'：焼土混入。） 19：暗黄褐色土：16層土と18層土の混土。 20：明黄褐色土：黄色ローム主体。 21・23：淡茶褐色土：15層土に近い。 22：茶褐色土：弱い焼土化見る漸移層下層土主体。 24：黄褐色土：15層土に似るが焼土化はほとんど見られない。

カマド層り方層土

25：暗茶褐色土/26：淡茶褐色土：焼土化見る漸移層土とロームの混土主体。 27：明橙色焼土。 28：明褐色土：27層土に13層又は25層土混入。 29：淡黄褐色土：ローム主体。 30・31・31'・32：暗黄褐色土：ロームとロームに近いものの中心の漸移層土の混土主体。 33：淡赤黄褐色土：ローム主体。 34：暗黄褐色土：漸移層中位層土主体。 35：暗茶褐色土：焼土化見る下層中心の漸移層土主体。 36：明黄褐色土：黄色ローム。 37：茶褐色土：弱い焼土化見る漸移層土主体。 38：茶褐色土：37層に似るが焼土化はほとんど見られない。 39：



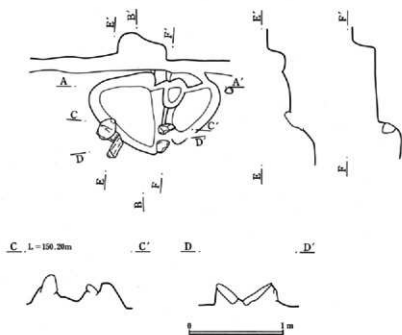
茶褐色土：37層に似るが焼土化はほとんど見られない。 40：暗黄褐色土：ロームと焼土化見る漸移層上層土の混土主体。 41：淡茶褐色土：下層中心の漸移層土主体。 42：明黄褐色土：ローム主体。

第199図 H-97号住居及びカマド

世紀中葉から7世紀中葉にかけての時期の特徴を持つ土器器環(1、3、2)や6世紀後半期の特徴を示す土器器の壺(4、5)・胴張壺(6)・椀(7)やこも編み石(8~10)が見られた。特に、(4)とした土器器壺はカマド左側袖の袖材として用いられていた。

一方覆土中からは古墳時代後期の土器器壺片を中心とした遺物が出土してきているが、これらの出土位置には床上20cm前後のレベルから出土するもの、40cm前後のレベルから出土するものの2つの大きなまとまりが認められた。こうした遺物の中には縄文

第2節 B区遺構と遺物



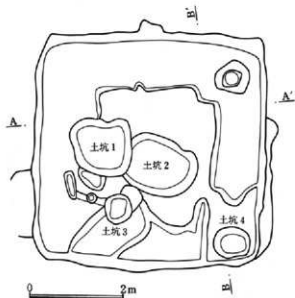
ビット 2 径：17×16cm 深さ：28cm
 ビット 3 径：18×13cm 深さ：12cm
 ビット 4 径：16×12cm 深さ：12cm
 ビット 5 径：20×13cm 深さ：8cm
 ビット 6 径：24×18cm 深さ：10cm
 貯蔵穴 径：64×62cm 深さ：54cm
 [掘り方面] 土坑 1 径：122×120cm 深さ：11cm
 土坑 2 径：156以上×123cm 深さ：7cm
 土坑 3 径：65×59cm 深さ：11cm
 土坑 4 径：76×66cm 深さ：4cm

土器片 (11)、磨石 (13~15) といった縄文時代の遺物や 6 世紀後半期の特徴を示す土師器環 (16)、や同時期のものではないかと推定している異形の土師器脚付甕 (17, 18)、こも編み石 (19, 20)、そして火打ち石 (21) などが見られた。

以上のように本住居に伴うとした遺物の中には新しい要素を持つものも含まれるが、全体としては 6 世紀後半の特徴を示し、特に土師器の甕 (4) がカマドの袖材として使用されていることから、この時期が本住居の時期を示すものと判断される。また覆土中の遺物から、本住居が奈良・平安期頃までは窪地としてその痕跡を残していたことが窺われる。

尚、後述するように床を形成する土層が上下 2 枚に区分され、床面が 2 重であることが認められたので、カマドの造り替え、若しくは住居の建て替え等のあったことが想定される。

規模 長軸：510cm 短軸：506cm 深さ：72cm
 カマド 幅：107cm 奥行き：125cm 左袖 幅：37cm 長さ：91cm 高さ：21cm 右袖 幅：30cm 長さ：91cm 高さ：14cm 燃焼部 径：41×89cm
 煙道 幅：52cm 長さ：36cm
 カマド掘り方 径：137×87cm 深さ：8cm
 [床面] ビット 1 径：24×20cm 深さ：5cm

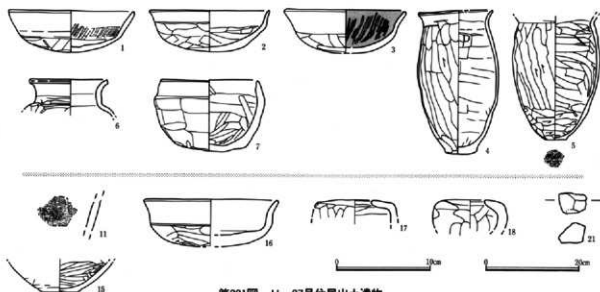


第200図 H-97号住居掘り方

構造 本住居は方形のプランを呈する。

掘り方を有する。掘り方には全体的構造として、壁際に幅95~122cm、深さ13cm以下を測る周溝状の掘り込みが設けられ、中央部は概ね方形様のプランで掘り残しを有する。掘り方には他に幾つかの土坑或いはビット様の掘り込みが見られたが、性格等を特定することはできなかった。床はこのような構造を持つ掘り方をロームやローム漸移層・黒色土等種々の土で埋め戻し、その上にロームとローム漸移層、

第3章 発見された遺構と遺物



第201図 H-97号住居出土遺物

一部乳白色シルトを用いた土壌で床を貼って造っている。床面は断面観察の結果上下2面に識別され、下位の面を旧床面とした。この上下2面の間には特に間層等は認められなかった。

カマドは東カマドで東壁の中程に設けられている。隅丸の逆三角形のプランを呈する浅い平底の掘り方を東壁ラインの内側に有するが、その中程やや南寄りの位置で南北に区分され、南北の境は僅かに盛り上がっている。燃焼面は掘り方をロームとローム漸移層土で埋め戻して造っている。袖の設置位置は南北に区分されたカマド掘り方のうち北側のものの北（左側）及び南（右側）の辺の肩部に当たり、このうち北側辺の中程に当たる位置には礫が手前側に倒れ込むような状態で出土し、その奥には礫が倒置された上に土師器壺が逆位に置かれ、一方南側辺の西端部に当たる位置には礫が立てられ、その奥に並べてやや左側に傾いた状態で礫が出土した。これらの礫は何れも袖材と判断されるが、これらを外側

から包むように、そして奥側に向けて、ローム漸移層下層土を中心とする土を用いて袖を造り上げている。尚袖の先端に当たる両側手前側の礫（袖材）の上には円礫を用いた天井石が横位に乗せられている。

床面には幾つかのピットと貯蔵穴を確認している。このうちピットは円形若しくは楕円形プランのものを中心とするが、その径は小さく、深さもピット2を除いては10cm以下と極めて浅い。このためこれらは柱痕と判断されるが、その底部は掘り方の覆土中に在って、柱穴を掘削したものかどうか、或いは床面に置いたものが沈下したものかどうかといった点は特定できなかった。位置的にはピット1若しくはピット2と4は主柱穴となる可能性を有している。一方貯蔵穴はカマド右側、南東コーナー付近に設けられている。貯蔵穴はロウト状の断面形態を示し、そのプランは概ね方形を呈する。中心となるピットの径は38×38cmを測り、底面より35cm（床面より20cm）程の高さから屈曲し、外側に広がっている。

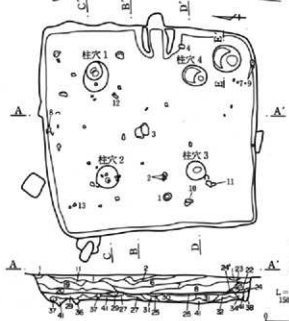
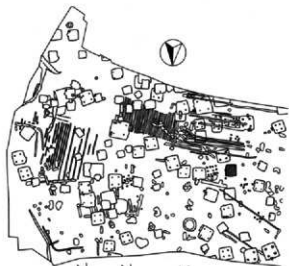
H-98号住居（古墳時代後期、第202～204図、図版38～39・82・97）

概要 本住居はB区中西部に位置する。B区に於いては中規模のものに属する竪穴住居跡である。

本住居北西側の1/2の範囲には規則的配列の耕作によるピット群が入って来ているが、幸い本住居は大きな影響は受けていなかった。また本住居の遺存

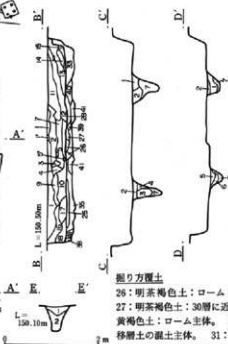
状況は元来比較的良好であったのであるが、残念乍ら掘り方面については検出に失敗して8cm程掘り過ぎてしまったため、ベルト部分などその一部を除いて十分な観察を行うことができなかった。

本住居の出土遺物は少なかったが、その中で本住



住居覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

1: 暗褐色土/2: 明茶褐色土: 漸移層土上層土主体。(1': 焼土流入) 3: 茶褐色土: 2層に似るがローム・黒色土多し。4: 暗茶褐色土: 9層に似るがロームと黒色土多し。5: 茶褐色土: 漸移層土主体。(5': 流入物ほとんど無し) 6・17: 明褐色土: 漸移層下層土主体。7: 茶褐色土: 漸移層中位層土中心にローム・黒色土等混入。8: 明茶褐色土: 下層中心の漸移層土主体。9: 暗茶褐色土: 黒色土に近いもの中心の漸移層上層土主体。10: 明褐色土/18: 茶褐色土: ローム・漸移層土・黒色土の混土。11: 暗褐色土: 1層より色調強い漸移層上層土主体。12: 明褐色土: 11層に似るがAs-YP多し。13: 明茶褐色土: 12層に似る焼土等やや多し。14: 茶褐色土: 13層に似るがローム少なし。15: 茶褐色土: 14層に似るが漸移層下層土内至ローム多し。16: 黒褐色土:



黒色土と漸移層土の混土。19: 黒褐色土: 漸移層土主体。20: 暗黄褐色土: 下層中心の漸移層土にロームと黒色土やや多し。21: 明茶褐色土: 8層に似るがAs-YPやや多し。22: 赤味掛かった褐色土: 24層土と焼土・黒色土の混土。23: 明褐色土: 8層に似るがローム多し。24: 暗褐色土: 黒色土に近い漸移層土。(24': 焼土等若干混入)

貼り床

25: 明褐色土: ロームと下層中心の漸移層土の混土。良く締まる。

廻り方覆土

26: 明茶褐色土: ロームと漸移層上層土の混土。27: 明茶褐色土: 30層に近いが粒径小さい。28・29: 黄褐色土: ローム主体。30: 明褐色土: ロームと漸移層土の混土主体。31: 明褐色土: 30層に似るが粒径小さい。32: 明茶褐色土: 上層中心の漸移層土主体。33: 明褐色土: 26層に似るが黒色土流入。34: 赤味掛かった茶褐色土: 焼土化見下層中心の漸移層土主体。35: 黄褐色土: ローム主体。36: 淡茶褐色土: 漸移層土主体。37: 淡茶褐色土: 漸移層中位層土主体。38: 灰褐色土: 粘性の強いシルト質土。39: 明黄褐色土: 黄色ローム。40: 黄褐色土: 黄色ローム主体。41: 明黄褐色土: やや色調強いローム。

柱穴・貯蔵穴・ピット層土

1: 淡茶褐色土: 下層中心の漸移層土主体。2: 茶褐色土: 漸移層土主体。3: 黒褐色土: 黒色土と漸移層上層土の混土主体。4: 黄褐色土: ロームと漸移層土と黒色土の混土。5: 暗褐色土: 黒色土に近い漸移層上層土主体。6: 淡茶褐色土: 1層に似るがブロック径大。7: 暗褐色土: 上層土中心の漸移層土主体。

第202図 H—98号住居

居に伴うと判断された遺物には6世紀後半から西暦600年前後にかけての時期のものの特徴を示す土師器环(1, 2)が見られた他、土師器胴張甕(3)やこ

も編み石(4, 5)も見られた。

一方、覆土中の遺物は古墳時代後期の所産の各種土師器を中心に出土が見られたが、6世紀中葉のも

第3章 発見された遺構と遺物

カマド覆土

1：暗褐色土主体。 2：黒色土主体。(2'：褐色土の混入量多い)
3：暗赤褐色土：暗褐色土と褐色土の混土主体。 4：汚れた暗黄褐色土。 5：赤褐色土：焼土多量に含み固く締まる。 6：暗黒褐色土主体。 7：暗黒褐色土：5層に比し緻密で粘性に富む。

加熱器材（全体にローム・焼土粒混入）

8：淡茶褐色土：下層中心の漸移層土（以下「漸移層土」）主体。弱い焼土化。（8'：焼土化進行。） 9：明赤褐色土：焼土。 10：明茶褐色土：下層中心の漸移層土主体。（10'：焼土化進行。） 11：黄褐色土：およびローム。 12：黄褐色土：11層土に漸移層土層土混入。 13：褐色土：黒色土に近い漸移層土層土主体。 14：淡茶褐色土：下層中心の漸移層土主体。弱い焼土化。 15：暗黄褐色土：部分的に弱い焼土化見る漸移層下層土主体。 16：淡茶褐色土：焼土化見る漸移層土主体。 17：茶褐色土：16層土に近く黒色土多く混入。

カマド及び住居掘り方覆土

18：暗赤褐色土：焼土化進んだ漸移層土主体。 19：淡茶褐色土：弱い焼土化見る上層中心の漸移層土。 20：淡茶褐色土：16層土にロームブロック混入。 21：黄褐色土：ローム主体。住居跡り床。 22：明茶褐色土：漸移層土。 23：茶褐色土：下層中心の漸移層土。 24：暗黄褐色土：ロームと漸移層下層土主体。

の(7)と西暦600年前後する時期のもの(8,9)と思われる土器器坪の他、こも編み石(10~12)や砥石(13)などが見られた。

以上のように本住居からの出土遺物は少なかったので断定することはできないが、本住居は概ね6世紀後半の所産と判断されるのである。また、住居廃棄後の比較的早い段階から土器の投棄が行われたものと判断される。

規模 長軸：462cm 短軸：456cm 深さ：46cm

カマド 幅：102cm 奥行き：96cm 左袖 幅：

60cm 長さ：62cm 高さ：24cm 右袖 幅：40cm

長さ：66cm 高さ：25cm 燃燒部 径：28×60cm

煙道 幅：35cm 長さ：36cm

〔床面〕 柱穴1 径：64×51cm 深さ：60cm

柱穴2 径：48×47cm 深さ：68cm 柱穴3 径：

42×40cm 深さ：36cm 柱穴4 径：51×42cm

深さ：60cm 貯蔵穴 径：59×54cm 深さ：56cm

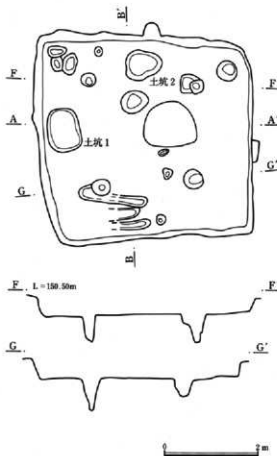
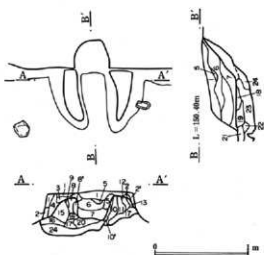
〔掘り方〕 土坑1 径：93×70cm 深さ：8または

18cm 土坑2 径：76×62cm 深さ：9cm

床下粘土坑 径111×93cm 深さ7cm

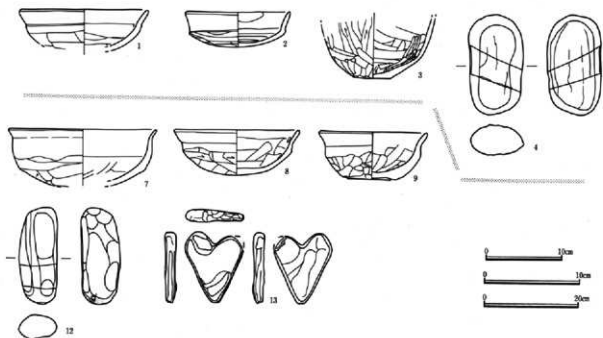
構造 本住居は方形のプランを呈する。

掘り方を有するが、前述のように掘り方面の検出に失敗したため全体的形状を観察することができなかったのであるが、残存部の観察に於いても特段の



第203図 H-98号住居カマド及び掘り方

全体的構造を確認することはできなかったが、幾つかの土坑・ピット様の掘り込みを確認している。このうちやや大きいものは東壁と西壁中央の壁下に見られたが性格は特定できなかった。高、前者は後述



第204図 H-98号住居出土遺物

するカマド位置に当たるがレベル的には一致しない。また住居中央やや南寄りに深さ数cmの浅い落ち込みが見られたが、灰褐色シルトが底面に乗るため床下粘土坑として把握される。こうした構造を持つ掘り方をロームとローム漸移層土等の土壌で埋め戻し、この上にロームとローム漸移層下層土を良く締めた貼り床を乗せて床面としている。

カマドは東カマドで、東壁中央付近に設けられている。カマドは平底の掘り方を有し、これを上層のものを中心とするローム漸移層土で埋め戻して燃焼面を造り出している。燃焼部は東壁ラインの内側設定され、袖は燃焼部の両側に設置されているが袖材

等は使用されず、下層のものを中心とするローム漸移層土等で造り上げている。カマドはよく使用され、燃焼面や袖の内面を中心に焼土化の進行が認められた。煙道はカマド奥壁に当たる住居の東壁面を若干掘り込んで造られ、急角度で上がっている。尚、天井の構造についてはよく確認できなかった。

床面に於いては主柱穴4基と貯蔵穴1基を確認した。このうち主柱穴は何れもしっかりした掘り方を有し径も大きく深い。また断面観察から柱材の径は16cm程はあったものと想定される。一方、貯蔵穴は柱穴様の形態を示し、カマド右側の南東コーナ一部に掘削されている。掘り方もしっかりしている。

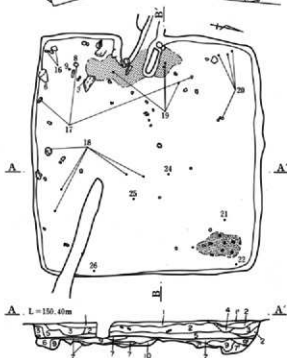
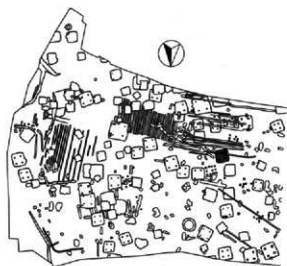
H-99号住居（古墳時代後期、第205～207図、図版39・82～83・97）

概要 本住居はB区中西部のやや南寄りに位置する。B区に於いては中規模の竪穴住居跡である。

本住居付近は東西走行の耕作溝が深く入り、本住居にも住居北西隅付近から東壁のカマド中央を突き抜けるように耕作溝が入って遺構を壊している。尚、掘り方面に見られた柱穴の配置から、本住居は拡張に伴う建て替えのあったことが確認された。

本住居の出土遺物はさして多くはなかったが、その中で本住居に伴うと判断されたものには7世紀前半期の特徴を示す須恵器環(1,2)、西暦600年前後する時期のものと思われる土師器環(3～5)、6世紀後半期の特徴を持つ土師器の甕(6)・小型甕(7)・小型胴張甕(8)が見られた他、紡錘車(9)やこも編み石(10～12)も見られた。この他、西側の床面

第3章 発見された遺構と遺物



住居覆土

1: 暗黒褐色土: 淡褐色土・焼土多量に含む。(1': 更に粒子緻密) 2: 暗黒褐色土: 1層に近似するが褐色土ブロック含む。 4: 暗黒褐色土: 褐色土が帯び状に多量に混入。 5: 暗黒褐色土: 淡褐色土粒若干量含む。(5': 淡褐色土織状に混入し全体に褐色掛かる。) 3: 暗黒褐色土: 褐色土粒・ブロック混入。

住居廻り方覆土

6: 黒褐色土: 黒色土主体。 7: 暗黒褐色土: 汚れた褐色土。(7': 暗褐色土主体に褐色土多量に混入。) 8: 暗黒褐色土: 褐色土中に明黄褐色土・黒色土少量混入。 9: 黒褐色土: 暗褐色土ブロックと黒色土ブロック多量に含まれる。(9': 9層に比し黒色土の混入が多い。) 10: 黒褐色土: 灰白色粘質土多量に混入。



第205図 H-99号住居

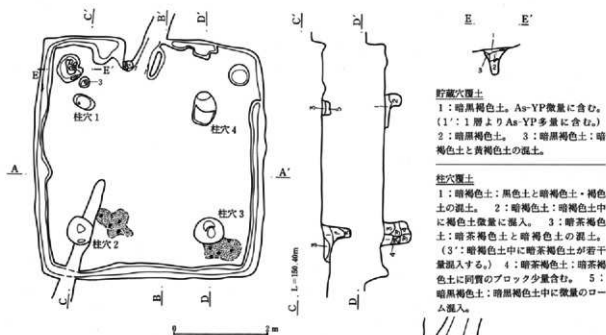
には柱穴3・柱穴4に絡んで、それぞれ87×63cm、81×49cmを測る粘土の分布が見られた。

一方、覆土中からは縄文土器(13)や敲石(14)、磨石(15)、7世紀前半期の特徴を持つ土師器の坏(16、17)、同じく6世紀後半期の土師器の甗(18)・甕(19)・小型甕(20)の他、こも編み石(21~26)など、縄文時代から奈良・平安期にかけての遺物の出土が見られた。

以上のような出土遺物の状況から、本住居は西暦600年を前後する時期の所産と考えられ、また覆土中

の遺物から住居廃絶後の早い時期から遺物の投棄が始まり、奈良・平安時代頃まで住居の痕跡が残されていたことが窺われる。

規模 長軸:510cm 短軸:488cm 深さ:41cm
 カマド 幅:104cm 奥行き:81cm 左袖 幅:37cm 長さ:64cm 高さ:28cm 右袖 幅:26cm 長さ:68cm 高さ:18cm 燃焼部 径:38×55cm
 [床面] 柱穴1 径:46×29cm 深さ:23cm
 柱穴2 径:54×54cm 深さ:59cm 柱穴3 径:62×55cm 深さ:61cm 柱穴4 径:71×48cm



深さ: 50cm 貯蔵穴1 径: 60×58cm 深さ: 70cm

貯蔵穴2 径: 44×43cm 深さ: 11cm

周溝 幅: 10~15cm 深さ: 14cm

〔掘り方〕 柱穴1 径: 51×36cm 深さ: 55cm

柱穴2 径: 33以上×30cm 深さ: 48cm 柱穴

3 径: 44×34cm 深さ: 29cm 柱穴4 径: 32×

30cm 深さ: 31cm ピット1 径: 44×40cm 深

さ: 39cm ピット2 径: 33×32cm 深さ: 42cm

構造 本住居は方形のプランを呈する。

掘り方を有し、掘り方には幅52~106cm、深さ15cm

以下の周溝上の掘り込みが廻り、南東部には幅15cm

以下のテラス状の掘り残しも見られた。その他、後

述するが、幾つかのピット様の掘り込みも見られた。

こうした構造を持つ掘り方を黒褐色土等で埋め戻し

て床面を造っているが、床には貼り床等は施されて

いない。

カマドは中央を耕作溝が走って壊されるため全体

状況はつまびらかでないが、東カマドで東壁中央付

近に設けられている。燃焼部は東壁を跨いで設定さ

れ、袖は両袖共に先端に礫を用いた袖石を持つよう

で、暗黄褐色土や暗黒褐色土で造り上げられている。

尚、周囲の石材の出土状況から板状の礫を用いた天

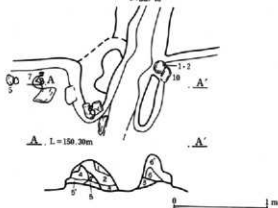
井石を袖石の上に乘せていたものと推定される。

貯蔵穴覆土

1: 暗黒褐色土。As-YP微量に含む。
(1': 1層よりAs-YP多量に含む)
2: 暗黒褐色土。 3: 暗黒褐色土: 暗
褐色土と黄褐色土の混土。

柱穴覆土

1: 暗褐色土: 黒色土と暗褐色土・褐色
土の混土。 2: 暗褐色土: 暗褐色土中
に褐色土微量に混入。 3: 暗茶褐色
土: 暗茶褐色土と暗褐色土の混土。
(3': 暗褐色土中に暗茶褐色土が若干
量混入する。) 4: 暗茶褐色土: 暗茶褐
色土に同質のプロック少量含む。 5:
暗黒褐色土: 暗黒褐色土中に微量のロー
ム混入。



カマド覆土

1: 黒褐色土: 黒色土と焼土プロックの混土。 2: 暗赤褐色土:
黒色土と焼土プロックの混土。焼土は1層より多い。 3: 暗褐色
土: 焼土を少量含む暗褐色土中に黄褐色土プロック少量含む。

袖構築材

4: 暗黄褐色土: 粘性持つ細面な土で、黄褐色土プロック微量に混
入。(4': ベースは4層に同じ。微量の焼土プロック混入。) 5:
暗黒褐色土: 緻密。焼土を微量に含む。(5': 顔面。焼土見ず)

袖構築材と判断されない土

6: 暗褐色土: 白色土粒少量。(6': 白色土粒と焼土比較的多量。)

第206図 H—99号住居及びカマド

床面に於いては主柱穴4基と貯蔵穴4基を確認し

た。主柱穴は柱穴1を除いてしっかりした掘り方を

呈し、そのスパンは250~290cmを測る。断面観察から

柱材の径は20cm程であったことが推定される。一方

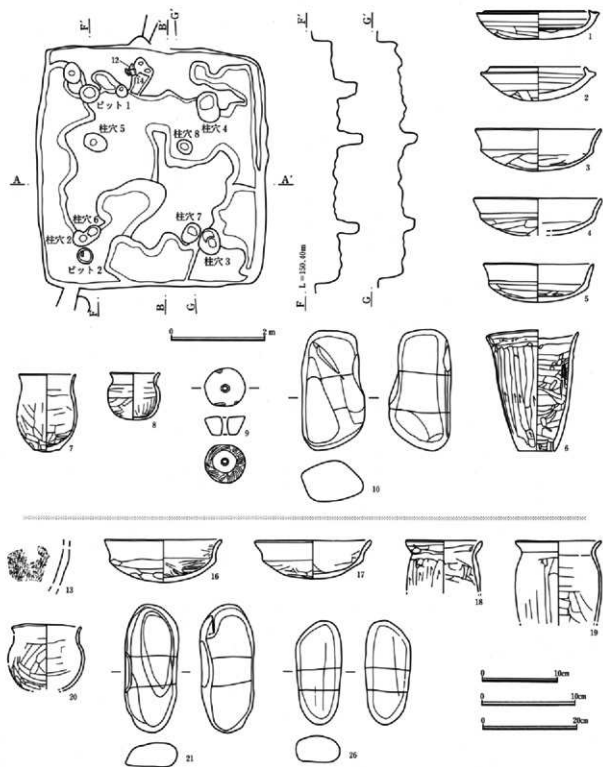
貯蔵穴はカマドの左右側、南東及び北東コーナーに

1基ずつ掘削されるが、何れも柱穴様の形態を呈し

北東側の貯蔵穴1は深く南東側の貯蔵穴2は浅い。

また、掘り方面に於いては柱穴と判断される柱穴

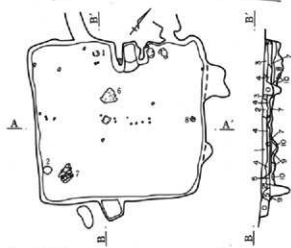
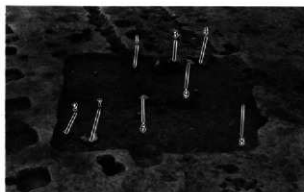
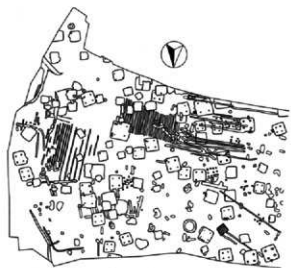
第3章 発見された遺構と遺物



第207図 H-99号住居掘り方及び出土遺物

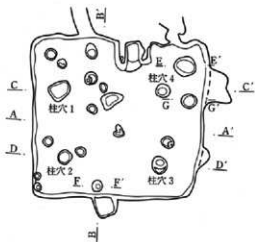
5～8が発見されたが、そのスパンは170～210cmと柱穴1～4のそれより二回り程狭い。従って、本住居は拡張されたものと推定されるが、同じく掘り方面に見られたピット2と床面の貯蔵穴1の南西に隣

接する小ピットと重なるピット1は、床面の遺構の状況に鑑みれば貯蔵穴になるものと思われるが、この場合拡張前のカマドは北カマドであったものと推定される。



柱穴・貯蔵穴・ピット覆土
 1：褐色土：ローム多く混入。 2：褐色土：明るいロームを多量に含む。(2'：粘性強い。) 3：暗黄褐色土：くすんだロームを柔らかく集合。(3'：褐色土多く含む。) 4：黄褐色土：明るいローム主体。

耕作土
 0：褐色土：As-Aや多く含む。
住居覆土
 1：褐色土：暗黄褐色土主体。 2：暗褐色土：褐色土・ローム僅かに含む 3：暗褐色土主体：ロームやや多く含む。 4：暗褐色土：ロームやや多く含む。 5：褐色土：暗黄褐色土と褐色土が2：1の比率の混土主体。 6：暗黄褐色土：ロームやや多く含む。
陥り床
 7：暗黄褐色土：ロームに褐色土等入り、しっかり固めた土層。
掘り方覆土
 8：暗褐色土：ローム・黒色土等混入。 9：褐色土：ロームやや多く含む。 10：黄褐色土：ローム主体。



H-107号住居(古墳時代後期, 第208~210図, 図版39~40・83)

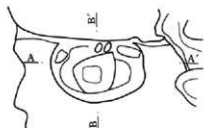
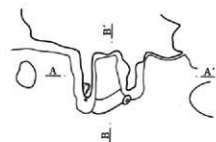
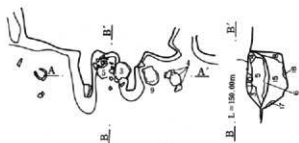
概要 本住居はB区北西部に位置する小型の竪穴住居跡である。

本住居の付近は規則的配列を見せるピットや溝等、耕作に伴う攪乱が多く入り、本住居も耕作溝2本と幾つかのピットが絡んで東壁を中心に壊されていて遺存状況はあまり良好とは言えなかった。

本住居の出土遺物はさして多くなかったが、この中で本住居に伴うと判断された遺物には西暦600年

第208図 H-107号住居

第3章 発見された遺構と遺物



第209図 H-107号住居カマド

カマド覆土

0: 褐色土: As-A入る。 1: 暗赤褐色土: くすんだロームと焼土大量に含む。 2: 暗黄褐色土: くすんだロームと褐色土 2: 1で温ざる。焼土僅かに含む。 3: 褐色土: ローム僅かに含む。 4: 褐色土: 黄白色ロームや多く混入。 5: 褐色土: 焼土・ローム僅かに含む。 6: 褐色土: ローム僅かに含む。

構造物材

7: 暗褐色土主体: 灰褐色粘質土僅かに混入。 8: 褐色土: 灰褐色粘質土や多く含む。 9: 灰褐色粘質土: 褐色土・赤褐色土僅かに含む。 10: 灰褐色粘質土: 褐色土・赤褐色土や多く、ローム僅かに混入。 11: 暗赤褐色土: 焼土や多く混入。(11': 根によるものかバサつく。) 12: 灰白色粘質土: 僅かに褐色土混入。 13: 褐色土: 15層土に似る。ローム僅かに含む。 14: 暗褐色土: くすんだローム僅かに含む。

カマド掘り方覆土

15: 暗灰黄褐色土: ローム僅かに混入。 16: 褐色土: ロームと暗褐色土や多く混入。 17: 暗褐色土: ローム僅かに含む住居掘り方覆土に続く。 18: 黄褐色土: ロームに15層近似の土僅かに混入。

を前後する時期から7世紀前半期の特徴を示す土師器環(1, 2)、6世紀代のもの(9)と7世紀代のもの(3, 5)を含む土師器甕(6)、6世紀後半期の土師器甕(7)が見られた他、土師器胴張甕(4)や手捏ね土器(8)があり、これらはカマド周辺(1, 3~5)及び、カマド前(6)と北西隅部(2, 7)の床面から出土している。

一方、覆土中からは縄文時代から奈良・平安時代に至る時期の遺物の出土が見られ、この中には6世紀後半期の所産と考えられる土師器甕(10)などが含まれていた。

以上の出土遺物の状況から本住居は西暦600年を前後する時期の所産と判断され、少なくとも奈良・平安期頃までは住居の痕跡が窪地として残されていたのではないかと考えられるのである。

規模 長軸: 366cm 短軸: 348cm 深さ: 21cm
カマド 幅: 85cm 奥行: 64cm 左袖 幅: 25cm 長さ: 64cm 高さ: 25cm 右袖 幅: 29cm 長さ: 51cm 高さ: 13cm 燃焼部 径: 40×59cm

深さ: 8cm カマド掘り方 径: 98×65cm 深さ: 26cm

柱穴1 径: 27×26cm 深さ: 34cm 柱穴2

径: 22×21cm(掘り方面径: 38×31) 深さ: 22cm

柱穴3 径: 36×32cm 深さ: 32cm 柱穴4

径: 29×29cm 深さ: 12cm

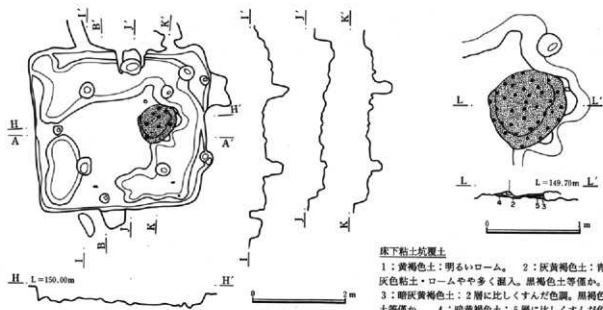
貯蔵穴 径: 44×42cm 深さ: 20cm

床下粘土坑 径: 87×73cm 深さ: 6cm

構造 本住居はやや隅丸の方形プランを呈する。

掘り方を有し、掘り方には南壁西部と西壁中央の一部を除いて壁際に幅25cm以下のテラスを伴う、幅102cm以下、深さ10cm以下の周溝状の掘り込みが掘削される。掘り方には他に幾つかのピット等が見られたが、このうち東部中央には青灰色粘土を見る床下粘土坑が見られた。床面はこうした構造を持つ掘り方をローム等で埋め戻し、ローム主体の土を固めた貼り床を施して造っている。

カマドは東カマドで東壁中央付近に造られている。掘り方を有し、これを暗褐色土やロームで埋め



床下粘土坑覆土

1：黄褐色土：明るいローム。 2：灰黄褐色土：青灰色粘土・ロームやや多く混入。黒褐色土等僅か。
 3：暗灰黄褐色土：2層に比しくすんだ色調。黒褐色土等僅か。 4：暗黄褐色土：5層に比しくすんだ色調。白色粒僅か。 5：黄褐色土：明るいローム。



戻して燃焼部を造っている。燃焼部は浅い落ち込みを成し、東壁ラインの内側に設けられる。袖は燃焼部両側に設けられるが、左袖の手前側には蹴を立てた袖材が見られ、右側袖の先端部にも袖石の抜き取り痕と思われる小ピットが見られ、その奥側に焼土を含む褐色系の土壌で袖を造り上げている。また、燃焼部には竪2個(3,5)が懸けられていた。

床面には多くのピットが見られたが、そのほとんどに本住居との関係者を特定できなかつたものの掘り



第210図 H-107号住居掘り方及び出土遺物

方面のピット観察と併せて支柱穴4基を特定し、貯蔵穴1基を確認した。このうち柱穴2は径の小さなもので、特に柱穴2は柱痕の可能性を有する。一方、貯蔵穴は土坑様の形態の浅い掘り込みのもので、カマド右側の南東コーナー付近に掘削されている。

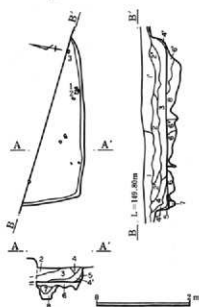
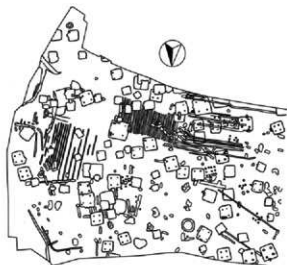
H-108号住居(古墳時代後期か、第211図、図版40・83・98)

概要 本住居はB区北西部所在の竪穴住居跡である。

本住居の遺存状況は比較的良好であったが、その過半が北側の調査区外に出ていて僅かに南壁と南西コーナー付近を調査できたに過ぎなかつた。尚調査

範囲の東端が僅かに曲がる傾向を見せるためこれが南東コーナーであれば小規模のものといえよう。

遺構本体が以上のような遺存状況であることもあって本住居の出土遺物は少なく、僅かに7世紀前



耕作土

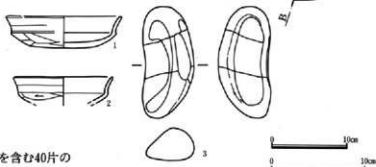
1：黒色土：As-APを少量含む。(1'：褐色土少量含む。)

住居覆土

2：黒色土：微小白色土粒を極少量含む。(2'：2層に比し多量の白色土粒を含む。) 3：黒色土：褐色土を多量に含む。4：黒色土：黒色土を主体とし、灰褐色土を少量含む。(4'：黒色土と灰褐色土の混土。) 5：暗黒褐色土：暗褐色土と灰褐色土の混土。

掘り方覆土

6：暗黄褐色土：暗黄褐色土と暗黒褐色土の混土。(6'：6層に比し暗黄褐色土の混入が多い。) 7：暗褐色土：黒色土少量混入する。 8：暗黒褐色土：黒色土を主体に黄褐色土が微量混入する。



第211図 H-108号住居及び出土遺物

半期の特徴を持つ土師器杯2点(1,2)を含む40片の土器片と2点のこも編み石(3,4)を見た過ぎず、何れも本住居に伴うと判断できるものではなかった。

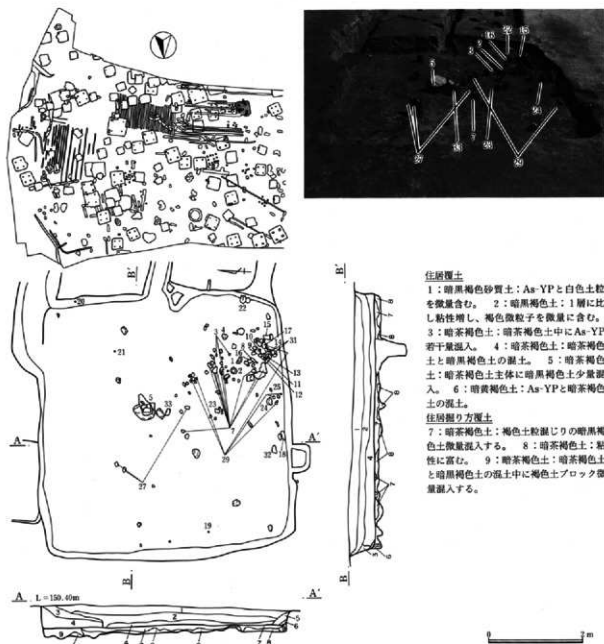
こうした出土遺物の状況のため本住居の時期の特定はできなかったのであるが、7世紀前半期の土師器杯(1,2)が壁際の所謂三角堆積に乗るような位置から出土することから本住居に伴うか住居廃棄後早い段階で投棄されたものと考えられる。

規模 残存長：336cm 残存幅：138cm 深さ：33cm
 (掘り方面) ピット1 径：26×26cm 深さ：26cm
 ピット2 残存径：38×40cm 深さ：13cm
構造 上述のように本住居はその一部を調査できた

に過ぎないが、方形プランを呈すると推定される。

本住居は掘り方を有し、掘り方に全体的構造は想定できなかったが2つのピットを確認した。こうした構造を持つ掘り方を暗黄褐色土や黒色土等で埋め戻して床面を造っている。

床面に於いては柱穴・貯蔵穴等の遺構を確認することはできなかったが、掘り方面に見られたピット1は柱穴、ピット2は貯蔵穴となる可能性を有し、或いは建て替えのあったことが推定される。



住居覆土

1: 暗黒褐色砂質土: As-YPと白色土粒を微量含む。 2: 暗黒褐色土: 1層に比し粘性増し、褐色微粒子を微量に含む。 3: 暗茶褐色土: 暗茶褐色土中にAs-YP若干量混入。 4: 暗茶褐色土: 暗茶褐色土と暗黒褐色土の混土。 5: 暗茶褐色土: 暗茶褐色土主体に暗黒褐色土少量混入。 6: 暗黄褐色土: As-YPと暗茶褐色土の混土。

住居掘り方覆土

7: 暗茶褐色土: 褐色土粒混じりの暗黒褐色土微量混入する。 8: 暗茶褐色土: 粘性に富む。 9: 暗茶褐色土: 暗茶褐色土と暗黒褐色土の混土中に褐色土ブロック微量混入する。

第212図 H-114号住居

H-114号住居 (古墳時代後期, 第212~214図, 図版40~41・83~84・97)

概要 本住居はB区南西部に位置する、B区に於いては中~大型のものに属する竪穴住居跡である。

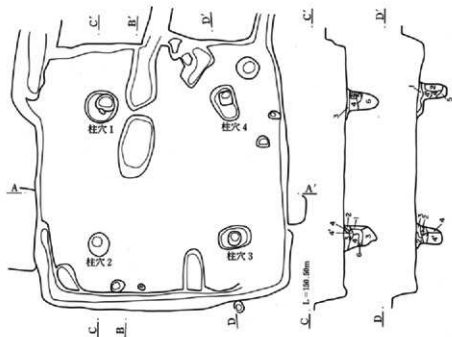
本住居付近は耕作溝が深く入り、本住居にも東部を中心に3本の耕作溝が入って本住居を壊している。特に住居の東部中央では、耕作溝と土坑等の擾乱が絡んでカマドの過半を壊し、その記録も行い得ないような状況であった。

さて、本住居の出土遺物は比較的多かったが、こ

の中で本住居に伴うと判断されたものには6世紀後半期の特徴を示す土師器壺(6,7)や同じく西暦600年を前後する時期の土師器環(1~3)、7世紀前半期のもものと判断される土師器の環(4)や高環(5)の他、こも編み石(8~18)が見られた。

一方、覆土中の遺物は住居南東部の床上10から15cm程の高さに集中して見られたが、この中には縄文時代の磨石(19~22)や6世紀後半期から7世紀

第3章 発見された遺構と遺物



柱穴覆土

- 1：暗黒褐色土：暗黒褐色土と暗黄褐色土の混土。
- 2：暗黄褐色土。
- 3：暗褐色土：黒色土と褐色土が微量含まれる。(3'：As-YPが微量に含まれる。)
- 4：暗茶褐色土：暗茶褐色土中に黒色土微量混入する。(4'：1層に比し黒色土の混入が多く全体に黒味かかる。)
- 5：暗茶褐色土：夾雑物を殆ど含まず。
- 6：暗茶褐色土：夾雑物を殆ど含まず、褐色土ブロックを若干量含む。

中葉頃にかけたものと思われる土師器環(23、26、24、25)や、6世紀前半期のもと思われる須恵器蓋(27)、6世紀後半期の土師器壺(28)や6世紀代の土師器胴張壺(29、30)などの他、こも編み石(32～36)や、耕作溝に絡んでか近代以降の稲荷信仰に伴う狐形土製品の破片(37)も見られた。

以上のような出土遺物の状況から、本住居は概ね西暦600年を前後する時期の所産として把握され、覆土中の遺物の状況から本住居は廃絶後比較的早い時期から遺物の投棄が始まり、少なくとも奈良・平安期頃まではその痕跡が残されていたことが推定されるのである。

規模 長軸：560cm 短軸：534cm 深さ：59cm

カマド 残存幅：46cm 残存奥行：60cm

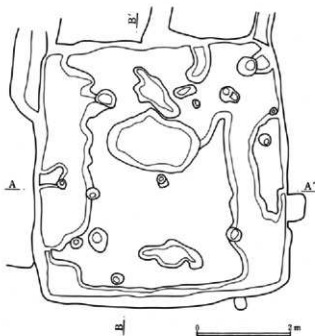
右袖欄：28cm以上 長さ：54cm 高さ：16cm

柱穴1 径：68×66cm 深さ：67cm 柱穴2 径：50×45cm 深さ：71cm 柱穴3 径：68×49cm 深さ：68cm 柱穴4 径：76×52cm 深さ：61cm

貯蔵穴 径：47×46cm 深さ：79cm

周溝 幅：10～26cm 深さ：10cm

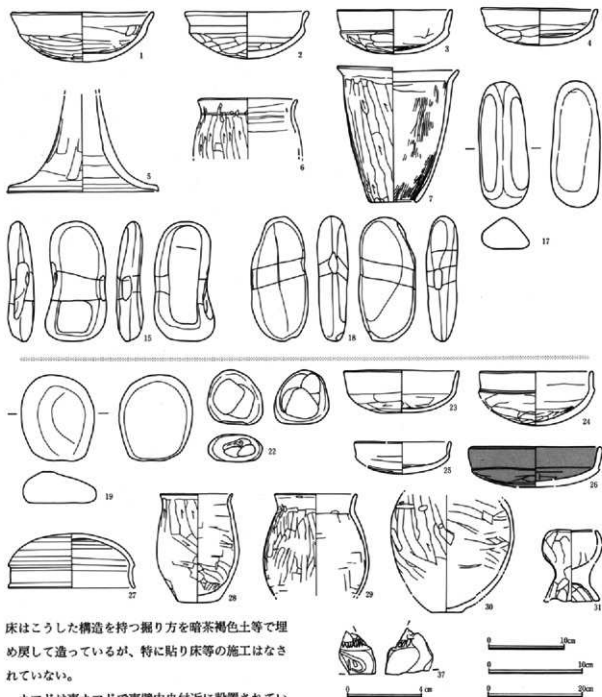
床下土坑 径：195×130cm 深さ：16cm



第213図 H-114号住居掘り方

構造 本住居は方形のプランを呈する。

掘り方を有するが、掘り方には全体的構造として幅16～113cm、深さ16cmを測る周溝状の掘り込みが廻るため、住居中・西部には方形様の掘り残し部が見られた。掘り方にはこの他幾つかのピット・土坑様の掘り込みも見られ、住居中央の東寄り、上述の方形プランの掘り残し部の東端部には大型の土坑様の掘り込みも見られたが性格等は特定できなかった。



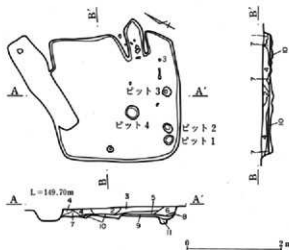
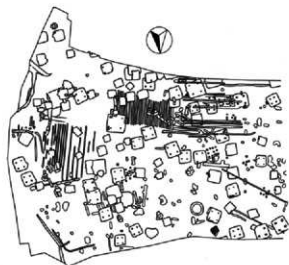
床はこうした構造を持つ掘り方を暗茶褐色土等で埋め戻して造っているが、特に貼り床等の施工はなされていない。

カマドは東カマドで東壁中央付近に設置されているが、上述のようにカマド付近は顕著な攪乱があることもあって十分な観察や記録化を施すことはできなかった。しかし乍ら燃焼部は東壁ラインの内側に設定され、その両側に短い袖を持つことを確認するなど、一定の所見を得ることはできた。

床面は東西の壁近くが耕作溝や土坑等の攪乱によって多少荒らされていたが、そうした中で主柱穴4基と貯蔵穴1基、そして周溝を確認している。こ

第214図 H-114号住居出土遺物

のうち主柱穴は何れも深いしっかりした掘り方を呈しており、北西の柱穴3を除く3基の柱穴では大きな掘り込みの中に径18から40cmの小さなピットが掘削されており、断面観察から柱材の径は20cm程と推定される。尚、貯蔵穴は柱穴状の形態を呈し、カマド右側の南東コーナー付近に掘削され、周溝は北西コーナーから西壁の壁際に確認された。



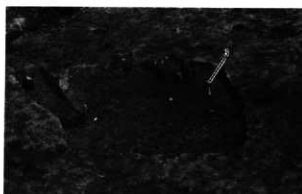
H-115号住居（古墳時代後期～平安時代，第215～216図，図版41・84）

概要 本住居はB区北西部の調査区北端際に位置する小型の竪穴住居跡である。

本住居は北壁中央付近が土坑による削平を受けており、大きく抉られているが、全体としての遺存状況は比較的良好であった。

本住居からの出土遺物は少なく僅かに29片の土器片と2個の土製の白玉(1,2)、そして1片の磁器片を見た過ぎない。これらの中には6世紀前半期のもと思われる土師器(3)なども見られたが、何れも本住居に伴わないか、その関連を特定することはできなかった。

以上のように出土遺物の中で本住居の時期を特定できるような遺物は無く、また覆土中の遺物も古墳



住居覆土

1：暗黄褐色土：ローム僅かに含む。 2：褐色土：ローム僅かに含む。 3：褐色土：褐色土と暗黄褐色土の混土。ローム僅かに含む。 4：暗黄褐色土：暗黄褐色土多量に、ロームやや多く、褐色土僅かに含む。 5：褐色土：暗黄褐色土を混入し、ローム僅かに含む。 6：暗褐色土：暗黄褐色土を僅かに混入する。 7：暗黄褐色土：ローム多く、褐色土僅かに含む。 8：暗黄褐色土：綿まりの悪いロームを主とし、褐色土僅かに混入。

廻り方覆土

9：暗黄褐色土：黒褐色土と白色粒僅かに含む。 10：黄褐色土：ローム主体に褐色土・白色粒・暗黄褐色土僅かに混入。 11：黄褐色土：ローム。

住居覆土

1：褐色土：ロームやや多く、暗褐色土・暗黄褐色土僅かに含む。 2：暗褐色土主体。

カマド覆土

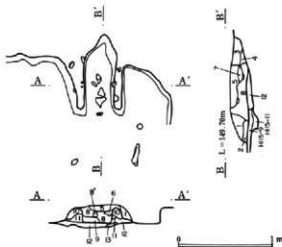
3：褐色土：暗黄褐色土僅かに含む。 4：褐色土：ローム僅かに含む。 5：灰褐色粘質土：白黄色土・薄紫粘質土・ローム僅かに含む。 6：暗黄褐色土：灰白色粘質土とロームの混土。 7：暗赤褐色土：黄土やや多く含む。 8・8'：褐色土：ローム僅かに含む。 9：褐色土：薄黄色ロームやや多く含む。

竪坑蓋材

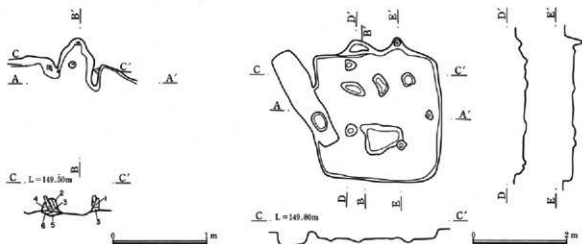
10：褐色土：白色粒子やや多く、ローム僅かに含む。 11：褐色土：白色粒子・ローム僅かに含む。

カマド廻り方覆土

12：褐色土：ロームやや多く含む。 13：黄褐色土：ローム主体。

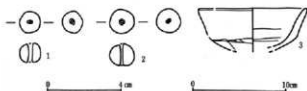


第215図 H-115号住居及びカマド



袖構壁材

1：褐色土：やや強い。2：暗褐色土：焼土僅かに含む。ややよく締まる。3：暗褐色土：焼土やや多く含む。よく締まる。4：褐色土：よく締まる。5：褐色土：幾分臭味帯びる。よく締まる。6：暗黄褐色土：くすんだローム主体。褐色土の混入やや多く、ややよく締まる。



時代後期から奈良・平安時代にかけての広い時期のものが見られ、住居の時期を推定することはできなかった。ただし本住居はカマドを伴っているので、古墳時代後期から平安時代の所産ではある。

規模 長軸：268cm 短軸：264cm 深さ：17cm
 カマド 幅：74cm 奥行き：84cm 左袖 幅：32cm 長さ：62cm 高さ：14cm 右袖 幅：15cm 長さ：53cm 高さ：17cm 燃焼部 径：29×77cm 深さ：3cm 煙道 幅：19cm 長さ：8cm
 ビット1 径：21×17cm 深さ：6cm ビット2 径：19×18cm 深さ：9cm ビット3 径：18×17cm 深さ：13cm ビット4 径：26×25cm 深さ：4cm
 床下土坑 径：88×67cm 深さ：6cm

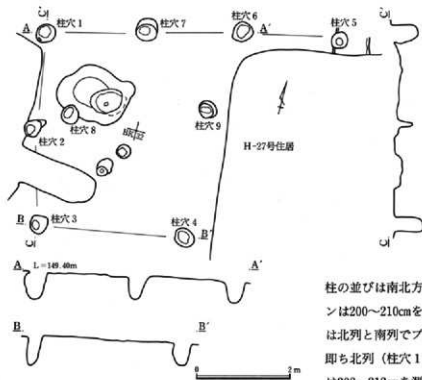
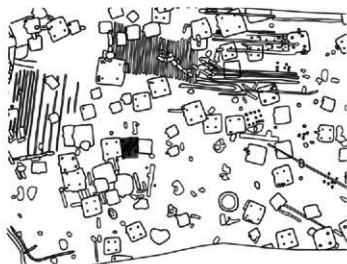
構造 本住居は方形のプランを呈している。

掘り方を有するが、掘り方には深さ10cm内外のビット様の掘り込みが幾つか見られたが、全体的なプランでの掘削等は認められなかった。尚、住居中西部には浅い土坑が見られたが、性格等は特定できなかった。床面はこのような掘り方をロームまたは黒褐色土等の土壌で埋め戻して造っているが、貼り床等の構造は特に施されていない。

第216図 H-115号住居掘り方及び出土遺物

カマドは東カマドで、東壁のかなり南寄りの位置に設けられている。カマドは平底気味の浅い掘り方を有し、これを褐色土とロームで埋め戻して燃焼面を造り出している。燃焼部は縦長で、その過半の部分が東壁ラインの手前に来るように設定されている。燃焼部は中から手前側ではやや浅く窪んでいるが、奥側ではすぼまって徐々に高くなり、奥壁に達して煙道へ入って行っている。袖は燃焼部の両側にほぼ平行に設置されている。本住居のカマドで特徴的だったのは礫による袖石を有し、これがカマドの先端ではなく基部側に立てられていたことである。袖本体は、この袖石の手前側に褐色土を主体とした土を盛って構築している。

床面に於いては4つ種のビットを発見・掘削したが、主柱穴及び貯蔵穴を確認することはできなかった。発見されたビットのうちビット1～3については位置的に壁構造に関連するものと考えられ、住居中央やや南西寄りのビット4は柱材に関連するものと思われる。これらのビットは一様に浅く、柱穴ではなく、柱様のものが床面に設置された加重により圧縮されたものの痕跡ではないかと思われる。



第217図 1号掘立柱建物

1号掘立柱建物(古墳時代後期以降, 第217図, 図版41)

概要 本建物はB区中央部の平坦部に位置する。

H-27号住居と切り合い関係にあるが、H-27号住居の床面に本建物の柱穴に比定できるピットは認められず、また想定される本住居の柱穴底面のレベルがH-27号住居の床面より高い位置にあったため新旧を特定することはできなかった。

本建物からの遺物の出土は少なく、4片の土器片

等を出土したに過ぎなかった。

以上のような状況のため本建物の時期を特定することはできなかったのであるが、柱穴の覆土中出土遺物の中で時期を想定できる遺物で最も新しいものは6世紀後半期のものなので、それ以降の所産としては把握されよう。

規模 柱穴1 径:44×36cm 深さ:59cm
柱穴2 径:41×34cm 深さ:60cm
柱穴3 径:38×35cm 深さ:61cm

柱穴4 径:42×

38cm 深さ:49cm

柱穴5

径:46×44cm 深さ:48cm

柱穴6 径:34×34cm 深

さ:61cm

柱穴7 径:

45×38cm 深さ:46cm

柱穴8 径:37×37cm 深

さ:43cm

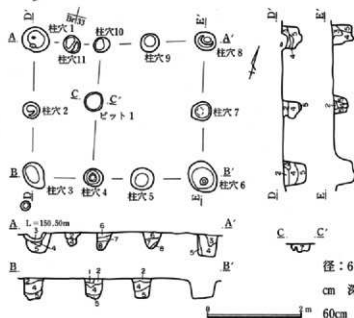
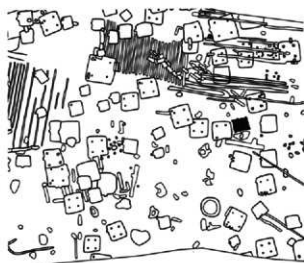
柱穴9 径:

40×36cm 深さ:42cm

構造 本建物は東部の中・南部部分が確認できなかったのであるが、東西方向に主軸を持つプランを呈する。

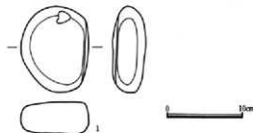
柱の並びは南北方向にある西列では2間でそのスパンは200~210cmを測る。しかし乍ら東西方向のものは北列と南列でプランが異なることが想定される。即ち北列(柱穴1・5~7)では3間構成でスパンは208~212cmを測るが、南列(柱穴4・5)は2間でスパンは317cmを測る。北列と西列にほぼ一致する210cm程の長さが本建物の基本の規格を示し、南列は入り口等、特段の構造によるものと思われる。

尚、本建物の範囲内には柱穴1~7以外にも幾つかのピットが見られたが、このうち柱穴8・9は柱穴と認められた。このうち柱穴9はその位置から1号掘立柱穴に伴う可能性も残すが、やや走行がずれるので、柱穴8・9は1号掘立柱穴とは異なる遺構と判断される。尚、柱穴8と柱穴9のスパンは292cmを測る。



柱穴層土

1：黒褐色土：ローム・暗黄褐色土層かに含む。 2：褐色土：ローム・暗黄褐色土層かに含む。 3：褐色土：暗黄褐色土主体としローム層かに含む。 4：暗褐色土：黒褐色土と褐色土の混土。ローム等層かに含む。 5：暗黄褐色土：褐色土とロームの混土。ローム・黒褐色土層かに含む。 6：暗褐色土：ロームやや多く全体に散在する。 7：暗褐色土：明るいロームやや多く含む。 8：褐色土：明るいローム層かに含む。



第218図 2号掘立柱建物及び出土遺物

2号掘立柱建物（古代以前、第218図、図版41・84）

概要 本建物はB区中央付近に位置する。特に他の遺構との重複関係等は見られなかったが、付近には本建物と若干走行のずれる柱穴列が見受けられた。

本建物からの出土遺物は少なく、僅かに磨石(1)が出土しただけであった。

従って、本建物の時期は特定できなかったのであるが、上位に攪乱によるAs-Aを見るものの基本的には覆土中にAs-A及びAs-Bを含まないので平安時代以前の所産とすることはできよう。

また柱穴2と柱穴7、柱穴4と柱穴10のそれぞれ

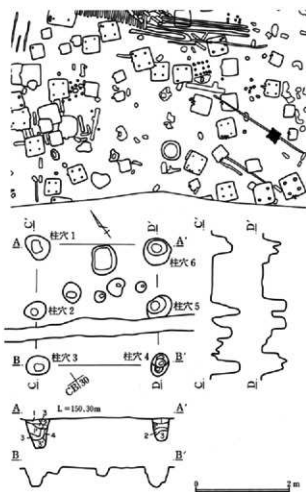
結ぶ線の交点近くにはピット1が在るが、その位置はやや北に寄っていて掘り込みが浅く、また東側の柱穴2-柱穴7、柱穴5-柱穴9ラインの交点付近にこれに連なる遺構を確認できなかったことから本建物には伴わないものであると判断される。

柱穴1 径：57×51cm 深さ：42cm 柱穴2 径：35×34cm 深さ：43cm 柱穴3 径：60×42cm 深さ：44cm 柱穴4 径：39×36cm 深さ：48cm 柱穴5 径：49×46cm 深さ：43cm 柱穴6

径：67×57cm 深さ：45cm 柱穴7 径：43×40cm 深さ：31cm 柱穴8 径：44×39cm 深さ：60cm 柱穴9 径：40×38cm 深さ：38cm 柱穴10 径：34×30cm 深さ：38cm 柱穴11 径：37×34cm 深さ：28cm

構造 本建物の主軸は東西方向を向くが、東側がやや北に上がっている。

本建物には11基の柱穴が発見されたが、基本的プランは2間×3間を呈するものと判断される。全体として4つのコーナーの柱穴は大きく、間に挟まれたものが小さい傾向を持つ。特に柱穴10は小さく、柱穴1との間に位置する柱穴11はその補助的效果を与えるものと思慮される。スパンは南北走行のものは140から150cm、東西走行のものは(柱穴11を除いて)105~125cmを測る。



柱穴覆土

- 1: 黒色土: 褐色土微量に混入。(1': 1層より褐色土の混入多し)
- 2: 暗黒褐色土。
- 3: 暗褐色土: 黒色土と暗褐色土の混土。(3': 淡褐色土ブロックを少量含む。)
- 4: 暗褐色土: 暗褐色土と黒色土の混土。

第219図 3号独立柱建物

3号独立柱建物(C区所在遺構、古代以前、第219図、図版41)

概要 本建物はC区東半の平坦面部分に位置する。

本建物は周囲には耕作に伴う溝や規則的配列を示す多数の掘り込みによる攪乱が入っていたが、本遺構の破壊は幸い柱穴5の一部に及んだに過ぎなかった。更に本建物の走行がこれらの攪乱に近いものであったのではあるが、覆土の相違や耕作に伴うピットが方形プランを呈するのに対し、本建物の柱穴が円形プランを呈する等の相違の中に本建物を識別

し、掘削・調査を行ったのである。

本建物は東西3基づつの柱穴列で構成されている。しかし後述のように東西方向のスパンが南北方向のそれの2倍強の広がりを持つため、東西列の間に柱穴の存在が想定されたのであるが、柱穴1と柱穴6の間のものは耕作に伴うピットであり、柱穴2と5、柱穴3と4の中間付近に柱穴を確認することはできなかった。この他、本建物の内側には幾つかの小ピットも見られたが本遺構との関係は特定できなかった。

さて、本建物からの出土遺物は僅かであり、合わせて7点の土器器片と須恵器片を出土したに過ぎなかった。更にこれらの遺物からは細かい時期の特定を行うことはできなかったのであるが、少なくとも各柱穴の覆土にAs-A及びAs-Bが認められなかったことや、覆土中の遺物の状況から本建物は古墳時代後期以降で且つ平安時代以前という大雑把な範疇で捉えることはできるものと思われる。

規模 柱穴1 径: 54×50cm 深さ: 64cm 柱穴2 径: 46×37cm 深さ: 37cm 柱穴3 径: 49×40cm 深さ: 60cm 柱穴4 径: 48×36cm 深さ: 49cm 柱穴5 径: 58×46cm 深さ: 51cm 柱穴6 径: 59×56cm 深さ: 41cm

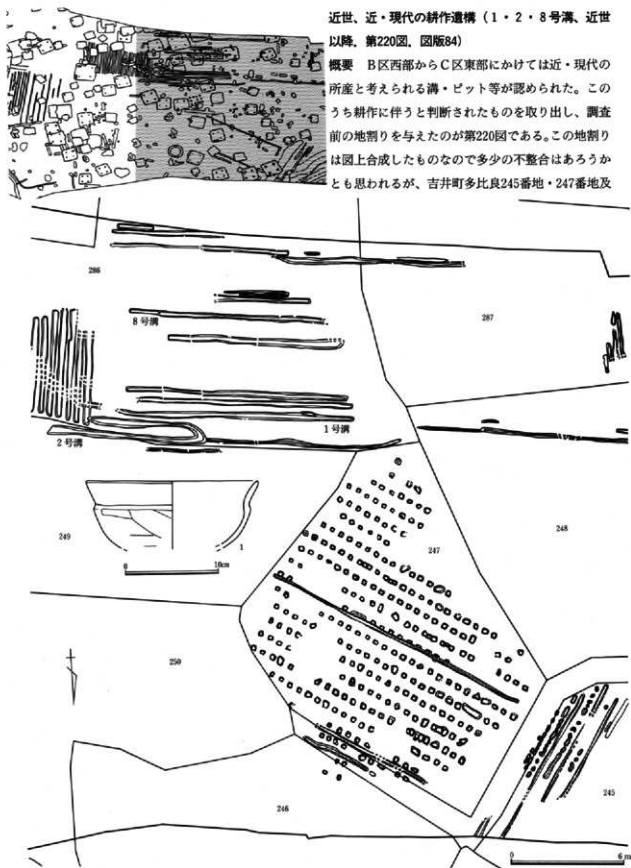
構造 前述のように本建物は東西3基づつの柱穴で構成される2間×1間の独立柱建物跡で、主軸は北々東を向いている。後述のように

本建物の柱穴は比較的しっかりした掘り込みを成すが、北側の2基の径はやや大きく、中及び南側の4基がこれに比べてやや小さい傾向を示す。掘り込みの深さは平面的な大小に拘わらず特定の傾向は示していない。

建物のスパンは、先に触れたように南北方向のものと東西方向のものとは異なった長さを示している。即ち、南北方向のものは西側のもでは116cmと140cm、東側のもでは何れも120cmを測り、一方、東西方向のものは北・中・南列の何れに於いても260cmかこれを若干切る、南北方向のそれに比べ2倍強の長さを測るのである。

近世、近・現代の耕作遺構（1・2・8号溝、近世以降、第220図、図版84）

概要 B区西部からC区東部にかけては近・現代の所産と考えられる溝・ピット等が認められた。このうち耕作に伴うと判断されたものを取り出し、調査前の地割りを与えたのが第220図である。この地割りは図上合成したものであるので多少の不整合はあろうかとも思われるが、吉井町多比良245番地・247番地及



第220図 B区西部からC区東部への近世、近・現代の耕作遺構及び出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

び247番地と246番地の境の馬入れ部分、そして286番地の区画内に集中しているのが分かる。

このうち247番地と246番地境の馬入れ部分には道路の両側を画すると思われる平行する2本の溝が入るが、その走行は調査前のものと若干異なるため、近代以前に遡る可能性を有する。

一方286番地に於いては1号畠の西側に東西走行の溝10本程が見られた。このうち3本には1・2・8の遺構番号を付したが、1・8号溝については286

番地の他の溝と同様新しい時期の耕作溝と考えられる。尚、2号溝は286番地と249番地の境に在ってこれを跨ぎ、プランも二つに折れるような形態を示すので機械掘削ではなく手掘りによるものと判断され、1・8号溝より古い近世・近代のものと考えられる。

尚、これらの溝は幾つかの遺物を巻き込んでおり、1号溝から6世紀後半期の特徴を示す土師器鉢(1)を含む土師器・須恵器片等、8号溝からも土師器片等の出土が見られた。

4号溝(古墳時代後期, 第221図, 図版46・84)

概要 4号溝はB区東部の土合川二面磨る斜面手前の緩傾斜部に位置する。全体で21m弱を調査したが、その北端は土合川に向かう傾斜面と2号谷に落ちる傾斜面に挟まれた鞍部に当たり、20号土坑の項で述べる地形の変換点に当たる2号谷の傾斜面の肩付近を南走する。尚、南端部の延長は2号谷に向かい、本溝の南北両端の比高差は1.3m程を測る。

4号溝の掘り込みは比較的しっかりしており、その規模も本遺跡の溝遺構の中では大きいもの一つである。本溝の北半部には後述する21号土坑がすっぽりと治まるように掘削され、北部に於いては幾つかのピットが絡んでいた。また南半部に於いては前述のようにH-28号住居のカマドが本溝の覆土の上位に設けられており、H-89号住居は本溝に重なる位置に掘削・建築されている。尚、断面及び形態の観察から一回以上の掘り直しが確認されたのであるが、流水等の痕跡は特に認められなかった。

本溝からは若干の遺物の出土が見られ、この中には7世紀前半期のものの特徴を示す土師器杯(1.2)や21号土坑に付随する可能性を持つ台石(3)も見られたが何れも本溝の覆土中からの出土である。

4号溝の時期、特に廃棄時期については、H-28号住居が本溝遺構埋没後に造られ、上述の土師器杯(1)が溝が掘り直された部分に掛かる位置から出土していることから、西暦600年前後する時期であったと判断される。埋没若しくは埋め立ては、短期間に行われたものと想定される。一方、当初の掘削時

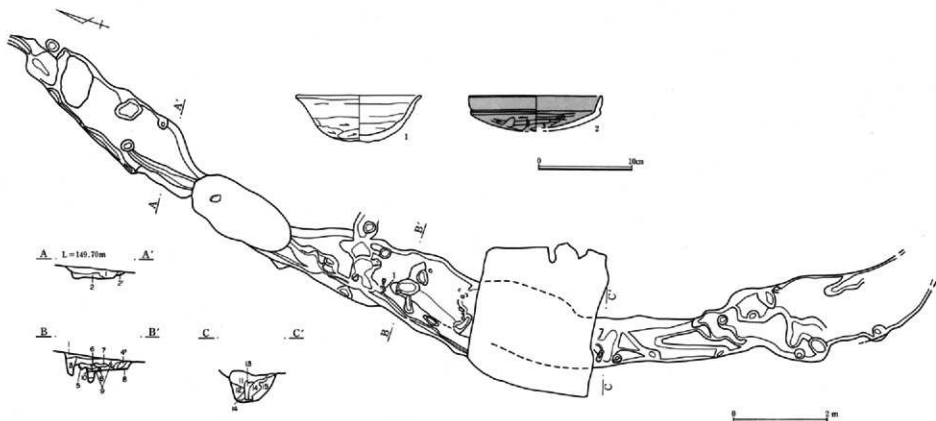
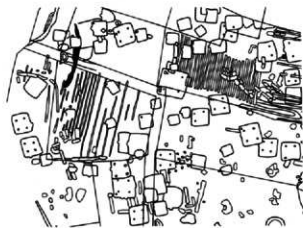
期を特定することはできなかったのであるが、出土遺物の状況から本溝は古墳時代後期の所産であり、上述のように下限の時期が推定され、更に遺構自体に掘り直しの痕跡が見られることから、6世紀代の所産として把握されるものと思われる。

規模 (旧段階の溝)長さ: 20.96m以上 上幅: 102~182cm 底幅: 71~107cm 深さ: 26cm以下
(新段階の溝)長さ: 18.38m以上 上幅: 46cm以下 底幅: 2~14cm 深さ: 87cm以下

構造 本溝はやや西に張り出すようなラインに乗る形で掘削されている。一回以上の掘り直しが想定されるが、形態的には大きく新旧2つのものに分けることができる。

このうち旧段階のものは、21号土坑付近でくびれが見られるが、概ね幅広のある程度の規格性を持ったプランを呈する。底面には凹凸が認められるのであるが、全体としては箱状の掘り方を呈するものとして把握される。

一方新段階のもののラインには弱い蛇行が見られ、21号土坑とH-89号住居の間及びH-28号住居付近では遺構の西壁を形成するが、他の部分では概ね旧段階のものの中央付近を通っている。形態的には栗研堀状を成し、特にH-89号住居の北側では底幅がかなり狭くなる。この形態的特徴とC-C'の断面に於け土層堆積が垂直に分層されて左右に分かれることと併せて考えると、板様物で土止めを施した可能性が思慮される。



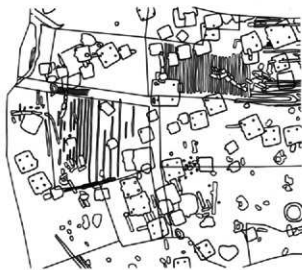
現耕作土等

- 1: 暗褐色土。
- 3: 暗褐色土: 黒色土・漸移層上層土ブロック層。As-A' 流入。
- 4: 好遺層土
- 2: 茶褐色土: 上層土を中心とするローム漸移層土 (以下「漸移層土」とする) ブロック層。(2': 2層に似るがローム粒混入。) 4: 明褐色土: 漸移層下層土ブロックにローム粒混入。(4': 4層土に似るがローム粒少ない。)
- 5: 暗褐色土: 黒色土・漸移層土とロームブロックの混土。
- 6: 暗茶褐色土: 漸移層土ブロックに黒色土粒混入。
- 7: 黒褐色土: 黒色土に漸移層土入る細かいブロック層。ローム粒を混入する。
- 8: 明黄褐色土: ロームブロックに漸移層下層土ブロック混入。

(地山の可能性あり。)

- 9: 明黄褐色土: 漸移層土とロームの細かいブロック層。As-BP 混入。
- 10: 暗黄褐色土: ロームブロック漸移層上層土ブロック混入。
- 11: 茶褐色土: 漸移層土ブロックに黒色土・ロームブロック混入。焼土粒を種かに含む。
- 12: 茶褐色土: 漸移層上層土ブロック層。漸移層下層土ブロックを種かに混入する。
- 13: 茶褐色土: 12層に似るが、色調暗く、ローム粒を混入し、焼土粒を種かに含む。
- 14: 明茶褐色土: ローム層土と漸移層土ブロックの混土。焼土粒種かに含む。
- 15: 明褐色土: 漸移層下層土とロームブロックの混土。

第221図 4号溝及び出土遺物



第222図 5・6号溝

5号溝 (近世～現代, 第222図)

概要 5号溝はB区東部の近世の削平による平坦面に位置するもので、全体的には東西走行の直線上に乗る、東から溝・土坑・溝・土坑の4つの遺構から構成される遺構群である。

5号溝は南側の吉井町多比良260番地と、北側の251番地及び259-1番地とを区画する区画線上に位置する。従って5号溝を構成する溝及び土坑は根切り溝や芋穴等の農耕に伴うものと判断される。

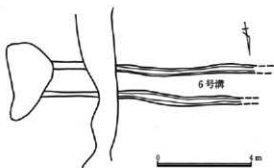
本溝を構成する遺構は時期的な差を有するのであるが、16号土坑を切る東側溝は覆土上位にAs-Aを含むこと等からAs-A降下後の所産であり、その他の遺構についてもこれらが乗る調査直前の区画が後述するAs-A下の畝遺構にも合致するため、少なくとも近世後期までは遡るものと判断される。

規模〔東側溝〕長さ：490cm以上 幅：50cm

〔西側溝〕長さ：550cm以上 幅：75cm

〔東側土坑〕長軸：180cm 短軸：100cm

〔西側土坑〕長軸：220cm 短軸：115cm



構造 5号溝は前述のように2条の溝と2基の土坑で構成される。溝は直線的なサク状の形態を成しているが、その幅が異なるため東側の溝と西側の溝は異なる溝と判断した。土坑は隅丸方形のプランを基調としている。

6号溝 (近世～現代, 第222図)

概要 6号溝はB区東部南寄りの近世の削平によると判断される平坦面の南端付近に位置する、東西方向に平行に並ぶ2条の溝で構成されるが、その東側と西側は削平されている。

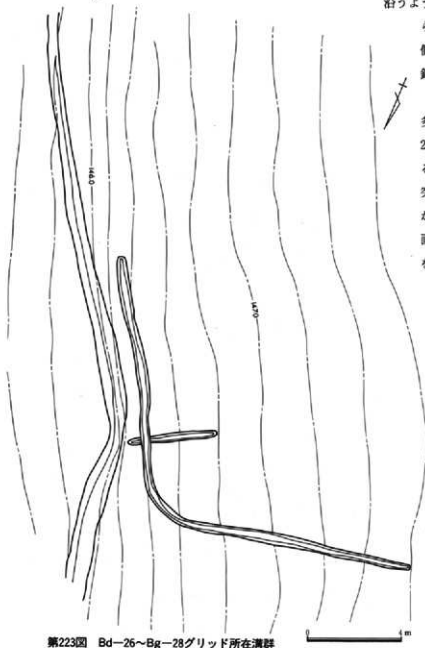
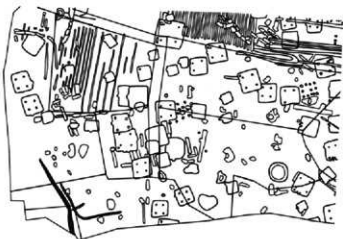
本溝は北側の吉井町多比良260番地と、南側の285番地の境に入る馬入れ道の中に在ってこれに重なっている。しかし、その走行は若干南西に傾いているので古い段階の状況を示すものと思慮される。本溝も5号溝同様その記録化が不充分であったため、覆土の状況等は不明だが調査経過から推してAs-A降下後の所産と推定される。尚、西側は後述する近世サク平面に至って北に折れるものと想定される。

規模〔南側溝〕長さ：880cm以上 幅：30cm

〔北側溝〕長さ：860cm以上 幅：40cm

構造 前述のように6号溝は南北2条の溝遺構で構成されている。南北の溝の間隔は、肩から肩まで凡そ70～100cm、溝と溝の中心の間隔は105～135cmを測る。

それぞれの溝のプランは若干蛇行するが、概ね直線的なラインを示しその方向は西北西を向く。その形態はサク状を呈する。



第223図 Bd-26～Bg-28グリッド所在溝群

Bd-26～Bg-28グリッド所在溝群（近世、第223図）

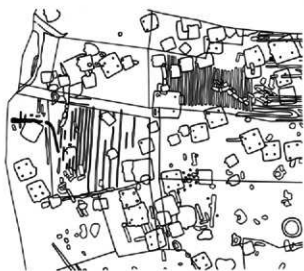
概要 次に遺構番号は付していないが、Bd-26～Bg-28グリッド所在の2条の溝遺構を取り上げたい。この溝遺構はB区北東部に在り、第1次調査区の調査の中で比較的遅い段階に確認・調査したもので、記録化が不十分であった。

2条の溝のうち東のものは「く」字状のプランで、土合川に落ちる斜面の肩に沿うように掘削されているが、東壁は削られている。一方西側の溝は、東側の溝に沿って北走した後、やや鈍角に折れて西走している。

さて、東側の溝は東側の吉井町多比良258番地-1・2と西側の252番地を区画しているものであるが、南側の259番地-1の区画に突き出しているため、現行の区画ができる以前に斜面と平坦部を区画する溝として掘削された可能性を有している。また西側のものは吉井町多比良252番地の範囲内に在るが、所謂根切り溝の形態を示しており、調査前の地割を二分するような位置に在って地割との整合性にやや欠けるためやはり現行区画の成立以前に掘削された可能性を有するものと思慮される。

規模（東側溝）長さ：25m以上 幅：100cm以下
（西側溝）長さ：21.7m 幅：45cm

構造 東西何れの溝も、しっかりした箱堀状の掘り込みを有していた。



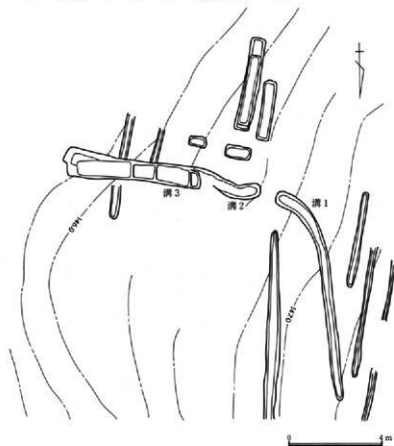
と思慮される。即ち、南北走行で南端部で東に走行を変え、溝1は259番地-1と260番地に跨って位置していること、東西走行を示す溝2は東に变じた溝1の延長線上にあつてそれに続くものと判断されること、また溝3としたものは若干走行を変ずるもの溝2にはほぼ重なっているもので、同様の意図の元に掘削されたものと思われることである。

さて、調査段階の記録化の失敗のため溝1と溝3

については時期の特定はできなかったが、溝2についてはAs-Aを若干含んでいるため18世紀末以降の所産と言うことができる。しかし、溝1・2・3は上述のように現代に続く土地区画とは合致しないことから今日の区画割り成立する以前の所産で、18世紀末以降に区画の変更のあったことを示唆するものと思われる。

尚、溝1・2・3については、その形状から所謂根切り溝のようなものの性格が想定される。

規模 溝1 長さ:9.45m 幅:60cm 溝2 長さ:8.5m 幅:68cm 深さ:19cm 溝3 長さ:5.7m 幅:107cm 深さ:43~55cm



第224図 Ba-36~Bd-34グリッド所在溝群

Ba-36~Bd-34グリッド所在溝群(近世。第224図)

概要 Ba-36~Bd34グリッド付近に所在する溝の多くは吉井町多比良259番地-1と260番地の区画内に収まり、走行もその区画に従って配置されているが、第224図中に溝1・2・3としたものは以下の理由により調査前まで続く土地区画に基づかないもの

構造 溝1は溝2サク様の形態を呈するが、その溝幅はやや広く、溝2はその西部で南側がややくびれるようなプランを示す。溝1と溝2の間は約70cm程度隔たっている。また溝3は短冊形の土坑様の形態を呈し、その底面は西部と東部のそれに対し中位のもの12cm程度、西端部が22cm程度高くなっている。

第3章 発見された遺構と遺物



耕作土

1: 暗褐色土: As-Aを含むローム漸移層土(以下「漸移層土」)。現耕作土に似る。

4号土坑覆土

2: 茶褐色土: 漸移層土ブロック。H-84号住居-2層に連続する。分層はできないが色調は濃い。

3: 茶褐色土: 漸移層下層土ブロックに漸移層上層土とロームブロック混入。

4: 暗褐色土: 黒色土・漸移層土・ロームブロックの混土。

5: 明褐色土: 漸移層下層土ブロックの混土。

第225図 1・2・4・7・25・26号土坑及び出土遺物

1号土坑(近・現代, 第225図, 図版42)

概要 1号土坑はB区中南部のH-3号住居の南、1.5m程の地点に位置する中小規模の土坑である。

本土坑は新しい時期(近・現代)の墓塚として認識され、確認面に於いて中型犬と思われる獣骨1頭分の出土が見られた。この動物は西頭位で脚部を南向に横臥の状態で葬られていたが、頭は立てられて

いたようで表土掘削時に欠失してしまった。

規模 長径:91cm 短径:60cm 深さ:19cm

構造 本土坑のプランは楕円形を呈するが、北辺はやや圧平され直線的となっている。

壁面は立って桶状の形態を呈する。底面は若干南に下がっている。

2号土坑(平安時代, 第225図, 図版42・84)

概要 2号土坑はB区東部のH-12号住居の南に十数cm隔てるといふ近接した位置に確認された小型の土坑である。H-12号住居の調査に伴うサブ・トレンチ掘削によって発見されたため、西半部を確認することはできなかった。

本土坑からは9世紀等の所産と思われる土師器薬片を中心とした遺物が見られ、9世紀後半期のものと思われる須恵器高台付碗(1)の出土も見られた。何れも本土坑との直接の関係は特定できなかった

が、覆土中にAs-A・As-Bを含まなかったため、平安期の所産として捉えられるものと思われる。

尚、本土坑の用途は特定できなかった。

規模 長径:推定59cm 短径:55cm 深さ:21cm

構造 本土坑はおよそ円形のプランを呈している。

土坑の掘り方は比較的整った形態を示しており、断面は上半部では逆八字形に開き、過半部は筒状を呈するという形態を見せている。底面はきれいな平底を呈している。

4号土坑(古墳時代後期以降, 第225図, 図版42・84)

概要 本土坑はB区北東寄りに在り、南壁部がH-84住居と接してこれを切る。また22号土坑と重なってこれを切るものと判断したが、或いはこれと同一遺構である可能性も有している。

本土坑からは6世紀後半期のものの特徴を持つ土師器環(1)を含む土師器2点が出土しているが、これらと本土坑との関係は特定できなかった。また陶

器1点の混入も見られた。

本土坑の時期は特定できなかったが、H-84号住居を切るもので6世紀を上限とし、覆土中にAs-A・As-Bを含まないため江戸時代中期を下限とする。

規模 長径:167cm 短径:127cm 深さ:42cm

構造 本土坑は隅丸方形のプランを呈するが、やや南に開いており、その形態は箱形に近い。

5号土坑(戦国時代～江戸時代初期, 第225図, 図版42・84～85)

概要 5号土坑はB区中南部に位置し、H-42号住居の覆土中に掘削され、同住居の床面を抜いている。南隅部は6号土坑と接するが本土坑の方が古い。

本土坑の底面付近からは、天聖通寶(1)、慶元通寶(2)、熙寧通寶(3)、咸平元寶(4)、祥符元寶(5)の5枚の銅銭が出土してきている。しかしこれらは咸平元寶(4)を除いて模倣銭の可能性が高く、戦国期に造られた銅銭と考えられる。

一方、覆土中からは古代以前の土師器片7片の出

土が見られた。

さて、人骨の出土は見られなかったものの、出土した銅銭が所謂六道銭と考えられることから、本土坑は墓塚であったものと推定される。尚、その時期については銭種から戦国期～17世紀の所産ではないかと思われる。

規模 長径:134cm 短径:102cm 深さ:53cm

構造 本土坑は方形プランを呈し、主軸は北東-南西を向く。掘り込みは比較的深くしっかりしている。

6号土坑（江戸時代後期、第225図、図版42）

概要 6号土坑はB区中南部のH-42・H-43号住居の覆土中に掘削された大型の土坑で、両住居の掘り片面を突き抜けている。

本土坑からの出土遺物は見られなかった。

尚、本土坑の覆土は多量のAs-Aを含んだ暗黒褐色土であったが、多量のAs-Aを含んでいることについてはAs-A降下後早い段階で本土坑が掘削されたか、本土坑が後述するAs-A下の畝跡に西接して

いることと併せて降下したAs-Aの処理のため掘削されたことが考えられる。何れにせよ本土坑は18世紀末頃に掘削されたものと思慮される。

規模 長径：323cm 短径：176cm 深さ：74cm

構造 本土坑は瓢箪形または隅丸方形に近いやや不整形なプランを呈し、主軸は北々西-南々東を向く。

掘り方はしっかりしているが、底面はやや丸底を呈する。

7号土坑（江戸時代中期以前、第225図）

概要 7号土坑はB区中南部に所在し、As-A下の畝遺構の下位面に発見調査された一連の土坑群の一つである。本土坑は、切り合い関係にある二つの土坑（便宜上、掘り込みの深いものを「土坑1」、浅いものを「土坑2」とする）から成るが、断面観察に於いては新旧関係を特定することはできなかった。

遺構の性格については、後述する27・28号土坑等の土坑群と同様、所謂芋穴等の農耕に伴うものであると思慮され、形態の近似する本土坑周囲の土坑も一連のものと思われる。

また、出土遺物は認められなかった。

ところで、本土坑の時期については18世紀以前の所産とすることはできるが、細かい年代までは特定できなかった。

規模 土坑1 長径：154cm 短径：73cm 深さ：48cm 土坑2 長径：136cm 短径：推定82cm 深さ：34cm

構造 二つの土坑は何れも隅丸方形のプランを呈し、底面も平底であるが、主軸方向は土坑1は北北西-南南東、土坑2は北々西-南々東を向いている。

25号土坑（江戸時代以降、第225図、図版85）

概要 25号土坑はB区中北部、H-9号住居の西20cmの近接した位置に所在する。東端部に小型の土坑が垂直に絡んでいる。

本土坑の覆土中からは9片の土師器・須恵器片が見られ、他にほうろく鍋の破片(1)も見られた。

記録化に失敗し、覆土の記載は残らないが、ほうろく鍋の出土から本土坑は近世以降の所産と判断さ

れる。また遺構の性格については、その形態から芋穴等の農耕に伴うものと判断される。

規模 長径：175cm以上 短径：58cm

〔南北走行の溝〕 長径：60cm 短径：32cm

構造 本土坑及びその東端に位置する小土坑は何れも隅丸方形のプランを呈する。主軸は西北西-東南東を向き、小土坑はほぼこれに直行する。

26号土坑（近世以降か、第225図、図版98）

概要 26号土坑はB区北東部、H-3号住居の東1m程の位置に所在する。

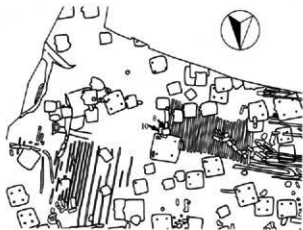
本土坑の覆土中からは須恵器片1片とこも編み石(2)が出土したが、覆土の記録化に失敗したことも相まって時期等の特定はできなかった。

25号土坑と同様、その形態上芋穴等の農耕に伴う

ものと思われ、近世の所産の可能性を持つ。

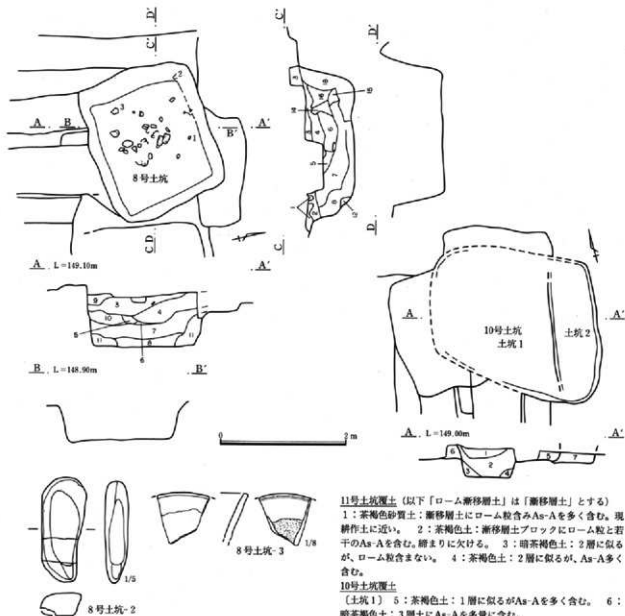
規模 長径：140cm 短径：60cm

構造 本土坑の主軸方向は南北方向を示し、整った隅丸方形のプランを呈している。土坑中心の底面には小ピットが見られたが、本土坑との関係を特定することはできなかった。



8号土坑覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

- 1: 明黄褐色土: ロームブロック
- 2: 明褐色土: 漸移層土とローム層ブロックの混土
- 3: 茶褐色土: 6層に似る
- 4: 暗褐色土: 漸移層上層土ブロックの混土
- 5: 明褐色土: ローム層土と漸移層土と黒色土ブロックの混土
- 6: 茶褐色土: 漸移層中層土ブロック
- 7: 黒褐色土: 漸移層土と黒色土ブロックの混土
- 8: 明褐色土: 漸移層土ブロックの混土
- 9: 明黄褐色土: ロームと漸移層土の接する部分のブロック
- 10: 暗茶褐色土: 漸移層上層土ブロックロームブロック混入
- 11: 暗黄褐色土: 漸移層土ブロック層
- 12: 暗黄褐色土: 黄色ローム下の軟質暗色ローム
- 14: 褐色土: 漸移層土ブロックの混土
- 15: 茶褐色土: 漸移層土層土ブロックにロームブロック混入
- 16: 明黄褐色土: 漸移層土とロームブロックの混土
- 18: 明褐色土: 漸移層下層土



11号土坑覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

- 1: 茶褐色砂質土: 漸移層土にローム粒含みAs-Aを多く含む。現耕作土に近い。
- 2: 茶褐色土: 漸移層土ブロックにローム粒と若干のAs-Aを含む。締まりに欠ける。
- 3: 暗茶褐色土: 2層に似るが、ローム粒含まない。
- 4: 茶褐色土: 2層に似るが、As-A多く含む。

10号土坑覆土

- (土坑1) 5: 茶褐色土: 1層に似るがAs-Aを多く含む。
- 6: 暗茶褐色土: 3層土にAs-Aを多量に含む。
- (土坑2) 7: 茶褐色土: 漸移層土とロームの細ブロックの混土。

第226図 8・10号土坑及び出土遺物

8号土坑(室町～江戸時代、第226図、図版42・85・98)

概要 8号土坑はB区南東部、1号畝下に調査された土坑群の1つで、9号土坑を切るが、10・11号土坑に切られている。

出土遺物は土師器片を中心に磨石(1)、こも編み石(2)などが見られたが、特に軟質陶器鉢(3)等の室町期のものと思われるものも含まれている。

軟質陶器を出土し覆土にAs-Aを含まないので、

室町期から江戸中期までの間の所産と判断される。

また用途については、遺構形態としては座箱による土塚墓の可能性が考えられるが、この場合は17世紀以降18世紀中葉以前という時期が与えられる。

規模 長径：232cm 短径：195cm 深さ：104cm

構造 本土坑は方形のプランを呈する。

掘り込みは箱状でしっかりしている。

10号土坑(江戸時代後期以降及び江戸時代中期以前、第226図、図版42)

概要 本土坑はB区南東の1号畝に調査され、8号土坑の覆土を切っており、11号土坑に切られている。

本土坑は8号土坑と一括で掘削したため、その状況は不明瞭であるが、中・西部のもの(土坑2)と東部のもの(土坑1)に分離される。

出土遺物は8号土坑のものと同様に得えなかった土師器・須恵器片等が見られただけであった。

本土坑の時期については、土坑1はAs-Aを含むことから江戸時代後期以降の所産とできるが、本土坑が1号畝の下面の調査で確認されていることから、時期の特定は難しい。何れにせよAs-Aを多く含むことからAs-A直前か降下後早い段階の所産であ

ろうと想定される。一方、土坑2はAs-Aを含まないことから、江戸時代中期以前の所産である。

用途については土坑2はその形態から半穴等の農耕に伴う可能性が考えられ、土坑1については降下As-Aの処理のための土坑という見方もできる。

規模 [土坑1] 長径：推定260cm 短径：208cm以内 深さ：21cm

[土坑2] 長径：208cm 短径：75cm 深さ：16cm

構造 土坑1のプランは隅丸の台形か方形を呈するものと推定され、一方、土坑2は隅丸の長方形のプランを呈するものと思慮される。

土坑1・土坑2は共に掘り込みは浅く平底である。

9号土坑(奈良時代～江戸時代中期、第227図、図版42)

概要 9号土坑はB区南東部のAs-A畝下に調査された土坑群の1つで、H-51号住居の覆土を切っているが、8・10号土坑に切られている。

本土坑からは土師器片2点が出土したのみで、覆土の記録化に失敗しているため時期の特定は難しい。尚、切り合い関係から本土坑は奈良時代以降、

江戸時代中期以前という広い範囲では捉えられる。

尚、本土坑の用途については、形態的には半穴等農耕に伴うものではないかと推察されるのである。

規模 長径：171cm 短径：74cm以上 深さ：32cm

構造 本土坑は長方形のプランを呈する。掘り方は箱状を成している。

11号土坑(江戸時代後期、第227図、図版42)

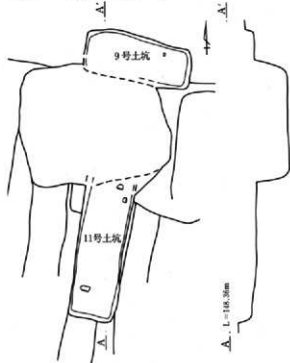
概要 本土坑は8～10号土坑と同様、B区南東部の1号畝下の調査で確認された土坑群の1つである。本土坑は8号土坑・10号土坑と切り合い関係にあるが、その何れをも切っており、上述の土坑群の中では最も新しい。

本土坑からは須恵器片2片が出土したに過ぎず、

時期特定は行えなかったが、As-Aを多く含むことから、10号土坑同様As-A降下後早い段階の掘削であろうと判断される。

規模 長径：312cm以上 短径：74cm 深さ：47cm

構造 本土坑は短冊形のプランを呈しており、平底で主軸は北々東を向いている。



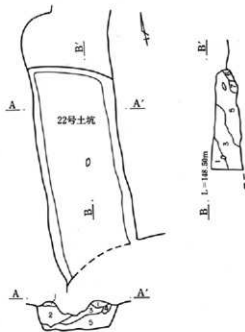
13号土坑(古墳時代後期以降～江戸時代中期, 第227図, 図版98)

概要 本土坑はB区東部のH-28号住居とH-29号住居の重複部分に位置し、双方の住居を切って両住居の新旧関係の判定を誤らせる要因となった。

本土坑は断面にのみ確認され、覆土にAs-Aを含まず、また、竪穴住居の調査の中で面的検出を果たすことができなかった。

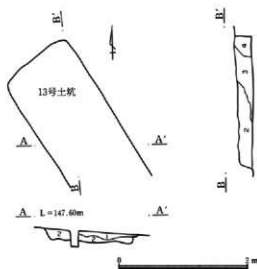
規模 長径:260cm以上 短径:125cm以上 深さ:26cm

構造 本土坑は平底で、長方形のプランを呈するものと推察される。



22号土坑覆土(以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

- 1: 暗黄褐色土: 漸移層下層土ブロック層。2: 暗黄褐色土: 3層に似るが、色調暗く、ロームブロックの混入が少ない。3: 暗褐色土: 漸移層下層土ブロックにローム層土ブロックを多く混入する。4: 暗黄褐色土: 1層に似るが黒色土の小ブロックを混入する。5: 暗黄褐色土: 2層に似るが、色調暗く、ロームブロック少ない。6: 褐色土: 6層に似るが、ロームブロック多く含む。7: 明褐色土: ローム層土。(プライマリールカ)



13号土坑覆土(以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

- 1: 明褐色土: 漸移層土のブロック層。2: 黒褐色土: 黒色土ブロックを中心に、ロームと漸移層土のブロック混入。3: 茶褐色土: 漸移層土ブロック土。As-BP・ローム粒を混入する。4: 暗褐色土: 漸移層下層土の多い漸移層土とロームブロックの混土。

第227図 9・11・13・22号土坑

第3章 発見された遺構と遺物

22号土坑（古墳時代後期～江戸時代中期、第227図、図版43）

概要 本土坑はB区北東寄りに在る、南端部はH-84住居と接しているが新旧関係は特定できない。

本土坑の覆土中に掘削される4号土坑は本土坑にほぼ重なっており、プランに僅かなズレの見られることと断面観察所見及び底面レベルの比較等から別遺構としたが、同一遺構である可能性も残る。

また本土坑からの出土遺物は無く、切り合い関係等の所見からも時期の特定は行い得なかった。

規模 長径：338cm以上 短径：216cm 深さ：59cm
構造 本土坑は長方形のプランを呈し、主軸方向は南北を示す。箱状の掘り込みで、底面は南北両端で上がり気味となるが概ね平底である。

15・16号土坑（江戸時代後期～近代、第228図、図版42・98）

概要 15・16号土坑はB区東部に在り、主軸が同一線上で基本形態が近似する大型の土坑である。

遺物の出土は16号土坑には見られなかったが、15号溝からは11点の土師器片と2点の須恵器片が出土し、こも編み石（1）も見られた。しかし何れも15号土坑の覆土中からの出土で本土坑の時期を特定するには至らなかった。

15・16号土坑は後述の17号土坑-土坑1と共に形態及び主軸方向が近似するため一括の遺構として把握される。これらは16号土坑が現在の区画を越えて掘削されるなど、別の規制に基づいて掘削されている。また15・16号土坑及び17号土坑-土坑1はAs-A

を含まないが、17号土坑-土坑1が切る17号土坑-土坑2がAs-Aを含むことから、15・16号土坑は江戸時代後期以降、近代以前の所産として把握される。

本土坑の用途は特定されなかったが、形態的に芋穴等の農耕に伴う遺構であったと推定される。

規模〔15号土坑〕長径：290cm 短径：90cm 深さ：19cm

〔16号土坑〕長径：418cm 短径：90cm 深さ：35cm

構造 15・16号土坑は短冊形のプランを呈する。15号土坑では若干のビットも見られたが、底面は基本的にフラットである。

17号土坑（江戸時代後期以降及び江戸時代中期以前、第228図）

概要 本土坑はB区東部に在り、前述のように15・16号土坑と一括と捉えられる土坑（「土坑1」）とこれに切られる土坑（「土坑2」）に分けられる。

本土坑からの出土遺物は無く、土坑2の覆土上位の第3層にAs-Aの水平的堆積が見られることから土坑2はAs-A降下時点には殆ど埋まっていたものと推定される。従って土坑2にはこれより遡る近世中期以前の時期を与えたい。一方、土坑1には15・16号土坑に想定した江戸時代後期以降を与えたい。

用途については土坑1は農耕に伴うものと思

れるが、土坑2の用途は想定できなかった。

規模〔土坑1〕長径：282cm 短径：100cm 深さ：31cm

〔土坑2〕長径：252cm 短径：210cm 深さ：117cm

構造 17号土坑のうち土坑1は両端が斜めに切れる短冊形のプランを呈し、底面は基本的に平坦である。

一方、土坑2は円形プランを基調とするが若干巴形のように西から南に向かって短い尾を引いており、全体の形態は楕円状を示している。

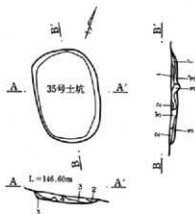
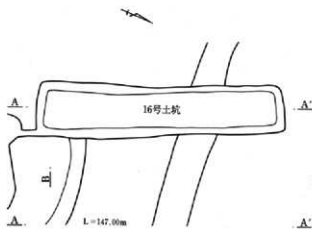
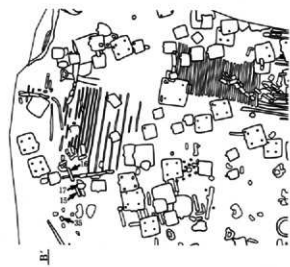
35号土坑（室町時代から江戸時代前期か、第228図、図版44）

概要 本土坑はB区東端部近くに所在しているが、遺構の上位が削平されていた、その遺存状況はあまり良好とは言えなかった。

本土坑からは土師器片4点と須恵器片1点の出土を見たが、遺構の時期の特定には至らなかった。

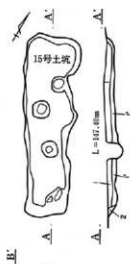
また、本土坑は覆土中に炭化物を多く含んでおり、

第2節 B区遺構と遺物



掘り方の縁辺部を中心に施土が若干見られたことから火葬土坑等の可能性が調査当初より考えられていた。この場合は遺構の時期として室町時代から江戸時代前期が与えられよう。

規模 長径：148cm 短径：100cm 深さ：19cm



15・16・17・35号土坑
[237頁228図の右]

15号土坑覆土(締まり悪い)

1:暗褐色土:ローム粒僅かに含む。(1':黒味を帯び、ロームブロック僅かに含む。) 2:暗黄褐色土:夾雑物殆ど無し。

16号土坑覆土(締まり2層は悪く、1・5層はやや悪く、3・4層はやや良い)

1:暗褐色土:ローム極く僅かに含む。 2:暗褐色土:灰褐色土ブロック僅かに含む。(2':ローム極く僅かに含む。) 3:褐色土:汚れたローム主体。 4:暗褐色土:ローム粒僅かに含む。 5:褐色土:汚れたローム粒主体。

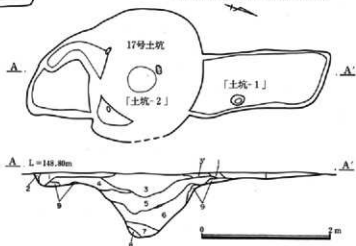


17号土坑覆土(締まりは1・2・7~9層はやや悪く、3~6層はやや良い)

〔土坑1〕 1:暗褐色土:ローム僅か、炭化物極僅かに含む。 2:褐色土:混入物殆ど目立たず。3:褐色土:ローム僅か、As-A極僅か。(3':色調暗い。) 4:褐色土:ローム粒・ブロックかなり多く混入。 5:褐色土:ローム僅か。 6:暗褐色土:ローム・炭化物極く僅か。 7:黄褐色土:汚れたローム粒主体。 8:暗褐色土:ローム極く僅か。 9:黄褐色土:ローム粒主体。

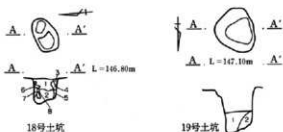
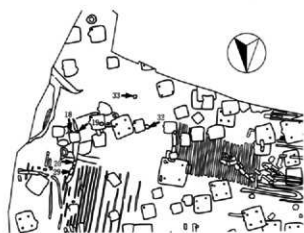
35号土坑覆土

1:黒色砂質土。(1':焼土・炭化物微量。縁辺部に焼土若干見える。) 2:黒褐色土:炭化物と焼土若干含む。 3:黒色土:炭化物多量に含む。(3':多量の炭化物含む。) 4:暗茶褐色土:焼土とローム微量に含む。



第228図 15~17・35号土坑

構造 本土坑は隅丸方形のプランを呈している。底面は平坦であり、壁面はやや開き気味に立つ。



18号土坑

18号土坑覆土

1: 茶褐色土: ローム漸移層土 (以下「漸移層土」) にローム・焼土含む。 2: 褐色土: 上層に下層入る漸移層土に若干の焼土・ローム混入。 3: 明褐色土: 漸移層下層土とロームの混土。 4: 茶褐色土: 1層に似るが混入物無し。 5: 黄褐色ローム。 6: 暗褐色土: 漸移層上層土にローム・焼土混入。 7: 茶褐色土: 3層に似るがローム含む。 8: 明褐色土: 漸移層土とロームの混土。

19号土坑

19号土坑覆土

1: 茶褐色土: 漸移層土にローム混入。焼土・カーボン僅かに混入。 2: 暗褐色土: 漸移層土にロームと黒色土混入。焼土若干混入。

29号土坑壁面露出自然堆積層

II: 褐色ローム。 III: 黄褐色ローム: As-BP微量に混入。 IV: 黄褐色ローム: As-BPベース。 VI: 暗黒褐色ローム: 所謂チョコレート色。 VII-1: 赤褐色軽石: 粒子の粗いAs-BPが純層に近い形で堆積。 VII-2: 淡褐色軽石: 粒子の細かいAs-BPが純層に近い形で堆積。 VIII: 暗黒褐色ローム: シルト質で強い粘質土

29号土坑覆土

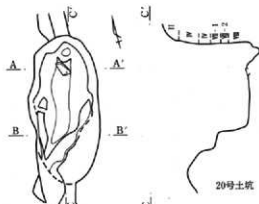
1: 明黄褐色ローム主体。黄色ローム混入。 2: 明黄褐色ローム: 漸移層土混入。 3: 明褐色ローム。 4: 明褐色土: 3層に似るが暗まり欠。 5: 明黄褐色シルト: やや砂質。プライマリーか。

32号土坑覆土

1: 暗黒褐色土。 2: 暗黒褐色土: 淡褐色土微量に含む。 3: 暗黒褐色土: 2層に比し淡褐色土の混入多い。 4: 暗褐色土。 5: 黄褐色土: As-BPを多量に含む。

33号土坑覆土

1: 暗褐色土: 黒褐色土と暗褐色土の混土。 2: 暗黒褐色土。 3: 黒褐色土: 炭化物が少量混入する。銅銭はこの層より出土する。



20号土坑

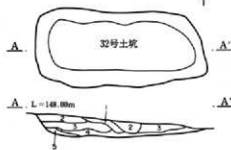
29号土坑

A. L=147.30m

A. L=147.30m

33号土坑

L=147.20m



A. L=148.80m



33号土坑-1 33号土坑-2 33号土坑-3 33号土坑-4
1/2

第229図 18~20・29・32・33号土坑及び出土遺物

18・19号土坑（奈良時代～江戸時代中期、第229図、図版42）

概要 18号及び19号土坑は、共にB区東部のH-89号住居の南側に位置する小型の土坑である。

何れも出土遺物は無く、時期についてはH-89号住居の覆土を切り、As-Aを含まないことから奈良時代以降、江戸時代中期以前としか捉えられなかった。

18・19号土坑は断面観察から共に径20cm程を測る柱材を設置した柱穴と考えられるが、両者の覆土は近似するものの形態的には相違があり、同一の建物を構成するかどうかは特定できなかった。また、18・

19号土坑の柱間距離は約160cmを測るが、付近にこれに続く柱穴は確認できなかった。

規模 [18号土坑] 長径：56cm 短径：25cm 深さ：39cm

[19号土坑] 長径：68cm 短径：60cm 深さ：73cm

構造 18号土坑はやや不整形な隅丸方形のプランを呈するが、東半部が中心を成し径30×18cmを測る。

一方、19号土坑は隅丸の三角形のプランを呈する、18号土坑に比して大きな掘り込みを持つ。底面は東側に向かって深くなっている。

20号土坑（古墳時代後期、第229図、図版43）

概要 本土坑はB区東部、4号溝北半に4号溝に重なるように掘削されていた大型の土坑である。

本土坑は4号溝の掘削後に認識・分離したもので、双方の覆土の間に違和感は無かったよう、掘削の途中段階では全く認識されていなかった。

本土坑の出土遺物は無く、覆土等の記録も残せなかったが、4号溝の新段階の壁ラインが本土坑の西壁に一部規制される形跡が窺えるので、本土坑が新段階の4号溝に先行していたものと考えられ、従って本土坑は西暦600年以前の所産と判断される。

本土坑の壁面観察で地山層が現地表に対し東側に急に落ち込む傾向が見られたことから、本土坑付近が元々の傾斜の変換点に当たることが確認された。

尚、本土坑の用途は特定できなかった。

規模 長径：242cm 短径：110cm 深さ：148cm

構造 本土坑は楕円形のプランを呈し、主軸は4号溝の走行ラインにほぼ重なる、東北東を向く。

底面はほぼ平底で、北端部に径30cm程、深さ22cmを測るビットが掘削されている。壁面はやや葉研状を呈するが垂直に近い角度で立っている。

29号土坑（縄文時代、第229図、図版43）

概要 本土坑はB区東部の4号溝北部の溝底部に確認・調査された土坑である。

出土遺物は見られなかったが、その形態と覆土の状況から縄文時代の貯蔵遺構と判断した。

規模 口径：106×86cm 最大径：133×94cm 底

径：90×79cm 深さ：95cm

構造 本土坑はやや不整形な長円形のプランを呈し、主軸は北東を向いている。

所謂袋状土坑で、底面から15～25cmの高さに最大径が見られた。

32号土坑（奈良時代以前、第229図、図版43）

概要 本土坑はB区南東部に位置する土坑である。

第1次調査区引き渡し直前のため押しのトレンチの中に確認調査された。確認面は東に向かって削平され、東壁は多少減失していた。

出土遺物も無く、覆土からの時期の特定は難しいが、位置的にH-11号住居の北西部に重なることか

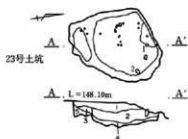
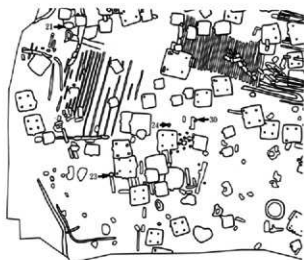
ら奈良時代以前の所産と考えられる。

尚、本土坑の用途はできなかったが、農耕に伴うものか土壌墓といったものの可能性が考えられる。

規模 長径：272cm 短径：124cm 深さ：28cm

構造 本土坑は隅丸方形のプランを呈し、箱状の掘り込み形態を示している。

第3章 発見された遺構と遺物



23号土坑

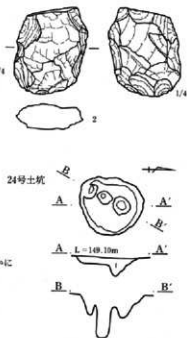
23号土坑覆土
1: 暗褐色土: 白色粒徑かを含む。 2: 暗褐色土: 炭化物等僅かに含む。3号谷の地上2枚目あたりの埋土に似る。 3: 褐色土: ロームブロック等僅かに含む。3号谷の地上1枚目の埋土に似る。 4: 褐色土: 暗黄色粘質土主体。 5: 褐色土: ローム粒や多く含む。



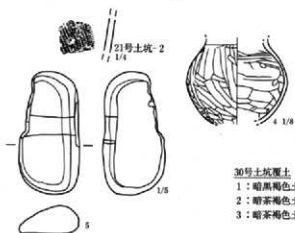
21号土坑

24号土坑覆土

1: 暗褐色土: 白色粒及びロームを僅かに含む。やや長く締まる。

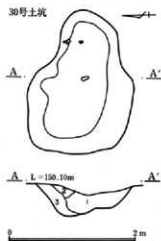


24号土坑



30号土坑覆土

1: 暗黒褐色土: As-YFが微量含まれる。
2: 暗茶褐色土: 夾雑物認められず。
3: 暗茶褐色土: As-YFが微量含まれる。



30号土坑

第230図 21・23・24・30号土坑及び出土遺物

33号土坑（室町時代～江戸時代前期，第229図，図版44・85）

概要 本土坑はB区南東部の緩斜面に位置する小型の土坑である。

本土坑の底面付近からは元豊通寶（1）、咸平元寶（2）、紹聖元寶（3）、天禧通寶（4）の4枚の銅銭が出土しており、遺構形態と併せて本土坑は墓塚で

あると判断され、その時期はおよそ室町時代から17世紀までに当てられよう。

規模 長径：138cm 短径：114cm 深さ：28cm

構造 本土坑は隅丸方形のプランを呈する。

底面は平底で、壁面はやや開き気味に立ち上がる。

21号土坑（古墳時代後期以降，第230図，図版43・85・98）

概要 本土坑はB区南東部に位置する大型の土坑で、北側に5号風倒木と切り合い関係にあるが新旧関係は特定できなかった。

本土坑の底面からはこも編み石（1）、覆土中からは土師器片を中心に燃糸紋系の縄文土器（2）、磨石（2）、土師器割張甕（4）、こも編み石（5）が出土している。覆土の記録化に失敗したこともあって時期特定は難しいが、出土遺物の状況から古墳時代後期以降の所産とすることはできよう。

尚、遺構中央底面の掘り込みは主軸方向が異なることなどから別遺構の可能性もある。

規模 長径：274cm 短径：188cm以上 深さ：36cm
中央部掘り込み 長径：102cm 短径：74cm 深さ：7cm以下

構造 本土坑は楕円形状のプランを呈する。

底面は概ね平底様で、中央付近に方形プランの浅い掘り込み痕が見られるが、上述のように別遺構の可能性はある。

23号土坑（江戸時代中期以前，第230図，図版43・85）

概要 本土坑はB区の北東部、H-45号住居の東に近接する位置に所在する中規模の土坑である。

本土坑の覆土からは縄文時代の石器（1,2）を含む古墳時代後期以降の土師器壺片を中心とした遺物が出土している。時期の特定には至らなかった。

尚、覆土にAs-Aを含まないことから、本土坑は江戸時代中期以前の所産ということになる。

規模 長径：290cm 短径：231cm 深さ：35cm

構造 本土坑は四半円形状のプランを呈する。南部にテラスを有し、底面はやや凹凸が見られる。

24号土坑（江戸時代中期以前，第230図，図版43）

概要 本土坑はB区中部東の平坦部に位置する。

本土坑覆土中からは4点の土師器・須恵器片が出土しているが、覆土の所見と併せても時期の特定はできなかった。

尚、覆土にAs-Aを含まないことから、本土坑は江

戸時代中期以前の所産ということにはなる。

規模 長径：102cm 短径：93cm 深さ：10cm

構造 本土坑は三角形に近い円形のプランを呈する。

底面は平底気味であるが、3基の小ピットが縦列に掘削されていた。壁面はやや開き気味である。

30号土坑（古墳時代後期～江戸時代中期，第230図，図版43・98）

概要 本土坑はB区中部の平坦面に位置する。

本土坑の覆土中からはこも編み石（1）と縄文土器及び土師器片各1点の出土が見られたが時期の特定には至らなかった。

尚、覆土中にAs-Aを含まないことから、本土坑は

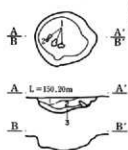
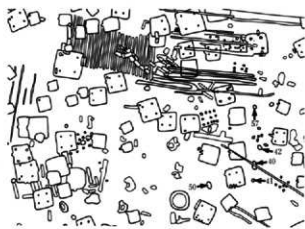
江戸時代中期以前の所産と言うことはできよう。

規模 長径：228cm 短径：164cm 深さ：57cm

構造 本土坑は隅丸の羽子板状のプランを呈する。

壁面は外反するように立ち上がり、底面は隅丸長方形のプランを呈する。

第3章 発見された遺構と遺物



41号土坑

41号土坑覆土

- 1: 褐色土: ローム等僅かに含む。 2: 褐色土: 黄土色掛かる褐色土小ブロックとロームブロックをやや多く、炭化物僅かに含む。 3: 暗黄褐色土: 黄土色掛かるローム主体。

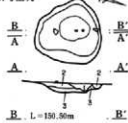


42号土坑

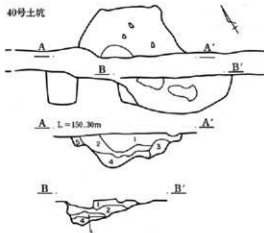
A. L=150.40m



57号土坑



B. L=150.50m



40号土坑

A. L=150.30m

40号土坑覆土

- 1: 茶褐色土。 2: 暗褐色土: 茶褐色土ブロックを多量に含む。 3: 暗褐色土: 茶褐色土やや多く、ローム等僅かに含む。 4: 暗褐色土: 茶褐色土等僅かに含む。 5: 暗茶褐色土: 白色粒やや多く、ローム僅かに含む。

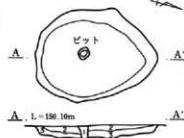
ビット覆土

- 1: 褐色土: 暗黄褐色土及び炭化物僅かに含む。

50号土坑覆土

- 2: 褐色土: 黄白色粒含み、暗黄褐色土僅かに含む。 3: 暗黄褐色土: ロームブロック主体とし、褐色土等僅かに含む。

50号土坑



A. L=150.10m

42号土坑覆土

- 1: 暗褐色土: ローム・炭化物・炭土を僅かに含む。(1': 色調暗い。) 2: 暗黄褐色土: くすんだローム粒、褐色土僅かに含む。 3: 黄褐色土: やや明るいローム粒。地山的。

57号土坑覆土

- 1: 褐色土: 灰色掛かる褐色土主体。 2: 暗茶褐色土: 暗茶褐色土粒、ローム等僅かに含む。 3: 暗黄褐色土: 薄い肌色のロームブロックに褐色土僅かに混入。

第231図 40~42・50・57号土坑及び出土遺物

40号土坑（古墳時代後期～江戸時代中期、第231図、図版44）

概要 本土坑はB区中西部に位置する。

本土坑付近は耕作に伴う規則的配置を示すピットや溝が多く入り、本土坑も攪乱を受けている。

本土坑の出土遺物は、覆土中からの土師器片1点と石器の剥片1点に過ぎなかった。

本土坑の細かい時期特定は行えなかったが、覆土

中にAs-Aを含まないで江戸時代中期以前の所産である。また、土坑の用途も特定できなかった。

規模 長径：245cm 短径：159cm 深さ：50cm

構造 本土坑は攪乱を受けているため不明な部分もあるが、凡そ瓢箪形のプランを呈する。

壁面は摺鉢状に開き底面は北西部に在る。

41号土坑（江戸時代中期以前、第231図、図版44・85）

概要 本土坑はB区中西部に位置する。

本土坑に直接伴うと判断されるような遺物の出土は見られなかったが、覆土中からは晩期の縄文土器片(1)と7世紀前半期の特徴を示す土師器坏片の出土が見られた。

しかし本土坑の時期の特定はできず、僅かに覆土

にAs-Aが含まれないことから、江戸時代中期以前の所産であることを確認できたに過ぎなかった。

尚、土坑の用途等は特定できなかった。

規模 径：88×86cm 深さ：24cm

構造 本土坑はやや方形に近い円形のプランを呈し、壁面はやや開き気味である。

42号土坑（縄文時代中期、第231図、図版44・85）

概要 本土坑はB区西部に位置する小土坑である。本土坑の掘り方面への影響は無いが、覆土中には現代の小さい攪乱が入って来ている。

本土坑に於いては、その上半部は欠失していたが中期後半期に比定される縄文土器深鉢(1)が、土坑中央に正位に置かれた状態で出土していた。土器の底部は若干底面に埋め込まれた状態で発見されている。この他にも編み石(2)の出土も見られた。

一方、覆土中からは土師器片の出土も見られたが、上述のように本土坑には攪乱が入っており、従ってこの土師器は後世混入したものと判断される。

以上の点から、本土坑は縄文時代中期の所産として把握される。

規模 径：126×125cm 深さ：19cm

構造 本土坑は円形基調のプランを呈する。

壁面は大きく開き、底面は概ね平坦である。

50号土坑（江戸時代中期以前、第231図、図版44）

概要 本土坑はB区中央の平坦部に位置し、土坑中央には小ピットの攪乱が入る。

本土坑からの出土遺物は無く本土坑の時期特定はできなかったが、覆土にAs-Aを含まないことから

江戸時代中期以前の所産ではある。

規模 長径：192cm 短径：144cm 深さ：30cm

構造 本土坑は楕円形のプランを呈する。

壁面は比較的立っており、底面は平底をなす。

57号土坑（江戸時代中期以前、第231図、図版45・85）

概要 本土坑はB区中南部に位置する。

本土坑からは、覆土中から7世紀中葉頃の所産と思われる土師器坏(1)を含む土器2点、剥片1点のみの出土が見られただけであった。

時期の特定には至らず、覆土にAs-Aを含まない

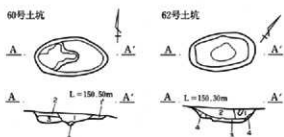
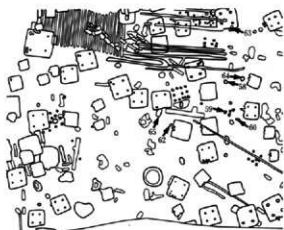
ことから、本土坑が江戸時代中期以前の所産ということを確認したに過ぎなかった。

規模 径：104×104cm 深さ：17cm

構造 本土坑は隅丸の三角形のプランを呈する。

底面は丸底気味で壁面は開いている。

第3章 発見された遺構と遺物



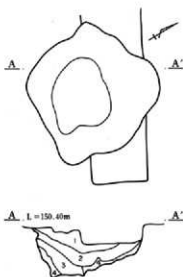
60号土坑覆土

1: 褐色土: ローム等僅かに含む。(1': 茶褐色土ブロックやや多く含む。) 2: 暗茶褐色土: くんだ暗黄褐色土ブロックやや多く、炭化物等僅かに含む。 3: 暗茶褐色土: くんだ暗黄褐色土と炭化物等僅かに含む。 4: 暗黄褐色土: くんだローム粒。

62号土坑覆土

1: 薄茶褐色土: 細粒。くんだローム僅かに含む。 2: 暗褐色土: 細粒。1層土近隣の土壌とくんだローム僅かに含む。 3: 褐色土: くんだロームブロック主体。 4: 黄褐色土: くんだローム粒。

64号土坑

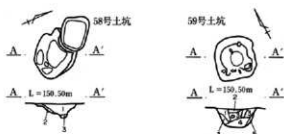


64号土坑覆土

1: 暗黒褐色土: 褐色土ブロックとAs-YPを微量に含む。 2: 暗褐色土: As-YPを若干含む。 3: 暗黒褐色土: 1層より厚味が更に増し、淡褐色土ブロックが相当量混入する。 4: 暗褐色土: 黒色土と褐色土の混土。

65号土坑覆土

1: 暗茶褐色土: ローム漸移層土(以下「漸移層土」)の小ブロックに黒色土と混入。 2: 暗褐色土: 漸移層上層土と黒色土の小ブロックにロームと3層土混入。 3: 茶褐色土: 漸移層土の小ブロックにロームと若干の黒色土含む。 4: 茶褐色土: 3層に似るが黒色土少ない。



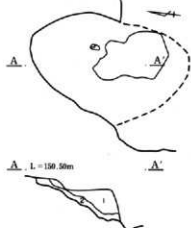
58号土坑覆土

1: 褐色土: 灰色掛かる褐色土ブロック主体。暗茶褐色土僅かに含む。 2: 暗茶褐色土: 灰色掛かる褐色土ブロック僅かに混入。 3: 茶褐色土: 2層に比し色調薄い。ローム粒僅かに含む。

59号土坑覆土

1: 茶褐色土主体。 2: 茶褐色土: 暗灰色土中に茶褐色土大量に含む。 3: 茶褐色土: 暗灰褐色土中に茶褐色土ブロック僅かに含む。 4: 褐色土: 暗灰褐色土中に茶褐色土とロームのブロック僅かに含む。 5: 暗黄褐色土: 白色粒子混入のローム。

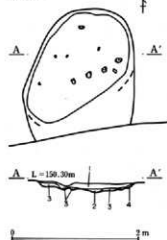
63号土坑



63号土坑覆土

1: 暗黒褐色土: 褐色土粒を微量に含んで堅く締まる。 2: 暗茶褐色土: 暗茶褐色土と黒色土の混土。

65号土坑



第232図 58~60・62~65号土坑

58号土坑（江戸時代中期以前、第232図、図版45）

概要 本土坑はB区西部のBt-32グリッドに所在する。付近には後述する59・60号土坑等の土坑・ピット群が遺存しているが、付近には耕作に伴う規則的配列のピットや溝が多く入っており、その一角に在る本土坑もその北部を壊されている。

本土坑からの遺物の出土は無く、遺構時期も特定できなかったのであるが、覆土中にAs-Aを含まないことから少なくとも江戸時代中期以前の所産ということを確認することができた。

59号土坑（江戸時代中期以前、第232図、図版45）

概要 本土坑も58号土坑同様B区西部のBt-32グリッドに所在する土坑・ピット群の一角を占める。

本土坑からの出土遺物は無く、時期特定もできなかったのであるが、58号と同じく覆土中にAs-Aを含まないことから江戸時代中期以前の所産ということになる。

尚、本土坑の用途は特定されなかったが、埋土に

60号土坑（江戸時代中期以前、第232図、図版45）

概要 本土坑はB区西部のBt-31グリッドに位置するが、上述の58・59号土坑に近接する。

本土坑からの遺物の出土は無く、また土坑の時期も特定できなかったが、やはり覆土にAs-Aを含まないことから江戸時代中期以前の所産とできよう。

尚、断面観察から本土坑は中央付近で一回の掘り直しのあったことが窺われるが、土坑の用途等を特定することはできなかった。

62号土坑（中・近世、第232図、図版45・96）

概要 本土坑B区中部、H-97号住居の東1m程の位置に所在する中規模の土坑である。

本土坑からは土師器片を中心に、こも編み石（1）や軟質陶器・陶器等の出土が見られた。

これらの遺物と覆土にAs-Aを含まないことを併せて、本土坑は中世以降、江戸時代中期以前の所産ではないかと推定される。

尚、本土坑の用途等は特定されなかった。

規模 長径：78cm 短径：63cm 深さ：28cm

構造 上述のように本土坑には欠損部分があって全体を見ることはできなかったが、概ね隅丸方形若しくは楕円形のプランを呈するものと推定される。

本土坑の底面形態は基本的には丸底傾向を示すものと推定されるが、小ピット、掘削痕若しくは植物の根の痕跡によるものと思われる著しい凹凸が見られた。壁面は開き気味である。

は礫を含み、東側より埋め戻されている。

規模 長径：68cm 短径：64cm 深さ：35cm

構造 本土坑は隅丸方形のプランを呈する。

掘り込みは摺鉢状であるが、底面は平底に近く確認面より26cm程の深さである。また、東南隅を中心にピット様の掘削が見られたが、断面観察から径12cm程の柱材の設置されていた可能性が窺われる。

規模 長径：116cm 短径：61cm 深さ：22cm

構造 本土坑は楕円形のプランを呈し、主軸は東を向く。

壁面や底面には凹凸が見られるが、これは植物等による攪乱によるものが多いものと思われる。底面は元々は平底のようで、東部では浅く掘り込まれてやや丸味を持つ。また、掘り直し部分は丸底を呈し、壁面は開き気味となるようである。

尚、本土坑の用途は特定されなかった。

規模 長径：104cm 短径：60cm 深さ：25cm

構造 本土坑は隅丸の長方形のプランを呈し、主軸は北東を向いている。

底面及び壁面にはかなり凹凸が見られたが、底面は元々は丸底気味のものだと判断され、壁面もやや開き気味になるものと思われる。

第3章 発見された遺構と遺物

63号土坑 (古墳時代後期以前, 第232図, 図版45)

概要 本土坑はB区中南部に位置する。北半部はH-114号住居に接しており、底面付近を除きH-114号住居に切られている。

本土坑からの出土遺物は認められなかったが、上述の切り合い関係から、西暦600年前後する時期より以前の所産と判断される。

尚、掘削目的や用途などは特定できなかった。

64号土坑 (江戸時代中期以前, 第232図, 図版45)

概要 本土坑はB区中西部に位置し、H-100号住居の東に近接する大型の土坑である。

本土坑からの出土遺物は認められず、土坑の時期特定もできなかったのであるが、覆土中にAs-Aを含まないことから江戸時代中期以前の所産といえる。但し本土坑は63号土坑に基本形態が近似していることから、63号土坑と同時期に掘削され

65号土坑 (江戸時代中期以前, 第232図, 図版45)

概要 本土坑はB区中部の平坦部、H-85号住居北側に近接した位置に確認された大型土坑である。

本土坑の上位は大きく削平され、底面付近が確認されたに過ぎないなど遺存状況は不良であった。

本土坑からは、覆土中から土師器片2点が出土しただけであり、時期の特定等は行い得なかったものであり、覆土中にAs-Aを含まなかったことから江戸時代中期以前の所産ということを確認できたに過ぎなかった。但し本土坑も63・64号土坑との形態的共通性から、西暦600年前後する時期以前に掘削された

BI-37~Bn-35グリッド所在土坑群 (27・28号土坑他, 江戸時代中期以前, 第233図)

概要 本土坑群はB区中北部の、後述する1号畠の下位面に確認・調査されたものを中心とする土坑群で、1号畠の範囲外にあるものも、形態的近似等の理由から一連の土坑群として扱いたい。

本土坑群は凡そ26基の土坑で構成されている。これらの多くはそれぞれに切り合い関係にあるが、新旧関係等は特定できていない。また本土坑群は前述

規模 長径:残存253cm 短径:160cm 深さ:84cm

構造 本土坑は概ね楕円形のプランを呈しており、主軸は北方を向く。

本土坑の掘り込みは深い荒い掘り方であり、底面と壁面には凹凸が多く見られるなどやや不整形であるが、掘り方は全体的としては楕円状の形態を呈するものと思われる。

たものである可能性も考慮される。

尚、本土坑の用途などの特定はできなかった。

規模 長径:223cm 短径:211cm 深さ:82cm

構造 本土坑は隅丸の台形を基調とするやや不整形なプランを呈する。主軸は凡そ東西方向を向く。

壁面は凹凸が目立つが全体的には楕円状の形態を示し、底面は概ね平底傾向にある。

可能性が考慮されるのである。

尚、本土坑の用途などの特定はできなかった。

規模 長径:210cm 短径:推定144cm 深さ:22cm

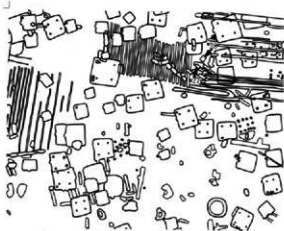
構造 本土坑は洋梨形のプランを呈し、主軸は北東を向いている。

上述のように本土坑は大きく壊されていたのでその全体状況を把握することはできなかったが、基本形態は43・44号土坑に近似するものと思われる。底面は概ね平底状であるが、43・44号土坑と同様凹凸が目立っている。

の7号土坑とも一群のものであると考えられる。

本土坑群を構成する土坑からの出土遺物は少なく、取り上げられたものは27号土坑からの土師器壺片1点と28号土坑から出土した6世紀後半期の所産と判断された土師器壺片1点だけである。

本土坑群の時期については、1号畠の下位面に遺存していたこと、及び上述の遺物から古墳時代後期



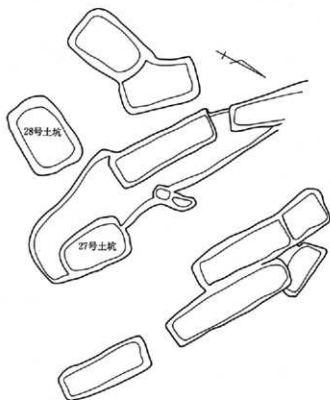
以降で江戸時代中期以前の所産ということが
できるが、細かい時期等は確認されなかった。

また、本土坑群は後世の地割である吉井町
多比良286番地の範囲内に収まるのであるが、
各土坑の主軸方向は土地の傾斜に沿って北東
方向を向いて地籍の方向（東西方向）に合致
しない。しかし、第233図下位の一群の土坑が
一定のライン上に掘削・配置されていること
から推して、本土坑群は何らかの規制に基づ
いて掘削されたものと思慮される。

規模〔27号土坑〕長径：152cm 短径：
96cm

〔28号土坑〕長径：168cm 短径：120cm

構造 本土坑群を構成する各土坑は一律に箱



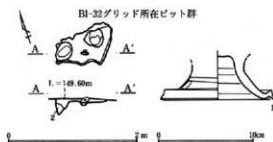
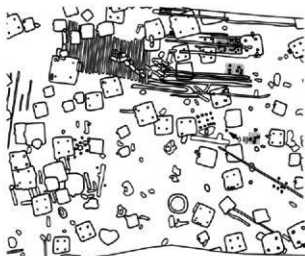
第233図 27・28号土坑

状の掘り方形態を見せているが、そのプランは一律
ではなく、凡そ方形、長方形、短冊形の3種類のも
のに分類される。

また規模も様々で、確認できるもので長軸方向で
98~288cm、短軸方向で56~124cm程を測るが、規模
の大小と形態との相関関係も認められない。

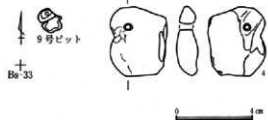
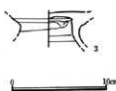
主軸方向も不定で、27号土坑のように凡そ南東方
向を向くものを中心としているが、28号土坑のよう
に北東方向を向くものが3基、北向きや東向きのもの
の各1基が見られた。

第3章 発見された遺構と遺物

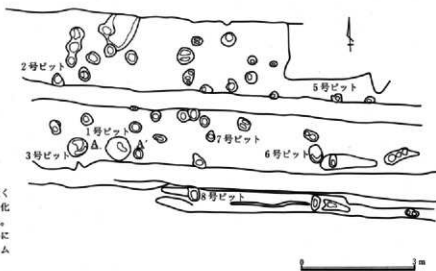
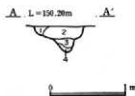


Bt-32グリッド付近ピット層土

1：暗褐色土；ローム粒僅かに含む。 2：暗褐色土；ローム粒やや多く、ロームブロック僅かに含む。



Bq~Ba-36~37グリッド所在ピット群



Ba-37グリッドーピット1層土

1：褐色土；2層土僅か、炭化物粒極く僅かに混入。 2：淡い茶褐色土；炭化物僅かに含む。ロームブロック混入。 3：褐色土；ローム粒と炭化物粒僅かに含む。 4：黄褐色土；くすんだローム粒主体。炭化物粒極く僅かに含む。

第234図 9号ピット・グリッド所在ピット群及び出土遺物

B1-32グリッド所在ビット群 (奈良時代以降, 第234図, 図版85)

概要 ビット群は東西の2基のビットから成る。西側ビットの第1層は東側に広がるが、この層の中で地山に転倒したような状態で8世紀後半期のものと思われる須恵器(1)が出土している。この遺物は混入したものではないと判断されることから、西側のビットは奈良時代以降、また覆土の状況からAs-A降下以前の所産で、奈良時代に近い時期のものと判断され、東側のものも同様であると思われる。

尚、双方のビットの用途等は特定できなかったが、その覆土の堆積状況から、西側のものは或る期間開口したまま放置されていたものと思慮される。

規模 東側ビット 径:62×55cm 深さ:16cm 西側ビット 径:65×50cm 深さ:34cm

構造 ビット群の東西何れのビットも楕円形を基調としたプランを呈する。

両ビット共に掘り方は柱穴様である。

Bs-35~36グリッド所在ビット群 (江戸時代中期以前, 第234図, 図版85)

概要 ビット群はB区南西部に所在するもので、大小14基のビットで構成されている。

ビット群の南北は耕作溝に区切られるため更に広がる可能性を有するが、周辺部分も併せて各ビットに建物・柵列等を想定することはできなかった。

本ビット群の各ビットの時期は特定できなかったが、これらのビットは覆土中にAs-Aを含まない江戸時代中期以前のビットと認識される。本ビット群のビットからは幾つかの遺物の出土が見られたが、特にビット4からは7世紀後半段階のものと判断さ

れる須恵器盤(3)が出土している。

規模 ビット1 径:48×32cm 深さ:43cm
ビット2 径:27×19cm 深さ:21cm ビット3 径:47×24cm 深さ:28cm ビット4 径:38×37cm 深さ:34cm ビット5 径:41×30cm 深さ:26cm

構造 本ビット群の各ビットのプランは様々で円形、楕円形を中心に方形を呈するものもある。

掘り込みは柱穴様で、径は14~57cm、深さも6~35cmを測るなど様々でない。

Bt-32グリッド所在ビット群 (江戸時代中期以前, 第234図)

概要 ビット群はB区北西部に所在し、3基のビットからなるが、58~60号土坑が近接しており一群の土坑・ビット群を形成している。

ビット2の北東部は耕作ビットで壊されている。

時期特定できなかったが、覆土中にAs-Aを含まない江戸時代中期以前のビットとして認識される。

尚、出土遺物はほとんど無く、性格も不明である。

規模 ビット1 径:95×60cm 深さ:26cm

ビット2 径:35×30cm以上 深さ:24cm以上

ビット3 径:44×40cm 深さ:20cm

構造 本ビット群のビットのうちビット1は楕円形プランで土坑様の掘り方を持ち、平底である。

ビット2・3は方形のプランを呈し、その掘り込みは柱穴様である。

9号ビット (江戸時代中期以前, 第234図, 図版85)

概要 ビットはB区中西部に位置し、新旧関係の特定できない一部重複する2基のビットからなる。

双方のビットの時期の特定はできなかったが、覆土中にAs-Aを含まない江戸時代中期以前のビットとして認識される。

双方のビット共に出土遺物は少なく、備かに土師

器片1点を出土したに過ぎなかった。

規模 北西側ビット 径:88×61cm 深さ:52cm

南東側ビット 径:106×80cm以上 深さ:12cm

構造 本ビット群のうち北西側のビットは隅丸方形のプランを呈し、掘り方は深く柱穴様で、底面は丸底状を示す。

一方、南東側ビットは不整形な方形プランを呈し、底面は平底で壁面は開き気味である。

第3章 発見された遺構と遺物



1号井戸覆土

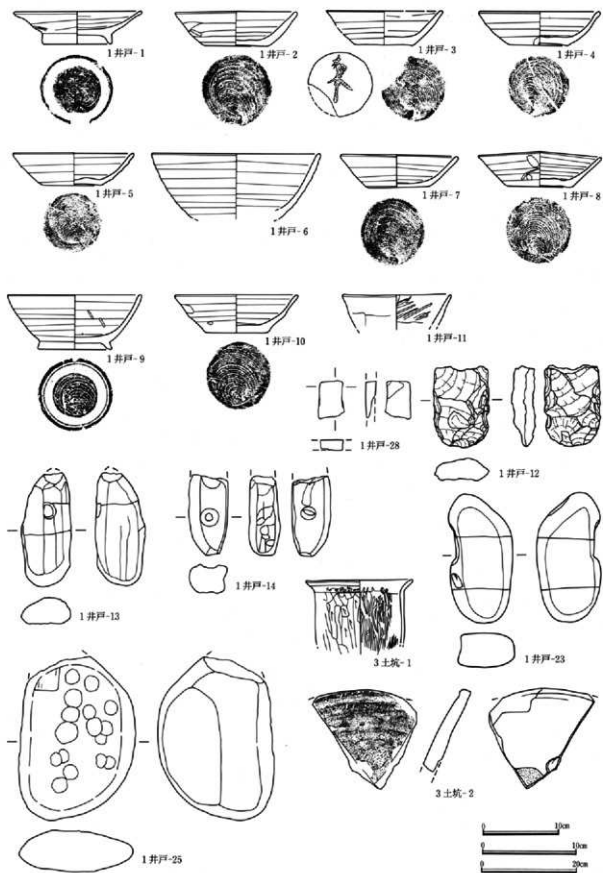
1: 黒色土: 砂質を呈し、若干の褐色土が混入する。2: 黒色土: 砂質を呈し、褐色土の混入が1層よりも多くなる。(2': 暗黒褐色土: 全体の色調が2層よりも明るく茶系を呈する。) 3: 暗褐色土: 褐色土主体に、これに黒色土が混入する。4: 褐色土: 暗褐色土ブロックとローム粒混入。5: 暗灰黒褐色土: ロームとAs-BPを極く少量含む。粘性強い。6: 暗灰褐色土: As-BPが若干重畳される。7: 暗赤褐色土: As-BPを多量に含む。

3号土坑 (井戸) 覆土

1: 暗褐色土: 白色粒子・乳白色軽石粒僅かに含む。やや固く、僅かに粘性あり。やや良く締まる。2: 暗褐色土: 白色粒子・乳白色軽石粒僅かに、炭化物粒極く僅かに含む。やや固く、粘性あり。やや良く締まる。3: 褐色土: 乳白色軽石粒・ローム粒を僅か、炭化物粒・ローム小ブロックを極く僅かに含む。やや軟らかく、粘性あり。良く締まる。4: 暗褐色土: 黒味強い。ローム粒・褐色土小ブロック僅か。炭化物粒極く僅かに含む。やや軟らかく、粘性あり。やや良く締まる。5: 褐色土: ローム粒やや多く散在。ロームブロック僅かに含む。やや軟らかく、粘性あり。やや良く締まる。6: 暗褐色土: ローム粒やや多く散在。ローム小ブロック僅か。炭化物粒極く僅かに含む。やや軟らかく、粘性あり。軟らかく良く締まる。(6': 乳白色軽石の混入目立つ。) 7: 暗赤褐色土: ローム

粒多く散在。ロームブロック僅かに含む。やや軟らかく、粘性あり。締まりやや悪い。8: 褐色土: 炭化物粒極く僅かに含む。固く、粘性あり。やや締まり良い。9: 黄褐色土: 明るいローム粒主体。灰褐色土粒僅かに含む。やや軟らかく、粘性あり。やや締まり悪い。9': 黄褐色土: 汚れたローム粒層。軟らかく、粘性あり。やや締まり悪い。10: 灰褐色土: 灰褐色土粒・白色粒子僅かに含む。やや固く、粘性あり。やや締まり良い。11: 暗灰褐色土: 僅かに小砂粒含み、べたつく。やや固く、粘性ややあり。やや締まり悪い。12: 黄褐色土: ローム粒主体とし、薄く明褐色調かる。僅かに小砂粒含む。やや軟らかく、粘性ややあり。やや締まり悪い。13: 暗灰褐色土: 11層に比し色調暗い。僅かに小砂粒含む。やや軟らかく、粘性ややあり。やや締まり悪い。

第235図 1号井戸・3号土坑 (井戸)



第236図 1号井戸・3号土坑出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

Bq~Bs-36~37グリッド所在ピット群 (江戸時代中期以前, 第234図, 図版98)

概要 本ピット群はB区南西部に所在し、大小47基のピットを含む。ピット群の南北と中央には耕作溝が入るため、滅失したピットもあるものと思われる。

本ピット群のピットは覆土中にAs-Aを含まない江戸時代中期以前のものとして認識しているが、細かい時期特定や建物・棚列等の想定等もできなかった。

各ピットからは土師器片を中心に若干の遺物の出土を見るが、2号ピットからはこも編み石(2)の出土もしている。

規模 1号ピット 径:66×63cm 深さ:37cm

2号ピット 径:34×29cm 深さ:60cm 3号

ピット 径:52×49cm 深さ:11cm 5号ピット

径:26×20cm以上 深さ:59cm 6号ピット

径:46×37cm 深さ:35cm 7号ピット 径:

27×20cm 深さ:25cm 8号ピット 径:41×32cm 深さ:15cm

構造 本ピット群の各ピットのプランは様々で、円形、楕円形を中心に隅丸の三角形・菱形等を呈するものもある。

また、形態は柱穴様のものが多かったが、その径は14~66cm、深さも9~67cmを調るなど一様でなく、形態・規模等に相関関係は認められなかった。

1号井戸 (平安時代以前, 第235~236図, 図版46・85~86・98)

概要 本井戸はB区南東、調査区南東隅に所在する。

遺構形態等から井戸と認定したのであるが、その掘り込みは確認面より約110cmと浅く、また調査時点に於いての湧水は見られず、井戸使用の根拠となるアグリも確認されなかった。

本井戸の確認面より20~30cmのレベルには礫が集積して投棄されていたが、30~50cmのレベルを中心に9世紀後半期の特徴を示す須恵器の台付皿(1)や坏(2~5,7,8,10)、碗(6,9)の出土が見られた。この他にも覆土中からは打製石斧(12)・凹石(13,14)といった縄文時代の遺物、西暦600年を前後する時期の所産と考えられる土師器坏(11)や、こも編み石(15~24,27)、台石(25)、転用砥石(28)、スラグ

(26)の出土も見られた。

本井戸の時期については、9世紀後半期の遺物が多く、まとめて投棄されていることから、当該時期以前の時期に掘削・使用されたものと判断される。

規模 径:541×225cm 深さ:116cm

構造 本井戸は肩部では隅丸方形のプランを呈するが、確認面より50cm余りのレベルを境にこれより下位はやや円形に近いプランを呈する。

底面は多少丸底気味で、壁面は垂直気味に立つが、上述のレベルを境に、その上は逆ハの字状に開く。

また、東部及び南東コーナーの肩部には径30~40cm程の柱穴が見られることから、上屋構造を持っていたことが想定される。

3号土坑 (井戸跡, 室町時代前後, 第235~236図, 図版46・85・98)

概要 本遺構はB区中東部に位置し、H-78・79号住居の北壁を切って造られている。

本遺構は当初確認面より1m程のアグリの下位面を床面と誤認し土坑として処理を始めたが、途中より井戸遺構であると認識し調査を進めた。従って本遺構は土坑番号を付しているが井戸遺構である。

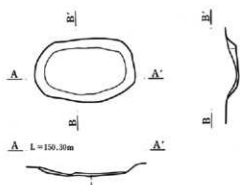
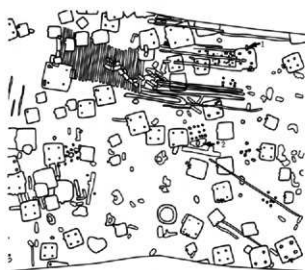
本遺構からは土師器片を中心に、6世紀後半代の土師器瓶(1)、室町期のものと思われる軟質陶器鉢(2)、コア(3)などの出土が見られた。

尚、覆土中の上位ではあったが軟質陶器の出土が見られたことから、本遺構は中世前後の時期の所産であろうと思われる。

規模 径:250×230cm 深さ:199cm

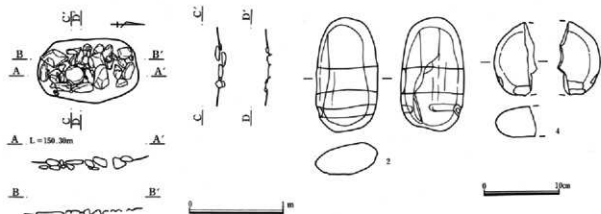
構造 本遺構は隅丸方形基本のプランを呈する。

本遺構には確認面より100~140cmのレベルに深い窪みを見せるアグリを有する。壁面は開き気味で、底面中央には径50×50cm、深さ14cmのピット状の掘り込みが掘削されている。



1号集石遺構覆土

1: 暗褐色土; 黒褐色土とロームの混土。



第237図 1号集石遺構及び出土遺物

1号集石遺構 (江戸時代中期以前, 第237図, 図版46・98)

概要 本遺構はB区南西部、H-114号住居の南壁を南北に跨ぐように切って造られている。

本遺構には礫が充填していたが遺構の遺存状況は悪く、確認面の調査段階では既に礫が露出するような状態であった。本遺構の性格は明らかでないが、本遺構の礫の状態が2号集石に近似するため、墓墳の可能性が考えられる。

本土坑の出土遺物の中に土器類は見られなかったが、集石の礫の中に混在してこも瀧み石(1~3)や磨石(4)が認められた。

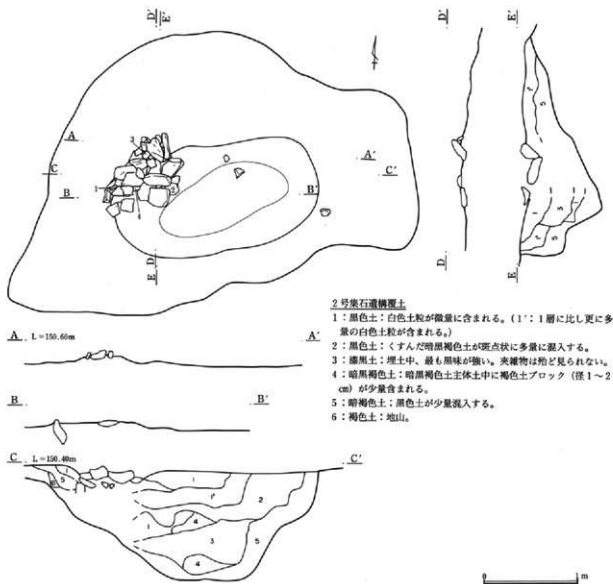
本遺構の時期は特定できず、覆土にAs-Aを含まないこと、古墳時代後期の住居を切っていることから、江戸時代中期以前で古墳時代後期以降の所産であることが僅かに確認されるに過ぎなかった。

規模 長径: 212cm 短径: 136cm 深さ: 13cm

構造 上述のように本遺構は遺存状況が悪かったため底面付近の所見しか得られなかったのであるが、本遺構は隅丸方形様のプランを呈している。

掘り方の底面は若干膨らみを持つが平底に近く、壁面は開き気味であるが確認面付近からは垂直に近くなるものと思われる。

礫は長さ30~40cm以下のものが中心で、置き易いように広い面を上下にして置かれ、これらの礫は凡そ上下2段に重ねられている。上段と下段は完全に分離できるものではないが、長さ40cmを越え、且つ幅のある大型の礫は上段のみに見られ、下段のものは全体的に上段のものに比べ小さい。尚、これらの礫の面的配置には特段の傾向は認められなかった。



第238図 2号集石遺構

2号集石遺構(室町時代以前, 第238~239図, 図版47・98)

概要 本遺構はB区中央部に位置する大型の遺構である。切り合い関係は無く単独で依存していた。

本遺構は元来何らかの目的で掘られた土坑であったものと思われるが、埋没経過の中で1体分のヒトを埋葬し、その上位に集石を施したと判断されるものである。ヒトは壮年期の女性で、北頭位横臥屈葬の状態で埋葬されていた。また、埋葬地点は土坑の覆土の中ではかなり高い位置にあって、集石の上部は確認面に露出するような状態であった。

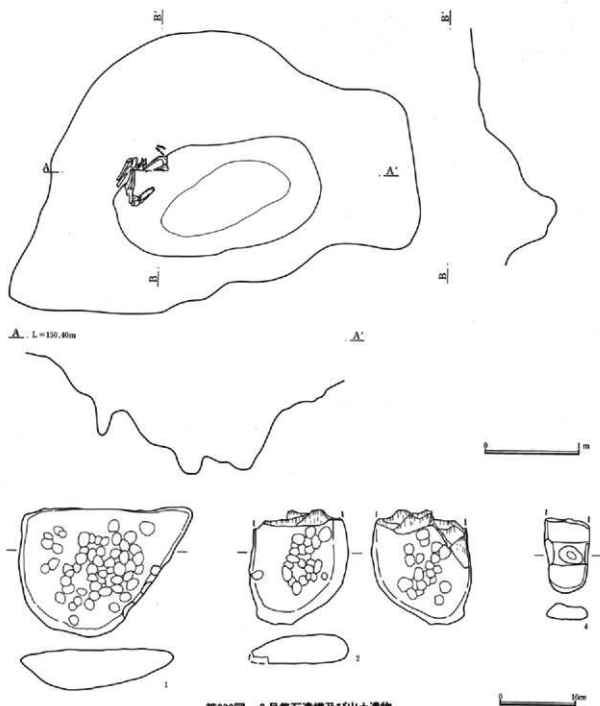
出土遺物は少なく、土器器片18片と、集石内に台

石(1,2)、こも幅み石(3)、凹石(4)、磨石(5)が見られた。

しかし、これらの出土遺物からの時期特定は難しかったが、ヒトが北頭位横臥屈葬で埋葬されていたことから、埋没の途中段階であるヒト埋葬は凡そ室町時代から江戸時代前期にかけて行われたと判断され、従って土坑の掘削はそれ以前に遡るものと思慮されるのである。

規模 長径:446cm 短径:294cm 深さ:142cm

集石範囲 長さ:103cm 幅:65cm



第239図 2号集石遺構及び出土遺物

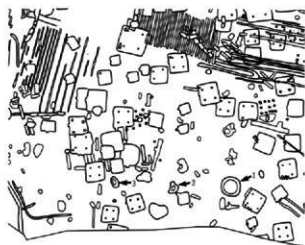
構造 本遺構の土坑部分は、確認面に於いては台形様の不整形なプランを呈しており、底面付近に於いては幅狭の楕円形状のプランを呈している。

底面には凹凸が見られ、壁面はやや開き気味に立ち上がっている。

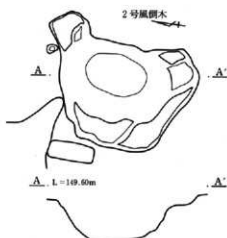
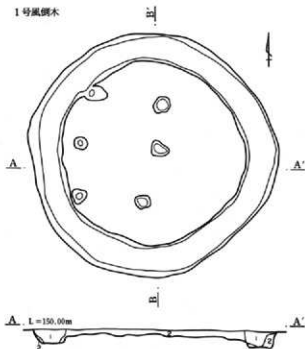
埋葬・集石部分は、上述のように土坑部分が埋没若しくは埋め戻されて浅い窪地状になった段階で造

られている。ヒト遺体の埋葬に当たって坑を掘削したか否かは確認されなかったが、遺体の上には礫を扇形に乗せて配置している。礫は長さ30cm前後以下のものが用いられ、広い面を上下として置かれているが、これは1号集石遺構の上段のものに似ている。尚、本遺構に於いても礫は部分的に2段構造となっている。

第3章 発見された遺構と遺物

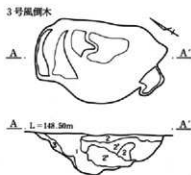


1号風倒木



2号風倒木

A. L = 149.60m



3号風倒木

A. L = 148.90m

1号風倒木覆土

- 1：黒色土：白色粒子を少量含む。
- 2：褐色土：As-YPを若干含んだローム層。締まりに欠ける。

3号風倒木覆土

- 1：暗黒褐色土：くすんだ暗褐色土が混入する。
- 2：暗茶褐色土。(2'：黒色土が少量混入する。)
- 3：暗茶褐色土：堅く締まる黒色土ブロック(径2~3mm)を少量含む。

第240図 1・2・3号風倒木

1号風倒木（古墳時代以降か、第240図、図版48）

概要 本風倒木はB区北部に在る整った形態のもので、別遺構の可能性も検討したが風倒木と判断した。
遺存状況は不良で倒木の方向は不明。時期もAs-Aを含まず土師器片を見たことから古墳時代以降

2号風倒木（時期不詳、第240図）

概要 本風倒木はB区北東部に所在する。
丸掘りを行ない出土遺物も無かったので、時期や倒木の方向等を特定することはできなかった。
規模 長径：331cm 短径：254cm 深さ：96cm

で江戸時代中期以前の可能性が考慮される。

規模 径：506×503cm 深さ：46cm

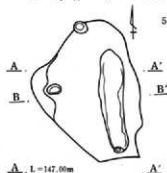
構造 本風倒木は円形に近いプランを持ち、幅58~76cm程のきれいな周溝状の落ち込みが一周する。

構造 本風倒木は台形を基調としたような不整形なプランを呈する。

本体は径240×170cm程で丸底気味で、確認面から数~30cm程の高さで北東・南・西側が広がる。



5号風倒木



A. L=147.00m



5号風倒木覆土

1: 黒色土: 東に向い褐色化。(1': 西に向い褐色化。 1'': 東上方に向い明るく、ローム混入。 1'': ローム混入。) 2: 暗褐色土: 東に向って明るい。(2': 全体明るく上方に向い明るい。 2'': 東上方に向い明るくローム含む。) 3: 茶褐色土: 褐色土と淡茶褐色土の混土。 4: 黄褐色ローム: As-YP混入。 5: 明褐色ローム: プライマリー。 6: 黒褐色土: 黒色土と褐色土の混土。ローム混入。下方に向い明るい。(6': 下方に向い暗い。) 7: 2層土に黒色土とローム混入。 8: 明黄褐色ローム: 若干の1・2層土混入。 9: 褐色土: 2層に似、暗褐色土・As-YP若干混入。10: 暗茶褐色土: 1・2・3層土の混土。ローム混入。 11: 明黄褐色土: 黄色ローム・褐色土・茶褐色土の混土。 12: 茶褐色土: 上方に向い明るい。 13: 明褐色ローム: 西側上方に暗褐色土・As-YP多く混入。 14: 黒褐色土: 黒色土とロームの混土。

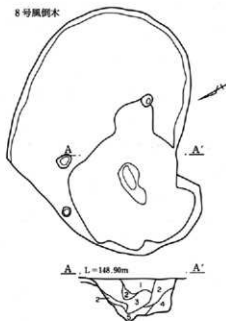
第241図 5・8・9号風倒木

3号風倒木 (古墳時代以降, 第240図, 図版48)

概要 本風倒木はB区北東部、H-9号住居の南東に近接して所在する。

本風倒木のプランは北北西-南南東方向に長く、また断面観察の所見から、樹木は北北東の方向に向

8号風倒木



A. L=148.90m

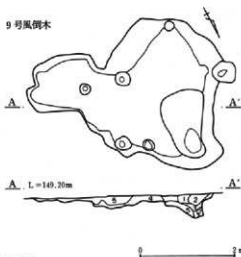
8号風倒木覆土

1: 暗褐色土: 若干砂質を呈す。 2: 暗褐色土: 締まり強く、As-YPが少量混入。 3: 黒色土: 黒色土と締まり強いAs-YP含みの暗褐色土の混土。 4: 暗赤褐色土: 1層と暗赤褐色土の混土。粘性持つ。 5: 暗赤褐色土: 3層と4層の間層。

9号風倒木覆土

1: 暗褐色土主体。 2: 暗褐色土主体。固く締まる。 3: 黒褐色土: 1・2層の暗褐色土斑点状に多量に見る。 4: 黄褐色土: 上部基本層のV層。 5: 暗黄褐色土: 黒色土とV層ブロック混入。

9号風倒木



A. L=149.70m



かって転倒したことが確認された。

また、僅か1点であるが土器器壁片が出土することから本風倒木は古墳時代以降ではないかと推定される。高、覆土にAs-Aは含んでいない。

第3章 発見された遺構と遺物

規模 長径：279cm 短径：172cm 深さ：103cm

構造 本風倒木は不定型なプランを呈する。

底面は小さく、壁面は逆ハの字状に立ち上がるが、

その壁のラインは東・南・西壁が比較的直線的に立ち上がるのに対し、北壁は多少段々を有している。

4号風倒木（縄文時代以降、第749図）822頁に記載

5号風倒木（時期不詳、第241図、図版48）

概要 本風倒木はB区東部に位置し、南端が21号土坑と接するが新旧関係は特定できなかった。また、本風倒木では黒ボク土の土壌サンプリングを行っているが、所見等は記録が残されていない。

黒ボク土を含むことから完新生のものだが、本風倒木の形成時期を特定することはできなかった。

尚、断面観察等から倒木の方向は西側に向かってであることを確認した。

規模 長さ：303cm以上 幅：226cm 深さ：132cm

構造 本風倒木は隅丸の三角形のプランを呈する。

倒木痕は南北に長く、壁面は東壁は鋭く立ち、西壁は開いている。

8号風倒木（時期不詳、第241図、図版48～49）

概要 本風倒木はB区北部、倒木の影響による可能性を有する北西-南東500cm、北東-南西350cm、深さ37cmを測る広い落ち込みの西端部に位置する。

出土遺物もなく、5号風倒木同様に黒ボク土を含むことから完新生と認識される。

倒木方向は、北側である。

規模 長径：338cm 短径：286cm 深さ：98cm

構造 本風倒木は不整形のプランを呈する。

底面は狭く、壁面は概して南壁は鋭く立ち、西壁から北壁にかけては開き気味である。

9号風倒木（時期不詳、第241図、図版49）

概要 本風倒木はB区北部に位置する。

本風倒木も5・8号風倒木と同様に黒ボク土を含み、剥片1片を含むことから完新生のものであると認識されるが、その時期は特定できなかった。

また、倒木の方向は不明瞭であるが、平面観察か

らは南東側に倒れたのではないかと想定される。

規模 長径：440cm 短径：308cm 深さ：74cm

構造 本風倒木は不整形なプランを呈する。

全体に20～30cmの深さに下がるが北側隅部に向かって傾斜し、最奥部で最も深くなる。

1号竈（As-A 下皿、18世紀後葉、第242図、図版47・48）

概要 本遺構はB区南部に所在する竈遺構である。

竈の畝部分は既に失われていたが、26条を数えるサクを確認している。サク群は全体として東西に長い短冊形の形状を呈し、位置的に吉井町多比良286番地の東に張り出す区画の北半に一致している。

このサク群にはAs-Aが充填し、遺構確認段階では白く列をなしていた。このAs-Aは純層に近い状態であったが、本遺構下にはAs-Aを多く含む10・11号土坑の存在もあるため、一次的堆積であったか二

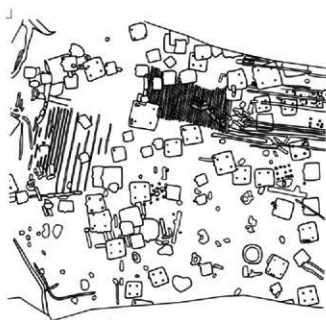
次的堆積であったかは明確ではない。何れにせよAs-A降下直前か降下後早い段階の遺構と判断されるので、本遺構については18世紀後葉という時期を与えたい。

規模 全体規模：長さ1,213cm 幅：640m サク

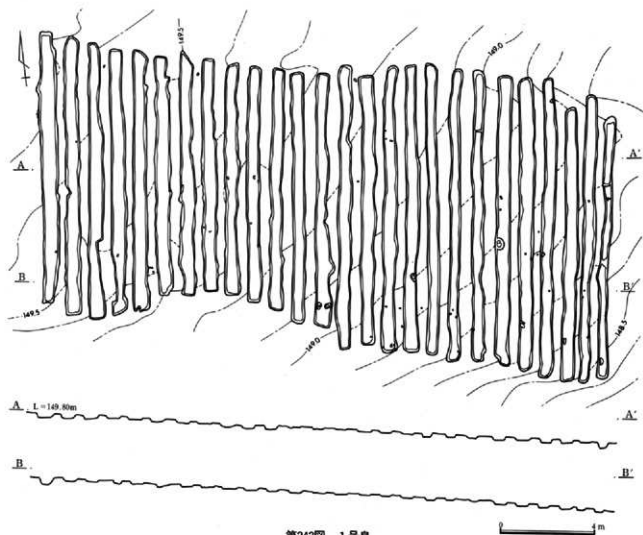
長さ：490～643cm 幅：23～40cm 深さ：2～16cm

構造 本遺構は上述のように26条のサク遺構で構成される。これらのサクの規模は平均で長さ567.88cm、幅32.80cm、深さ6.23cmを測るものである。

第2節 B区遺構と遺物



それぞれのサクは平行に並び、個々のサクとサクの中心の間隔は34~58cm、平均47.81cmを測る。また、サクの中心と中心を結ぶラインは東南東-西北西の方向を向いており、畝遺構全体の形態は菱形を呈している。しかし、サクの端部を結ぶ畝遺構の側のラインは大きくは東半部の中程で狭くなり、西半部の中程で広くなる傾向を示しているものの、やや不定型な波状を呈していて、北側ラインと南側ラインでそのラインの形態も均質ではない。



第242図 1号畝



近世削平面（近世以降、第243図、図版47・86・99）

概要 本遺構はB区中東部に在り、西側幅2m弱の斜面部分と東側の幅24m程の平坦面部分からなる。

第243図に図示し、本項に主に取り上げるのは西側の斜面部分についてである。この斜面部分は、西走する6号溝とその延長部である馬入れ道が直角に北に曲がる位置に相当し、現代の地割りである吉井町多比良260番地の西縁に沿って掘削されていた。

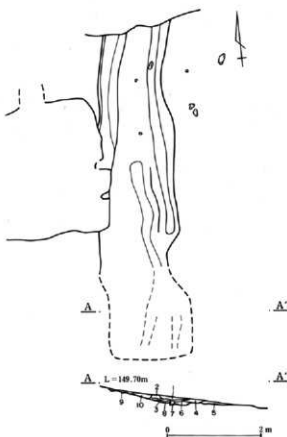
本遺構の覆土中からの遺物は多くなく、土師器や須恵器（1,3他）、磨石（4）の他、17世紀の所産と考えられる陶器の摺鉢片（2）なども含まれていた。

さて下限が現代まで下る本削平面の当初掘削の時期については、覆土下位層にAs-Aが含まれないことから江戸時代中期以前に遡ることが確認され、こうした削平による耕作地の確保が近世に行われる傾向にあること、出土した摺鉢片（3）の時期などから江戸時代前・中期に求めたい。

規模（西側斜面部）長さ：516cm以上 幅：170cm 深さ：41cm

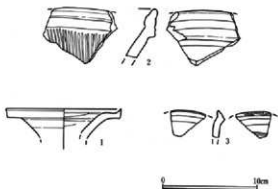
構造 上述のように本遺構は西側の斜面部分と東側の平坦面部分からなるが、全体的には東西26m、南北23m程度以上になるものと推定される。

このうち斜面の西肩と平坦面の比高差は40cm弱を測る。斜面は凡そ20°の角度を以て東側に向かって掘削されており、平坦面との境には幅50cm程、深さ数cmの南北走行の浅い溝状の掘り込みが1～2条掘削されている。

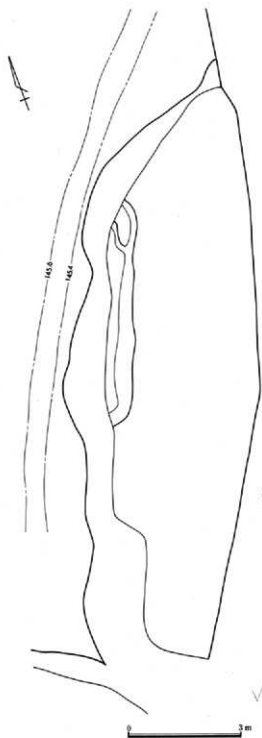


近世削平面覆土

1：茶褐色土：現耕作土。ローム漸移層土（以下「漸移層土」とする）とロームの細かい土にAs-A混入。 2：茶褐色土：1層に似るが色調暗く、カーボン混入。 3：暗褐色土：漸移層上層土に似、ローム粒・カーボン・As-A混入。 4：茶褐色土：1層に似るが、As-A少なくやや軟質。 5：明褐色土：漸移層下層土にローム粒混入。僅かにAs-A混入。 6：褐色土：漸移層上層土ブロックにローム粒混入。 7：暗褐色土：漸移層上層土中心のブロック層。 8：褐色土：漸移層土ブロックにローム粒多く混入。 9：褐色土：漸移層土ブロックにローム粒とAs-A混入。 10：明褐色土：漸移層下層土ブロックとロームブロックの混入。



第243図 近世削平面及び出土遺物



第244回 2号谷及び出土遺物

2号谷（古墳時代後期以降、第244回、図版86）

概要 本谷はB区東端部に所在する、自然埋没による谷地形である。東側は削平等で滅失している。

本谷からの出土遺物は打製石斧(1)や7～8世紀



にかけての土師器坏(2,3)や須恵器盤(4)、布目瓦(5)、そしてほうろく鍋(6)や18～19世紀の火消し壺(7)、ひょうそく(8)や寛永通寶(10)などの江戸時代の遺物が見られた他、石版(9)の出土も見られた。

従って、本谷の埋没は古墳時代後期頃から近代に至るまで行われていたものと推定される。

規模 長さ：785cm以上 幅：260cm以上 深さ：188cm以上

構造 本谷は土合川に平行するように南北に延び、底面は南側に向かって傾斜している。

本谷の西壁は鋭く立ち、底は比較的平坦である。

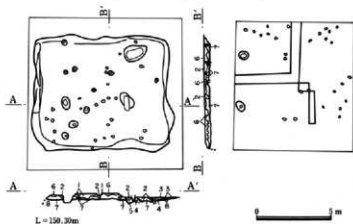
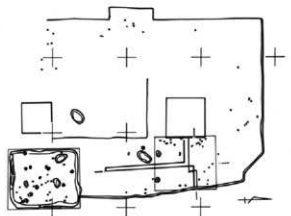
第3章 発見された遺構と遺物

B区縄文包含層（縄文時代早期、第245～246図、図版48・86～87・98）

概要 本遺物包含層は旧石器時代文化層に対する試掘調査に伴って確認・調査されたもので、層位的には標準Ⅳ層に相当する層の中に認められた。

当該包含層はBp～Br-29～32グリッドで確認されたが、Bp-30グリッドを中心に土器片40点以上、剥片等を含む石器61点以上の出土を見た。調査時点に於いてこの包含層は、出土遺物と層位による特徴から、縄文時代の早期以前のもので且つ旧石器時代には入らない時期のものであると認識されていた。しかし乍らこれらの出土遺物は、その後の処理の失敗から上位層での出土遺物と一括してしまうなど、明確に本包含層の遺物を識別できにくくしてしまっている。この中で、第246図に示したものは取り上げ番号等から本包含層出土遺物として扱ひ得ると判断されたものであり、土器類としては燃糸文系の縄文土器片(1～3,5,7～9)があって、本包含層の時期を示している。また、第246図にはこも編み石(4)と打製石斧(6)も図示したが、これらは上位層に属する可能性を有している。

尚、本包含層調査中に南東のBp-31～32グリッドに於いて方形プランの落ち込みが確認されたが、掘削の結果、この落ち込みは標準第Ⅴ層の上面を成すものであることが確認され、更に底面は北部と中・南部で段差を有し、また凹凸が見られるなど、面的にも遺構とはなり得ないものと判断された。



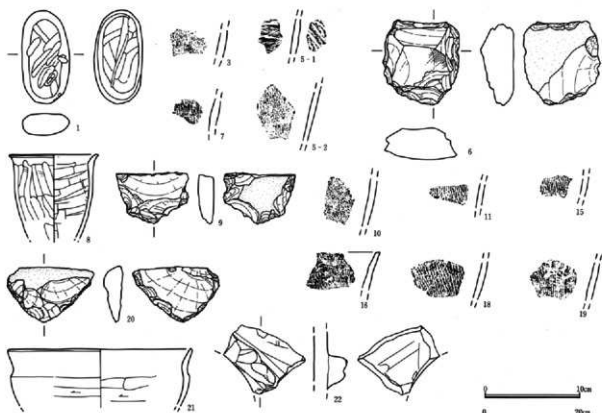
Bp-31～32グリッド埋土

1：淡茶褐色土：ロームに近いものを中心のローム漸移層土（以下「漸移層土」とする）ブロック層。 2：茶褐色土：上層土中心の漸移層土ブロック層。 3：茶褐色土：2層土にローム小ブロックを混入する。 4：暗茶褐色土：上層土中心の漸移層土の小ブロックに黒色土の小ブロックと僅かのロームの小ブロックを混入する。 5：暗茶褐色土：4層に似るが、As-YPを含むもののローム粒は殆ど含まない。 6：茶褐色土：漸移層土ブロック層。 7：暗黄褐色土：漸移層土の最下層土。若干のロームの小ブロック混入。標準Ⅳ層土。 8：黄褐色土：標準Ⅴ層土。ロームの最上層でAs-YPを混入する。

第245図 B区縄文包含層



第246図 B区遺構外出土遺物（縄文包含層）



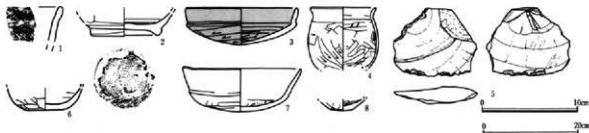
第247図 B区遺構外出土遺物(2)

B区に於ける遺構外出土の遺物(第247~249図, 図版87~89・98~99)

概要 B区に於いては比較的多くの遺構外の出土遺物を得ている。このうち確認面に於いて取り上げた資料を第247図に、それ以外のものを第248~249図に示した。

第247図に示した確認面表出時に出土の遺物は土師器の甕(8)や鉢(21)など土師器片を主体としているが、縄文時代の土器(3,5,7,10,11,15,16,18,19)や石器(1,6,9,12,17,20,23)などが多く見られた他、こもろみ石(2,4)やスラグ(14)、また土製カマド片(22)の出土を見ている。

一方、第248~249図に示したように攪乱土坑や排土などからも、土師器・須恵器或いは銅片等を中心に多くの遺物の出土を見たが、それらの多くはB区の各遺構の出土遺物と同様のものであり、縄文時代の土器片(1,12,13,18,27,28,33)や石器類(5,10,11,14,16,17,21,22,23,29~32,37,39,42~45,48,49)、各種の土師器(3,4,6,15,25,26,34)や須恵器(2,35)の他、土板(9)や茶釜の蓋らしきもの(36)、キセル(19)や鍬(20)等の金属製品。そしてこもろみ石(38,40,41)も含まれていた。



第248図 B区遺構外出土遺物(埋土-1)

第3章 発見された遺構と遺物



第249図 B区遺構外出土遺物(埋土-2)

第3節 C区の概要

C区は本遺跡の台地部分のやや東寄りに位置している。本区はその中程に北東方向から1号谷とした谷地形が入り込んで区を東西に分けているが、この谷地形は縄文時代以降江戸時代にかけて埋没していったと推定される。1号谷とその南側の一面には、竪穴住居や掘立柱建物が約46mに亘って見ることのできない緩衝地帯のような区域が見られた。これを境に東側（以下「東半部」とする）ではB区に続く遺構群が見られ、西側（以下「西半部」とする）ではD区に続く遺構群が見られ、竪穴住居が東半部に集中するのに対し、西半部では掘立柱建物が目立つなど、その様相を若干異にしている。

C区で発見・調査された遺構はさして多くなかったが、竪穴住居は14軒を調査した、このうち6世紀中葉と判断されるものは1軒、同じく6世紀後半期のものは3軒、西暦600年を前後する時期のもの3

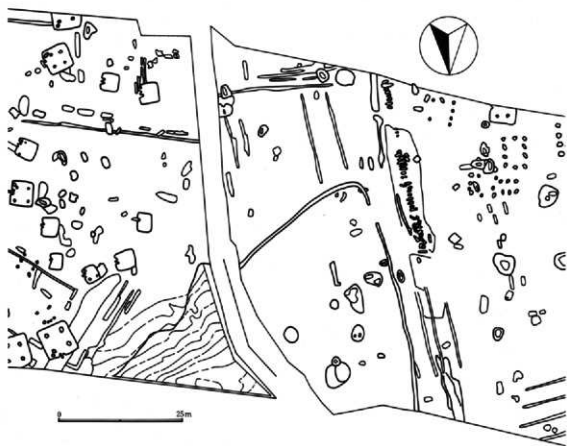
軒、7世紀前半期のもの1軒、8世紀中葉頃のものの1軒、古墳時代後期の範囲に入るもの3軒、古墳時代後期以降のもの2軒を数えた。

一方、掘立柱建物は概ね古代以前と判断されるものの5棟と時期不詳の1棟の計6棟を調査した。

土坑はC区全体に見られたが、分布に規則性等は見られなかった。また小型のピットは上述の緩衝地帯付近など一部を除いて広く見られたが、やはり特に規則性等は認められなかった。

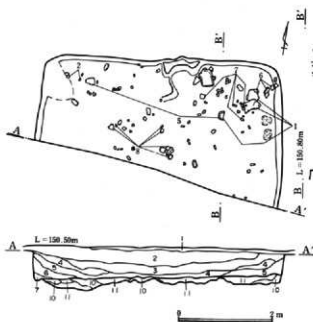
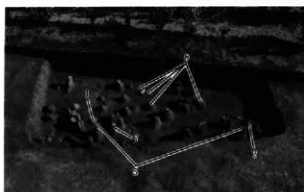
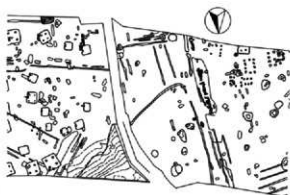
完新生の倒木を主とする風倒木痕は21基を調査したが、数量的には他の区に比較して多めであった。

溝遺構では1号谷の肩部を越えるように掘削された9号溝が特徴的であったが、西半部の東寄りでは1号谷の西側に沿って3条以上の溝と道路遺構等が集まる帯状のゾーンも見られた。



第250図 C区全体図

第4節 C区の遺構と遺物



カマド覆土

1: 灰褐色土: 粒子緻密で灰を混入。 2: 黒褐色土: 粒子緻密で焼土含む。(2': ロームの混入も少量見られる。) 3: 灰褐色土: 粒子緻密で黒色土少量混入。 4: 灰褐色土: 粒子緻密で焼土若干混入。(4': 焼土・炭化物混入。) 5: 灰褐色土: 焼土ブロック少量混入。 6: 黒褐色土: 焼土・ロームを相当量混入。

焼物層材

7: 灰白色土: シルト質の強粘性土。

カマド掘り方

8: 暗黒褐色土: ローム少量混入。 9: 暗黒褐色土: ロームと暗黒褐色土の混土。(9': 9層に比しロームの混入更に多くなる。)

掘り土

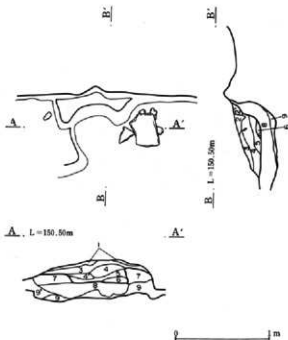
1: 黒色土: 砂質。(1': As-A多量に含む)

住居覆土

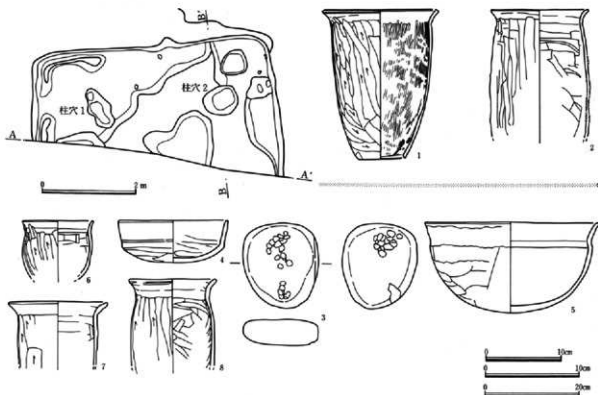
2: 暗黒褐色土: 褐色土・白色土粒多量に混入。
3: 暗黒褐色土: 2層に比し若干黒色化が進み夾雑物減少。
4: 黒褐色土: 淡褐色土ブロック多量に混入。(4': 堅く締まる。) 5: 黒色土: 黒色土と暗黒褐色土の混土に淡褐色土ブロック少量混入。
6: 黒色土: 4層土と5層土の混土。
7: 黒色土: 若干の褐色土混入。
8: 暗黒褐色土: 炭化物多量に入る。(8': 焼土なし。) 9: 暗茶褐色土: 黒色土少量混入。

住居掘り方覆土

10: 暗茶褐色土: 若干の汚れ目立つ。 11: 暗茶褐色土: 8層に比し黒色土多し。 12: 暗黒褐色土: ロームブロック少量。 13: 暗灰黒褐色土: ロームブロック微量に含み、粘性強い。 14: 暗灰黒褐色土: 13層に比し黒み増す。



第251図 H-20号住居及びカマド



第252図 H-20号住居掘り方及び出土遺物

H-20号住居（古墳時代後期，第251～252図，図版100・116・122）

概要 本住居はC区東半部の調査区南端際に位置し、南半部は調査区外に出て調査できなかった。

出土遺物のうち本住居に伴う出土遺物は何れも6世紀後半の特徴を示す土器の甕(1)と壺(2)であった。一方、覆土中からは土器器壁片を中心に、磨石(3)や6世紀後半から7世紀前半の特徴を持つ土器の坏(4)・鉢(5)・小型壺(6)・壺(8、7)や、こも編み石(9)、カマドの袖材と考えられるスサの入った塑物(10)などが見られた。

本住居に伴う遺物は少なかつたものの、本住居は6世紀後半の所産と判断される。また、覆土中の遺物の状況から本住居は廃棄後早い段階から埋没が始まり、奈良・平安時代の頃まではその痕跡を留めていたことが窺われる。

尚、本住居の北東部には炭化物の出土が見られたが、覆土中に焼土を伴うことと併せて所謂焼失家屋であった可能性が考慮される。

規模 長軸：540cm 短軸：残存308cm 深さ：46cm

カマド 幅：180cm 奥行：86cm 左袖 幅：42cm 長さ：64cm 高さ：21cm 右袖 幅：57cm

長さ：55cm 高さ：18cm 燃烧部 幅：88cm

柱穴1 径：50×44cm以上 深さ：推定12cm

柱穴2 径：72×61cm 深さ：推定74cm

貯蔵穴 径：56×52cm 深さ：推定99cm

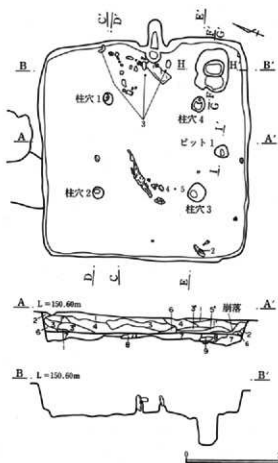
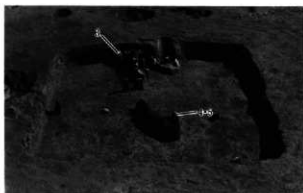
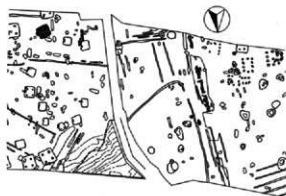
構造 上述のように本住居は南側部分が路線外に在るため、その全容は明らかではないが、本住居は方形のプランを呈するものと推定される。

本住居は掘り方を有し、これを暗色系の土壌で埋め戻して床面を造り出している。

カマドは北カマドであるが、かなり壊されていて全体的状況は明らかでない。カマドは浅い掘り方を有し、暗黒褐色土等で埋め戻して燃烧面を造り、その左右側にシルト質の土壌で袖を造り出している。

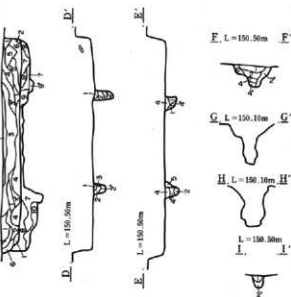
柱穴・貯蔵穴は掘り方面に確認され、北西コーナー部分の状況から幅15cm前後で、深さ17cmと推定される周溝を伴っていたものと想定される。

第3章 発見された遺構と遺物



住居覆土

1: 暗黒褐色土・褐色土微量。(1': 褐色土ブロック小型化)
 2: 汚れた黄褐色土。 3: 暗褐色土・褐色土・炭化物少量。(3': 褐色土顯著で炭化物消える。) 4: 暗黒褐色土・黒色土ブロック多量に、褐色土少量含む。 5: 暗褐色土・褐色土若干混入。(5': 褐色土の混入激減。) 6: 暗褐色土主体。



柱穴・貯蔵穴・ピット覆土

1: 黒色土・くすんだ灰褐色土微量に含む。 2: 暗褐色土・暗褐色土・黒色土の混土。(2': 黒色土の占める割合高い。) 4: 暗茶褐色土・暗茶褐色土とくすんだ褐色土の混土。(4': 4層に比し全体に色調明るい。) 6: 暗黒褐色土・黒色土と灰褐色土ブロックを微量含む。

地山層

3: 暗灰褐色土: 壁く締まる。 5: 暗黄褐色土。

住居掘り方覆土

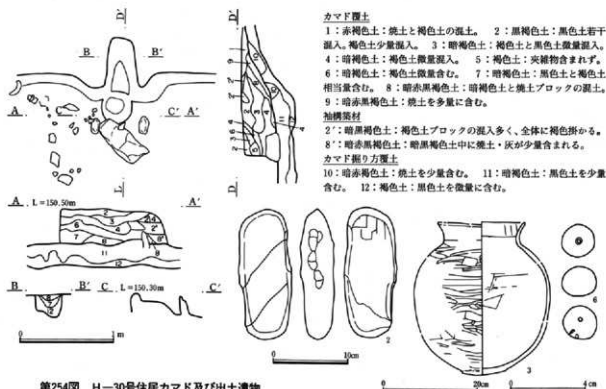
7: 暗褐色土・褐色土・黒色土微量に混入。 8: 暗黒褐色土・黒色土・褐色土ブロック多量に含む。 9: 暗黒褐色土: As-YPを微量含む。(9': As-YP含まない) 10: 暗褐色土・黒色土微量に混入。

第253図 H-30号住居

H-30号住居 (古墳時代後期か, 第253~254図, 図版100~101・116・122)

概要 本住居はC区東半の南部に位置するB・C区に於いては中型のものに属する竪穴住居跡である。

本住居の出土遺物のうち本住居に伴うと判断されたのは僅かにこも編み石2点(1,2)だけであった。



第254図 H-30号住居カマド及び出土遺物

一方、覆土からは土師器片を中心に、7世紀前半期の特徴を示す土師器の割製甕(3)や坏の他、こも編み石(2)や石製の小玉(6)などが出土した。

以上のような状況下で、本住居はカマドを伴うことから古墳時代後期から平安時代にかけての広い時間の中で捉えられるだけであったが、消極的乍ら覆土中の遺物から得られた7世紀前半という時期の前後に本住居が営まれた可能性が想定される。

また本住居の中央やや西寄りから炭化材の出土したことから、本住居は所謂焼失家屋であると判断される。中心に在るヤマザクラという鑑定結果を得た最も大きな材は、位置的に北東の柱の転倒したものと判断され、他の炭化材は垂木材であると思われる。

規模 長軸：464cm 短軸：450cm 深さ：49cm

カマド 幅：92cm 奥行き：103cm 左袖 幅：34cm 長さ：60cm 高さ：36cm 右袖 幅：39cm 長さ：62cm 高さ：33cm 燃焼部 径：33×34cm

深さ：7cm 煙道 幅：27cm 長さ：71cm

柱穴1 径：24×22cm 深さ：49cm 柱穴2

径：25×23cm 深さ：46cm 柱穴3 径：41×36cm

深さ：33cm 柱穴4 径：32×27cm 深さ：29cm

カマド覆土

1：赤褐色土：焼土と褐色土の混入。 2：黒褐色土：黒色土若干混入。褐色土少量混入。 3：暗褐色土：褐色土と黒色土少量混入。 4：暗褐色土：褐色土少量混入。 5：褐色土：夾雑物含まれず。 6：暗褐色土：褐色土少量含む。 7：暗褐色土：黒色土と褐色土相当量含む。 8：暗赤黒褐色土：暗褐色土と焼土ブロックの混入。 9：暗赤黒褐色土：焼土を多量に含む。

加橋蓋材

2'：暗赤黒褐色土：褐色土ブロックの混入多く、全体に褐色掛かる。 8'：暗赤黒褐色土：暗赤褐色土中に焼土・灰が少量含まれる。

カマド掘り方覆土

10：暗赤黒褐色土：焼土を少量含む。 11：暗褐色土：黒色土を少量含む。 12：褐色土：黒色土を微量に含む。

貯蔵穴 径：92×75cm 中心部径：43×35cm 深さ：82cm

ピット1 径：27×26cm 深さ：33cm

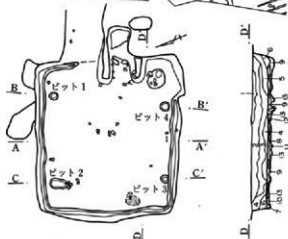
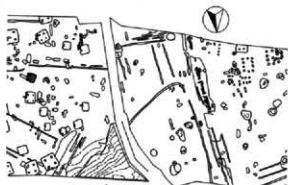
構造 本住居は概ね方形のプランを呈する。

記録化が不十分であったため全容は明らかではないが、本住居は幅106～134cm、深さ12～30cm程を測る周溝状の掘り込みを伴う掘り方を有する。床面はこうした構造を持つ掘り方これを暗黒褐色土等で埋め戻して造り出している。

カマドは東カマドで、東壁中央付近に設けられる。掘り方を有し暗褐色土等で埋め戻して燃焼面を造っている。燃焼部の両側手前側には礎を立てて袖石とし、暗黒褐色土・褐色土等で袖を造り上げている。両袖の上には板状の礎を載せて天井石としている。

床面では柱穴4基と貯蔵穴とピット各1基を確認した。柱穴は柱穴3を除いて径が小さいので柱痕と考えられ、特に柱穴1の径は上述の柱材と判断した炭化材の太さと一致する。一方、貯蔵穴は南東コーナー付近に掘削されるが、蓋を想定させる深さ25cm程を測る広い掘り込み部分と、その中央に掘削された柱穴様の掘り込みを持つ2段構造を示している。

第3章 発見された遺構と遺物



カマド覆土

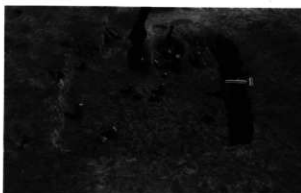
1: 褐色土: ローム等僅かに含む。(1': 植物灰) 2: 暗黄褐色土: ローム等僅かに含む。 3: 褐色土: ローム僅かに含む。 4: 灰褐色土: 焼土等僅かに含む。 5: 暗黄褐色土: ローム散在し、焼土等僅かに含む。 6: 褐色土: ローム等僅かに含む。 7: 褐色土: 焼土等僅かに含む。 8: 暗茶褐色土: 焼土等僅かに含む、幾分赤味を帯びる。 9: 暗黄褐色土: ローム等僅かに含む。 10: 暗赤褐色土: 焼土粒を含む、赤味を帯びる。

池溝築材

11: 暗灰褐色土: ローム粒等僅かに含む。 12: 灰褐色土: ベースは11層に似る。明灰褐色粘質土大量含む。

カマド掘り方覆土

13: 褐色土: 暗黄褐色土を主体とし、ローム僅かに含む。 14: 褐色土: 明るいロームかなり多く、暗黄褐色土等僅かに含む。 15: 暗黄褐色土: 14層に比しローム大きく且つ多い。 16: 暗黄褐色土: くすんだローム主体。褐色土やや多く混入。(16': ローム少ない)



積作土

1: 褐色土: 締まり悪く、As-A多く散在。

住居覆土

2: 褐色土: ローム等僅かに含む。 3: 褐色土: ロームやや多く含む。 4: 暗褐色土主体。良く締まる。 5: 褐色土: ローム僅かに含む。 6: 褐色土: ロームやや多く含む。 7: 褐色土: 土質幾分暗い。周溝埋土。

貼り床

8: 暗黄褐色土: くすんだロームと黒褐色土の小ブロック斑点状に混在。明灰褐色粘土僅かに含む。特に堅固。 9: 暗黄褐色土: 8層には劣るが堅固。 10: 暗黄褐色土: 褐色土粒とくすんだロームの強土主体。黒褐色土僅かに含む。

床下粘土坑覆土

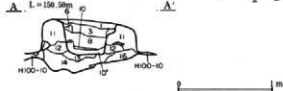
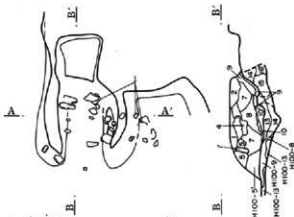
11: 暗黄褐色土: 暗灰黄褐色土とローム斑点状に混入。 12: 明灰黄褐色土: くすんだローム粒に明灰褐色粘質土かなり多く含む。 14: 黄褐色土: 明るい色調のローム散層。

住居掘り方覆土

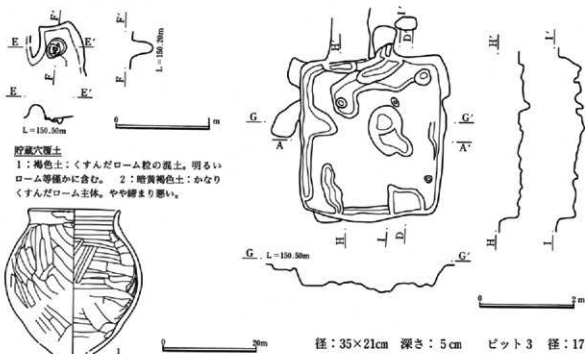
13: 暗黄褐色土: くすんだローム粒主体。

ピット覆土

1: 暗褐色土: くすんだロームを極く僅かに含む。 2: 褐色土: くすんだローム粒と褐色土粒の混土主体。1層近似の土壌等僅かに含む。 3: 黄褐色土: 明るいローム粒主体。褐色土僅かに混入。



第255図 H-100号住居及びカマド



第256図 H-100号住居掘り方及び出土遺物

H-100号住居(古墳時代後期, 第255~256図, 図版101・116)

概要 本住居はC区東半部の東寄りに在り、B・C区に於いては小型の竪穴住居跡である。

後世の土坑によりカマド左袖外側から東壁北側の部分が切られていた。

本住居からは各種土師器を中心に遺物の出土が見られるが量的には少なく、この中で本住居に伴う可能性を持つものとして土師器の胴張壺(1)と甕(2)があり、前者は6世紀後半期、後者は6世紀前半期の特徴をそれぞれ示している。

従って、本住居は凡そ6世紀中葉頃の所産として把握したい。また、覆土中の遺物から平安期頃まではその痕跡が留められていたものと思慮される。

規模 長軸:349cm 短軸:319cm 深さ:38cm

カマド 幅:107cm以上 奥行き:140cm 左袖

幅:32cm以上 長さ:50cm 高さ:35cm 右袖

幅:40cm 長さ:81cm 高さ:32cm 燃焼部

径:37×58cm 深さ:2cm 煙道 幅:47cm 長さ:51cm

ピット1 径:17×17cm 深さ:12cm ピット2

径:35×21cm 深さ:5cm ピット3 径:17×16cm 深さ:16cm ピット4 径:20×18cm 深さ:10cm

貯蔵穴 径:43×35cm 深さ:48cm

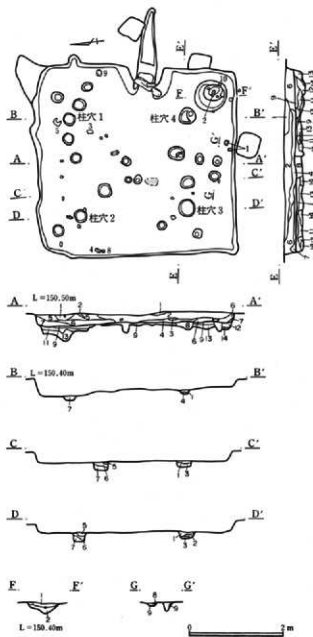
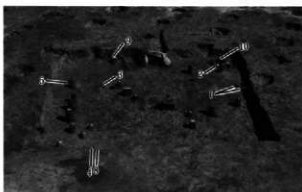
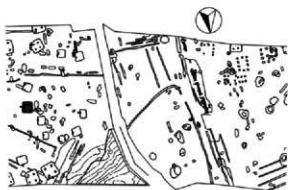
床下粘土坑 径:122×75cm 深さ:13cm

構造 本住居は方形のプランを呈するが、南東コーナー付近が若干南側に張り出し気味となっている。

掘り方を有し、掘り方には東壁北半部から北壁と西壁及び南壁の中程の壁際に幅8~20cm、深さ5cm以下の浅い周溝状の掘り込みが廻り、住居中央付近には不整形なプランで明灰褐色粘質土を見る床下粘土坑を有する。床面はこのような構造を持つ掘り方をローム主体の土で埋め戻し、ロームや褐色土等の土壌を締め固めた貼り床を施して造っている。

カマドは東カマドで東壁やや南寄りに造る。浅い掘り方を有し、これを褐色土等で埋め戻して燃焼面を造り、その両側に灰褐色土等を使って袖を造る。

床面ではピット4基と貯蔵穴1基を確認した。このうちピットは全て壁際に近い位置に在るものの、方形の配置を見せるため柱穴様の機能が想定される。尚ピットは何れも小さく浅いものなので、材に掛かった加重による窪みの可能性も有する。一方貯蔵穴はカマド右側の南東コーナーの狭い範囲に掘削され、柱穴様の形態を呈している。



第257図 H-101号住居

耕作土

1：褐色土：As-Aを多く含む。

住居層土

2：褐色土：ローム等僅か。 3：黒褐色土主体。 4・5：褐色土：ローム僅か。 6：褐色土：ローム粒や多く含む。 7：褐色土：ローム粒と明るいロームブロックや多く含む。

貼り床

8：褐色土：くすんだロームと褐色土ブロックの混土。 9：暗黄褐色土：くすんだローム粒大量に含む。大変固く締まる。

住居掘り方

10：暗黄褐色土：くすんだロームと褐色土ブロックの混土。 11：褐色土：微分赤味を帯びる。 12：暗黄褐色土：ロームブロックに褐色土僅かに含む。 13：黄褐色土：明るいローム層。

柱穴・貯蔵穴・ピット層土

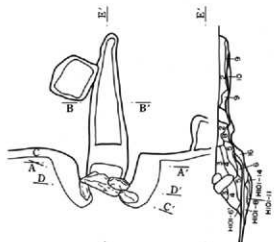
1：褐色土：ローム粒や多く含む。 2：暗黄褐色土：くすんだローム粒主体。 3：暗黄褐色土：明るいローム粒主体。 4：黄褐色土：明るいロームブロック主体。 5：暗黄褐色土：褐色土主体。黄褐色ロームブロックや多く含む。 6：褐色土：ローム僅か。 7：暗黄褐色土：黄褐色土主体。ロームブロック大量に含む。 8：暗黄褐色土：ローム僅かに含む。 9：褐色土：くすんだローム粒と褐色土粒の混土主体。

H-101号住居(古墳時代後期, 第257~259図, 図版101・116・122)

概要 本住居はC区東半部に位置する、B・C区に於いては中規模なものに属する竪穴住居跡である。

本住居付近は後世のピットの掘削があり、本住居も一部がこれらに切られている。床面に於いても多数のピットが確認されたが、これらの多くは本住居には伴わないものであると認識される。

本住居の出土遺物のうち、本住居に伴うものとしては7世紀前半期の特徴を持つ土師器環(1)があり、この他にも編み石(2~3)や完形に近い鉄製の鉄先(4)が見られた。また、西壁前からは粘土塊の出土も見られたのである。



カマド覆土

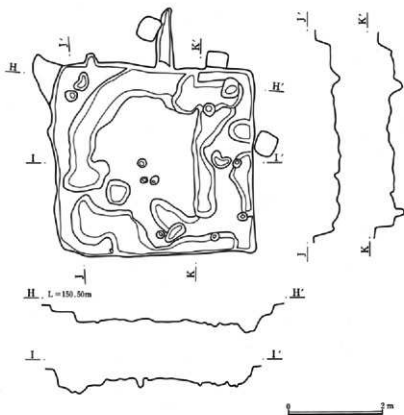
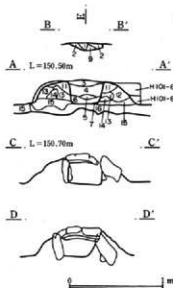
1: 黄褐色ロームブロック: 南面と東面擁ける。 2: 褐色土: ローム極く僅かに含む。 3: 暗赤褐色土: 暗紫色を帯びる。焼土・ローム極く僅かに含む。 4: 暗赤褐色土: 暗紫色を帯びる。焼土に含む。 5: 暗赤褐色土: 6層土粒多く混入し、4層に比し焼土を多く含む。 6: 灰褐色土: 薄くピンク掛かる。焼土粒やや多く、くすんだローム粒等僅かに含む。 7: 暗黄褐色土: くすんだ色調子の黄白色ローム粒主体。6層土僅かに混入。 8: 暗黄褐色土: ロームブロックを主体とし褐色土僅かに混入。 9: 暗黄褐色土: くすんだ白黄色ローム粒と褐色土粒(2層土)を2:1程の割合で混じる。 10: 黄褐色土: ロームブロック主体。僅かにくすんだ暗黄褐色土の小ブロック含む。

抽換壁材

11: 褐色土: 白色粒子やや多く、灰褐色土・炭化物僅かに含む。 12: 暗赤褐色土: 11・13層土に比し幾分色調暗く、炭化物等僅かに含む。 13: 褐色土: 暗黄褐色土の小ブロック・白色粒子やや多く、焼土・ロームを僅かに含む。 14: 暗赤褐色土: 11~13層土に比し粒子細かい。焼土・ローム等僅かに含む。 15: 暗黄褐色土: くすんだローム粒・ブロックの混土に褐色土小ブロック混入。黒褐色土等僅かに含む。

カマド掘り方覆土

16: 黄褐色土: くすんだロームブロック主体とし、褐色土ブロック僅かに混入。



一方、覆土中からは各種の土師器を中心とした遺物の出土が見られたが、の中には縄文土器片(6)や不定形石器(7)、或いは磨石(8)、敲石(9)と言った縄文時代の遺物や、7世紀前半期の特徴を示す土師器環(10)などが見られた。

以上のような少ない遺物の状況ではあるが、本住居の時期としては7世紀前半を充てたいと思う。

規模 長軸: 440cm 短軸: 410cm 深さ: 27cm

カマド 幅: 115cm 奥行: 185cm 左袖幅: 44cm 長さ: 60cm 高さ: 25cm 右袖幅: 39cm

長さ: 58cm 高さ: 25cm 燃焼部 径: 34×46cm

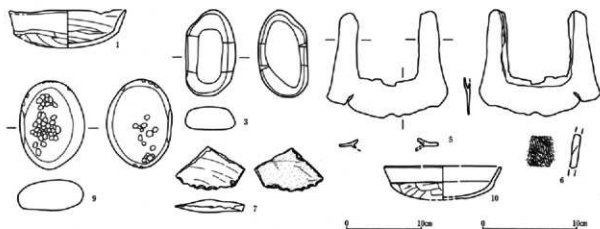
深さ: 0cm 煙道 幅: 40cm 長さ: 117cm

柱穴 1 径: 27×25cm 深さ: 9cm 柱穴 2 径: 28×25cm 深さ: 20cm 柱穴 3 径: 37×33cm 深さ: 14cm 柱穴 4 径: 36×34cm 深さ: 24cm

貯蔵穴 径: 70×65cm 深さ: 38cm

第258図 H-101号住居カマド及び掘り方

第3章 発見された遺構と遺物



第259図 H-101号住居出土遺物

構造 本住居は概ね方形のプランを呈し、掘り方を有する。掘り方には各コーナー部と北壁の壁際に14～72cmの幅を測るテラス状の掘り残しを有し、その内側に幅11～84cm、深さ14cm以下の周溝状の掘り込みが廻るものの、そのプランは不整形で明瞭な規則性は認められなかった。こうした構造の掘り方をロームや褐色土等で埋め戻し、その上にはやはりロームと褐色土を用いた貼り床を施して床面としている。

カマドは東カマドで東壁の中央付近に造られる。浅い掘り方を有し、これをロームで埋め戻して燃焼面を造っている。燃焼部は東壁ラインの内側に設定され、その両側手前には左右1個づつの礎を立てて袖石とし、袖石を包み込むように奥壁にかけてロームや褐色土で袖を造り上げている。袖石の上には板様の天井石が渡されている。煙道は燃焼面より15cm程上の位置より奥壁を掘り抜いて掘削されている

が、掘削方向は水平に近い緩傾斜を示している。この水平に近い掘り込みは長いもので、125cm程を測る進められた地点でその掘削方向を上方に変じている。

床面に於いては、貯蔵穴1基と22基のピットが確認された。これらのピットは径14～36cm、深さ6～32cmを測り、その殆どは径も小さく掘り込みも浅いものであった。これらのうち、主柱穴については位置関係から柱穴1～4としたピットを充てたが、特に柱穴1・2については規模が小さいことなどから掘り方ではなく柱痕ではないかと思われる。他の多くのピットについては本住居に伴わないか、関係を特定できなかった。一方、貯蔵穴はカマド右側、南東コーナー付近に掘削されるが、深さ18cm程の楕円形プランの土坑様の掘り込みと、その東寄りに径42×33cm、深さ20cmを測る柱穴様の掘り込みを掘削する2段構造であり、上段には蓋の存在が想定される。

H-102号住居(古墳時代後期、第260～261図、図版102・116～117)

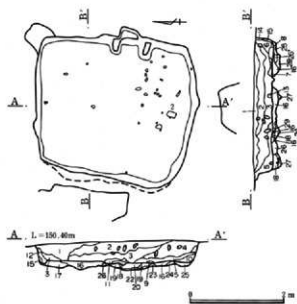
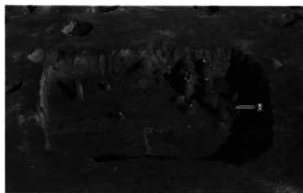
概要 本住居はC区東半部に位置する、小規模な竪穴住居跡である。

本住居付近は耕作に伴う規則的配列のピットが入るが、本住居は大きな影響を受けていない。しかし、床面検出の失敗から北東・北西・南西部の床面を若干掘りすぎてしまっている。

本住居の出土遺物はさして多くなく、更に本住居に伴うと判断される遺物は確認されなかった。また、

覆土中からは古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての時期の土師器壺を中心とした遺物の出土が見られたが、この中には7世紀前半期の特徴を示す土師器環(1)や、台石(2)も見られた。

以上のような出土遺物の状況からは本住居の時期は特定されなかったのであるが、覆土中の遺物が7世紀前半期の遺物を含む古墳時代後期のものを主体とし、住居廃絶後の始めの段階の投棄行為でこれら



第260図 H-102号住居

が放棄され、奈良・平安時代まではその痕跡が窪地としてのこされていたことが窺われること、及び本住居がカマドを伴うことから、本住居は古墳時代後期の所産と考えられる。高、H-30号住居と同様、消極的乍ら出土遺物から得られた7世紀前期という時期の前後に本住居が営まれた可能性が想定される。

規模 長軸：348cm 短軸：315cm 深さ：51cm
カマド 幅：101cm 奥行き：112cm 左袖 幅：56cm 長さ：31cm 高さ：27cm 右袖 幅：35cm 長さ：37cm 高さ：28cm 燃焼部 径：39×25cm
煙道 幅：43cm 長さ：26cm 掘り方 径：47×36cm 深さ：12cm

貯蔵穴 径：44×43cm 深さ：57cm (床面よりの深さ：推定63cm)

住居覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

1：暗茶褐色土/2：暗褐色土/3：黒褐色土：漸移層上層土主体。4：暗褐色土/6：茶褐色土：漸移層土の混土主体。5：黒色土/7：茶褐色土：漸移層土と黒色土の混土主体。8：明茶褐色土：黒色土・漸移層土・ロームの混土。9：黒褐色土：黒色土とロームの混土。10：茶褐色土：上層中心の漸移層土主体。11：茶褐色土/12：茶褐色土：漸移層土主体。13：黒褐色土：黒色土と淡黄灰色シルトの混土。14：淡茶褐色土：漸移層下層土。15：明褐色土：ローム主体。

貼り床

16：黒褐色土：黒色土と漸移層上層土の混土主体。17：淡茶褐色土主体。18：淡茶褐色土：漸移層土主体。

住居掘り方覆土

19：茶褐色土：上層中心漸移層土主体。20：茶褐色土：19層土基調。22：灰褐色土：青灰色シルト主体。23：淡茶褐色土：19層土と22層土の混土。24：淡茶褐色土：下層基調の漸移層土主体。25：暗褐色土：黒色土と下層中心の漸移層土主体。26：明褐色土：ロームと漸移層土の混土。(26：黒色土混入。) 27：淡茶褐色土：漸移層下層土。28：淡茶褐色土/29：淡茶褐色土：漸移層下層土主体。

床下粘土坑 径：94×84cm 深さ：12cm

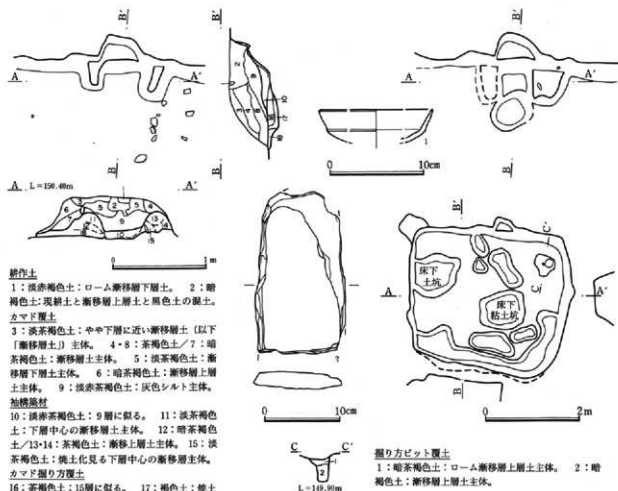
床下土坑 径：97×95cm 深さ：19cm

構造 本住居は概ね隅丸方形のプランを呈する。

掘り方を有し、掘り方の南壁西半から西壁の壁際にかけては幅20~41cm、深さ9cm以下の周溝状の掘り込みが廻る他、幾つかの土坑・ピット様の掘り込みが見られた。このうち、中央やや南西寄りに青灰色シルトを含む床下粘土坑が確認され、北壁中央やや東寄り位置には壁面に接する土坑が見られた。床面はこのような構造を持つ掘り方をローム漸移層土を中心とする土壤で埋め戻し、黒色土とローム漸移層土を用いた貼り床を施して造り出している。

カマドは東カマドで、東壁面中央付近に設けられている。カマドは東壁よりやや内側に離れた位置に

第3章 発見された遺構と遺物



耕作土

1: 淡赤褐色土: ローム漸移層下層土。 2: 暗褐色土: 表耕土と漸移層上層土と黒色土の混土。

カマド覆土

3: 淡茶褐色土: やや下層に近い漸移層土 (以下「漸移層土」) 主体。 4・8: 茶褐色土/7: 暗茶褐色土: 漸移層土主体。 5: 淡茶褐色土: 漸移層下層土主体。 6: 暗茶褐色土: 漸移層上層土主体。 9: 淡赤茶褐色土: 灰色シルト主体。

地構遺材

10: 淡赤茶褐色土: 9層に似る。 11: 淡茶褐色土: 下層中心の漸移層土主体。 12: 暗茶褐色土/13-14: 茶褐色土: 漸移上層土主体。 15: 淡茶褐色土: 焼土化見る下層中心の漸移層主体。

カマド掘り方覆土

16: 茶褐色土: 15層に似る。 17: 褐色土: 焼土化見る漸移層土主体。 18: 暗褐色土: 住居掘り方覆土



第261図 H-102号住居遺構及び出土遺物

浅い掘り方を掘削しているが、ローム漸移層土等で埋め戻して燃焼面を造っている。袖は燃焼部の両側に設けられるが、その位置はカマド掘り方の奥側から東に当たり、灰色シルトや下層のものを中心とするローム漸移層土で造られている。

床面に於いては、柱穴や貯蔵穴等の施設を確認す

ることはできなかった。尚、貯蔵穴については掘り方面に於いて、カマド右側の南東コーナー付近にビットを確認・調査したが、位置的・形態的に貯蔵穴であろうと判断される。尚、これが床面に於いて検出できなかったことから、本住居には造り替えの可能性が考えられる。

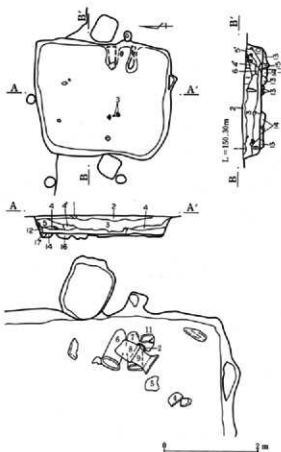
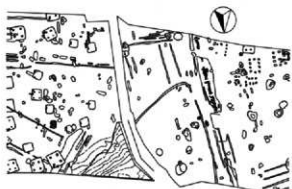
H-103号住居(古墳時代後期, 第262~264図, 図版102・117)

概要 本住居はC区東半部の北部に位置する、小型の竪穴住居である。

付近にはビットや面的な攪乱が入り、本住居も一部その影響を受けて壊されている。

本住居からの出土遺物はさして多くなかったが、本住居に伴うと判断された遺物はどれも6世紀後半期から7世紀前半期の特徴を示す土器器の坏(1,2)、

瓶(8)、壺(10,6,7,9)、小型甕(4,3)である。小型甕1点(3)を除く遺物これらは全てカマド周辺で出土し、このうち2個の土器器甕(6,7)はカマドに並列に掛けられていたものが手前側に転倒したような状態で、また後述するように、天井材に使用されたと判断される土器器の瓶(8)に壺(9)が差し込まれたものも見受けられた。



カマド覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

1: 暗茶褐色土: 漸移層上層土主体。As-YF等軽石と漸移層下層土やや多く含む。 2: 茶褐色土: 漸移層土主体。 3: 暗褐色土: 上層土中心の漸移層土主体。 4: 暗黄褐色土: 漸移層上層土主体。 5: 暗茶褐色土: 漸移層上層土主体。 6: 暗褐色土: 漸移層上層土主体。 7: 茶褐色土: 2層土に似る。

焼機残材

8: 暗褐色土: 黒色土に近い漸移層上層土主体。 9: 淡茶褐色土: 弱い焼土化見る漸移層下層土主体。 10: 淡茶褐色土: 漸移層下層土主体。焼土化進行。

カマド掘り方覆土

11: 茶褐色土: 下層土中心の漸移層土主体。燃焼面中央中心に焼土化見る。 12: 暗黄褐色土: ロームと漸移層土の混入。住居掘り方。

耕作土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

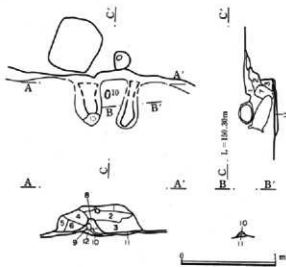
1: 暗茶褐色土: 現耕作土。

住居覆土

2: 暗褐色土/4: 黒褐色土/12: 黄褐色土: 漸移層上層土主体。(4': ローム又は漸移層下層土混入。) 3: 暗褐色土: 漸移層上層土主体。As-YF等多く含む。 5: 茶褐色土/10: 褐色土: 上層土中心の漸移層土主体。(5': 黒色土混入。) 6: 淡茶褐色土: 漸移層土にローム多く混入。 7: 暗茶褐色土: 黒色土と漸移層土の混入土主体。 8: 明褐色土: 黒色土・漸移層土・ロームの混入。 9: 明褐色土: 下層土中心の漸移層土にローム多く混入。 11: 黄褐色土: ローム主体。

住居掘り方覆土

13: 淡茶褐色土: 下層土中心の漸移層土主体。 14: 暗黄褐色土: ロームに近い漸移層下層土主体。 15: 暗茶褐色土: 漸移層上層土主体。植物の根のみ。 16: 明褐色土: ロームと漸移層上層土の混入。 17: 黄褐色土: ローム主体。

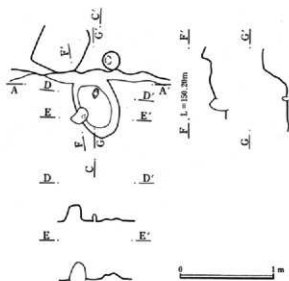


第262図 H-103号住居及びカマド

一方、覆土中からは土師器壺片を中心に、古墳時代後期の土師器瓶(5,11)などの出土が見られた。

以上のような出土遺物の状態から、本住居は西暦600年を前後する時期の所産と判断され、また覆土中の遺物の状況から奈良・平安時代頃まではその痕跡が残されていたことが窺われる。

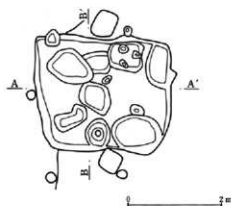
第3章 発見された遺構と遺物



第263図 H-103号住居掘り方

規模 長軸：288cm 短軸：248cm 深さ：32cm
 カマド 幅：71cm 奥行き：63cm 左袖 幅：29cm 長さ：44cm 高さ：16cm 右袖 幅：21cm 長さ：51cm 高さ：8cm 燃焼部 径：27×51cm
 カマド掘り方 径：44×67cm 深さ：6cm
 構造 本住居は西側のコーナーが丸みを持つ、台形のプランを呈する。

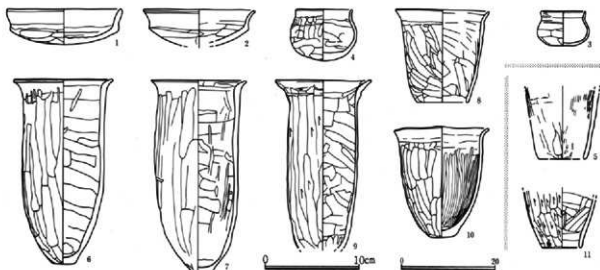
掘り方を有する。掘り方には径1m以下、深さ数cm以下の土坑8基の他、浅い掘り込みの小ピットが幾つか見られたが、全体的には特徴の規則性を持つ



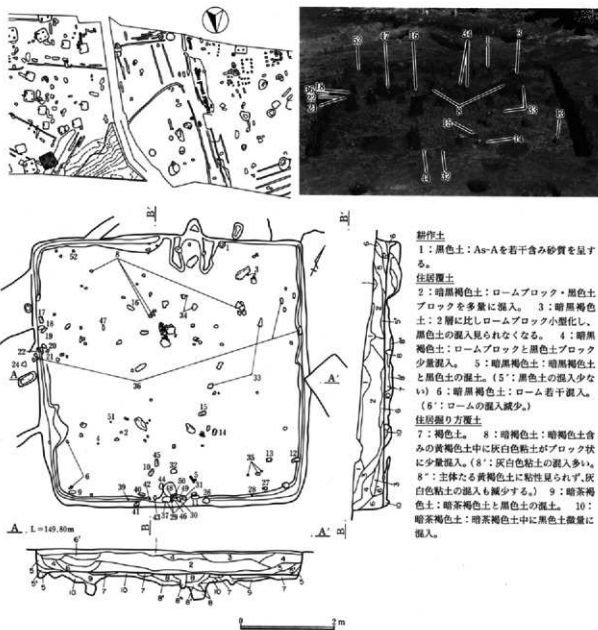
た掘り込み等は認められなかった。床面はこうした構造を持つ掘り方をローム漸移層土やロームなどで埋め戻して造られている。

カマドは東カマドで、東壁やや南寄りに造られているが、楕円形プランの浅い掘り方を有し、これをローム漸移層土やロームで埋め戻して燃焼面を造っている。カマド掘り方の北側の肩の中程には土師器甕(10)が逆位に置かれて袖材とされている。袖はカマド掘り方の南北肩の東半部に当たる位置に、ローム漸移層土を用いて造り上げられている。尚、袖材の上には上述のように土師器の甕(8)に甕(9)を差し込んだものが天井材として渡されていた。

尚、床面に於いても、掘り片面に於いても、柱穴・貯蔵穴等の構造を確認することはできなかった。



第264図 H-103号住居出土遺物



第265図 H-104号住居

H-104号住居(古墳時代後期, 第265~268図, 図版102~103・117~118・122)

概要 本住居はC区東半部北端1号谷手前の緩斜面部に位置する、B・C区に於いては中型~大型の物に属する竪穴住居である。

本住居付近には後世の耕作溝等が入り、本住居もその一部が壊されている。また床面に確認された小ピットも後世の掘削によるものが認められる。

本住居の出土遺物のうち本住居に伴うと判断され

たものには6世紀後半から7世紀前半期にかけての特徴を示す土師器の坏(2~6, 1)と甕(7)、及び甎(8)が見られた他、15個のこもろみ石(9~23)も見られた。

一方覆土中からは打製石斧(26)やスクレイパー(27)、磨石(28)といった縄文時代の遺物や中期の弥生土器(24, 25)、6世紀後半から7世紀前半に至

耕作土

1: 黒色土: As-Aを若干含む砂質を呈する。

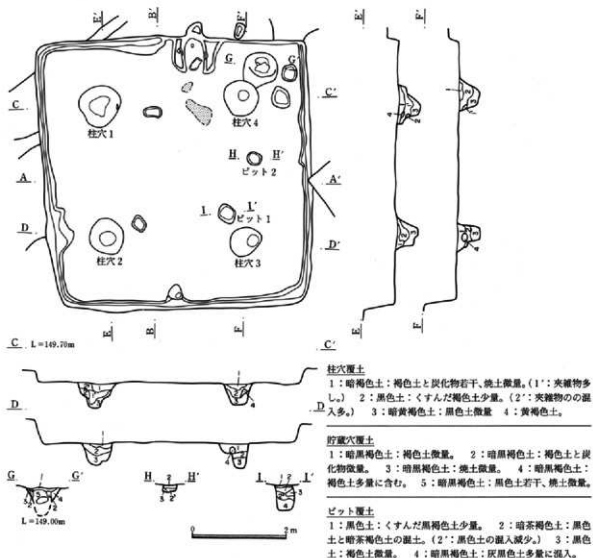
住居覆土

2: 暗黒褐色土: ロームブロック・黒色土ブロックを多量に混入。 3: 暗黒褐色土: 2層に比しロームブロック小型化し、黒色土の混入見られなくなる。 4: 暗黒褐色土: ロームブロックと黒色土ブロック少量混入。 5: 暗黒褐色土: 暗黒褐色土と黒色土の混入。(5': 黒色土の混入少ない) 6: 暗黒褐色土: ローム若干混入。(6': ロームの混入減少。)

住居掘り方覆土

7: 褐色土。 8: 暗褐色土: 暗褐色土含みの黄褐色土中に灰白色粘土がブロック状に少量混入。(8': 灰白色粘土の混入多い。 8'': 主体たる黄褐色土に粘性見られず、灰白色粘土の混入も減少する。) 9: 暗茶褐色土: 暗茶褐色土と黒色土の混入。 10: 暗茶褐色土: 暗茶褐色土中に黒色土微量に混入。

第3章 発見された遺構と遺物



第266図 H-104号住居

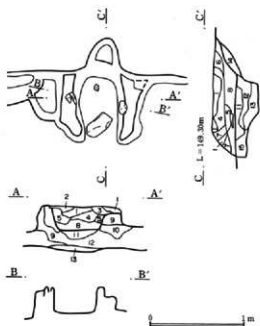
る時期の特徴を持つ何れも土師器の坏 (29, 30, 31, 32) や甕 (33)、鉢 (34)、小型壺 (35) 壺 (36) の他、土師器壺 (37) があり、軟質陶器火鉢 (38) の混入も見られた。また、こも編み石 (39~51) や台石 (52)、火打ち石 (53) なども見られた。

こうした出土遺物の状況から本住居は西暦600年を前後する時期の所産と考えられ、覆土中の遺物から住居廃絶後比較的早い段階から埋没が始まったことが窺われる。

また、後述する掘り方面の状況から、大幅な拡張が行われたものと想定される。

規模 長軸: 575cm 短軸: 568cm 深さ: 68cm

カマド 幅: 106cm 奥行き: 112cm 左袖 幅: 30cm 長さ: 73cm 高さ: 24cm 右袖 幅: 26cm 長さ: 76cm 高さ: 17cm 燃烧部 径: 41×67cm 深さ: 0cm 煙道 幅: 38cm 長さ: 26cm 柱穴1 径: 90×87cm 深さ: 69cm 柱穴2 径: 77×74cm 深さ: 84cm 柱穴3 径: 71×58cm 深さ: 63cm 柱穴4 径: 78×73cm 深さ: 79cm 貯蔵穴 径: 73×72cm 深さ: 63cm ピット1 径: 37×34cm 深さ: 58cm ピット2 径: 30×25cm 深さ: 19cm 床下土坑 径: 130以上×100cm 深さ: 10cm ピット3 径: 26×24cm 深さ: 45cm ピット4



カマド覆土

1：黄褐色土：焼土ブロック少量、暗褐色土微量に含む。2：暗黒褐色土：暗黒褐色土と黄褐色土の混土。3：灰茶褐色土：灰を多量に含む粘性もつ、褐色土微量に混入。4：暗黒褐色土：灰を少量含む。5：灰茶褐色土：3層に比し更に多量の灰を含み、強い粘性を持つ。6：暗黒褐色土：焼土ブロックと灰白色土を微量に含む。7：黒褐色土：黒色土と暗黄褐色土の混土。8：暗黒褐色土：焼土ブロックを若干量含む。

焼物燃料

9：暗黒褐色土：焼土ブロックを少量含む。10：暗褐色土：As-YPを少量含む、黒色土も微量に含まれる。

カマド掘り方覆土

11：暗黒褐色土：微小の褐色土粒、焼土粒を若干量含む。12：暗黒褐色土：焼土ブロックを多量に含む。13：暗黒褐色土：焼土含まず。14：暗赤褐色土：焼土少量含む。15：暗黒褐色土：褐色土ブロック少量含まれる。

径：36×33cm 深さ：57cm ビット5

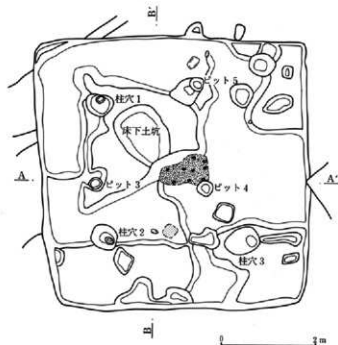
径：28×27cm 深さ：75cm

構造 本住居は方形のプランを呈する。

掘り方を有するが、掘り方の東壁北半から北壁東半にかけては幅70～120cm、深さ11cm以下の周溝状の掘り込みが見られる。この掘り込みは北壁側では東から2/3、東壁側では北から2/3の位置からそれぞれ南方、西方へ延びており、住居中央付近ではプランが不明瞭になるがほぼ一周するように見受けられる。また、中西部では径26×23cmの焼土の分布があり、

住居中央付近には106×64cmの範囲で粘土の分布があって、その北東部には床下粘土坑らしい土坑が見られた。他にも幾つかの掘り込みが見られたが、床面はこうした掘り方を黄褐色土や黒色土等種々の土壌で埋め戻して造りだしている。

カマドは東カマドで、東壁中央付近に設けられている。カマドは浅い掘り方を有し、焼土を含む暗黒褐色土等で埋め戻して燃焼面を造り出している。燃焼部の両側には隙を立てて袖石とし、これを中心に前後方向に焼土を含む暗黒褐色土や暗褐色土等を盛り上げて袖を造り上げている。燃焼部の手前寄りには板状の点紋網雲母石墨片岩が見られ、天井石が掛



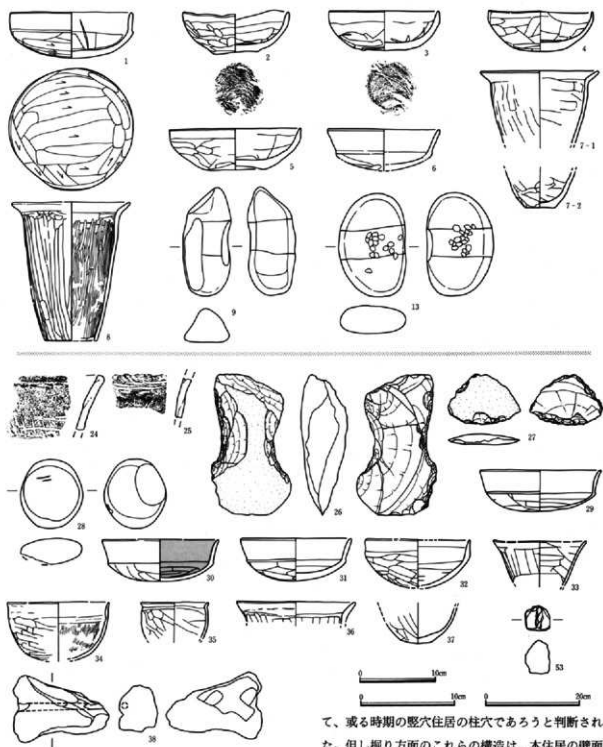
第267図 H-104号住居カマド及び掘り方

けられていたものと想定される。また、燃焼部の奥寄り中央には支脚と思われる裸が設置されていた。

床面に於いては、主柱穴4基と貯蔵穴1基を確認した。このうち柱穴は何れも大きなもので、しっかりした掘り方を有している。また貯蔵穴はカマド右側に掘削されているが、その形態は柱穴様で掘り込みも深かった。その他、幾つかのピットが見られたが、本住居に伴わないと判断され、またはその関係を特定することはできなかった。

さて、掘り方面に於いては上述のように住居の北東側2/3程の部分を囲むように周溝状の掘り込みが確認されているが、その内側に確認されたピット3

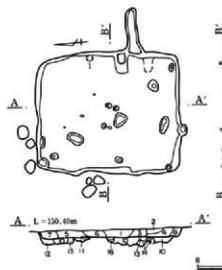
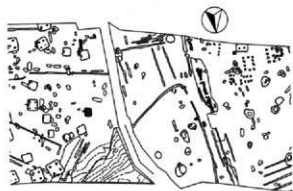
第3章 発見された遺構と遺物



第268図 H-104号住居出土遺物

と4、ビット4と5を結ぶ線は周溝状の掘り込みのラインの内側に沿うような位置にあり、2つの線は直角に近い角度を成している。その長さも236cm、220cmと近似するため、上述の周溝状の掘り込みと併せ

て、或る時期の竪穴住居の柱穴であろうと判断された。但し掘り方面のこれらの構造は、本住居の壁面や床面に見られた柱穴のラインに近似することから、本住居の拡張前のものであろうと思われる。尚、北東部に対応するビットは検出されなかった。しかし、想定位置からはずれるが、柱穴1の底面にも径17×15cmを測る小ビット様の掘り込みが見られることから、柱穴1にこれを求めることもできよう。



住居覆土（以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする）

1：黒褐色土：漸移層上層土にロームや多く含む。 2：黒褐色土：1層に似るが混入物多い。 3：暗茶褐色土：上層中心の漸移層土にロームと黒色土や多く混入。 4：茶褐色土：下層中心の漸移層土にロームや多く混入。 5：茶褐色土：漸移層上層土にローム・As・YPをやや多く混入。 6：茶褐色土：5層に似るが色調明るい。 7：黒褐色土：黒色土と漸移層上層土の混土主体。 8：暗茶褐色土：7層に近いが黒色土少ない。 9：暗茶褐色土：7層に似るがローム多く混入。

住居掘り方覆土

10：暗茶褐色土：黒色土に近い漸移層上層土主体。 11：黒褐色土：ベースは10層に近い。 12：暗褐色土：10層の主体土と漸移層下層土の混土。 13：茶褐色土：漸移層下層土主体。 14：明茶褐色土：やや色調暗いローム主体。 15：黄褐色土：ローム主体。 16：黒褐色土：黒色土主体。 17：淡茶褐色土：漸移層下層土主体。 18：明褐色土：ローム主体。 19：明黄褐色土：ローム。 20：淡茶褐色土：漸移層下層土主体。

カマド覆土（以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする）

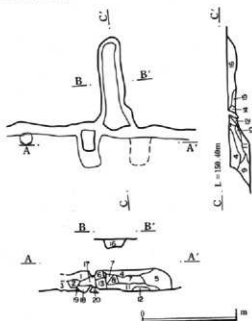
1：茶褐色土：漸移層上層土主体。 2：黒褐色土：黒褐色土と漸移層上層土・灰褐色シルトの混土。 3：黒褐色土：黒色土と漸移層上層土の混土主体。 4：茶褐色土：1層に似る。 5：淡茶褐色土：下層中心の漸移層土主体。 6：明褐色土：ロームに近いもの中心の漸移層下層土主体。 7：暗茶褐色土：漸移層上層土と弱い焼土化見る漸移層下層土の混土主体。 8：灰褐色土：青灰色又は灰褐色シルトに7層土混入。一部強く焼土化。 9：暗茶褐色土：黒色土に近い漸移層上層土主体。 10：灰茶褐色土：青灰色又は灰褐色シルト。 11：明茶褐色土：下層中心の漸移層土と暗灰色シルト・焼土・ローム・As・YP・カーボンの混土。 12：暗黄褐色土：ロームに近いもの中心の漸移層土。 13：淡茶褐色土：青灰色又は灰褐色シルト主体。 14：黒褐色土：焼土化見る黒色土主体。 15：暗茶褐色土：漸移層土主体。 16：黒褐色土：黒色土に近い漸移層上層土主体。土坑か。

袖構風柱

17：明灰下層土：漸移層下層土と灰色シルトの混土主体。 18：明褐色土：漸移層下層土主体。

カマド掘り方覆土

19：暗褐色土：漸移層上層土主体。 20：暗茶褐色土：漸移層土主体。



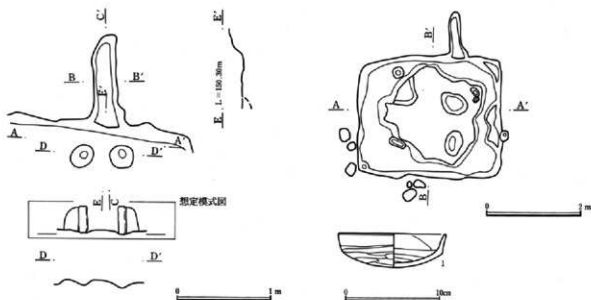
第269図 H-105号住居及びカマド

H-105号住居（古墳時代後期～平安時代、第269～270図、図版103・118）

概要 本住居はC区東半部の中程に位置する小型の
竪穴住居跡である。

本住居付近は小ピットが多く入り、本住居も壁面
の一部が壊され、床面にも10基余りのピットが見ら

第3章 発見された遺構と遺物



第270図 H-105号住居掘り方及び出土遺物

れたが、これらのピットについては本住居に伴わないものと思われる。

本住居の出土遺物は少なく、本住居に伴うと判断される遺物は一点も認められなかった。一方、覆土中からは古墳時代後期の土師器甕片を中心とした遺物の出土があったが、この中には7世紀前半期の特徴を有する土師器坏(1)も見られた。

このような遺物の状況から、本住居の時期を特定することはできなかった。また覆土中の遺物は古墳時代後期のものを中心とするが、これらの時期の特定までには至らず、カマドの遺存から僅かに古墳時代後期から平安時代にかけての広い時間の中で捉えられるだけであった。尚、覆土中の遺物の状況から奈良・平安時代頃まではその痕跡を留めていたことが推察された。

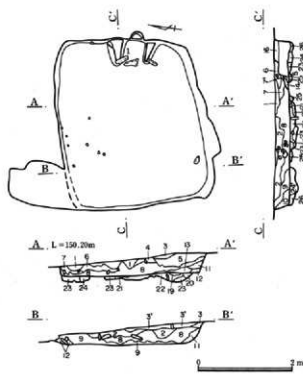
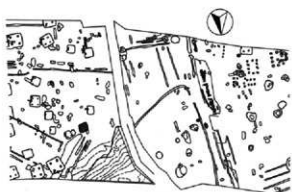
規模 長軸：308cm 短軸：266cm 深さ：24cm
 カマド 幅：推定80cm 奥行き：136cm 左袖幅：23cm 長さ：40cm 高さ：14cm 右袖幅：19cm 長さ：推定35cm 燃烧部 径：推定34×32cm 深さ：0cm 煙道 幅：25cm 長さ：98cm
 カマド掘り方左側ピット 径：52×44cm 深さ：7cm カマド掘り方右側ピット 径：50×50cm 深さ：7cm

構造 本住居は概ね方形のプランを呈する。

本住居は掘り方を有する。掘り方には東南コーナーと南壁中央付近には23cm以下のテラス状の掘り残しを有するが、幅11～72cm、深さ9cm以下の周溝状の掘り込みが一周するが、そのプランは不整形で、中央の掘り残し部のプランは凡そ菱形を呈している。この他にも幾つかの土坑・ピット様の掘り込みが見られた。床面はこうした構造を持つ掘り方をローム及びローム漸移層土で埋め戻して造り出している。

カマドは東カマドで、東壁のやや南寄りに設置されているが、破壊が進み、右袖は確認されなかった。カマドは浅い掘り方を有するが、掘り方面には左右1基づつの浅い掘り込みが見られ、位置的に袖石の抜き取り痕ではないかと想定した。この掘り方をローム漸移層土で埋め戻して燃烧面を造っている。燃烧部は東壁の手前に設けられ、その左側にローム漸移層下層土と灰色のシルトで袖を造り上げている。煙道は燃烧面から13cmの高さで東壁を抜いて、ほぼ水平方向に長く掘削され、端部で上方に掘削しているようである。

尚、床面に於いても、掘り方面に於いても柱穴・貯蔵穴等の構造は認められなかった。



住居覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

1: 暗褐色土: 漸移層土主体。 2: 茶褐色土: 上層土中心の漸移層土主体。 3: 明茶褐色土: 下層土中心の漸移層土主体。(3': 漸移層土と黒色土やや多く混入。) 4: 淡茶褐色土: 漸移層土主体。 5: 黒褐色土: 漸移層土にローム等多く混入する。 6: 暗褐色土: 上層土中心の漸移層土にローム・黒色土多く混入。 7: 暗褐色土: 漸移層土主体。(7': 黒褐色土: 黒色土多く含む。) 8: 黒褐色土: 黒色土と漸移層土の混土。ローム多く含む。 9: 淡茶褐色土: 下層土中心の漸移層土にローム多く混入。 10: 暗茶褐色土: 漸移層土主体。均質な土。 11: 淡茶褐色土: 下層土中心の漸移層土主体。 12: 暗褐色土: 6層に似るがロームブロックを含まない。 13: 暗褐色土: 7層に似るが黒色土角ど含まない。

カマド覆土

14: 暗褐色土: 黒色土に近い漸移層土主体。 15: 暗褐色土: 14層に似るが黒色土混入。 16: 淡茶褐色土: 11層に似るがロームブロック混入する。

住居掘り方覆土

17: 淡茶褐色土: 漸移層下層土ブロック主体。 18: 黒褐色土: 黒色土と上層土中心の漸移層土の混土主体。 21: 暗茶褐色土: 黒色土に近い漸移層土主体。 22: 茶褐色土: ロームと漸移層土の混土主体。 23: 黄褐色土: ローム主体。 24: 淡茶褐色土: 下層土中心の漸移層土主体。(24': ベースの粒径小さい。) 25: 淡茶褐色土: 漸移層土主体。 26: 明茶褐色土: 漸移層土主体。

第271図 H-106号住居

H-106号住居 (古墳時代後期~平安時代, 第271~272図, 図版103・118~119)

概要 本住居はC区東半の1号谷の南縁部に位置する中小規模の竪穴住居跡である。

本住居付近は1号谷に向かう緩傾斜部分に在り、本住居も北に向かって削平される傾向にあり、住居北壁の西端部には36号土坑が入って、本住居を切っている。また掘削の失敗から、掘り方面はベルト部分を除き掘りすぎてしまっている。

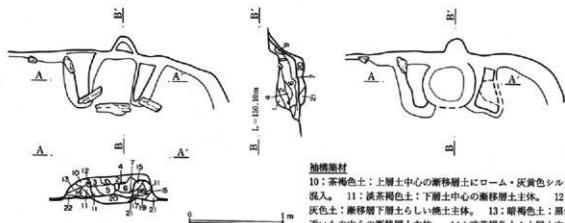
本住居からの出土遺物は少なく、土器類は僅かに18片を数えたに過ぎない。この中で本住居に伴う遺物はカマド材に転用された台石(1)のみで、覆土中

からは古墳時代後期のものを中心に、7世紀後半期の特徴を示す須恵器環(2)も見られた。

出土遺物から本住居の時期特定はできず、僅かにカマドを伴うことから古墳時代後期から平安時代というおおまかな範囲で捉えられるに過ぎない。

規模 長軸: 364cm 短軸: 334cm 深さ: 46cm
カマド 幅: 109cm 奥行き: 75cm 左袖 幅: 36cm 長さ: 59cm 高さ: 18cm 右袖 幅: 32cm 長さ: 46cm 高さ: 17cm 燃焼部 径: 43×47cm 煙道 幅: 27cm 長さ: 15cm

第3章 発見された遺構と遺物



カマド覆土

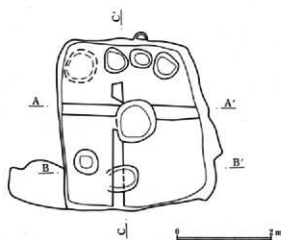
1: 暗黄褐色土: 上層土中心の漸移層土にローム・As-YP等多く含む。 2: 暗茶褐色土: 上層土中心の漸移層土に黒色土・焼土・ローム・As-YP多く含む、弱い焼土化見る。 3: 灰褐色土: 灰色シルトに漸移層土等入る。 4: 茶褐色土: 弱い焼土化見る漸移層土主体。 5: 淡赤褐色土: 焼土化認め漸移層土主体。 6: 淡赤灰褐色土: 灰色シルトと焼土化見る漸移層土の混土主体。 7: 暗褐色土: 弱い焼土化見る上層土中心の漸移層土主体。 9: 黄褐色土: ローム主体。

袖構築材

10: 茶褐色土: 上層土中心の漸移層土にローム・灰黄色シルト多く混入。 11: 淡茶褐色土: 下層土中心の漸移層土主体。 12: 暗赤灰色土: 漸移層下層土らしい焼土主体。 13: 暗褐色土: 黒色土に近いもの中心の漸移層土主体。 14: 暗茶褐色土: 上層土中心の漸移層土主体。 15: 赤味掛かった茶褐色土: 焼土化見る下層土中心の漸移層土。 16: 明褐色土: 11層土中心にロームや多く混入。 17: 淡茶褐色土: ロームに近い漸移層下層土主体。 18: 淡茶褐色土: 17層土をベースにする。

カマド掘り方覆土

19: 黒褐色土: 黒色土と黒色土に近い漸移層土主体。 20: 赤味掛かった茶褐色土: 弱く焼土化した上層土中心に漸移層土主体。 21: 淡茶褐色土: ロームに近い漸移層下層土にロームと黒色土多量に入る。 22: 暗褐色土: 黒色土に近い漸移層上層土主体。



カマド掘り方 径: 56×46

cm 深さ: 7cm

床下土坑 径: 45×42cm

深さ: 14cm

構造 本住居は凡そ隅丸の台形のプランを呈する。

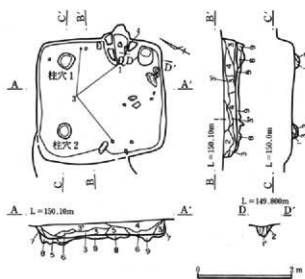
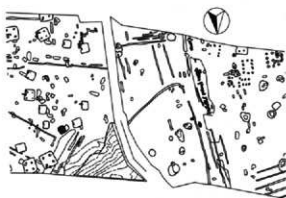
掘り方を有するが、前述のように掘り方を掘り過ぎたため、全体の状況は明らかにできなかったが、住居中央に青灰色シルトを僅かに含む土壌を底面に貼る土坑が見られた他、幾つかの土坑状の掘り込みが見られた。床面はこうした構造を持つ掘り方をローム漸移層土等で埋め戻して造っている。



カマドは東カマドで東壁中央やや南寄りに造られている。本カマドは円形プランの掘り方を東壁際に掘削しているが、この掘り方を黒色土とローム漸移上層土で埋め戻して焼面を造り出している。焼面は東壁の内側に設定され、掘り方両側の手前に相当する位置に細長い礫を立てて袖石とし、袖石より奥側に焼土や

青灰色シルト等を含むローム漸移層土を用いて袖を造り上げている。尚、袖石の上には板状の礫を載せて天井石としていたものと判断される。また、煙道は焼面から高さ20cm程の位置から斜上方向に東壁を掘り込んで造っている。

尚、本住居では床面に於いても、掘り方面に於いても柱穴・貯蔵穴等を確認することはできなかった。



第273図 H-109号住居

H-109号住居(古墳時代後期, 第273~274図, 図版104・119・122)

概要 本住居はC区東半部の中央やや北寄り、1号谷の南縁に面する緩傾斜部分に位置する小型の竪穴住居跡である。

本住居の西壁中央から北西コーナー付近にかけてはH-110号住居と切り合い関係にあり、本住居がこれを切っている。

本住居からの出土遺物は土師片で僅かに三十数片と少なかったのであるが、この中で本住居に伴うと判断された遺物には、6世紀後半期の特徴を持つ土師器坏(2)と土師器甕(4)、同じく7世紀前半期の特徴を示す土師器坏(1)、そして7世紀代のもので判断された土師器甕(3)が挙げられる。

一方、覆土中からは古墳時代後期から奈良・平安

住居覆土

1: 黒色土: 褐色土・焼土・白色土粒を比較的多量に含む。2: 暗黒褐色土: ロームが大小のブロックで多量に混入。焼土粒も少量含む。3: 暗黒褐色土: 褐色土粒微量に含む。(3': 3層に比し褐色土粒の混入若干多い。) 4: 暗黒褐色土: As-YP含みのロームブロック大きく比較的多量に混入。5: 暗黒褐色土: 褐色土と黒色土含みの暗褐色土の混入。6: 暗褐色土: 赤っぽい褐色土中に淡い褐色土微量混入。7: 暗褐色土: 夾雑物殆ど認められず。

住居掘り方覆土

8: 暗黒褐色土: 褐色土微量に混入する。9: 暗褐色土: 褐色土と黒色土の混入。

柱穴覆土

1: 黒色土: 若干の褐色土混入。2: 暗褐色土: ロームブロックと黒色土少量混入。3: 暗茶褐色土: 暗茶褐色土と褐色土の混入。

貯蔵穴覆土

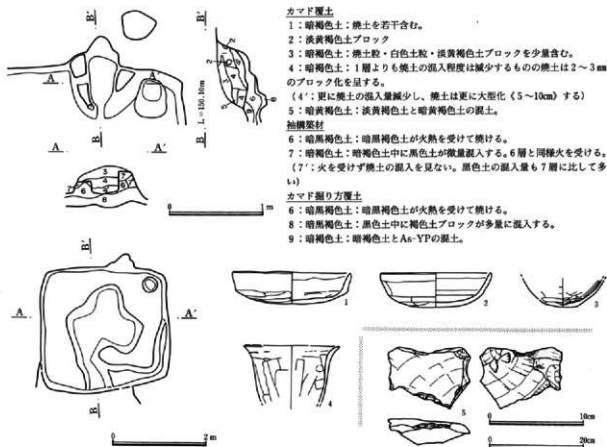
1: 暗黒褐色土: 褐色土粒・炭化物少量混入する。(1': 炭化物の混入減少する。) 2: 暗黒褐色土: 褐色土ブロック少量混入する。

時代にかけての各種の土師器を中心とした遺物の出土が見られたが、この中には不定形石器(5)など縄文時代の遺物、そして、こも編み石(6)なども見られた。

以上のような出土遺物の状況から、本住居は西暦600年を前後する時期の所産と判断される。また、覆土中の遺物の状況から、本住居は少なくとも奈良時代頃までは窪地等としてその痕跡を留めていたものと思慮されるのである。

規模 長軸: 275cm 短軸: 257cm 深さ: 33cm
カマド 幅: 81cm 奥行き: 87cm 左袖 幅: 20cm 長さ: 70cm 高さ: 26cm 右袖 幅: 29cm 長さ: 55cm 高さ: 28cm 燃焼部 径: 31×49cm

第3章 発見された遺構と遺物



カマド覆土

- 1: 暗褐色土: 焼土を若干含む。
- 2: 淡黄褐色土ブロック
- 3: 暗褐色土: 焼土粒・白色土粒・淡黄褐色土ブロックを少量含む。
- 4: 暗褐色土: 1層よりも焼土の混入程度は減少するものの焼土は2~3mmのブロック化を呈する。
- 5: 暗黄褐色土: 淡黄褐色土と暗黄褐色土の混土。

袖構築材

- 6: 暗黒褐色土: 暗黒褐色土が火熱を受けて焼ける。
- 7: 暗褐色土: 暗褐色土中に黒色土が微量混入する。6層と同様火を受ける。(7': 火を受けず焼土の混入を見ない。黒色土の混入量も7層に比して多い)

カマド掘り方覆土

- 6: 暗黒褐色土: 暗黒褐色土が火熱を受けて焼ける。
- 8: 暗黒褐色土: 黒色土中に褐色土ブロックが多量に混入する。
- 9: 暗褐色土: 暗褐色土とAs-YFの混土。

第274図 H-109号遺構及び出土遺物

深さ: 2cm 煙道 幅: 24cm 長さ: 22cm

柱穴1 径: 33×30cm 深さ: 12cm 柱穴2

径: 32×26cm 深さ: 15cm

貯蔵穴 径: 40×32cm 深さ: 31cm

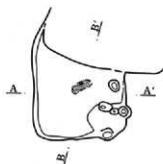
構造 本住居は概ね隅丸方形プランを呈する。

掘り方を有し、掘り方には幅36~88cm、深さ11cm以下を測る不整形なプランの溝状の掘り込みが西壁中央部を除いて掘削されていて、住居中央部は多少菱形に近い不整形なプランで掘り残されている。更に前者の掘り込み部分に於いては、幅44cm以下、平均的には22cm程の幅で、深さ8cm以内を測る周溝状の掘り込みが、南壁の中程から西壁の中程までの間にかけての壁際に掘削されている。このような構造を持つ掘り方を褐色土・暗黒褐色土・黒色土で埋め戻して床面を造っている。

カマドは東カマドで東壁のやや南寄りに造られて

いる。カマドは掘り方を有し、これを暗褐色土・暗黒褐色土等の土壌で埋め戻して焼成面を造り出している。焼成部は縦長で東壁面の内側に設定されているが、袖はこの両側に設けられ、掘り方の埋土と同様に暗褐色土や暗黒褐色土で造り上げている。尚、袖は逆ハの字状のプランで配置され、手前側はすぼんで焚き口部は狭くなっている。

床面に於いては柱穴と判断されたピット2基と貯蔵穴1基を確認している。このうち柱穴は何れも北側のものが北東及び北西コーナー寄りに掘削され、径はあるが掘り込みは浅いものである。尚、両側の柱穴は床面に於いても貯蔵穴に於いても確認することはできなかった。また、貯蔵穴はカマド右側に接してこれをやや切るような状況で、南東コーナーの狭い範囲に掘削されている。形態は隅丸方形のピット様ではあるが、底部は東に寄っている。

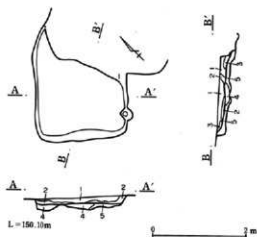


住居覆土

- 1: 黒褐色土: 粘性の乏しい黒色土中にロームブロック (径5cm程度) が少量混入する。
- 2: 暗黒褐色土: 暗黒褐色土とロームブロック (径2~3cm) の混土。
- 3: 暗黄褐色土。

住居掘り方覆土

- 4: 黒褐色土: 黒色土中に淡黒褐色土が少量混入する。
- 5: 暗黄褐色土: 黒色土が少量混入する。



第275図 H-110号住居

H-110号住居 (古墳時代後期か, 第275図, 図版104)

概要 本住居はC区東半部の中央部のやや北寄りの1号谷の南縁に面する緩傾斜部分に所在位置する、小型の竪穴住居跡である。

本住居はその東部がH-109号住居と切り合い関係にあるが、本住居はH-109号住居に切られている。また、小ピットにより南壁の一部が切られていた他、後述するように南西隅部に於いては土坑1基を切っているようである。

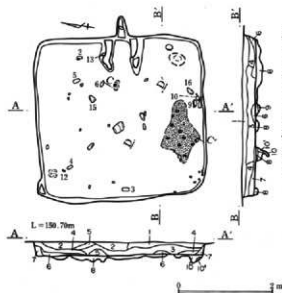
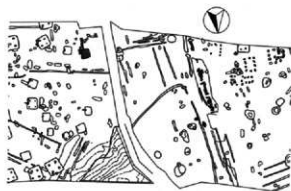
さて、本住居からの出土遺物は全く確認されず、その使用・廃棄等の時期を特定することはできなかったのであるが、H-109号住居に切られていることから西暦600年を前後する時期以前の所産として把握される。また、掘り方面に於いて粘土の分布を確認している。遺構としては確認されていないが、この粘土がカマドの存在を示唆するものと思われることから、上記の切り合い関係と併せて本住居は古墳時代後期の所産として把握されるのではないかとと思われるのである。

規模 長軸: 260cm以上 短軸: 198cm 深さ: 22cm
構造 上述のように本住居はその東部をH-109号住居に切られているため、その全体的状況を明らかにすることはできなかったのであるが、本住居のプランは長方形若しくは隅丸の長方形を呈するものと思慮される。

本住居は掘り方を有し、掘り方面の南西隅部には小ピットを伴う径90×82cm、深さ5cm以内の隅丸三角形プランの浅い掘り込みが見られた。しかし、その範囲は南壁ラインを越えることから、これは本住居に伴うものではなく別遺構であると判断される。この他に掘り方面には特段の掘り込み等は確認されなかったが、残存部の中央に46×20cmの範囲で粘土の分布が見られた。床面はこうした掘り方を黒色土や暗黄褐色土で埋め戻して造っている。

尚、カマド遺構は認められず、柱穴・貯蔵穴等も床面に於いても掘り方面に於いても確認することはできなかった。

第3章 発見された遺構と遺物

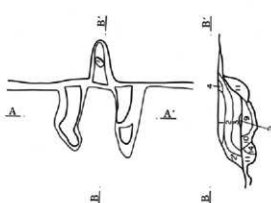


住居覆土

1: 暗黒褐色土: ローム粒・小ブロックを多量に含む。 2: 暗黒褐色土: ローム小ブロックを微量含む。 3: 暗黒褐色土: 大小のロームブロックと黒色土大ブロック多量に綿状に含む。 4: 暗黒褐色土: ロームと黒色土小ブロック多量に含む。黒色土多く全体の色調暗い。 5: 暗黒褐色土: 黒色土大ブロックとローム小ブロックを少量含む。 6: 暗茶褐色土: 茶褐色土と暗褐色土の混土。 7: 暗黒褐色土: 黒色土を主体に褐色土が少量混入。

住居掘り方覆土

8: 暗黒褐色土: 暗茶褐色土と褐色土含みの黒色土の混土。 9: 灰褐色粘質土。 10: 黒色土: ロームブロックを微量に含む。(10': 褐色土の混入が多く、全体に色調明るい。)



カマド覆土

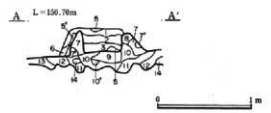
1: 黒色土: As-YP少量含む。若干粘性持つ。 2: 暗黒褐色土: As-YPとローム粒少量含む。煙道先端向い、焼土・灰の混入徐々に入る。(2': 焼土見ない。) 3: 暗黒褐色土: ローム小ブロック微量に含む。焼土小ブロック若干量見らる。 4: 黒褐色土: 焼土ブロック多量に含む。 5: 灰褐色土: 灰主体の粘質土。(5': 灰茶褐色土: 茶褐色土に灰が微量混入する。) 6: 黒褐色土: ローム少量混入。締まりに欠ける。

捨焼灰材

7: 淡灰褐色粘質土: 粘性強く、焼土微量に含む。(7': 暗黒褐色土を少量含む。) 8: 暗褐色土: 焼土粒と褐色土ブロックを微量に含む。

カマド掘り方・住居掘り方覆土

9: 暗赤褐色土: 暗褐色土に多量の焼土含む。 10: 暗黒褐色土: 黒色土と褐色土に焼土少量混入。(10': 焼土少なく赤味減少。) 11: 黒色土: 褐色土少量、焼土若干混入。 12: 黒色土: 黒色土と褐色土の混土。 13: 暗褐色土: 黒色土に褐色土が多量に混入。 14: 淡暗褐色土。



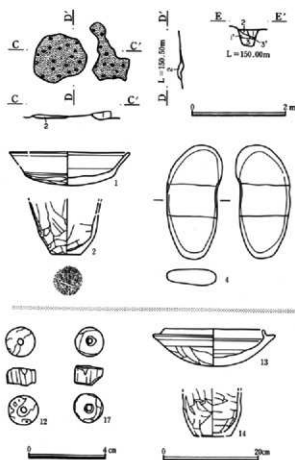
第276図 H-111号住居及びカマド

H-111号住居 (古墳時代後期, 第276~277図, 図版104・119・122~123)

概要 本住居はC区東半部南寄りに位置する。

付近には耕作溝等が入るが、本住居はあまり影響を受けておらず、他の住居との切り合い関係も見られなかった。

本住居の出土遺物のうち、本住居に伴うと判断された遺物には、6世紀後半期の特徴を示す土師器環(1)、西暦600年前後する時期のものかと思われる土師器甕(2)の他、こも編み石(3~11)が見られ



第277図 H-111号住居出土遺物

た。また床面に於いては、南壁中部の手前側には136×90cmの範囲で粘土の分布が見られ、カマド手前にも粘土の小さな分布が見られた。

一方、覆土中からは7世紀前半期の特徴を持つ須恵器坏(13)、7世紀代のものかと思われる土師器甕(14)の他、石製模造品の白玉(12・17)やこも羅み石(15・16)なども見られた。

以上のように時期特定に資する遺物は少なかったため断定はできないが、本住居は凡そ6世紀後半期の所産として把握したい。また、若干ではあるが覆土中から奈良・平安期の遺物の出土を見ることから、当該期頃までは本住居の痕跡が残されていたことが窺われるのである。

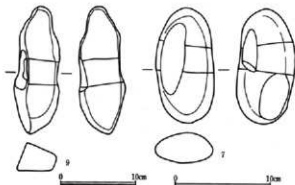
規模 長軸：356cm 短軸：347cm 深さ：33cm
カマド 幅：95cm 奥行き：126cm 左袖 幅：28cm 長さ：68cm 高さ：16cm 右袖 幅：29cm 長さ：76cm 高さ：22cm 燃焼部 径：40×66cm

貯蔵穴覆土

1：暗褐色土：As-YPと黒色土を少量含む。(1'：淡褐色土小ブロック微量を含む。) 2：暗褐色土：1・1'約うより黄色味が強くなるが、成分は1層に同じ。 3：暗黄褐色土：夾雜物見られず。(3'：暗黄褐色土中に黒色土微量に含まれる。)

床下粘土坑覆土

1：暗褐色土：黒色土と褐色土の混土。上面には灰白色粘土が極く薄く堆積する様子を看取できるもの1層中への層入は認められない。 2：暗褐色土：暗褐色土と灰白色粘土の混土。



深さ：0cm 煙道 幅：23cm 長さ：46cm

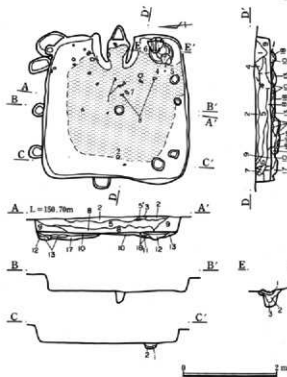
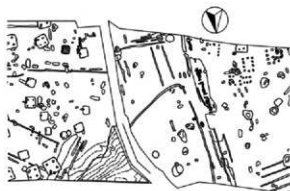
構造 本住居は凡そ方形のプランを呈する。

掘り方を有する。記録化に失敗し詳細を述べることはできないが、掘り方は概ね幅広の浅い掘り込みが周溝状に廻り、内画部分が方形様に掘り残されていた。また、この掘り残し部分の南よりに灰白色粘土を覆土に持つ径の大きく浅い床下粘土坑が造られている。床はこうした構造を持つ掘り方を黒色土を主体とする土壤で埋め戻して造っている。

カマドは東カマドで東壁の中程に造られている。カマドは浅い掘り方を有し、これを黒色土と褐色土で埋め戻して燃焼面を造り出している。燃焼部は東壁の手前側に設定され、両脇に袖を造っている。袖は概ね左右平行に造られるが、左袖では若干手前側が内に折れる。袖は淡灰褐色粘質土と暗褐色土で造り上げられている。煙道は燃焼部の奥壁である東壁面の、燃焼面より15cm上の部分より奥へ、水平に近い傾斜で掘削されているのが確認されたが、煙道の奥側は削平されたため不明であった。

尚、床面に於いては、柱穴を確認することはできなかった。貯蔵穴についてはカマド右側、南壁との中間付近に掘削されているが、その規模・形状については記録化に失敗したため明らかではない。

第3章 発見された遺構と遺物



カマド覆土

1: 褐色土主体。 2: 褐色土主体。 3: 褐色土主体。くすんだロームやや多く含む。 4: 暗黄褐色土主体。ローム・黒褐色土やや多く含む。(4': ローム少ない)。 5: 黄褐色土主体。焼土大量に含む。 6: 暗赤褐色土主体。ローム・焼土やや多く含む。

袖罎築材

7: 褐色土主体。くすんだロームやや多く含む。 8: 褐色土主体。 10: 暗赤褐色土主体。

カマド張り方覆土

9: 暗黄褐色土主体。焼土やや多く含む。 10: 暗赤褐色土主体。 11: 暗灰黄褐色土主体。赤褐色土やや多く含む。 12: 褐色土: くすんだロームと褐色土の混土に黒褐色土やや多く含む。 13: 褐色土/14: 暗黄褐色土/15: 黄褐色土: くすんだローム主体。

住居覆土

1: 褐色土主体。 2: 褐色土主体。 3: 暗褐色土主体。炭化物大量に含む。 4: 褐色土主体/5: 暗黄褐色土主体: ローム大量に含む。 6: 褐色土主体。ローム多く含む。 7: 暗褐色土主体。黒味強い。 8: 褐色土主体。黒褐色土。 9: 暗黄褐色土主体。

貼り床

10: 褐色土主体。 11: 灰黄褐色土主体。膚色ロームやや多く含む。かなりしっかりした貼り床で、固く締まる。

住居掘り方覆土

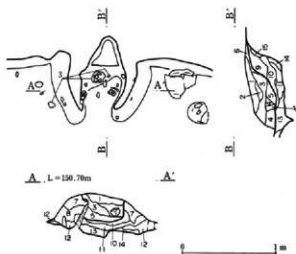
12: 黄褐色土: 膚色ローム主体。 13: 暗黄褐色土主体。 14・15: 灰黄褐色土主体。 16: 明灰褐色土: 灰褐色土主体。 17: 暗黄褐色土主体。膚色ローム大量。灰黄褐色土やや多し。 18: 黄褐色ローム。

柱穴覆土

1: 暗黄褐色土主体。ロームやや多く含む。 2: 黄褐色土: くすんだローム主体。

貯蔵穴覆土

1: 褐色土主体。 2: 暗黄褐色土: ロームと暗黒褐色土やや多く混入。 3: 暗黄褐色土主体。

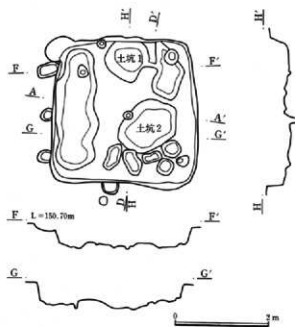


第278図 H-112号住居及びカマド

H-112号住居 (古墳時代後期, 第278~279図, 図版105・119)

概要 本住居はC区東半部南寄りに位置する、小型の竪穴住居である。

本住居付近にはピット等の掘乱が多く入っているが、本住居も床面にこうしたピットが幾つか見られ



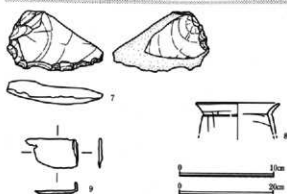
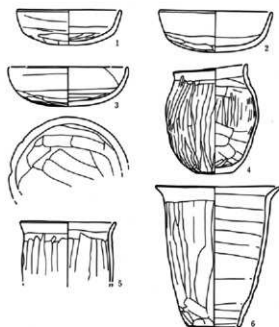
るなど、若干の影響を受けている。

本住居の出土遺物のうち本住居に伴うと判断された遺物には6世紀後半期の特徴を示す土師器環(2, 3)、土師器甕(4, 5)、土師器瓶(6)があり、7世紀前半期の特徴を持つ土師器環(1)も見られた。

一方覆土中からは古墳時代後期の土師器壺片を中心に、不定形石器(7)や7世紀後半期のものと思われる土師器甕(8)、そして奈良時代のものと思われる鎌(9)の出土も見ている。

以上のような出土遺物の状況から、本住居は6世紀後半期の所産と判断され、覆土中の遺物の状況から少なくとも奈良時代の頃までは本住居はその痕跡を留めていたものと思慮される。

規模 長軸: 320cm 短軸: 311cm 深さ: 35cm
カマド 幅: 108cm 奥行き: 90cm 左袖 幅: 35cm 長さ: 74cm 高さ: 33cm 右袖 幅: 30cm 長さ: 65cm 高さ: 33cm 燃焼部 径: 38×47cm 深さ: 2cm 煙道 幅: 36cm 長さ: 31cm
貯蔵穴 径: 51×45cm 深さ: 42cm
床下土坑1 径: 93×88cm 深さ: 10cm
床下土坑2 径: 136×101cm 深さ: 15cm
構造 本住居はやや南に開く隅丸方形様のプランを呈する。



第279図 H-112号住居掘り方及び出土遺物

本住居は掘り方を有する。掘り方には北壁前に径257×94cm、深さ13cm、東南角付近に径127×71cm、深さ7cmを測る土坑様の掘り込み、また、西壁前の同程度の深さを測るピット群などが掘削され、全体にテラス部分を伴う周溝状の形態を意図した掘り込みが施されていたものと思われる。また、カマド前と住居中央やや南西寄りには床下土坑1・2が確認されている。床はこうした褐色土やローム等の土壌で埋め戻した上に、ローム等を締め固めた貼り床を呈して造り出している。

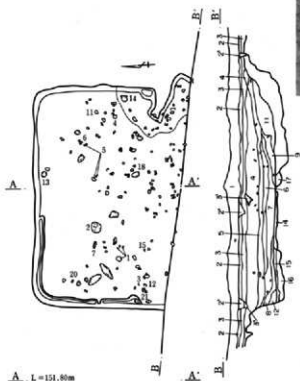
カマドは東カマドで東壁中央付近に設けられている。カマドは掘り方を有し、これを焼土を含んだロー

第3章 発見された遺構と遺物

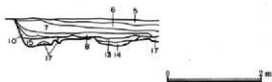
ム等で埋め戻して燃焼面を造っている。燃焼部は東壁より幾分内側あたりに設定され、その両側にはやや丸みを持った逆ハの字状のプランで、褐色土等を用いて袖が造られている。煙道は燃焼面より30cm弱上の部分から緩傾斜を以て東側に造られ、東壁面を越えて掘削されている。

床面に於いて柱穴は確認できなかったが、貯蔵穴

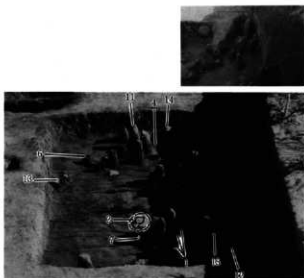
をカマド右側南東コーナー付近に確認した。貯蔵穴は床面より十数cm掘り下げられた後、やや東寄りの位置で更に径31×29cm、深さ76cmを測る柱穴様の掘り込みが施される二段構造を成す。尚、上位の掘り込み部分は蓋の設置を示唆するものと思われる。また、床面の南壁中央やや東寄りの地点から住居内面にかけての広い範囲で硬化面が認められた。



A L=151.80m



第280図 H-116号住居



耕作土

1：灰褐色土：As-A多量に含む。現耕作土。 2・2'：灰褐色土主体。 3・3'：暗褐色土主体。

住居覆土

4：暗褐色土：軽石等含む。 5：褐色土主体。 6：褐色土主体。 7：褐色土主体。くすんだロームやや多く含む。 8：暗茶褐色土主体。 9：暗茶褐色土：くすんだ黄色土主体。10：褐色土主体。くすんだロームやや多く混入。 11：灰黄褐色土主体。灰白色粘土粒多く混入。 12：暗黒褐色土主体。

床下粘土坑覆土

13：暗褐色土：暗褐色土に明褐色土の入る層土主体。ロームやや多く混入。 14：明灰黄褐色粘土主体。

貼り床

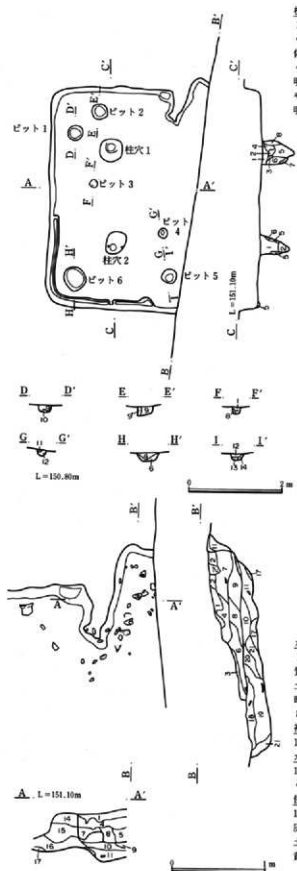
15：暗黄褐色土主体。ロームやや多く混入。

住居掘り方覆土

16：暗黄褐色土主体。ローム多く混入。 17：黄褐色土：ローム・ローム漸移層土主体。

H-116号住居(奈良時代、第280～273図、図版105・119～120・123)

概要 本住居はC区西半部の調査区南端に位置する、C区に於いては中規模のものに属すると推定される竪穴住居である。住居の南部は路線外に在って調査することができなかった。



第281図 H-116号住居及びカマド

柱穴・ピット覆土

1：暗褐色土主体。 2：黒褐色土主体。 3：暗褐色土：黒色土やや多く含む。 4：暗褐色土主体。 5：褐色土主体。 6：暗灰黄褐色土主体。 7：暗灰黄褐色土主体。 8：暗黄褐色土主体。 9：褐色土主体。くすんだロームやや多く含む。(9'：若干色調暗い。) 10：黄褐色土：やや明るいローム。 11：褐色土主体。紫掛かる。 12：暗黄褐色土：ロームやや多く混入。 13：暗黄褐色土：ロームやや多く混入。 14：黄褐色土：明るいローム。

住居の床面にいくつかのピットを確認したが、その多くは本住居との関連を特定できず、住居付近に見る若干のピット群の一部である可能性を持つ。

本住居からの出土遺物は比較的多かったが、このうち本住居に伴うと判断された遺物には8世紀前半期の特徴を示す須恵器環(5)や土師器甕(6)、8世紀後半期の特徴を持つ土師器環(1)や須恵器蓋(2、4)の他、こも編み石(7)も見られた。

また、掘り方のカマド前付近からもやや集中した遺物の出土を見たが、8世紀前半期の特徴を示す須恵器環(8)や土師器胴張甕(9)が含まれていた。

一方覆土中からは奈良～平安時代の土師器甕片を中心に、6世紀前半期の特徴を持つ須恵器の環(3、11)、同じく8世紀前半期の須恵器高台付碗(13)・土師器の胴張甕(14)や8世紀後半期の須恵器の蓋(10)や環(12)、9世紀後半期の須恵器碗(15)や9世紀代の土師器台付甕(16)、そして磨石(17、18)や紡錘車(19、20)なども見られた。

こうした出土遺物の状況から、本住居は凡そ8世紀中葉の所産であったと判断され、覆土中の遺物の

カマド覆土

1：暗褐色土：灰白色粘質土等僅かに混入。 2・2'：暗褐色土：灰白色粘質土やや多く、炭土僅かに含む。 3：暗褐色土主体。 4：暗灰黄褐色土：灰白色粘質土主体。 5：暗灰黄褐色土：灰白色粘質土主体。 6：暗灰黄褐色土主体。 7：暗灰黄褐色土主体。灰白色粘質土僅かに含む。 8：暗灰褐色土主体。 9：暗黄褐色土：焼土やや多く散在。

袖構塞材

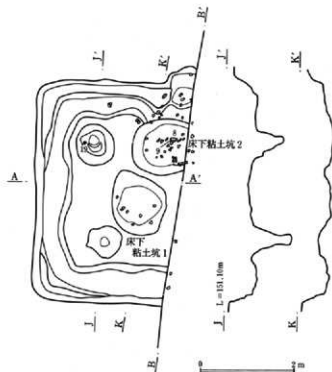
14：明灰褐色土主体。 15：灰褐色土主体。明褐色粘土やや多く含む。

カマド掘り方覆土

10：暗灰黄褐色土主体。 11：暗灰黄褐色土主体。10層に比し色調若干暗く、僅かに締り硬い。

住居掘り方(床下粘土坑)覆土

16：灰褐色土：灰褐色・黄褐色粘質土主体。 17：浅黄褐色土主体。 18：灰黄褐色土：焼土粒等やや多く入。 19：灰黄褐色土：灰黄褐色粘質土・灰色粘土・青灰色粘土と焼土の混土。 20：灰黄褐色粘質土主体。浅黄色土やや多く含む。 21：灰褐色粘質土主体。青灰色粘土やや多く混入。



第282図 H-116号住居掘り方

状況から住居廃絶後早い段階で埋没が始まり、平安時代頃まではその痕跡を留めていたものと思われる。

また、本住居のカマドは掘り方面の2基の床下粘土坑とカマドの掘り方が2回掘削されていることから、造り替えのあったことが確認される。

規模 東西：473cm 南北：336cm以上 深さ：43cm
カマド 残存幅：84cm 奥行き：103cm 左袖幅：34cm 長さ：74cm 高さ：17cm 燃烧部径：100×56cm以上 掘り方(下位)径：50×46cm以上 深さ：14cm

柱穴1 径：50×48cm 深さ：72cm 柱穴2 径：51×37cm 深さ：94cm ビット1 径：31×30cm 深さ：15cm ビット2 径：32×32cm 深さ：18cm ビット3 径：17×16cm 深さ：14cm ビット4 径：20×19cm 深さ：14cm ビット5 径：32×31cm 深さ：16cm ビット6 径：51×45cm 深さ：18cm

周溝 幅：6～16cm 深さ：8cm

床下粘土坑1 径：138×118cm 深さ：27cm 床下粘土坑2 径：120×120cm以上 深さ：15cm

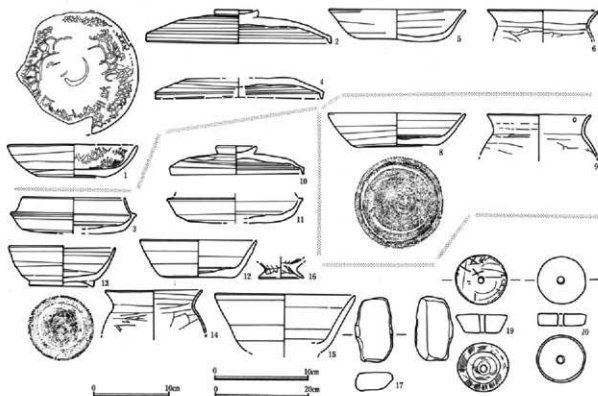
構造 上述のように本住居はその南部が路線外に在るためその全容は明らかでないが、プランは概ね方形を呈するものと判断される。

本住居は掘り方を有し、掘り方には東壁から北壁東部及び北西コーナー付近に幅26cm以下のチラスを伴う、幅40～70cm、深さ22cm程の周溝状の掘り込みが廻っている。更に住居の中段とカマド前に大型の床下粘土坑が掘削されている。このうち前者(1号床下粘土坑)の壁・底面上には明灰黄褐色粘土、後者(2号床下粘土坑)の壁・底面上には暗青灰色粘土をややく含む灰黄褐色粘質土が残されていた。床面はこうした構造を持つ掘り方

をロームやローム漸移層などで埋め戻し、暗黄褐色土主体の土で貼り床を施して造っている。

カマドは東カマドで、その北半部を調査することができた。カマドは掘り方を有するが、掘り方には十数cmのレベル差を持つ新旧2つのものがあってカマドに造り替えのあったことが窺われる。尚、下位の掘り方は横長の楕円形プランを呈して東壁の内側に掘削される。燃烧面はカマド掘り方を暗灰黄色土等で埋め戻して造り、燃烧部は東壁のラインを跨いで設けられている。袖は粘土を含む灰黄褐色土等で造られ、煙道は燃烧面より50cm程上がったレベルから緩傾斜を以て東方向に掘削されるようである。

床面に於いては上述のように幾つかのビットを確認したが、この中で柱穴2基を特定した。柱穴は何れも径の大きい深いもので、断面観察及び底面形態から径20cm程の柱材が設置されていたものと想定される。また、北壁西半から西壁にかけては周溝が掘削されていたが、貯蔵穴は確認されなかった。



第283図 H-116号住居出土遺物

4号掘立柱建物（時期不詳，第284図，図版42）

概要 本建物はC区東半部の北寄りに所在する。

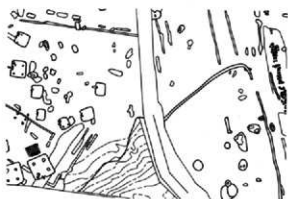
付近には耕作に伴う規則的配列のピット群が存在しているが、ピットの形態的相違や軸方向の相違から識別した。尚、柱穴1と柱穴2の間にあるピットは本建物に伴わないものと判断される。

本建物からの出土遺物は無く、覆土の記録化にも失敗したので時期等は特定できなかった。

規模 柱穴1 径：47×39cm 深さ：43cm 柱穴2 径：38×31cm 深さ：40cm 柱穴3 径：46×42cm 深さ：42cm 柱穴4 径：41×32cm 深さ：36cm

構造 本建物の軸は東北東-西西南西を向く。

柱穴の並びは1×1間であり、柱間は190~220cmで、平均2m程を測る。



第284図 4号掘立柱建物

第3章 発見された遺構と遺物

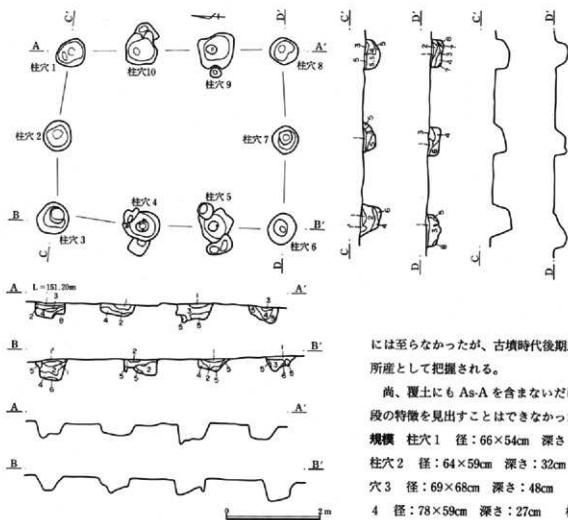


5号掘立柱建物(古墳時代後期以降, 第285図, 図版106)

概要 本建物はC区南西部からD区南東部にかけて11棟の掘立柱建物の集まる地域の一画に当たる。

本建物の柱穴4・5・9・10には小ピットが絡んでその一部を壊している。

本建物の柱穴4からは土師器9片と須恵器1片、柱穴5からは土師器1片を出土している。時期特定



柱穴覆土-1 (サクサクした土層)

1: 黒褐色土主体。(1': 褐色土の混入多い。) 2: 黒色土主体。ローム等極く僅かに含む。 3: 黒色土主体。ローム等僅かに含む。

柱穴覆土-2 (締まりの良いベタついた土層)

4: 黒褐色土: 黒色土主体。褐色土・ロームやや多く混入。 5: 暗黄褐色土主体。黒褐色土やや多く混入。(5.5: 明るいロームの割合高い)

堆山層

6: 暗黄褐色土ローム。 7: As-YP。 8: 黄褐色土ローム。

には至らなかったが、古墳時代後期以降の所産として把握される。

尚、覆土にもAs-Aを含まないだけで特段の特徴を見出すことはできなかった。

規模 柱穴1 径: 66×54cm 深さ: 32cm

柱穴2 径: 64×59cm 深さ: 32cm 柱

穴3 径: 69×68cm 深さ: 48cm 柱

穴4 径: 78×59cm 深さ: 27cm 柱

穴5 径: 73×70cm 深さ: 35cm 柱

穴6 径: 69×58cm 深さ: 30cm 柱

穴7 径: 54×54cm 深さ: 27cm 柱

穴8 径: 60×56cm 深さ: 30cm 柱

穴9 径: 89×80cm 深さ: 30cm 柱

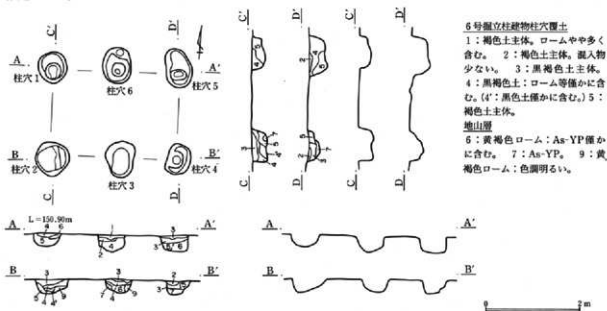
穴10 径: 69×66cm以上 深さ: 36cm

構造 本建物の主軸は北-南を向く。

第285図 5号掘立柱建物

柱の並びは2×3間であり、スパンは南北方向では139~181cm(平均154.8cm)、東西方向では169~196(平均181.75cm)を測り、短軸側のものの方が長軸側のもの比べて若干長い。

個々の柱の掘り込みは浅かったが、径は大きく、平底気味であった。しかし柱への加重が底面の支持力を越えるよう柱材の設置位置は下がる傾向にあり、断面観察所見と併せて柱材の径は10~20cm程と推定される。



第286図 6号掘立柱建物

6号掘立柱建物(古墳時代後期以降, 第286図, 図版106)

概要 本建物はC区西南のD区にかけての掘立柱建物の集中域の一角に位置する。5号掘立柱建物の北に近接し、17号掘立柱建物の西に近接し、主軸方向は5号掘立柱建物の主軸方向と垂直の関係にある。

本建物からは須恵器残片を出土しているので古墳時代後期以降の所産ということではできるが、覆土の所見も併せて時期特定には至らなかった。

規模 柱穴1 径: 62×59cm 深さ: 26cm 柱穴2 径: 72×70cm 深さ: 29cm 柱穴3 径: 76×63cm 深さ: 27cm 柱穴4 径: 66×50cm 深さ: 31cm 柱穴5 径: 84×57cm 深さ: 41cm 柱穴6 径: 74×62cm 深さ: 36cm

構造 本建物の主軸方向は東-西方向を向く。

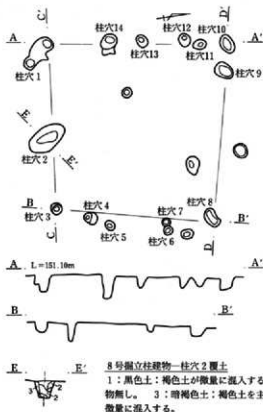
本建物は1×2間の配置を示し、柱穴列は直線の配置を呈する。そのスパンは東西方向で118~155cm(平均134.25cm)を測り、南北方向では180~190cmを測って、5号掘立柱建物と同様に長軸方向の隣接する柱のスパンに対し短軸方向のスパンの方が長い。また、北側の柱列は全体で267cm、南側の柱列は280cm程を測る。

全体的に各柱穴の径は大きい、掘り込みは浅い。また底面は平底気味であるが、柱穴1・4・5・6では5号掘立柱建物同様に柱の設置位置が低くなっている。



西側の柱穴9と柱穴1を結ぶライン上に乗る柱穴9～13・1のピットの配列から建物の存在が想定され調査及び記録化が行われた。

本建物からの遺物の出土は無く、また覆土の記録化も一部を除いて出来なかったため時期の特定には至らなかった。しかし、柱穴2の覆土がAs-A・As-Bを含まないこと、当該地区の小ピットでAs-Bの混入の有無が識別できていたことから古代以前の所産であるものと思慮される。



8号掘立柱建物一柱穴2覆土

1：黒色土；褐色土が微量に混入する。 2：黒色土；地と夾雑物無し。 3：暗褐色土；褐色土を主体とし、この中に黒色土が微量に混入する。

第287図 8号掘立柱建物

8号掘立柱建物（古代以前か、第287図、図版106）

概要 本建物はC区西西部の南東寄り、C区南西部からD区南東部にかけての掘立柱建物の集中域の東端に位置する。

本建物は4つの隅部に位置する柱穴1・3・7・9と、それを結んだライン付近に位置する小型のものを中心とするピットからなるピットの集合体であり、明瞭な掘立柱建物遺構の形態を呈していないが、

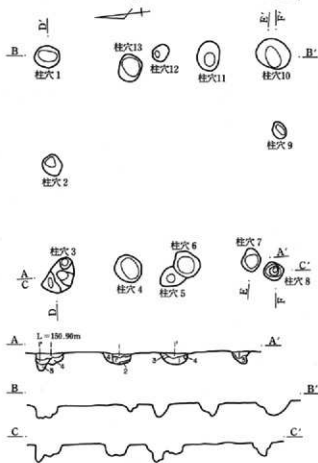
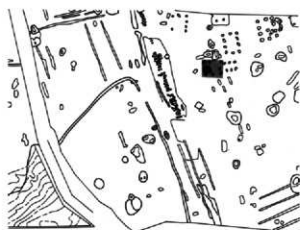
規模 柱穴1 径：37×29cm以上
深さ：10cm 柱穴2 径：84×48cm 深さ：39cm 柱穴3 径：24×23cm 深さ：36cm 柱穴4 径：32×25cm 深さ：34cm 柱穴5 径：21×17cm 深さ：24cm 柱穴6 径：20×18cm 深さ：37cm 柱穴7 径：18×18cm 深さ：13cm 柱穴8 径：22×20cm以上 深さ：18cm 柱穴9 径：43×31cm 深さ：29cm 柱穴10 径：41×27cm 深さ：30cm 柱穴11 径：29×21cm 深さ：18cm 柱穴12 径：27×24cm 深さ：24cm 柱穴13 径：27×22cm 深さ：22cm 柱穴14 径：38×27cm 深さ：46cm

構造 本建物の主軸は北北東—南南西を向く。

上述のように明瞭な掘立柱建物の形態ではないが、柱穴1・3・

7と柱穴9または柱穴10を結ぶ、東辺336cm、南辺352cm、西辺380内至325cm、北辺373cmを測る台形のライン周辺にあるピットで構成されるが、全てのピットが本建物を構成するか否かは特定できなかった。

尚、位置的には東辺では柱穴3-4-7-8または柱穴3-5-6-8、西辺では全ての柱穴の連続か、柱穴10-12-14-1または柱穴11-13-1の組み合わせで構成されていたことが想定される。



第288図 17号掘立柱建物

17号掘立柱建物 (古代以前か、第288図、図版106)

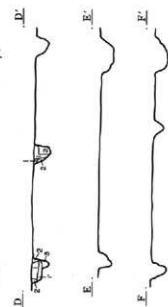
概要 本建物はC区西南部、C区西南部からD区南東部にかけての掘立柱建物の集中域の一面に在る。

6号掘立柱建物に近接し、付近には幾つかのピットも見られたが、本建物もその影響を受けている。さて本建物からの遺物の出土はなく、時期の特定

には至らなかった。しかし、少なくともC区西半では小ピットの覆土の確認ではAs-Bの混入の有無が識別できており、柱穴の覆土中にAs-A・As-Bを含まないことから古代以前の所産であるものと認識される。

尚、本建物の柱穴は柱間の検討から2×3間の規格による柱穴1・2・3・4・6・7・10・11・13のグループと、柱穴1・2・3・5・8・9・10・12のグループに分けることができた。この二つのグループについて

は、柱穴3が3カ所の底面を持つことから掘り直しのあったことが想定され、一方柱穴4・5・6、柱穴7・8、柱穴11・12・13がそれぞれ近接し乍らそれぞれの中で上述の二つグループに分けられること、そして両グループで想定される建物の規模や主軸方向がほぼ一致するこ



17号掘立柱建物柱穴覆土

1: 黒色土: 褐色土中ブロック少量含む。締まりに欠ける。(1': 褐色土の混入多い。) 2: 暗褐色土: 固く締まった褐色土中に黒色土少量混入。 3: 暗茶褐色土: 暗茶褐色土主体土中に褐色土ブロック若干量混入。 4: 暗黒褐色土: As-YPと褐色土少量含む。

となどから、建て替えのあったものと思慮される。
規模 柱穴1 径: 52×46cm 深さ: 30cm 柱穴2 径: 44×39cm 深さ: 37cm 柱穴3 径: 84×54cm 深さ: 53cm, 32cm, 46cm 柱穴4 径: 60×54cm 深さ: 47cm 柱穴5 径: 42×53cm以上 深さ: 37cm 柱穴6 径: 58×51cm 深さ: 28cm

第3章 発見された遺構と遺物

柱穴7 径：45×40cm 深さ：29cm 柱穴8
径：38×37cm 深さ：29cm 柱穴9 径：37×28
cm 深さ：20cm 柱穴10 径：73×60cm 深さ：
31cm 柱穴11 径：64×46cm 深さ：26cm 柱
穴12 径：40×33cm 深さ：26cm 柱穴13 径：
56×49cm 深さ：20cm

構造 本建物の軸は、僅かに東に触れる北向きのものである。

上述のように本建物の柱穴は柱間の検討から、柱穴1・2・3・4・6・7・10・11・13のグループと、柱穴1・2・3・5・8・9・10・12のグループに分けられたが、想定される建物（便宜上、前者を「建物1」、後者を「建物2」とする）は、建て替えによるものと考えられ、ほぼ同規模である。

建物1・2は何れも凡そ440cm四方の方形のプラン

9号溝（江戸時代、第289図、図版106）

概要 本溝はC区中央の中・北部に所在する溝遺構である。本溝はC区西部に於いてのみ確認され、学校道を隔てた東半部に於いては確認できなかった。

本溝の規模は小さかったが掘削距離は比較的長く、後述の1号谷の肩付近に、これを巻くような位置に掘削されている。開口部を挟んで南北に分かれるが、全体として約63m程を調査することができた。

本溝の出土遺物は僅かで時期の特定には至らなかった。しかし、埋土の観察から何回かの掘り直しのあったことが確認され、最も新しいものはAs-Aを含む江戸時代後期以降のものであるが、現代の地割りと符合しないことから近・現代まで下ることはないものと思われる。また、その当初の掘削時期についてはAs-Aを含まないので江戸時代中期以前のものと言うことはできるが、江戸時代後期以降まで引き続き使用されていたことを勘案すれば近世の範囲に収まるのではないかと思われる。

尚、本溝には留意の痕跡は認められず、その掘削位置から1号谷と台地部とを区画するために掘削されたものと判断されるが、用途としては所謂根切り溝といったものが想定される。

を呈しているが、建物1は2×3間の規格、建物2は2×2間の規格で建てられている。南北方向のスペンは建物1では138～184cm（平均155.33cm）を測り東側のものの方が20cm程長い、建物2では220～245cm（平均232.5cm）を測りやはり東側のものの方が15cm程長い。尚、東西方向のスペンは北列のものは225～240cm、南列のものは150～295cmを測り、その平均値227.5はほぼ建物2の南北方向のスペンの平均値に近いものであった。

柱穴の掘り込みは全体に浅いものであったが、その規模・形態はバラエティーに富み、特に規格性は認められなかった。また、建物1・2それぞれのグループに於いてもその規模・形態に統一性は認められなかったが、建物1の柱穴の方が建物2のものより若干大きい傾向が見受けられた。

規模 南側部分掘削距離：29.33m 北側部分掘削距離：33.73m 幅：34～73cm（平均55.79cm） 深さ：18～51cm（平均31.43cm） 開口部幅：3.4m

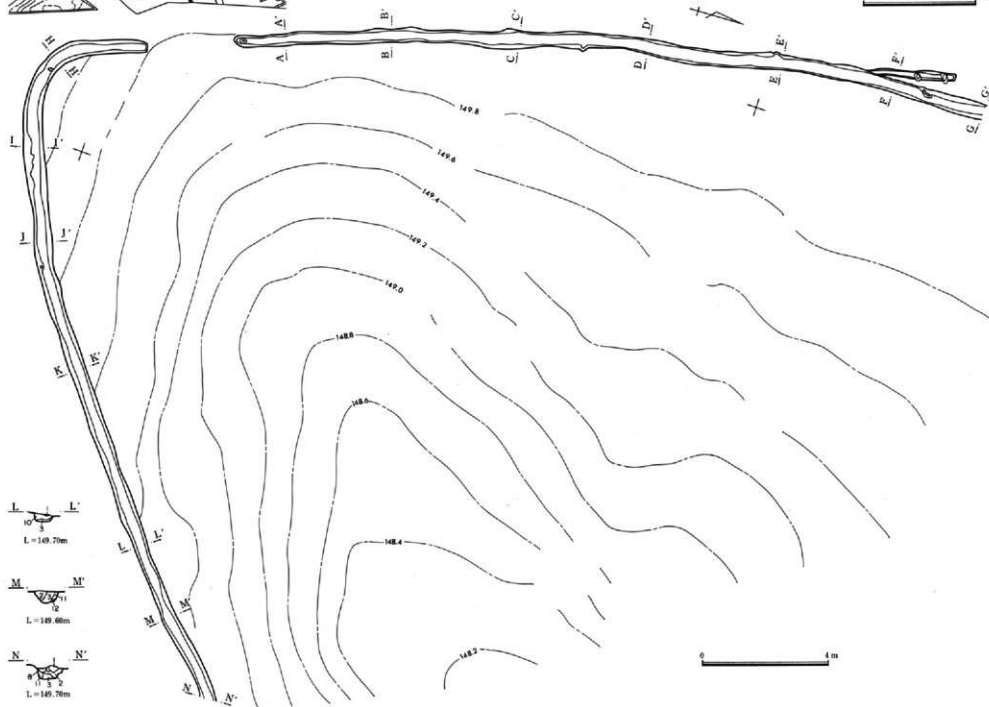
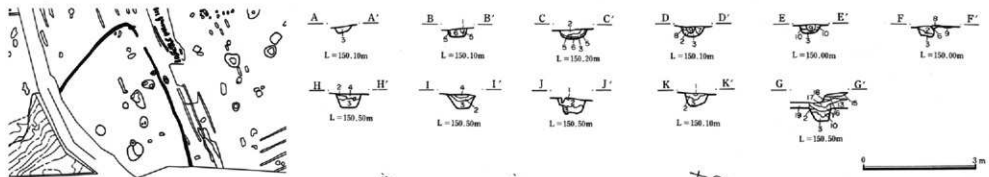
構造 本溝は1号谷の肩部を巻くような位置に掘削されるが、中程に開口部を持ち、開口部を挟んで南部のもの（以下「溝1」とする）と北部のもの（以下「溝2」とする）とに分けられる。

溝1のラインは北東方向を向き、その方向は1号谷の等高線の方位に近似する。溝1の東端は所謂学校道の下に入り、C区東半部に延びるかどくかは確認できなかった。また、西端は195°程折れて溝2の延長線上に乗り、開口部に接している。

一方、溝2のラインは南2/3では北北東方向を向くが、緩やかに走行を変えて北1/3では南北に走る。尚、このラインは1号谷の等高線の方位に比べやや西に開いている。また溝2の南端は開口部に接し、北端は路線外に出ていて不詳である。

開口部はC区西部の中央付近に在るが、その位置は1号谷の谷底ラインの延長線上に位置する。

溝は1号谷の傾斜面の最上部付近に掘削されるが、掘り方は箱型を呈し小振りである。



総括上

9: 灰褐色土: 埋跡層土に近くAs-Aや多く混入する。 15: 灰色掛かった黒褐色土: 黒色土と漸移層土(以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」)の混土。As-A混入。僅かに塊土含む。

2号溝層土

1: 暗褐色土: 漸移層上層土に黒色土入る混土主層。 2: 暗茶褐色土: 漸移層土に黒色土とAs-YPや多く混入。 3: 黒褐色土: 漸移層上層土と黒色土の混土に漸移層下層土とローム混入。 4: 茶褐色土: 2層に依るが黒色土を含まない。 5: 淡茶褐色土: 下層中心の漸移層土にAs-YP等混入。 6: 黄褐色土: ロームと漸移層土に多くのAs-YP混入。 7: 暗褐色土: 1層に近いと思われるベースにAs-YPや多く混入。 8: 茶褐色土: 漸移層上層土主層。 10: 暗茶褐色土: 2層に依る。 11: 茶褐色土: 漸移層土にロームやAs-YP等混入。 12: 明茶褐色土: ロームと漸移層上層土の混土。 13: 茶褐色土: 漸移層下層土にローム混入。 16: 明褐色土: ロームに近い漸移層土。As-YPと漸移層上層土混入。二次堆積層。 17: 暗褐色土: 漸移層上層土。 18: 茶褐色土: 漸移層土。二次堆積層。 19: 黄褐色土: ロームの二次堆積層。漸移層土とAs-YP混入。



13号溝（江戸時代中期以前、第290図、図版120）

概要 本溝はC区西半部の東を南北に走る、1号道等の道・溝遺構が集まる帯状のゾーンの一部に在り、その南端部に所在する溝遺構で全体で17m程を調査することができた。

本溝の過半の部分は表土として剥ぎ取った土層中に在るため、本溝は面的にはその底部付近を確認できたに過ぎなかった。

本溝からは須恵器片を中心に不定形石器(1)やこも羅み石(2)などの出土が見られたが、時期特定には至らなかった。尚、断面観察により本溝は江戸時代中期以前の耕作層の下位から掘り込みれていることから、当該時期以前の所産と判断される。

また、本溝は後述する1号道の東に沿って遺存している。

規模 長さ：16.75m以上 上幅：192cm 基底幅：108cm 深さ：36cm

構造 本溝の走行は概ね北北西を向いている。

上述のように本溝の遺存状況は良好ではなかったため、その全容は明らかではないが、断面観察と併せて本溝の掘り方形態は概ね箱型状を呈するものと判断される。しかし、壁面はやや開き気味で蕨研に近い形状を示している。床面は平底気味であるが、走行方向に沿って底面の中程に細い溝状の掘り込みが施されている。

**耕作土**

- 1：灰褐色土：現耕作土。 2：黒褐色砂質土：As-A層入。 3：黒色土主体。
4：暗褐色土：漸移層（以下「漸移層」）上層土。 5：黒色土：3層近似。 15：淡灰褐色土：14層土に5層土混入。

中間地積層

- 8：暗茶褐色土：漸移層上層土主体。
13：淡茶褐色土：漸移層下層土か。
14：淡灰褐色土：13層近似。よりグラウ化。

13号溝覆土

- 6：茶褐色土／9：暗褐色土：漸移層土。
10：明茶褐色土：均質な漸移層下層土。

ビッド覆土

- 11：暗茶褐色土／12：黒褐色土：黒色土に近い漸移層上層土主体。

1号道覆土

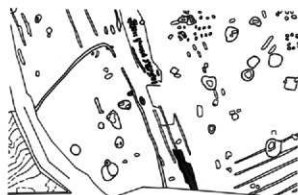
- 16：灰褐色土：やや砂質。酸化鉄多し。
17：灰褐色砂質土／18：灰褐色土：16層に似る。 19：灰褐色土：18層近似。
20：山砂主体で良く締まる。(20'：通りに酸化鉄) 21：淡茶褐色土：13層近似。

地山層

- 7：明褐色土：漸移層下層土主体。

第290図 13号溝及び出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物



埋没後の土

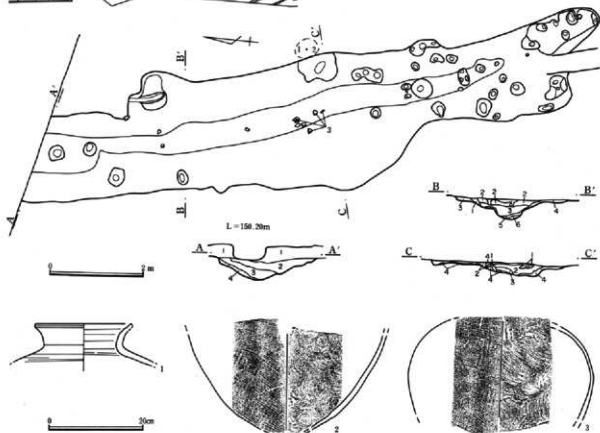
1：黒色土：部分的にくすんだ黒褐色土混入。比較的強い粘性持つ。

17号覆土

2：暗黒褐色土：部分的に黒斑が混入するもの他の夾雑物は認められない。 3：暗黒褐色土：2層よりも黒味を帯びる。暗黄褐色土混入が少量混入するが他の夾雑物は認められない。 5：暗褐色土：暗褐色土と褐色土の混入。 6：暗黒褐色土：チョコレート色を呈する。若干砂質を帯びる。 7：黒色土：砂質の黒色土主体。褐色土が少量混入する。

地山層

4：黄褐色土。



第291図 17号溝及び出土遺物

17号溝(古墳時代後期以降、第291図、図版106-120)

概要 本溝はC区中央の、1号道等の道・溝遺構の集まる帯状のゾーンの北端に位置する溝遺構である。

本溝の南端部は一部現代の耕作溝に横され、また浅くなって遺構確認を難しくしているが、全体としては比較的良好な遺存状況を示している。

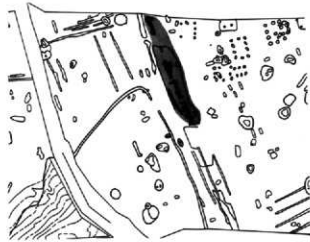
本溝の途中には須恵器甕(1,2,3)が押し潰されるように出土し、覆土中からは須恵器甕片を中心に土師器甕などの比較的多くの遺物の出土を見た。また、

埋土の状況から本溝は黒ボク土形成時には埋没していたことが確認された。従って、本溝は古墳時代後期以降、古代以前の所産として把握される。

規模 長さ：12.8m以上 上幅：292cm以下 基底幅：62cm 深さ：55cm

構造 本溝の走行は概ね北北西を向き、溝の掘削は直線的に行われている。

また、掘り方は薬研畑状を呈するが、壁面の開きは緩やかであった。



2号島



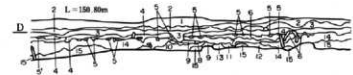
2号島サテライト

1: 淡茶褐色土: 1号道A-A'-2層に近いが、色調暗くグライ化も弱い。

地山層

2: 明褐色土: 下層土中心に上層土ブロック入るローム漸移層土。

1号道 A L=150.90m



[1号道A-A'・B-B'・C-C'・D-D'セクション注記]

1: 褐色土: ローム漸移層土(以下「漸移層土」)に少量のローム混入。極く弱いグライ化を見る。 2: 淡茶褐色土: 漸移層下層土。グライ化見られる。13号溝-13・14層に比定。 3: やや灰色掛かった淡茶褐色土: 2層土に近いがグライ化や進行。13号溝-16層に近い。 4: やや灰色掛かった茶褐色土: 中位の漸移層土に軽石・ローム混入。 5: 灰褐色土: グライ化進んだ漸移層土らしき層。硬質で良く締まり、3層との境では山砂の堆積する部分も見られる。 6: 暗褐色土: 漸移層上層土。弱くグライ化したローム(As-YP)若干混入。 7: 砂質土: 山砂と1層土の混入。 8: 褐色土: 1層土に似るがローム(As-YP)やや多く混入。

12号溝

E E' L=150.60m



[1号道D-D'セクション注記]

掘削土等(以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

1: 盛土。 2: 暗茶褐色土: 締まりに欠け、As-Aを多く含む。現耕作土。 3: 茶褐色土: ベースは4層に似るが、As-Aを多く含む。 4: 茶褐色土: 現耕作土と漸移層上層土ブロックの混入。若干のAs-Aを混入する。 5: 黒色土: As-Aを混入する。(5・5層土に4層土のブロック混入)

遺跡調査後の地層

6: 暗褐色土: 漸移層土と黒色土のブロック層。上位に向けて黒色土多くなる。 7: 茶褐色土: 漸移層土ブロック。 8: 暗茶褐色土: 7層に近いがやや色調暗い。道路面の可能性を持つ。

遺跡の掘削面

9: 暗褐色土: 弱くグライ化する黒色土と、漸移層土の小ブロック層。As-YP若干含む。 10: 茶褐色土: 漸移層下層土ブロック層。上面がやや硬く締まる。ロームの小ブロックをやや多く混入する。 11: 砂質土: 山砂と漸移層土の混入。 12: 茶褐色土: 漸移層上層土。ややグライ化し、上位で硬化し、締まる部分がある。 13: 明茶褐色土: 漸移層土。部分的に締まる部分がある。

自然堆積層

14: 暗茶褐色土: 漸移層上層土であり、上位に向けて黒色になる。6層と似た印象を受けるが、6層のようなブロック化は見られない。 15: 明茶褐色土: 漸移層下層土。

[12号溝セクション注記]

12号溝埋土

1: 茶褐色土: 現耕作土に近いがAs-Aを含まず、やや色調明るい土をベースに漸移層上層土ブロックを混入しAs-YPも含む。 2: 暗褐色土: 漸移層上層土ブロックにAs-YPと1層土を混入する。



12号溝（江戸時代中期以前、第292図、図版106）

概要 本溝はC区の西半部1号道の東に隣接し、後述する1号道の検出に伴って調査された溝遺構で、本来本遺跡の遺構確認面に於いては確認することのできなかった遺構である。

本溝からの出土遺物は認められず、時期の特定はできなかったのであるが、As-Aを含まないことから江戸時代中期以前の所産とでき、後述の1号道に近接してその形成面近くを掘り込んでいるので中世

以降の所産と判断されるものである。

尚、本溝の走行は1号道に比べやや西に傾いているため、1号道及び2号畠に関連したものではないと判断され、性格等を想定することもできなかった。

規模 長さ：10.1m 上幅：44cm 基底幅：27cm 深さ：18cm

構造 本溝の走行の方向は北北西を向く。

掘り込み形態はサク遺構に近いものであった。

1号道（室町時代か、第292～293図、図版107・115・121）

概要 本道は、C区の西半南部の東寄り、溝遺構の集まる帯状のゾーンの中に所在する道状遺構である。

本道は第3次調査区の表土掘削・精査の際、調査区の南側に後述するサクの短い2号畠を発見し、道遺構の存在を予測して断面観察の後に機械掘削の範囲を数十cm高めに取って硬化面を検出していったものである。尚、本遺構は現代の地籍に一致しない。

本遺構の南側は上述のように掘削し、北側は後世の耕作面より高くなるため確認できなかった。また全体に2号畠のサク遺構による影響を受けている。

本道からは土師器・須恵器片を中心とした遺物の出土を見たが、この中には8世紀代の須恵器坏(1、2)や7世紀代の土師器甕(3)・須恵器の蓋(4)や長煎煮(5)の他、須恵器甕片(6、7)や女瓦(8)も

見られたが、時期の特定には至らなかった。尚、本遺構は江戸時代中期以前と判断される2号畠に壊されており、後述する中世の所産と考えられる1号火葬土坑が本遺構の形成面とほぼ同様の面に掘削されていること、本遺構の南側の延長線上に山上内杉氏膝下の多比良氏の居城である新堀城が在ることなどから室町時代頃の所産ではないかと考えられる。

規模 長さ：34.8m以上 硬化面幅：101～241cm 深さ：12cm

構造 本道の方向は概ね北北西を向く。

遺構は上述のように硬化面によって確認された遺構であるため直線的ではあるが、不整形なプランを呈している。硬化面の幅は160内至190cm程のものを中心とし、中央が窪む浅い溝状の形態を示している。

2号畠（江戸時代中期以前、第292～293図、図版107・123）

概要 本遺構はC区の西半部の溝等の遺構の集まる帯状のゾーンに所在する畠遺構である。

本遺構は短いサクの集合体であり、細長い区画に掘削されたものと判断されたので、前述のように道遺構の存在を予想したのであるが、1号道と同様、北側は後世の耕作面より欠失していた。

本遺構からの出土遺物は土師器・須恵器片を中心に若干見られたが、この中にはこも編み石(1)や磨石(2)なども含まれていたが時期の特定には至らなかった。尚、サクの覆土がAs-Aを含まないことから、本畠は江戸時代中期以前の所産と判断されるが、

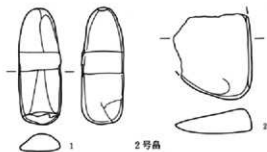
前述のように本畠が切る1号道が室町時代頃の所産と考えられ、その廃棄後に本畠が造られていることを勘案すると、江戸時代に入ってから造られたものではないかと想定されるのである。

本遺構は1号道若しくはその痕跡である地割りに沿って耕作されたもので、1号道と同様、現代の地割りによる規制は全く受けていない。

規模 全体規模：長さ42.4m 幅：192cm以下 サク 長さ：44～189cm(平均99.60cm) 幅：23～60cm(平均42.10cm) 深さ：2～25cm(平均9.31cm)

構造 本遺構は43条以上のサク遺構で構成され、畠

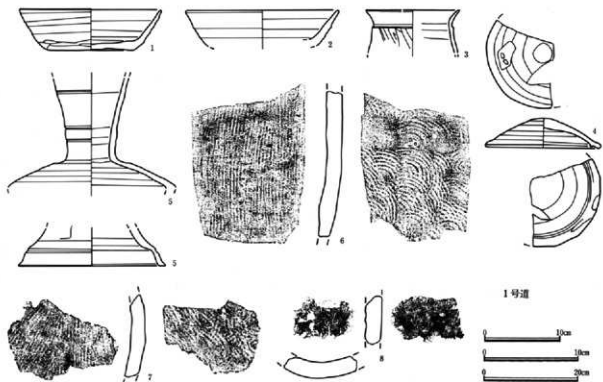
第3章 発見された遺構と遺物



の方向は概ね北北西を向く。

壺全体の形態は確認面とした1号道の硬化面に対するサクの掘り込みが浅かったため判然としないが、元来は1号道の形態に準拠する帯状のプランを呈していたものと思われる。サクとサクの間隔は概ね60~70cm程を測るものであったと思慮される。

また、100~140cm程度の長さに掘削され、掘り込みもさほど深くなかったものと思慮される。



第293図 1号道・2号壺出土遺物

36号土坑 (平安時代以降, 第294図, 図版107)

概要 本土坑はC区東半部北寄りに所在する。

南側にH-106号住居と接してこれを切っている。本土坑からの遺物の出土は見られず、時期特定もできなかったが、H-106号住居との切り合い関係と覆土中にAs-Aを含まないことから、平安時代以降で江戸時代中期以前の所産ということはある。

尚、本土坑の用途等は特定されなかった。

規模 長径:166cm以上 短径:96cm 深さ:15cm

構造 本土坑の主軸は北を向く。

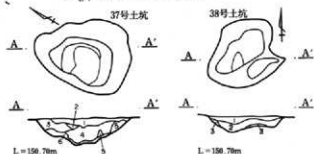
上述のように本土坑は切り合い関係から全体像は明らかにできなかったが、隅丸方形を基調としたプランを呈したものと推定され、底面は平底である。

37号土坑 (平安時代以降, 第294図, 図版108)

概要 本土坑はC区東半部南寄りに位置する。

本土坑からの遺物の出土は見られず、時期の特定

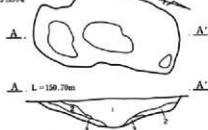
もできなかったが、覆土中にAs-Aを含まないことから江戸時代中期以前の所産ということはある。



37号土坑覆土

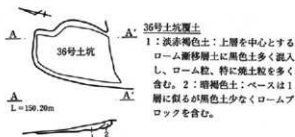
1: 暗茶褐色土: 茶褐色土・白色粒子多く、暗褐色土僅かに混入。
2: 茶褐色土: 白色粒子等含む。 3: 暗茶褐色土: 白色粒子・明褐色粒子をやや多く、白色粒子僅かに含む。 4: 暗褐色土: 茶褐色土・褐色土・ローム等僅かに含む。 5: 暗黄褐色土: ぐすんだローム大量に含む。 6: 黄褐色土: 僅かにぐすんだローム主体。

39号土坑



39号土坑覆土

1: 暗褐色土主体。茶褐色土散在。 2: 褐色土: 暗黄褐色土と暗褐色土混在。白色粒子・茶褐色土やや多く、ローム僅かに散在。
3: 暗黄褐色土主体。ローム粒多く、白色粒子やや多く混入。黄褐色土僅かに含む。

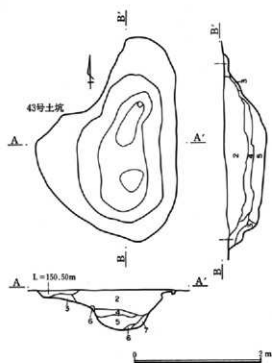


36号土坑覆土

1: 淡赤褐色土: 上層を中心とするローム崩移層土に黒色土多く混入し、ローム粒、特に焼土粒を多く含む。 2: 暗褐色土: ベースは1層に似るが黒色土少なくロームブロックを含む。

38号土坑覆土

1: 薄茶褐色土主体。やや締まり悪い。 2: 褐色土: 茶褐色土ブロックやや多く、ローム粒・小ブロック僅かに含む。 3: 暗黄褐色土: ローム粒主体。薄茶褐色土粒やや多く混入。



43号土坑覆土

1: 暗褐色土: 白色土粒・As-YPを多量に含む。 2: 暗褐色土: 白色土粒を上部に多量に含む。 3: 暗黄褐色土: 黒色土・As-YP・白色土粒を少量含む。 4: 暗黄褐色土: As-YPを少量含む。 5: 暗黄褐色土: 黒色土中ブロックとAs-YPを若干量含む。 6: 黄褐色土。 7: 暗黄褐色土。

尚、本土坑の掘削目的等は特定されなかった。

規模 長径: 154cm 短径: 118cm 深さ: 46cm

構造 本土坑の主軸は北を向き、隅丸の逆三角形様のプランを呈する。

底面はやや東に偏って丸底を呈し、壁面はやや開き気味である。

38号土坑 (江戸時代中期以前, 第294図, 図版108)

概要 本土坑はC区東半部南寄りに位置する。

39号土坑の西に近接し、本土坑の中央を東西走行の現代の耕作溝が通っている。

本土坑からの遺物の出土は見られず時期特定もできなかったが、覆土中にAs-Aを含まないことから

第3章 発見された遺構と遺物

江戸時代中期以前の所産という把握はできる。

尚、本土坑の用途等は特定されなかった。

規模 長径：123cm 短径：105cm 深さ：20cm

39号土坑（江戸時代中期以前、第294図、図版108）

概要 本土坑はC区東半部南寄り、38号土坑の東に位置する大型の土坑である。

本土坑の北半には現代の耕作溝が東西に横切る。

出土遺物は見られず、僅かに覆土にAs-Aを含まないことから江戸時代中期以前の所産として把握さ

43号土坑（江戸時代中期以前、第294図、図版108）

概要 本土坑はC区東半部の調査区南端近くに位置する大型の土坑である。

本土坑からの出土遺物は見られず、時期特定はできなかったが、覆土にAs-Aを含まないことから江戸時代中期以前の所産としては把握される。

また、本土坑の用途等を特定することはできな

44号土坑（江戸時代中期以前、第295図、図版108）

概要 本土坑はC区東半部中・南の土坑の多い一面に所在する、中規模の土坑である。

須惠器及び土師器の甕片各1点を出土したが時期特定には至らず、覆土にAs-Aを含まないことから僅かに江戸時代中期以前の所産とできたと過ぎない。

本土坑の用途については、その形態から芋穴等の

45号土坑（江戸時代中期以前、第295図、図版108）

概要 本土坑はC区東半部の中南部の土坑の多い一面に所在する、中規模の土坑である。

本土坑からの遺物の出土はなく、本土坑は覆土のAs-Aの有無から僅かに江戸時代中期以前の所産と確認できたに過ぎない。

46号土坑（江戸時代中期以前、第295図、図版108）

概要 本土坑はC区東半部の中南の土坑の多い一面に在る、大型のものに属する土坑である。

本土坑からの遺物の出土はなく、覆土にAs-Aを

構造 本土坑の主軸は北東を向き、プランは概ね楕円形状を呈するものと推定される。

底面は丸底気味で、壁面はやや開いている。

れたに過ぎなかった。

規模 長径：230cm 短径：122cm 深さ：50cm

構造 本土坑の主軸は概ね北を向き、プランは隅丸方形を基調とした形態を示している。

底面は丸底気味で、壁面は開き気味である。

かった。

規模 長径：325cm 短径：224cm 深さ：70cm

構造 本土坑の主軸は概ね北を向くが、やや東に寄っている。瓢箪形に近い不整形プランを呈する。

掘り方形形態は船底形に近く、壁面は開き気味で特に上半は東西に大きく開いている。

農耕に伴うものではないかと思われる。

規模 長径：204cm 短径：124cm 深さ：42cm

構造 本土坑は隅丸の楕形のプランを呈し、その主軸は概ね西北西を向く。

本土坑の掘り方は箱形を呈し、底面は平底に近いが西側で深くなる。

また、本土坑の用途等は想定されなかった。

規模 長径：約165cm 短径：約145cm 深さ：35cm

構造 本土坑はX字状のプランを呈し、長軸は概ね北西を向いている。

壁面は段々を有し、底面は丸底気味である。

まないことから江戸時代中期以前の所産とできたと過ぎなかった。また、本土坑の掘削意図等は想定されなかった。

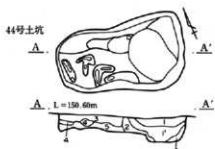
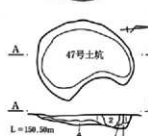


45号土坑覆土

1: 暗褐色土: 堅く締まり、As-YP微量を含む。 2: 暗黄褐色土: 黒色土微量に混入。 3 層: 黄褐色土。

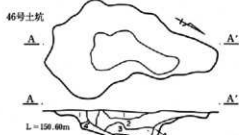
48号土坑覆土

1: 暗褐色土: As-YPを部分的に多量に含み、堅く締まる。 2: 暗赤褐色土: 黒色土微量に混入。



44号土坑覆土

1: 暗黄褐色土: 白色土粒が多量に含まれる。(1': 白色土粒減少) 2: 暗黒褐色土: 夾雑物殆ど含まれず。 3: 暗褐色土: As-YP少量含まれる。 4: 暗黄褐色土: As-YP主体。 5: 暗褐色土: 黒色土少量含まれる。

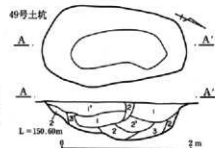


46号土坑覆土

1: 暗黄褐色土: 微小の白色土粒を若干量含む。 2: 暗黄褐色土: 褐色土粒多量を含む。 3: 暗黒褐色土: 小さな褐色土斑状を含む。(3': 明褐色土ブロック少量混入) 4: 暗茶褐色土: 黒色土少量含む。(4': 更に多量の黒色土含まれる。)

49号土坑覆土

1: 黒色土: 黒色土と暗黒褐色土の混土中に白色土粒が多量に含まれる。(1': 暗黒褐色土: 白色土粒多量に含まれる) 2: 暗褐色土: 黒斑部分的に混入。(2': 黒斑の混入後の) 3: 暗褐色土: 夾雑物なし。



47号土坑覆土

1: 暗黄褐色土: As-YPを中心とする褐色土が若干量混入。 2: 暗黒褐色土: 褐色土粒を微量に含む。 3: 暗黄褐色土: As-YP主体。 4: 暗黄褐色土。



51号土坑覆土

1: 暗褐色土: ローム漸移層 (以下「漸移層」) 上層土主体。 2: 茶褐色土: 下層の多い漸移層土主体。 3: 暗茶褐色土: 2層に似る。 4: 茶褐色土: 上層中心の漸移層土にロームと黒色土多く含む。 5: 黒褐色土: 黒色土と漸移層土の混土主体。

52号土坑覆土

1: 暗褐色土: 漸移層上層土主体。 2: 淡茶褐色土: 下層土中心の漸移層土主体。 3: 茶褐色土: 上層に近い漸移層土主体。 4: 淡茶褐色土: 広いロームと3層土の混土。

第295図 44~49・51・52号土坑

規模 長径: 274cm 短径: 156cm 深さ: 57cm
構造 本土坑の主軸は概ね北西を向き、水筒様の不

整形なプランを呈する。
掘り方は風倒木様で、底面は丸底気味である。

47号土坑 (江戸時代中期以前, 第295図, 図版108)

概要 本土坑もC区東半部の中部に所在する。
出土遺物はなく、覆土にAs-Aを含まないことから江戸時代中期以前の所産とでき、用途は不明である。

規模 長径: 153cm 短径: 122cm 深さ: 25cm
構造 本土坑の主軸は北を向き、勾玉形のプランを呈し、底面は平底気味である。

第3章 発見された遺構と遺物

48号土坑（江戸時代中期以前、第295図、図版109）

概要 本土坑はC区東半部の中南の土坑の多い一面に在る、中規模の土坑である。

本土坑からの出土遺物はなく、覆土にAs-Aを含まないことから江戸時代中期以前の所産と把握される。

尚、用途についてはB区の7号土坑等との形態的

近似から芋穴等の農耕に伴うものと思慮される。

規模 長径：169cm 短径：96cm 深さ：18cm

構造 本土坑の主軸は北西を向き、隅丸長方形のプランを呈する。

彫り込みは箱形で、底面は平底を成す。

49号土坑（江戸時代中期以前、第295図、図版109）

概要 本土坑もC区東半部の土坑の多い一面に所在する、中規模の土坑である。

本土坑の時期については、出土遺物もなく、覆土にAs-Aを含まないことから僅かに江戸時代中期以前の所産として把握されたに過ぎない。

用途については想定できなかった。

規模 長径：226cm 短径：130cm 深さ：64cm

構造 本土坑の主軸は概ね北西を向き、隅丸長方形様のプランを呈する。

底面は丸底気味で、壁面は立っている。

51号土坑（江戸時代中期以前、第295図、図版109）

概要 本土坑はC区東半中央部の土坑・ピットの集中区に所在する、中規模の土坑である。

出土遺物はなく、その時期については覆土から江戸時代中期以前の所産とできたと過ぎなかった。

尚、用途については、その形態的特徴から芋穴等

の農耕に伴うものであろうと想定される。

規模 長径：149cm 短径：82cm 深さ：34cm

構造 本土坑の主軸は概ね北北西を向き、隅丸長方形様のプランを呈する。

掘り込みは箱形で底面は平底を呈している。

52号土坑（江戸時代中期以前、第295図、図版109）

概要 本土坑もC区東半中央部の土坑・ピットの集中区に所在する土坑である。

出土遺物はなく、その時期は覆土の状況から江戸時代中期以前の所産とできたと過ぎなかった。

尚、用途については想定されなかった。

規模 長径：142cm 短径：150cm 深さ：19cm

構造 本土坑の主軸は概ね北東を向き、楕円形に近い隅丸方形のプランを呈する。

底面は平底であるが小ピットが見られ、壁面はやや開き気味である。

53号土坑（江戸時代中期以前、第296図、図版109）

概要 本土坑はC区東半部中央の土坑・ピットの集中区に所在する中小規模の土坑である。

出土遺物はなく、その時期は覆土の状況から江戸時代中期以前の所産とできたと過ぎなかった。

尚、用途については想定されなかった。

規模 長径：137cm 短径：36cm 深さ：41cm

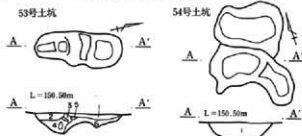
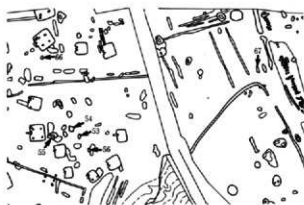
構造 本土坑の主軸は概ね北北東を向き、隅丸方形に近いプランを呈する。

土坑形態は複数のピットが縦列に掘削されているように見えるが、土層断面には識別されない。

54号土坑（江戸時代中期以前、第296図、図版109）

概要 本土坑もC区東半部中央の土坑・ピットの集中区に所在する南北に接する2基の土坑である。

出土遺物はなく、覆土の状況からその時期は江戸時代中期以前の所産とできたと過ぎなかった。

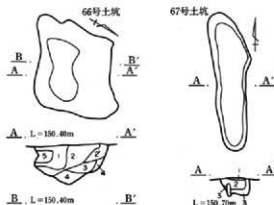


53号土坑覆土

1: 黒褐色土: 黒色に近いもの中心のローム漸移層土に炭化物と6層土多く混入。 2: 赤褐色土: 漸移層上層土。北にかけローム・炭化物・As-YFを多く混入。 3: 黄褐色土: 漸移層下層土とロームの混入。 4: 明褐色土: 下層中心の漸移層土にロームと黒色土混入。 5: 黒色土: 黒色土に近い漸移層土と炭化物の混入。植物の根か。 6: 明茶褐色土: 下層中心の漸移層土とロームの混入。

54号土坑覆土

1: 明茶褐色土: ローム漸移層下層土ブロック層。



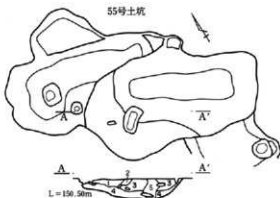
66号土坑覆土

1: 暗黒褐色土: 黒色土主体。 2: 暗茶褐色土主体。(2': As-YF含まず) 3: 暗黒褐色土: 1層に近似。As-YF含まず。 4: 暗茶褐色土: 夾雑物無し。 5: 暗黄褐色土主体。多量のAs-YF混入。

67号土坑覆土

1: 暗灰褐色土: As-A混じりの攪乱層。 2: 褐色土: 褐色土と暗黄褐色土の混入に白色粒子・乳白色粒子僅かに散在。 3: 暗黄褐色土: 大変固く締まる。白色粒子や多く、As-YF僅かに含む。

第296図 53~56・66・67号土坑及び出土遺物



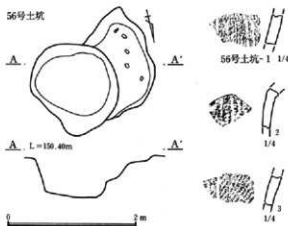
〔55号土坑詳記〕

近現代耕作土

1: 明褐色土: 締まりに欠けるローム漸移層土(以下「漸移層土」とする)。上位にAs-A混入。 2: 赤褐色土: 締まりに欠ける漸移層上層土。As-A混入。

55号土坑覆土

3: 明褐色土: 漸移層下層土。As-YF混入。 4: 褐色土: 漸移層上層土にAs-YFと漸移層下層土混入。 5: 明茶褐色土: 下層土中心の漸移層土。3層に比し色調暗い。



尚、用途については想定されなかった。

規模 (北側土坑)長径:109cm 短径:90cm以上
深さ:27cm (南側土坑)長径:138cm 短径:80cm以上 深さ:29cm

構造 南北双方とも主軸は西北西を向き、プランはやや不整形である。

双方とも底面は平底気味で、壁面は立つ。

55号土坑 (江戸時代中期以前, 第296図, 図版109)

概要 本土坑はC区東半中央のビット集中区に在り、東西に並ぶ2基の土坑を中心とする土坑群である。出土遺物はなく覆土にAs-Aを含まないこと

第3章 発見された遺構と遺物

から江戸時代中期以前の所産である。

尚、東西の土坑の新旧関係は特定されず、土坑の用途も想定できなかつた。

規模〔東側土坑〕長径：277cm 短径：174cm 深さ：57cm

〔西側土坑〕長径：247cm 短径：128cm 深さ：26

cm

構造 東西の土坑は何れも隅丸長方形のプランを呈し、主軸は西北西を向くが西側のものの方が西に傾いている。東西の土坑の北或いは南に絡む土坑も隅丸長方形のプランを呈している。

掘り方は概ね箱形で、平底である。

56号土坑（縄文時代か／時期不詳、第296図、図版109・121）

概要 本土坑はC区東半部中央の土坑の集中区に所在する土坑で、東西2基の土坑で構成される。

東西の土坑からの新旧関係は特定できなかったが、西側の土坑からは後期の縄文土器片（1,2,3）の出土が見られ、西側の土坑が該期の所産である可能性が考えられる。尚、覆土の記録化に失敗したこともあって東側の土坑の時期は特定されなかつた。

規模〔東側土坑〕長径：142cm 短径：141cm 深さ：34cm 〔西側土坑〕長径：146cm以上 短径：142cm 深さ：19cm

構造 本土坑のうち東側のものの主軸は北西を向き、プランは楕円形に近い。西側のものの主軸は凡そ北北西を向き方形様のプランを呈する。

何れも底面は平底様で、壁面は立っている。

66号土坑（江戸時代中期以前、第296図、図版110）

概要 本土坑はC区東半中南部の土坑の多い地区の一面に所在する中規模の土坑である。

本土坑からの出土遺物は無く、時期も覆土にAs-Aを含まないことから江戸時代中期以前の所産として捉えられるだけであつた。

尚、本土坑の用途等は想定できなかつた。

規模 長径：146cm 短径：136cm 深さ：63cm

構造 本土坑の主軸方向は東北東を向き、隅丸の菱形のプランを呈する。

底面は船底形で、壁面は立っている。

67・68号土坑（江戸時代中期以前、第296～297図、図版110）

概要 67・68号土坑はC区西半部の東端、1号道の東側に東西に並んで所在する細長い土坑である。

この2基の土坑からの出土遺物は見られなかつたが、基本的に覆土にはAs-Aを含まないので江戸時代中期以前の所産と考えられる。

67・68号土坑は並行に並んでおり、遺構形態から耕作に伴うサクである可能性が考えられる。

規模〔67号土坑〕長径：219cm 短径：60cm 深

さ：26cm 〔68号土坑〕長径：215cm 短径：72cm

深さ：26cm

構造 67・68号土坑の主軸方向は概ね北北西を向いている。プランは何れも溝状を呈し、その形状は箱掘状である。

尚、2基の土坑は上述のようにこの平行に並んで遺存するが、その間は凡そ110cmを隔てており、68号土坑の方が約50cmの段差を以て北に出ている。

69号土坑（江戸時代中期以前、第297図、図版110）

概要 本土坑はC区西半部の南半に位置する。

本土坑からの出土遺物は無く、土坑の時期は覆土の状況から江戸時代中期以前とできるに過ぎない。

また、平面の記録化に失敗している。

規模 長径：約130cm 短径：約100cm 深さ：39cm

構造 本土坑の主軸は北東を向き、長方形のプランを呈する。

底面は概ね平底で、北東部にピットが掘削される。



第297図 68~71・73~75号土坑

70号土坑 (江戸時代中期以前, 第297図, 図版110)

概要 本土坑はC区西西部の中程に位置する。

出土遺物はなく、その時期も覆土に As-A を含まないことから、江戸時代中期以前の所産ではある。

尚、本土坑の底面には焼土が見られたため、何ら

かの焼却に用いられたものと思慮される。

規模 長径: 106cm 短径: 107cm 深さ: 31cm

概要 本土坑はほぼ円形のプランを呈する。

底面は平底で、壁面は立っている。

71号土坑 (古墳時代以前, 第297図, 図版110)

概要 本土坑はC区西西部の南寄り、17号掘立柱建

物の中に位置する。

第3章 発見された遺構と遺物

出土遺物は無く、断面観察で古墳時代以降のものではないと判断され、風倒木の可能性が考えられた。

規模 長径：189cm 短径：85cm 深さ：49cm

73号土坑（江戸時代中期以前、第297図、図版110）

概要 本土坑はC区西半部の南端近く、後述の74・75土坑に近接したピットの多い一角に所在している。

出土遺物は無く、覆土の状況から江戸時代中期以前と判断できたに過ぎない。

尚、本土坑の性格等は特定されなかった。

74号土坑（江戸時代中期以前、第297図、図版110）

概要 本土坑はC区西半部の南端近く、ピットの多い一角に所在している。

出土遺物は見られず、覆土にAs-Aを含まないことから江戸時代中期以前の所産と判断された。

尚、本土坑の用途等は特定されなかった。

75号土坑（江戸時代中期以前、第297図、図版110）

概要 本土坑はC区西半部の南端近くに所在し、73・74号土坑や幾つかの小ピットに近接している。

本土坑の出土遺物はなく、覆土にAs-Aを含まないため江戸時代中期以前の所産とすることはできる。

尚、本土坑の掘削目的等は特定されなかった。

85号土坑（江戸時代中期以前、第298図、図版111）

概要 本土坑はC区西半部の南端近く、H-116号住居の北東に位置する。

本土坑からの出土遺物は無く、覆土にAs-Aを含まないことから江戸時代中期以前のものと同確認できた。

尚、本土坑は形態的には井戸遺構に似るが、その

99号土坑（江戸時代中期以前、第298図、図版111）

概要 本土坑は9号溝の内側に近接して所在する。

本土坑からの遺物の出土は無く、覆土の状況から江戸時代中期以前のものと同把握されたに過ぎない。

尚、本土坑は覆土に多量の炭化物を含み、本土坑の北に在って後述する100号土坑との関連から燃焼

概要 主軸は北北西を向き、空豆形のプランを呈す。

底面は丸底気味で、土坑中央と北端部にピット状の落ち込みを有する。

規模 長径：203cm 短径：112cm 深さ：60cm

概要 本土坑の主軸は概ね北西を向き、半円形に近いプランを呈している。

壁面及び底面は凹凸を持っており、掘り方は風倒木のような印象を受ける。

規模 長径：163cm 短径：115cm 深さ：80cm

概要 本土坑の主軸は概ね東西を向き、楕円形様のプランを呈するがやや中央がくびれる。

掘り方は葉研堀状を呈し、底面は西に向かって深くなる。

規模 長径：144cm 短径：73cm 深さ：21cm

概要 本土坑の主軸は概ね北東を向き、瓢箪形のプランを呈する。

底面は凹凸が見られるが、最深部は北部にあり、壁面は立ち気味である。

用途等を特定することはできなかった。

規模 長径：148cm 短径：124cm 深さ：128cm

概要 本土坑はやや南北に引かれる円形のプランを呈する。

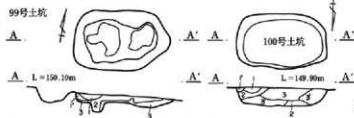
掘り方はロウト状で、底面は丸底を呈する。

に関連した遺構である可能性が考えられた。

規模 長径：152cm 短径：84cm 深さ：38cm

概要 本土坑の主軸は概ね東を向き、縦長の五角形のプランを呈する。

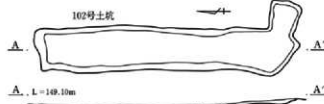
底面は多少凹凸を持ち、東端にピットが掘られる。

**99号土坑覆土**

1: 黒色土: 1層と同様黒色土中に炭化物の混入は見られない。(1': 微量の暗黒褐色土が混入する。) 2: 黒色土: 炭化物を多量に含んで締まりに欠ける。 3: 灰黒褐色土: 暗黒褐色土と褐色土の混土。

100号土坑覆土

1: 暗黒褐色土: 褐色土を微量に含む。(1': 褐色土小ブロック少量含む。) 2: 黒色土: 褐色土を微量に含む。 3: 黒色土: 炭化物と褐色土粒を微量含む。(3': 褐色土が中ブロック化して少量含む。)

**137号土坑****102号土坑覆土**

1: 黒色土: 漆黒土中にAs-YP含みの暗褐色土少量混入。締まりに欠ける。

[137号土坑土層注記]**小ビド覆土**

1: 黒褐色土: 黒色土とローム漸移層上層土の中ブロック層。

137号土坑覆土

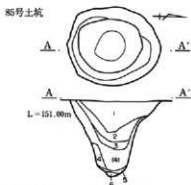
2: オリーブ褐色土: 黄色系ロームとローム漸移層下層土の中ブロック層。 3: 黒褐色土: 1層に近いがAs-YP多く含む。

第298図 85・99・100・102・135~137号土坑

100号土坑 (江戸時代中期以前, 第298図, 図版111)

概要 本土坑はC区西半、9号溝の内側に所在する。

本土坑からの遺物の出土は無く、覆土のAs-Aの有

**85号土坑覆土**

1: 暗褐色土主体。白色粒子・乳白色粒子多量に含む。 2: 褐色土主体。黄色土をや多く含む。 3: 暗褐色土: 褐色土と暗褐色土の混土主体。暗褐色土の比率が高い。 4: 暗褐色土: くすんだローム。 5: 暗褐色土: 薄い緑を帯びたローム。 6: 黄褐色: 白色粒子主体とし、As-BPの明褐色粒子をや多く含む。

135号土坑**136号土坑****135号土坑覆土**

1: 暗褐色土: 上層土中心のローム漸移層土に黒色土入る中ブロック層。ロームとAs-YP混入。 2: オリーブ褐色土: ローム漸移層下層土に黒色土入るブロック層。As-YP混入。

136号土坑覆土

1: 暗褐色土: 上層土中心の漸移層土の中ブロック層。As-YPと若干の黒色土混入。 2: オリーブ褐色土: ローム漸移層土のブロック層。As-YPを混入。1層に近い。



無から江戸時代中期以前のものとして把握される。

本土坑では北壁を中心に焼土が見られたが、何かを燃やすような経過があったものと考えられる。

規模 長径: 146cm 短径: 89cm 深さ: 36cm

概要 本土坑の主軸は99号土坑と同様に概ね東を向き、隅丸形状のプランを呈する。

底面は概ね平底に近く、掘り込みは箱形に近い。

102号土坑 (江戸時代中期以前, 第298図, 図版111)

概要 本土坑はC区中北部の1号谷の中に在る。

本土坑の出土遺物は無いが、覆土にAs-Aを含まないことから江戸時代中期以前の所産と判断される。

尚、本土坑の用途等は特定されなかった。

第3章 発見された遺構と遺物

規模 長径：422cm 短径：73cm 深さ：10cm

概要 本土坑の主軸は北北西を向き、細長い短冊形

のプランを基調とし、北西部に張り出しを有する。

掘り込みは浅く、箱状の掘り方を呈する。

135号土坑（中世以前、第298図、図版111）

概要 本土坑は136・137号土坑と共に1号道の下位に調査したピット群中に在る小型の土坑である。

付近はピットが多く、本土坑にもピットの掘削が入っていることが認められた。

本土坑からの出土遺物は無かったが、室町期前後と推定される1号道の下面に発見されたので中世以

前、恐らくは古代以前の所産であると考えられる。

尚、本土坑の用途等は特定されなかった。

規模 長径：89cm 短径：80cm 深さ：24cm

概要 本土坑のプランは円形に近いものであった。

底面は平底気味で、壁面は緩やかな曲線を描いて立ち上がる。

136号土坑（中世以前、第298図、図版111）

概要 本土坑も135号土坑同様1号道の下位に調査されたピット群の中に在る小型の土坑である。

本土坑にも小ピットの掘削痕が認められた。

また、本土坑の時期は135号土坑同様中世以前のものと判断される。

尚、本土坑の掘削意図等は確認できなかった。

規模 長径：80cm 短径：70cm 深さ：24cm

概要 本土坑のプランは隅丸の台形を呈する。

底面は本来的には平底であったと推定され、壁面は垂直気味に立ち上がる。

137号土坑（中世以前、第298図、図版111）

概要 本土坑も135・136号土坑同様1号道の下位面に調査されたピット群の中に所在する土坑である。

本土坑にも小ピットの掘削が認められた。

本土坑からの出土遺物は見られなかったが、135・136号土坑と同様中世以前の所産と判断される。

規模 長径：145cm 短径：51cm 深さ：30cm

概要 本土坑は北北東を向き、短い溝状のプランを呈する。

掘り方は溝状である。底面は平底気味であるが、南半部に対し北半部は10cm程深く掘削されている。

1号火葬土坑（中世、第299図、図版114）

概要 本火葬土坑は1号道の東に隣接して所在する。1号道の確認面に検出され、1号道同様本来の確認面に於いては確認できなかった遺構である。

本遺構は掘削ミスからその東半部を掘りすぎてしまったので十分な記録化を行えなかった。

本遺構からは須恵器片1点と焼骨の出土を見た。

時期については、その遺構形態が典型的な中世の

火葬土坑と認識されるので、中世の所産と判断した。

規模 長径：125cm 短径：推定70cm 深さ：12cm

概要 本火葬土坑の主軸は概ね北を向き、プランは隅丸の長方形を呈する。

掘り過ぎてしまったが東壁中位に10cm以下の小さな突出部を持っていた。

底面は平底気味で、中央を除き礫が置かれていた。

C区のピット群（第299図、図版107）

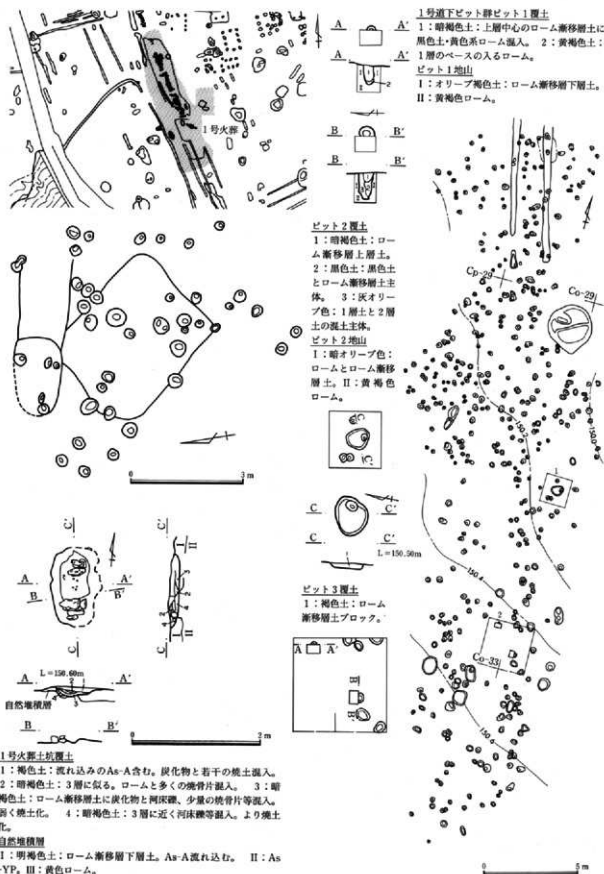
概要 C区に於いては、1号谷の底部と南側の一角等を除く広い範囲に小型のピットが見られた。

このうち Cp~Cq-30グリッド及び近接した1号

道下のピット群を右頁の299図に示した。

これらの小ピットの時期は古代以前から現代に至る各時代に亘っているが、1号道下に検出された

第4節 C区の遺構と遺物



第299図 1号火葬土坑・1～3号ピット及びピット群

第3章 発見された遺構と遺物

ピット群は中世以前で、その多くは古代に遡ると判断された。またこれらのピットには棚列等の構造物の配列も見出すことはできなかった。

規模 長径：14～50cm(平均31.15cm) 短径：14～40cm(平均26.97cm) 深さ：10～43cm(平均23.91cm)

概要 C区所在のピット群のプランは円形または隅丸方形を呈するものを基調としている。

C区のピット群のうちCp-Cq-30グリッド所在ピットを見ると、平均的な径の大きさが20.89×17.00cmと30.96×27.12cm、40.90×36.50cmを測る

13号風倒木 (古墳時代前後か、第300図、図版112)

概要 本風倒木はC区西半部に所在する。

出土遺物は無く、倒木の時期特定には至らなかったが、覆土に良く形成された黒色土が見られることから、弥生時代～古墳時代前後のものと推定される。

14号風倒木 (時期不詳、第300図、図版112)

概要 本風倒木はC区西半部中程に位置する。

出土遺物は無く、覆土からも時期の特定には至らなかった。

尚、倒木の方向は東側に向かってである。

16号風倒木 (時期不詳、第300図、図版112)

概要 本風倒木はC区西半部のやや南寄りに位置し、19号風倒木と切り合うが新旧関係は不明である。

覆土から秋耳飾から転用の垂飾(1)が出土したが、丸廻して土層の記録化に失敗したこともあって時期の特定には至らなかった。

また、倒木の方向も特定し得なかったが、壁面の

19号風倒木 (時期不詳、第300図、図版112)

概要 本風倒木はC区西半部に所在する。東に16号風倒木と接して切り合い関係にあるが上述のように新旧関係は特定できなかった。

出土遺物は無く、16号風倒木と併せて丸廻してしまったので時期は推定できなかった。

尚、倒木の方向については、壁面の傾斜の比較か

3グループに分けられ、小さい径のグループの径は14～28cm(平均19.6cm)でピットの深さは平均16.38cmを測り、中位の径は21～38cm(平均29.08cm)で深さは平均24.30cmを測り、大きい径のものの径は31～50cm(平均38.94cm)で深さは平均28.90cmを測った。

1号道下のピット群のピット1・2を立ち割った断面観察からは、ピット1は杭様の材を打ち込み、ピット2は材を埋め込むという2つの材の設置形態があることを確認した。

尚、樹木は北側に倒れたものと判断される。

規模 長径：372cm 短径：322cm 深さ：80cm

構造 本風倒木のプランは不整形で東西に長い。

底面は北側ほど深くなっている。

規模 長径：推定370cm 短径：約305cm 深さ：132cm

構造 本風倒木は水滴状のプランを呈する。

壁面は西側できつく、東側に緩やかに立ち上がる。

傾斜の比較から東～北東にかけての方向に倒れた可能性が思慮される。

規模 長径：174cm 短径：138cm 深さ：125cm

構造 本風倒木のプランは東西に長く、やや不整形である。

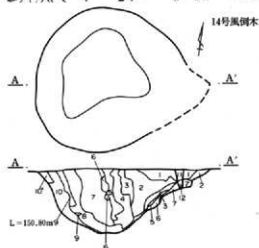
他の壁面に対し南東の壁面の傾斜がきつい。

ら西北西方向に倒れたものと推察される。

規模 長径：286cm以上 短径：270cm 深さ：74cm

構造 本風倒木のプランは不整形で確認面では東南東-西北西に長く、底面では南北に長い。

壁面は西北西側は段を持って、他の部分に対し緩やかである。

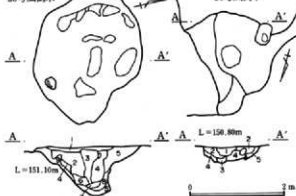


14号風倒木覆土

1: 黒褐色土: 頁質土壌。 2・3: 頁質土壌。 4: 暗褐色土: 硬質。 5: 小さな暗黄褐色土: 白色粒子や多く含む。ロームと暗褐色土僅かに混在。 6: 小さな暗黄褐色土: As-YP大量に含む。(As-YP層) 7: 黄褐色ローム: 暗い肌色。 8: 黄褐色ローム: 明褐色帯びる。 9・10・10': 黄褐色ローム: 淡緑色。 **ピット覆土**

11: 暗褐色土: 黒味帯びる。粒子混入少ない。 12: 暗褐色土: 11層に比し固く良く締まる。ローム僅かに含む。

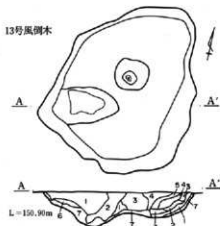
20号風倒木



第300図 13・14・16・19～21号風倒木及び出土遺物

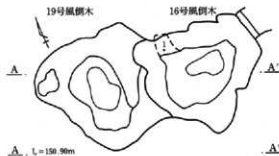
20号風倒木 (縄文時代か、第300図、図版112)

概要 本風倒木はC区中部、1号谷の南方に当たる調査区南端近くに所在する。



13号風倒木覆土

1: 黒色土: 褐色掛かった黒色土中に薄黒土が面状に少量混入。 2: 黒色土: 黒黒土。処々に褐色土ブロックが少量混入。 3: 褐色土: As-YP含みのローム。 4: 褐色土: ローム。固く締まる。 5: 小さな暗褐色土: 黒色土が少量混入。 6: 明るい褐色土: 夾雑物見られず。 7: 赤味のある褐色土: 夾雑物見られず。



近世以降の耕土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

1: 灰茶褐色土: 現耕作土とローム漸移層土の混土。

20号風倒木覆土

2: 暗褐色土: 漸移層上層土主体。 3: 暗褐色土主体。2層に比し明るく漸移層下層土や多く混入。 4: 明茶褐色土: 漸移層土主体。 5: 黄褐色土: ロームと下層中心の漸移層土の混土主体。 6: 黒褐色土: 黒色土と漸移層上層土の混土主体。 7: 明茶褐色土: ベースは4層土に似る。 8: 暗黄褐色土: 漸移層下層土主体。 9: 黄褐色土: 5層土に似るがロームと漸移層下層土や多く含む。

21号風倒木覆土

1: 茶褐色土: 漸移層土主体。 2: 明茶褐色土: 下層中心の漸移層土主体。 3: 暗黄褐色土: 漸移層下層土主体。 4: 黄褐色土: ロームに近い漸移層下層土主体。 5: 明黄褐色土: ローム主体。

出土遺物は無かったが、覆土を見るとローム漸移層土以下の土が主体で、黒色土の形成が余り進んで

第3章 発見された遺構と遺物

いない段階の倒木痕と考えられることから、後述の1号谷の形成状態と併せて縄文時代のものではないかと推定される。

尚、倒木の方向は北側であったと思慮される。

21号風倒木（時期不詳、第300図、図版112）

概要 本風倒木はC区中南部に在り、東側はC区を横断する所謂学校道の下に入って調査できなかった。

本遺構は東西2つに分割される可能性を持つが、分割の有無や新旧関係は記録できなかった。

また出土遺物はなく、時期の推定もできなかった。

22号風倒木（縄文時代か、第301図、図版112）

概要 本風倒木はC区中南部、上述の21号風倒木の南に近接して所在する風倒木痕で、21号風倒木との間は確認面より10cm程低くなっている。

出土遺物は無かったが、覆土がローム漸移層土を主体として黒色土をあまり含まないことから、20号風倒木と同様縄文時代のものと思われる。

26号風倒木（縄文時代以降、第301図、図版112）

概要 本風倒木はC区西半、1号谷の底部近くに所在する倒木痕である。

出土遺物は無かったが、覆土に良く形成されたと思われる黒色土が見られるので完新世のものと判断される。

27号風倒木（弥生時代～古墳時代か、第301図、図版113）

概要 本風倒木も26号風倒木と同様、C区西半の1号谷の底部近くに所在する倒木痕である。

出土遺物は無かったが、覆土に見られる黒色系の土がよく形成された状態にあることが窺えることから、弥生時代～古墳時代前後のものと推定される。

28号風倒木（縄文時代以降、第301図、図版113）

概要 本風倒木は1号谷の西寄りに位置している。

出土遺物は見られなかったが、覆土に黒色土が見

規模 長径：278cm 短径：221cm 深さ：106cm

構造 本風倒木のブランは尾の極めて短い円形を呈し、東西にやや長い。

掘り方は摺鉢状を呈している。

尚、倒木方向については壁面の状況から西南西と推定されるが、東西が別遺構として分離する場合は東半部は南東方向に求めることができる。

規模 長径：258cm以上 短径：258cm 深さ：113cm

〔西半部〕長径：120cm以上 短径：188cm 深さ：53cm

構造 本風倒木は不定型なブランを呈する。

尚、倒木の方向については、壁面の傾斜の比較から西側と判断される。

規模 長径：234cm 短径：158cm 深さ：83cm

構造 本風倒木は隅丸方形のブランを呈するが、西壁はやや張り出す。

掘り方は摺鉢状を成している。

尚、倒木の方向については特定し得なかった。

規模 長径：149cm 短径：144cm 深さ：43cm

構造 本風倒木は円形状のブランを呈する。

壁面はやや鋭く立ち底面は平底気味で、底面中央には不整形なピット様の落ち込みが見られた。

尚、倒木の方向は北側であると判断される。

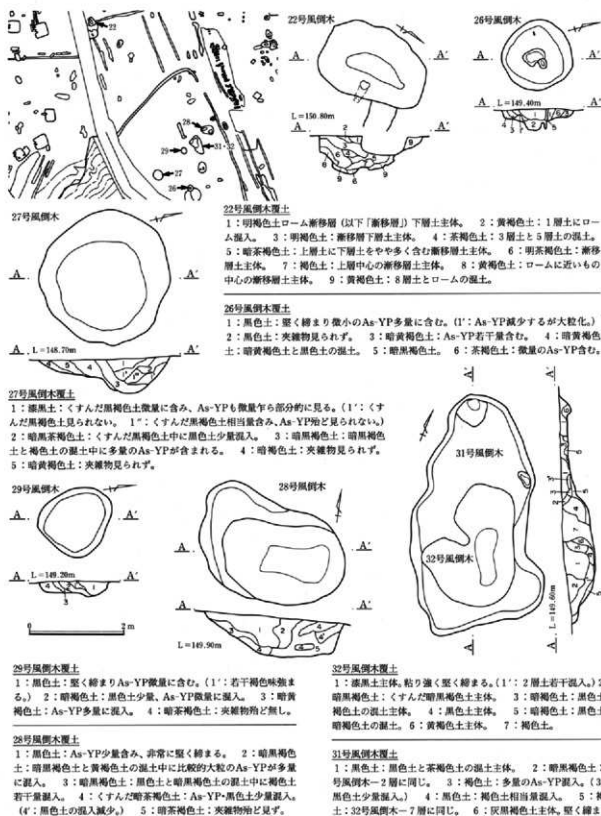
規模 長径：278cm 短径：275cm 深さ：91cm

構造 本風倒木は円形に近いブランを呈する。

底面は丸底で、壁面は開き気味であるが、北壁の傾斜は特に緩やかである。

られるので完新世のものと判断される。

尚、倒木の方向は西側である。



第301図 22・26～29・31・32号風倒木

規模 長径: 320cm 短径: 236cm 深さ: 105cm

構造 本風倒木は空豆形のプランを呈する。

底面は平底で、壁面は東側はやや鋭く、西側は緩やかに立ち上がっている。

29号風倒木（縄文時代以降、第301図、図版113）

概要 本風倒木は1号谷の南西寄りに位置する。

出土遺物は無かったが、覆土に黒色土が形成されていることから完新生のものと判断される。

尚、倒木の方向は北北西であろうと思われる。

規模 長径：151cm 短径：140cm 深さ：33cm

構造 本風倒木は一方が潰れたような楕円形のプランを呈する。

底面は平底に近く、壁の立ち上がりは鋭い。

31・32号風倒木（縄文時代か/以降弥生時代～古墳時代前後か、第301図、図版113）

概要 31・32号風倒木はC区西半の1号谷の底部近くに所在する。

この2基の倒木痕は切り合い関係にあるが、32号風倒木の方が新しい。

何れも出土遺物は無かったが、覆土を見ると黒色土の形成が進み、特に32号風倒木では顕著であった。従って32号風倒木は弥生時代～古墳時代前後のものと推定され、31号風倒木は完新生に形成されたものと判断される。

尚、倒木の方向については31号風倒木は南南東、

32号風倒木については北北西であると思慮される。

規模 [31号風倒木] 長径：278cm以上 短径：230

cm 深さ：68cm [32号風倒木] 長径：269cm

短径：237cm 深さ：76cm

構造 31号風倒木のプランは隅丸の菱形、32号風倒木のプランは隅丸形状を呈する。

何れも底面は丸底気味で、壁面の傾斜は31号風倒木は南側、32号風倒木は北側の方が緩やかである。

30号風倒木（縄文時代以降、第302図、図版113）

概要 本風倒木はC区西半の1号谷中に位置する。

出土遺物は無かったが、覆土に黒色土の形成が見られることから完新生のものとして捉えられる。

倒木方向は壁面の傾斜から西側と判断される。

規模 長径：280cm 短径：216cm 深さ：50cm

構造 本風倒木のプランは楕円状を呈する。

底面は平底様であるが、壁面の傾斜は比較的鋭いものの西壁はやや緩やかである。

35号風倒木（縄文時代以降、第302図、図版113）

概要 本風倒木はC区西半部の北寄りに位置する。

周囲には小ピットが廻るように多数遺存していた。

出土遺物は見られなかったが、覆土に黒色土の形成が見られることから完新生のものではある。

尚、倒木の方向は西方であったと判断される。

規模 長径：225cm 短径：214cm 深さ：64cm

構造 本風倒木は不整形のプランを呈する。

底面は楕円形で、西壁面では緩傾斜を示す。

36号風倒木（縄文時代以降、第302図、図版113）

概要 本風倒木はC区西半部の中程に位置する。

出土遺物は無かったが、覆土に若干の黒色土の形成が窺われることから、縄文時代頃のものではないかと考えられる。

尚、倒木の方向は特定できなかった。

規模 長径：446cm 短径：362cm 深さ：89cm

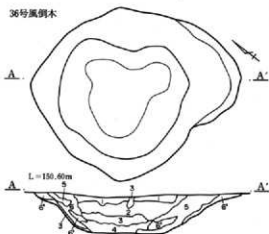
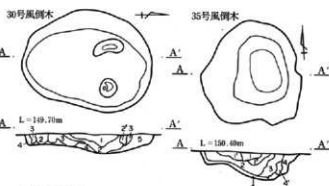
構造 本風倒木は不整形のプランを呈する。

底面は平底気味で、壁面は大きく開く。

37号風倒木（縄文時代以降、第302図、図版113）

概要 本風倒木は1号谷の中程に所在し、南に26号風倒木と接するが新旧関係は特定できなかった。

出土遺物は無く、覆土に黒色土を含むことから完新生の所産として把握されるが、黒色土の形成状況



30号風倒木覆土

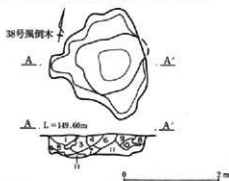
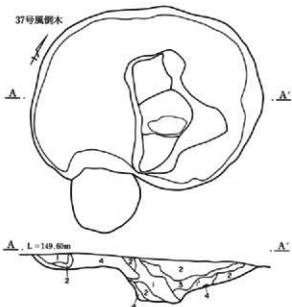
1: 暗黒茶褐色土: くすんだ茶褐色土, 夾雜物は殆ど無し。 2: 黒色土: 黒色土と暗茶褐色土の混土にAs-YP少量含む。(2': 若干褐色味強。) 3: 暗黒褐色土: 暗褐色土中に黒色土少量混入しAs-YP相当量含む。 4: 黄褐色土: As-YPを極めて多量に含む。 5: 褐色土: 夾雜物無し。

35号風倒木覆土

1: 暗赤褐色土: 全体に赤味帯びる。(1': 黒色土と暗赤褐色土の混土) 2: 黒色土: 暗赤褐色土がブロックで混入。 3: 黒色土: 黒色土と暗赤褐色土の混土中にAs-YPが相当量混入。 4: 黄褐色土: 黒色土微量に混入。(4': 黒色土の混入増加。)

36号風倒木覆土

1: 褐色土: As-YPのブロック少量混入。 2: 褐色土: 堅く締まり, As-YP極く微量に混入。 3: 褐色土: 堅く締まり若干黒味が強い。 4: 褐色土: 褐色土締まる。 5: 黒色土: くすんだ褐色土ブロック少量混入。 6: 暗黒褐色土: 暗黒褐色土とくすんだ褐色土の混土, As-YP微量を含む。 6': 暗褐色土: 黒色土微量に混入。部分的にAs-YPも見。



37号風倒木覆土

1: 黒色土: As-YP少量含む。(1': 1層より明るい。) 2: 黒色土: 黒色土とくすんだ暗黒褐色土の混土。 3: 暗茶褐色土: 黒色土少量混入。 4: 明褐色土: As-YPを主体とする。

38号風倒木覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

1: 黄褐色土: 下層中心の漸移層土主体。 2: 茶褐色土: 1層と3層の混土。 3: 暗茶褐色土: 漸移層土層土主体。 4: 黄褐色土/5: 暗黄褐色土/7: 黄褐色土: ローム主体。 6: 黄褐色土: 5層土とロームの混土。 8: 黄褐色土/10: 明茶褐色土: 7層土主体。 9: 黄褐色土: 8層土に近い。 11: 黄褐色ローム。

第302図 30・35~38号風倒木

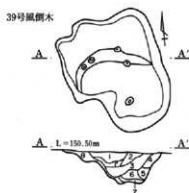
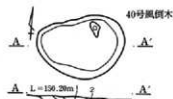
から古墳時代まで下ることはないと思われる。

尚、倒木の方向は断面観察と壁面傾斜の比較から西南西にあったものと推定される。

規模 長径: 499cm 短径: 389cm 深さ: 88cm

構造 本風倒木は隅丸方形のプランを呈するが、底面は凸形のプランを呈する。

第3章 発見された遺構と遺物



39号風倒木覆土

1：暗茶褐色土：淡褐色土粒を微量含み、堅く締まる。(1'：1層に見られた淡褐色土粒が大粒(2~3mm)になる。) 2：暗黒褐色土：暗褐色土と良く締まった黒色土の混土。3：暗黒褐色土：淡褐色土粒を含む、良く締まった黒色土中に暗褐色土が若干混入する。4：暗黒褐色土：2層土とAs-YPの混土。5：暗褐色土：2層土とくすんだ少量のAs-YPの混土。6：暗褐色土：暗褐色主体土中に良く締まる多量くすんだ黒色土が少量混入する。7：暗黒褐色土：黒色土中に明褐色土が微量に混入する。8：黄褐色土：As-YP含みの黄褐色土中に微量くすんだ黒色土が混入する。

40号風倒木覆土

1：黒色土：堅く締まる黒色土と暗黒褐色土の混土。微小の白色土粒を多量に含む。2：暗褐色土：暗褐色主体土中に黒色土が微量混入する。3：褐色土：若干くすんだ黒色土が微量混入する。4：黒色土：堅く締まる。

43号風倒木覆土

1：にぶい黄褐色土：ルーム漸移層土とルーム(As-YP)のブロック層。やや硬質。2：暗褐色土：上層土を中心とするルーム漸移層土に黒色土粒とルームの小ブロックを混入する。3：暗オリーブ褐色土：若干のルームを混入するルーム漸移層土のブロック層。4：黄褐色土：黄色系のルームのブロック層。下層土を中心とするルーム漸移層土とAs-YPのブロックを混入する。5：黄色土：4層土と6層土の混土。6：黄褐色土：ソフトルームのブロック層。やや軟質。7：褐色土：下層土を中心とするルーム漸移層土に黒色土の若干入るブロック層。

第303図 39・40・43号風倒木

38号風倒木 (縄文時代か、第302図)

概要 本風倒木は1号谷の南、21号風倒木の北西に近接して所在する。

本風倒木からの遺物の出土は認められなかったが、覆土に若干の黒色土を含むため完新生の倒木ではある。しかし、覆土の主体はルーム或いは下層土を中心とするルーム漸移層土であるので縄文時代の

早い段階のものではなかったかと想定される。

尚、倒木の方向を特定することはできなかった。

規模 長径：231cm 短径：206cm 深さ：44cm

構造 本風倒木は不定形のプランを呈する。

底面は若干丸みを持ち、壁面は垂直に近い角度で立ち上がっている。

39号風倒木 (縄文時代以降、第303図、図版114)

概要 本風倒木はC区西西部の南寄りの掘立柱建物の多い一角に所在する。

出土遺物は見られなかった。また覆土に黒色土を含むことから完新生の倒木であることは確認できたが、倒木の細かい時期は特定できなかった。

尚、倒木の方向は覆土の観察から東または東南東と想定されるがやや判然としない。

規模 長径：271cm 短径：233cm 深さ：68cm

構造 本風倒木は不定形のプランだが、やや記録化が不十分なため細かい形態所見は述べられない。

40号風倒木（縄文時代以降、第303図、図版114）

概要 本風倒木はC区西半部の1号谷の外側、9号溝のコーナー付近に所在する浅い遺構である。

出土遺物は無く、倒木の時期については賈土に黒色土を含むことから完新生の所産とできたと過ぎなかった。

また、倒木の方向を特定することもできなかった

43号風倒木（縄文時代か、第303図、図版114）

概要 本風倒木はC区西半部、1号谷と平坦部を画する9号溝の西側に位置する。

出土遺物は見られなかったが、覆土はロームやローム漸移層土を主体としており、黒色土は若干含まれるだけであったので、縄文時代の早い段階かそれ以前の倒木痕であろうと推定される。

尚、倒木の方向は特定できなかったが、底面の位

2号竪穴状遺構（時期不詳、第304図、図版114）

概要 本遺構はC区中程の調査区南端近くに位置する形態的には竪穴住居に近似した遺構である。

竪穴住居の可能性を考慮して調査に入ったのであるが、形態的に竪穴住居として認識することはできなかった。また、遺構の性格等も特定することはできなかった。

本遺構からの出土遺物は認められず、覆土にも特徴的な状況を見出せなかったため、本遺構の時期を

3号竪穴状遺構（時期不特定、第304図、図版114・121）

概要 本遺構はC区西半部中程、1号道の西側に近接して所在する。本遺跡の竪穴住居との比較から竪穴住居とは異なる竪穴状の遺構として処理したが、平面形態は竪穴住居に近似しており、或いは竪穴住居であった可能性も残される。

本遺構は上述したCp-Cq-30グリッドの小ピット群の中に在り、本遺構にも多くの小ピットが見られたが、多くは本遺構に伴わないと思われるものであり、且つ多くは本遺構より新しいものである。

本遺構の遺構番号の注記された土師器片を中心と

が、遺構形態から南側であった可能性が思慮される。

規模 長径：186cm 短径：130cm 深さ：29cm

構造 本風倒木は一方が圧平される楕円形に近いプランを呈している。

底面は若干丸みを帯び、壁面は開き気味に立ち上がる。

置や壁面傾斜の比較等から北西であった可能性が考慮される。

規模 長径：256cm 短径：225cm 深さ：70cm

構造 本風倒木は円形に近いプランを呈する。

底面は南寄りであり、壁面は東・南・西側へは鋭く立ち上がり、北側へはやや段差を持ち乍ら緩傾斜気味に立ち上がっている。

特定することはできなかった。

規模 長径：372cm 短径：289cm 深さ：32cm

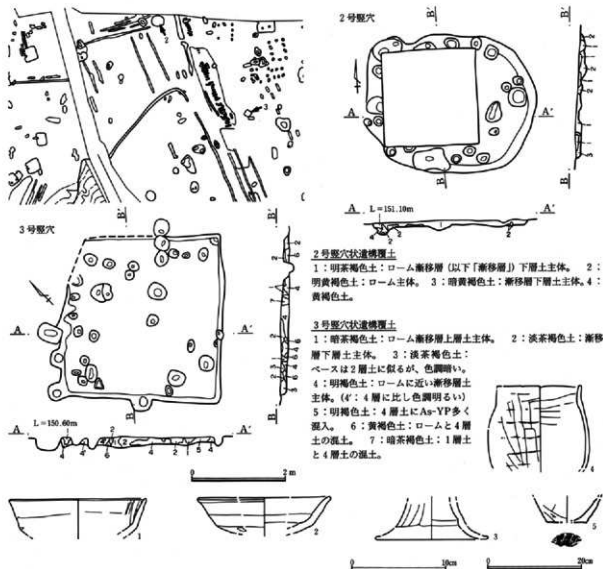
構造 本遺構は概ね楕円形のプランを呈する。

底面は平底を基調としているようであるが、本遺構との新旧関係を特定できない小型のピットが多く見られ、かなり凹凸が見られる。

底面近くしか確認できなかったが、壁面はしっかりと立ち上がっているようである。

する数十片の遺物があるが、その多くは4号竪穴状遺構のものとなる可能性が高い。これは調査段階に於いて後述の4号竪穴状遺構を誤って3号竪穴状遺構として処理し、これを4号竪穴状遺構に訂正した際の作業の不徹底に起因する。本書に於いてこれらを3号竪穴状遺構の出土遺物として掲載しているのは、整理段階でそれに気付くのが遅れたことと、その分離が一部難しいことによる。これらの遺物については4号竪穴状遺構の項(668頁)に述べるが、こうした事情から本遺構の時期の特定は留保したい。

第3章 発見された遺構と遺物



第304図 2・3号竪穴状遺構及び出土遺物

規模 長径：356cm 短径：355cm 深さ：17cm

構造 本遺構はきれいな方形プランを呈する。

掘り方は箱状で、底面は概ね平らであるが竪穴住居の掘り方面のような印象を持つ掘り込みである。

上述のように幾つかのピットが入っているが、本遺構に確実に伴うと判断されるものは無かった。また、カマド等の竪穴住居を示すような構造物は一切認められなかった。

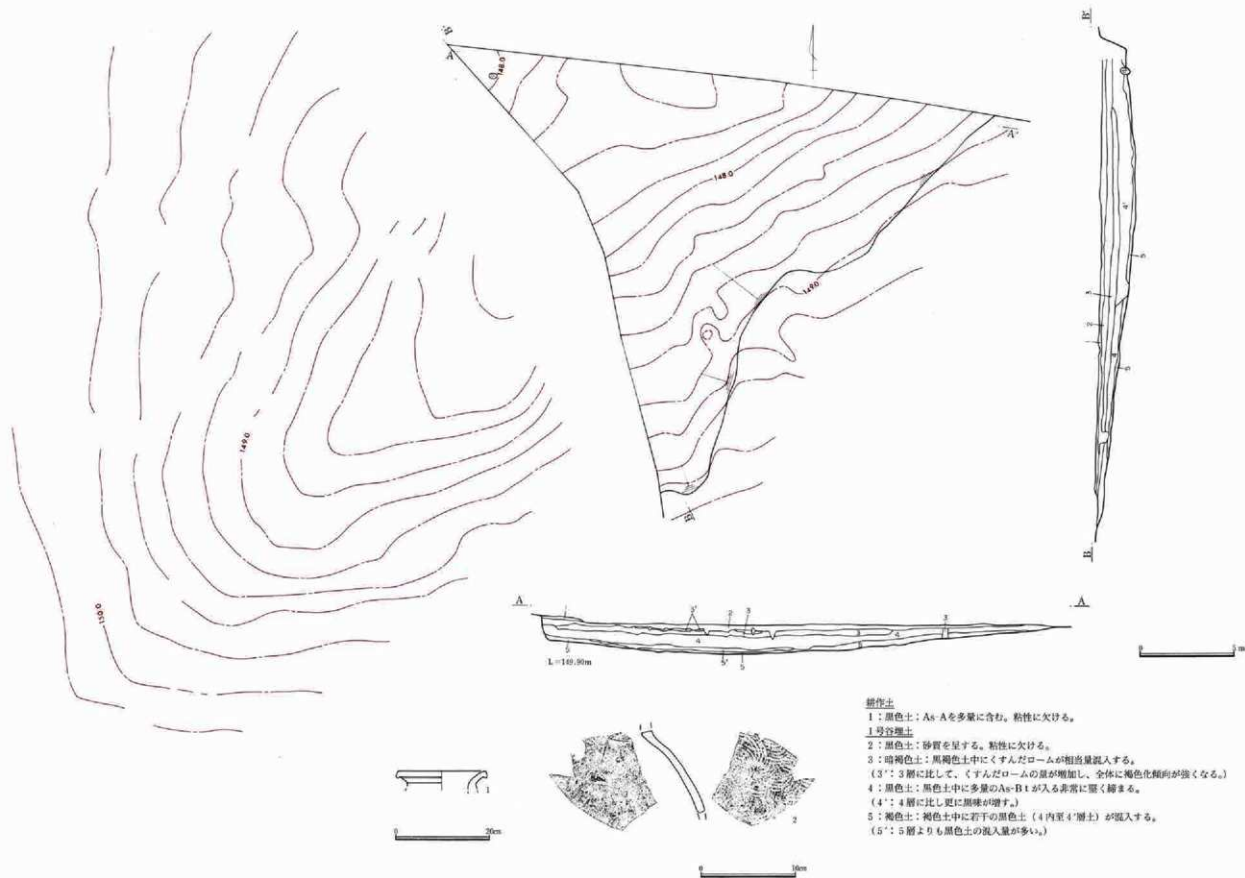
1号谷 (縄文時代～江戸時代, 第305～306図, 図版114・121)

概要 1号谷はC区の中程に北東方向から入り、調査区の半ばまで延びる谷地形である。

この谷地形は現況に於いてもその痕跡を留めており、路線外にあっては北東方向に75m程直線的に延びている。人家があって不明瞭になるが更に55m程延びて下位の段丘に向かって斜面を削り込んでいる

ようである。この痕跡は驟雨がれば雨水が集まって認識されるが、通常はさほど明瞭なものではなく、また地籍の境付近に在るが地籍の境界線は谷地形を反映するものではない。

第4章第2節に示すように、パリオ・サーヴェイ社によるこの谷地形を埋める黒色土(黒ボク土)の



掘作土

1：黒色土：As-Aを多量に含む。粘性に欠ける。

1号谷埋土

2：黒色土：砂質を呈する。粘性に欠ける。

3：暗褐色土：黒褐色土中にくすんだロームが相当量混入する。

(3'：3層に比して、くすんだロームの層が増加し、全体に褐色化傾向が強くなる。)

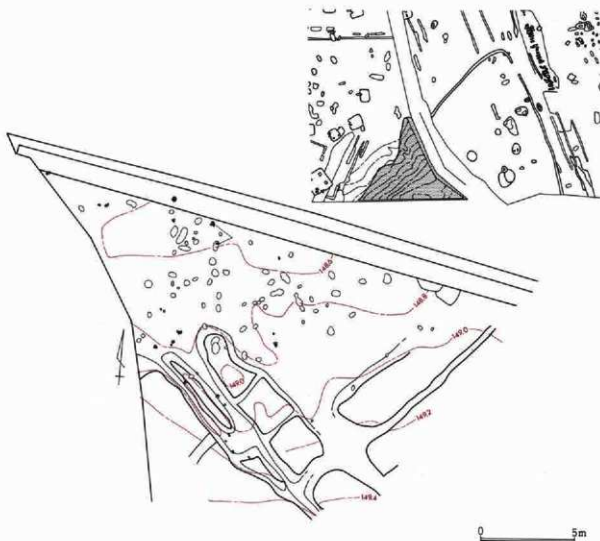
4：黒色土：黒色土中に多量のAs-B1が入る非常に暗く締まる。

(4'：4層に比し更に暗味が増す。)

5：褐色土：褐色土中に若干の黒色土(4内頁4'層土)が混入する。

(5'：5層よりも黒色土の混入量が多い。)

第305図 1号谷及び出土遺物



第306図 1号谷

鑑定所見によれば、この黒色土の形成は約6500年前から7世紀以前にかけて行われたということであり、谷の埋没は縄文時代早期以前に始まり、9号溝の存在から江戸時代後期頃までは1号谷が谷地形として意識されていたことが窺われる。

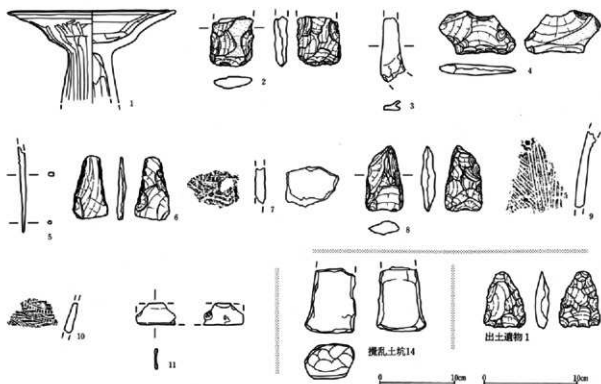
また、1号谷からは土師器・須恵器片を中心とする遺物の出土が見られた。尚、須恵器甕(1,2)を含

むこれらは埋土の1層から出土しており、2層以下からの遺物の出土は見られなかった。

規模 調査範囲：24×28m 深さ：93cm

構造 第305図に示した本谷のルーム上面は緩やかな凹面を形成しているが、第306図に示した黒色土上位には耕作によると思われる北東-南西、北西-南東方向の方眼に規制される凹凸が見られた。

第3章 発見された遺構と遺物



第307図 C区遺構外出土遺物

C区に於ける遺構外出土の遺物 (第307図, 図版121~123)

概要 以上報告した以外にも、C区各グリッド或いは埋土からは土器器片を中心に幾つかの遺物の出土を見ている。

このうち、グリッド取り上げ遺物には前期の縄文土器片(7,9,10)や打製石斧(2)・スクレイパー(4,6,8)など縄文時代の遺物や、7世紀前半期の特徴を

示す土器器の高坏(1)の他、鉄・鋤先(3)や角釘(5)用途不明の破片(11)といった鉄製品も見られた。

この他、視乱土坑からは磁石(14)、また排土からは石鏃(出土遺物-1)やこも編み石(出土遺物-2)などの出土も見られた。

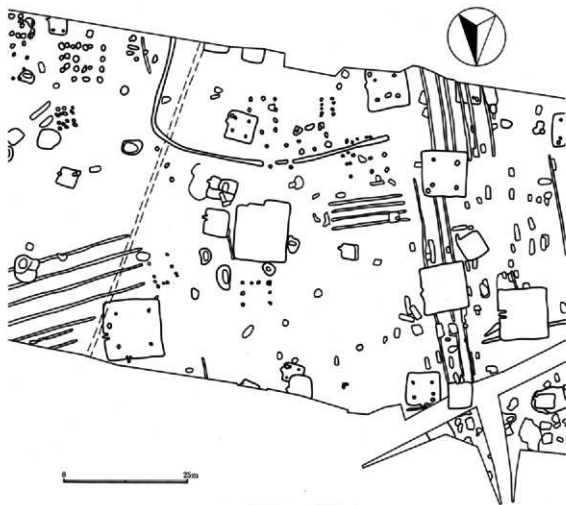
第5節 D区の概要

D区は本遺跡の台地部分の中央付近に在り、東半を中心に本遺跡のピークのレベルを示している。

遺構の分布は小型ピットが区の広い範囲に見られたのを除くとやや散漫な印象を受けるが、特徴的だったのは1辺の長さが8~10mを超える大型の竪穴住居6件が集中して分布すること、東南部を中心に18棟を数える掘立柱建物が見られたことであった。このうち大型の竪穴住居は何れも6世紀後半から7世紀初頭頃の所産と考えられるもので、複数のカマドを有するものも見られた。一方、掘立柱建物はC区西南部に分布したのから続く遺構群で、概ね奈良・平安時代の所産であろうと判断される。

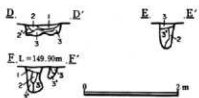
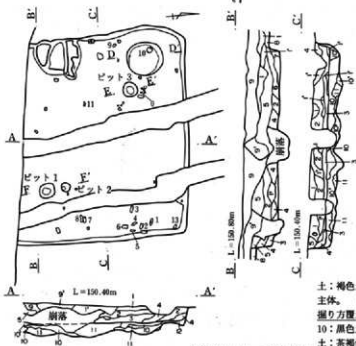
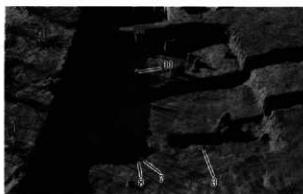
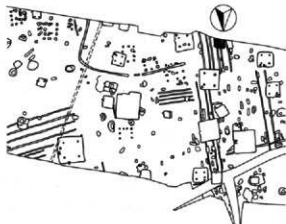
さて、D区で発見・調査された遺構のうち竪穴住居は27軒で、このうち6世紀中葉から西暦600年を前後する時期と判断されたものは11軒、同じく7世紀代のもの3軒、西暦700~800年頃までのもの3軒、9世紀後半から西暦900年を前後する時期のもの4軒、10世紀後半期のもの1軒他、6世紀代のもの1軒、平安時代のもの3軒を数えた。

掘立柱建物は上述の通りであるが、これと同時期と思われる溝遺構1条があり、土坑は古代以前のもの19基、地下式坑1基を数え、この他多数のピットも見られた。また、完新生後半の倒木を中心とする風倒木痕は13基を調査した。



第308図 D区全体図

第6節 D区の遺構と遺物



柱穴・貯蔵穴覆土
 1: 暗黒褐色土主体。 2: 暗黒褐色土・褐色土多量に含む。(2': 褐色土減少) 3: 暗褐色土・暗黒褐色土と褐色土の混土。(3': 褐色土増加)

耕作土・地山層土
 9・9': 黒色土: As-A主体。 8: 暗褐色土: ローム層移層土。

住居覆土
 1・1'・6・7: 暗黒褐色土主体。 2: 暗黒褐色土・褐色土相当量混入。 3: 暗褐色土・暗褐色土と黒色土の混土主体。 4: 黒褐色土主体。 5: 黒褐色土。

掘り方覆土
 10: 黒色土: 褐色土多量に混入。(10': 褐色土大量) 11: 暗茶褐色土: 茶褐色土主体。 12: 暗褐色土・暗褐色土と褐色土の混土。

第309図 H-113号住居

H-113号住居 (古墳時代後期~平安時代, 第309~310図, 図版124・140・162)

概要 本住居はD区西部の調査区南側に位置する、D区に於いては小型の竪穴住居跡である。

住居南部は路線外に出ていて調査できなかった。

出土遺物の中で本住居に伴うと判断されたものには石製の紡錘車(0)とこもろみ石(1~9)がある。

一方、覆土中からは古墳時代後期から奈良時代頃にかけての土師器片を中心に7世紀後半期の特徴を持つ土師器片(10)の他、不定形石器(11)やこもろみ石(12,13)も見られた。

このような状況のため出土遺物からの時期特定で

きず、カマドを伴うことから僅かに古墳時代後期から平安時代の範囲で捉えられるに過ぎない。

規模 長軸: 444cm 短軸: 360cm以上 深さ: 34cm

カマド 幅: 101cm 奥行き: 94cm 左袖 幅:

35cm 長さ: 70cm 高さ: 19cm 右袖 幅: 34cm

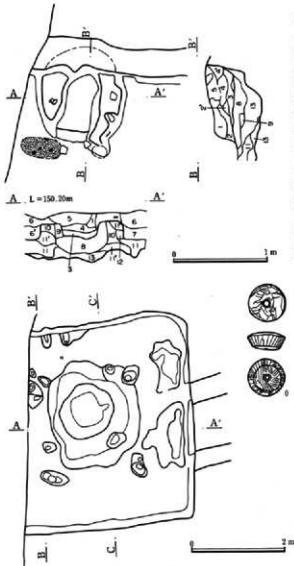
長さ: 87cm 高さ: 17cm 燃焼部 径: 28×72cm

ピット1 径: 34×29cm 深さ: 56cm ピット2

径: 20×18cm 深さ: 25cm ピット3 径: 32×

31cm 深さ: 52cm

貯蔵穴 径: 78×72cm 深さ: 21cm



カマド覆土

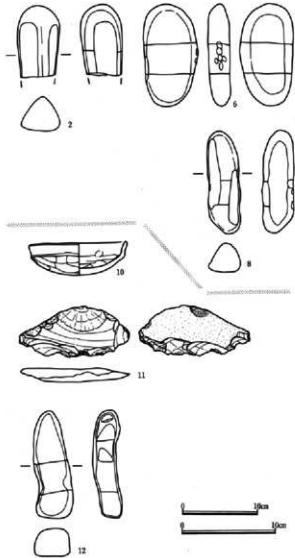
1：暗褐色土：淡褐色土粒を若干量含む。 2：暗黒褐色土：殆ど夾雑物は見られないが、微量のくすんだ赤褐色土ブロックが散見される。(2'：2層に1層で見られた淡褐色土粒が少量混入。) 3：暗黒褐色土：くすんだ赤褐色ブロック、炭化物、淡褐色土粒がそれぞれ多量に含まれる。 4：暗黒褐色土：くすんだ焼土ブロックと炭化物を主体的に含む。(4'：暗黒褐色土：少量の焼土ブロックと炭化物を含む。) 5：暗褐色土：多量の淡褐色土粒と微量の焼土粒を含む。 6：暗黒褐色土：淡褐色土粒を微量に含む。(6'：殆ど夾雑物を含まず。)

袖構築材

9：暗赤褐色土：焼土ブロックと暗黒褐色土の強土。 10：暗黒褐色土：白色粒子・褐色粒子微量を含む。 11'：暗黒褐色土：焼土ブロックが少量混入する。

掘り方覆土

7：暗褐色土：淡褐色土粒と焼土粒が微量見られる。 8：暗赤褐色土：焼土粒・焼土ブロック主体土に黒色土・黄褐色土が若干量混入する。 11：暗黒褐色土：暗黒褐色土中に黄褐色土ブロックが少量混入する。 12：淡褐色粘質土。 13：暗黒褐色土：褐色土と黒色土の強土。



床下土坑 径：119×104cm 深さ：12cm

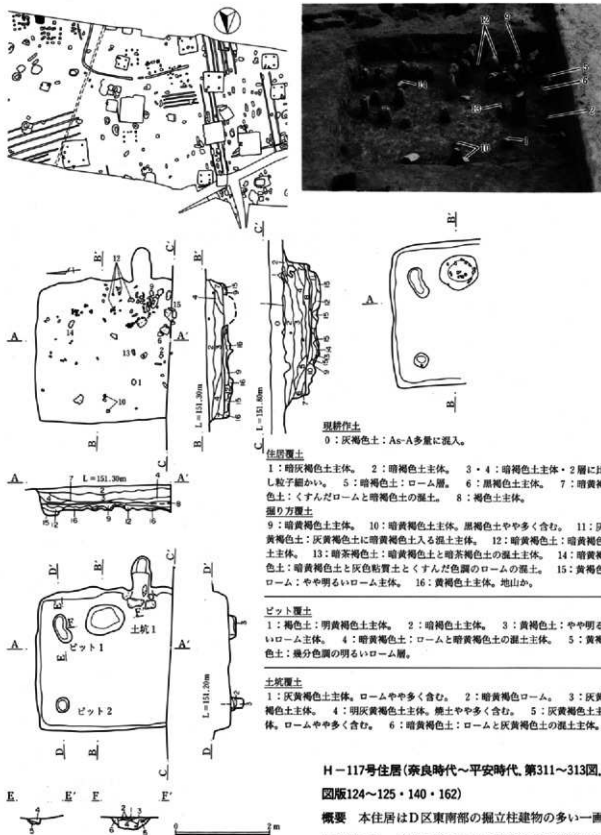
構造 本住居は方形プランを呈すると思われる。

本住居は幅80～140cm、深さ数cmを測る周溝状の掘り込みが廻り、中央の方形の掘り残し部に床下土坑の掘削される掘り方を有する。床面はこれを黒色土・暗褐色土・褐色土等で埋め戻して造っている。

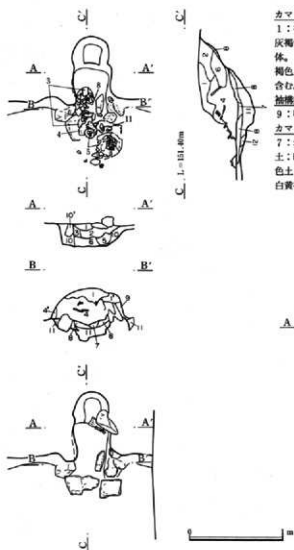
カマドは珍しい西カマドで、浅い掘り方を持ち、これを黒色土や焼土等種々の土壌で埋め戻して燃焼面を造る。燃焼部は西壁の内側に置かれ、燃焼面の両側に焼土と暗黒褐色土で袖を造り上げている。

床面にはピットと貯蔵穴を見たが、ピット1・2本住居との関係特定できず、ピット3は主柱穴の可能性を持つ。貯蔵穴はカマド右側に掘削される。

第310図 H-113号住居遺構及び出土遺物



第311図 H-117号住居



第312図 H-117号住居カマド及び掘り方

出土遺物の内、本住居に伴うと判断された遺物には8世紀後半期の特徴を示す須恵器環(1,2,8)や土師器の壺(4)・台付壺(11)、9世紀前半期のもっと判断される土師器壺(3,5)があり、この他男瓦(6)やこも編み石(7)が見られた。

一方、覆土中からは奈良・平安期の土師器壺片を中心とする多数の遺物が出土したが、この中には7世紀後半期のもと思われる須恵器の環(10)や平瓶(12)、8世紀後半期の須恵器の高台付環(9)が見られた他、こも編み石(13~15)や鐵と思われるものを含む鉄製品(16,17)なども見られた。

以上の点から本住居は概ね西暦800年前後する時期の所産として捉えられよう。

カマド覆土

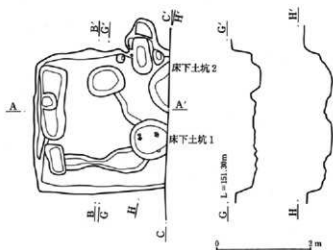
1: 褐色土: 白色砂・ローム僅かに混在し、暗灰褐色土層僅かに含む。(1': 暗灰褐色土殆ど無し。) 2: 暗灰褐色土: 褐色土等僅かに含む。 3: 褐色土主体。 4: 褐色土: 焼土等僅かに含む。(4': 4層土にローム混入。) 5: 赤褐色土: 赤褐色土主体。暗灰褐色土僅かに含む。 6: 褐色土: 焼土粒僅かに含む。

捨焼土層

9: 明黄褐色土: 明黄褐色土に暗黄褐色土入る混土。焼土等僅かに含む。

カマド掘り方覆土

7: 赤褐色土: 焼土。 8: 暗赤褐色土: 焼土やや多く散在。 10: 暗黄褐色土: 暗黄褐色土に明黄褐色土入る混土主体。焼土等僅かに混入。 11: 灰黄褐色土: 灰黄褐色土と暗黄褐色土の混土。焼土・白色粘土等僅かに含む。 12: 白黄褐色粘質土: ローム等僅かに含む。



規模 長軸: 284cm以上 短軸: 308cm 深さ: 33cm

カマド 幅: 87cm 奥行き: 95cm 左袖 幅: 29cm 長さ: 27cm 高さ: 33cm 右袖 幅: 27cm 長さ: 推定33cm 高さ: 31cm 燃烧部 径: 38×60cm 煙道 幅: 38cm 長さ: 34cm カマド掘り方 径: 42×79cm 深さ: 13cm

ピット1 径: 64×30cm 深さ: 15cm ピット2 径: 31×28cm 深さ: 25cm

土坑1 径: 84×64cm 深さ: 25cm

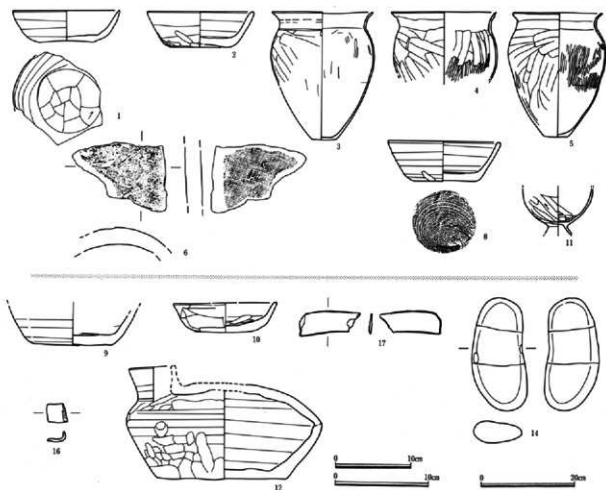
床下土坑1 径: 85×87cm以上 深さ: 12cm

床下土坑2 径: 82×94cm以上 深さ: 15cm

構造 上述のように本住居はその南部を調査できなかったので全体の状況は明らかではないが、プランは凡そ方形を呈していたものと想定される。

掘り方を有し、北壁際と西壁より50cm程内側に深さ10cm以下の溝様の掘削が見られたが、その掘削に全体的な規格性は認められなかった。カマド手前

第3章 発見された遺構と遺物



第313図 H-117号住居出土遺物

当たる調査区際には2つの床下土坑が東西に並ぶように見られたが、このうち西側の床下土坑2の底面には暗黄褐色土と灰色粘質土が付着するように堆積するのが認められた。床面はこのような構造を持つ掘り方を暗黄褐色土等で埋め戻して造っている。

カマドは東カマドである。縦長の隅丸方形のプランを持つ掘り方を有し、これを焼土を含む土壌で埋め戻して焼面を造っている。焼焼部は東壁を跨ぐように造られ、東壁際に竈を立てて袖石としてい

る。袖はこの袖石を包むように明黄褐色土等で造っている。カマド部分の竈の出土状況から袖石の上には板状の天井石を載せていたことが分かる。煙道は焼面から数cm上から若干の傾斜を持って20cm程掘り進めてから垂直に立ち上げている。

床面に於いては幾つかの掘り込みを見た。このうちビット1は小型のビットが2つ重なったもので、ビット2と共に位置的には支柱穴となる可能性を持つ。また、土坑1は貯蔵穴かとも思われる。

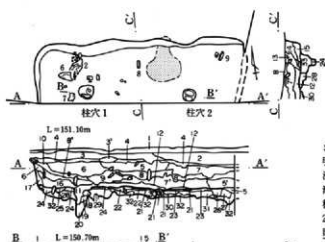
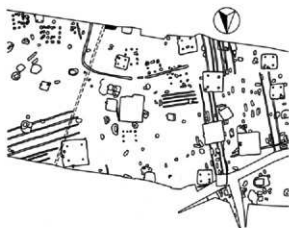
H-118号住居(古墳時代後期か、第314~315図、図版125・141・162)

概要 本住居はD区中部の調査区南端部に位置する竪穴住居跡である。

本住居はその過半が路線外に出ており、東壁も甘藷用水の敷設時に壊されているためその一部しか調査できなかったが、北側の柱穴を確認できた。ま

た東寄りの床面から北壁面にかけて幅74cm、奥行き98cmを測る焼土面を確認し、焼土化の見られる覆土の状況と併せてカマドの痕跡と判断した。

本住居からは古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての土師器を中心に、6世紀後半期の特徴を



柱穴遺土

1: 淡茶褐色土: 下層土中心のローム漸移層土 (以下「漸移層土」) 主体。 2: 黒褐色土: 黒色土と漸移層土の混土。(2': 2層に似るがローム混入。) 3: 暗褐色土: 2層土にローム・As-YPや多く混入。 4: 暗黄褐色土: ロームと漸移層土の混土主体。 5: 暗茶褐色土: 漸移層土に黒色土等混入。

耕作土及び埋土

1: 茶褐色土: 昭和63年頃の耕作土。 2: 甘泉用水の水道管敷設時の埋土。 3: 暗褐色土: As-A含む耕作土。(3': 3層土に4層土混入。) 4: 茶褐色土: ローム漸移層 (以下「漸移層」) 上層土As-A混入。

住居遺土

5: 暗褐色土/7: 茶褐色土: 漸移層上層土主体。(5': As-YPや焼土等多く含む。 7': ローム多く含む。) 6: 黒褐色土/11: 黒色土/19: 茶褐色土: 黒色土と漸移層上層土の混土主体。 8: 黒色土: 黒色土主体。 9: 淡茶褐色土/14: 茶褐色土: 漸移層土主体。 10: 褐色土: 4層に似るがAs-A含まない。 12: 淡茶褐色土: 漸移層土主体。ロームやや多し。 13: 明茶褐色土: 下層中心の漸移層土主体。 15: 明褐色土: ローム、淡褐色シルトと下層中心の漸移層土の混土主体。 16: 茶褐色土: 漸移層土主体。As-YPや多く含む。 17: 暗褐色土: 黒色土と漸移層土の混土主体。 18: 茶褐色土: 上層中心の漸移層土主体。 20: 暗黄褐色土: ローム・漸移層土・黒色土の混土。

埴り床

21: 暗赤茶褐色土: 焼土化やや速人だ上層中心の漸移層土主体。 22: 黒褐色土: 黒色土と漸移層土の混土主体。 23: 黄褐色土: ローム主体。 24: 茶褐色土: 上層中心の漸移層土主体。 25: 黄褐色土: ロームと下層中心の漸移層土の混土主体。

掘り方覆土

26: 暗茶褐色土: ベース5'層土に近い。 27: 暗黄褐色土: 漸移層土主体。 28: 暗黄褐色土/30: 黄褐色土: ロームに漸移層土と黒色土多く入る。 29-31: 黄褐色土/32: 明黄褐色土: ローム主体。 33: やや橙色掛かった黄褐色土: やや焼土化見る漸移層土主体。

第314図 H-118号住居

示す土師器壺(2,6)や西暦700年を前後する時期の土師器の小型壺(3,4)や胴張壺(5)、8世紀前半期の所産と判断される土師器坏(1)の他、こも編み石(7~9)などの出土が見られたが、確実に本住居に伴うと判断されるものは認められなかった。

以上のように本住居に伴う遺物が無かったため時期の特定には至らなかったが、廃棄後の住居は6世紀後半期と8世紀前半期に土器の投棄が行われたことが窺われることから、本住居は6世紀代(6世紀後半以前)の所産と推定され、少なくとも奈良時代まではその痕跡を留めていたことが想定される。

規模 長軸: 452cm以上 短軸: 140cm以上 深さ: 36cm

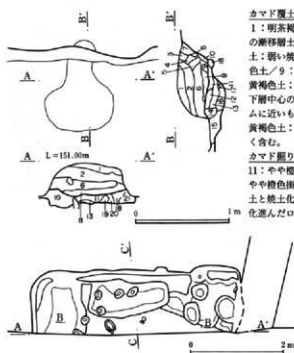
カマド 燃焼部推定径: 74×50cm

柱穴1 径: 31×28cm 深さ: 38cm 柱穴2 径: 27×25cm 深さ: 15cm

構造 本住居は上述のようにその過半を調査できなかったため全体状況はつまびらかではないが、プランは概ね隅丸方形を呈するものと思慮される。

掘り方を有し、残存部の状況を見ると壁際には幅22cm以下のテラスを伴う幅38~110cm、深さ12cm以下の周溝状の掘り込みが廻るようである。掘り方に

第3章 発見された遺構と遺物



カマド覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

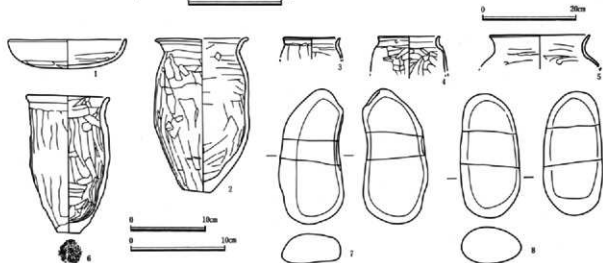
1: 明茶褐色土: 漸移層下層土主体。 2: やや赤味の掛かった茶褐色土: 下層中心の漸移層土主体。 Aa-YP・ローム・焼土をやや多く含む。 3: 赤味掛かった茶褐色土: 弱い焼土化見る漸移層土主体。 焼土多く混入。 4: やや赤味の掛かった暗茶褐色土/9: 明茶褐色土: 弱い焼土化見る上層中心の漸移層土主体。 焼土等含む。 5: 黄褐色土: ロームに焼土等混入。 6: 赤味の掛かった明茶褐色土: 弱い焼土化見る下層中心の漸移層土主体。 焼土等混入。 7: 橙色掛かった黄褐色土: 焼土化見るロームに近いもの中心の漸移層土焼土化。 焼土やや多く含む。 8: やや赤味の掛かった黄褐色土: 5層に似るが全体に弱く焼土化。 10: 黄褐色土: 5層に近いがローム多く含む。

カマド掘り方

11: やや橙色掛かった明茶褐色土: 焼土化見る漸移層土と黒色土の混土主体。 12: やや橙色掛かった黄褐色土: 焼土の入るローム主体。 13: 橙色掛かる黄褐色土: 焼土と焼土化見る下層中心の漸移層土にローム等混入。 14: 暗赤茶褐色土: 焼土化混んだロームまたは漸移層下層土主体。 15: やや橙色掛かった暗茶褐色土: 14層土とロームの混土主体。 16: 黒色土主体。 17: 橙色掛かった暗茶褐色土: 13層土と16層土の混土。 18: 暗黄褐色土/19: 黄褐色土: ローム主体。 20: 黒色土: ローム多く混入。

住居掘り方覆土

21: 明黄褐色土: ローム主体。



第315図 H-118号住居遺構及び出土遺物

この他にも幾つかの小ピットが見られるが、床面はこうした構造を持つ掘り方をロームやローム漸移層土等で埋め戻し、その上にローム漸移層上層土を中心とする土壤で貼り床を施している。

カマドは北カマドであり、北壁のやや東寄りに造られていた。掘り方を有し、これを焼土を含むローム

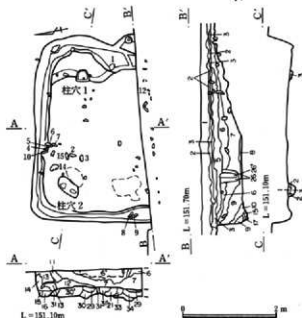
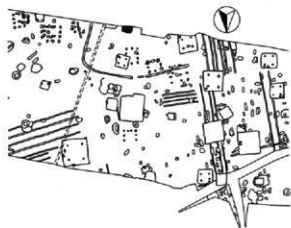
ムやローム漸移層土等種々の土壤を用いて埋め戻し、燃焼面を造っている。床面の焼土面は凡そ燃焼部の範囲を示すものと推定されるが、その範囲は北壁の内側に限られている。

床面に於いては支柱穴と思われるピット2カ所を確認したが、何れも径は小さく、掘り込みも浅い。

H-119号住居 (古墳時代後期～奈良時代、第316～317図、図版125・141・162)

概要 本住居はD区中部の調査区南端、H-118号住居の西に近接して所在する竪穴住居跡である。

本住居の南半は路線外に在って調査できなかった。



耕作土

1: 現耕作土。 2: 茶褐色土: ローム漸移層(以下「漸移層」)上層土と1層土の混土。 3: 茶褐色土: H-118-4層に比定。

住居覆土

5: 茶褐色土/8: 黒褐色土/9・12: 暗茶褐色土: 漸移層上層土主体。 6・6': 暗茶褐色土: 漸移層上層土主体。 As-YPややまし。 7: 暗褐色土: 漸移層上層土主体。 黒色土・ローム等やや多く含む。 8: 黒褐色土: 黒色土に近い漸移層上層土主体。 11: 暗茶褐色土: 黒色土に近いもの中心の漸移層上層土主体。 12: 茶褐色土/14-17: 淡茶褐色土: 漸移層土主体。 15: 明褐色土: ロームに近いもの中心の漸移層土主体。 16: 暗褐色土: 上層中心の漸移層土主体。

住居層重後の柱穴覆土

26・26': 暗褐色土: 漸移層上層土主体。

住居掘り方覆土

22: 暗黄褐色土/21: 黄褐色土/34: 明黄褐色土: ローム主体。 30・30': 暗褐色土: 上層中心の漸移層土主体。 34・34': 黄褐色土: ロームと漸移層土の混土。 33: 暗茶褐色土/

柱穴覆土

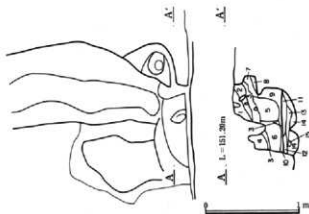
1: 茶褐色土: 漸移層上層土主体。 2: 暗褐色土: 黒色土と漸移層上層土主体。 3: 黄褐色土: 黒色土・漸移層土・ローム。

カマド覆土

1・2・6: 茶褐色土: 上層中心のローム漸移層土(以下「漸移層土」)主体。 3: 淡茶褐色土: 2層に近似し乳白色シルトやや多く混入。 4: 黒褐色土: 黒色土に乳白色シルト混入。 5: 乳白色シルト主体。 7: 淡茶褐色土: 3層に近い。 8: 淡茶褐色土: 7層に似るがロームやや多く混入。 9・10: 淡茶褐色土: 7層に似るが5層土混入。

住居掘り方覆土

11・12: 暗黄褐色土: ロームに近いもの中心の漸移層土主体。 13: 淡茶褐色土: 漸移層土主体。 14: 明黄褐色土: ローム主体。 15: 淡茶褐色土: 漸移層土と5層土主体。



第316図 H-119号住居及びカマド

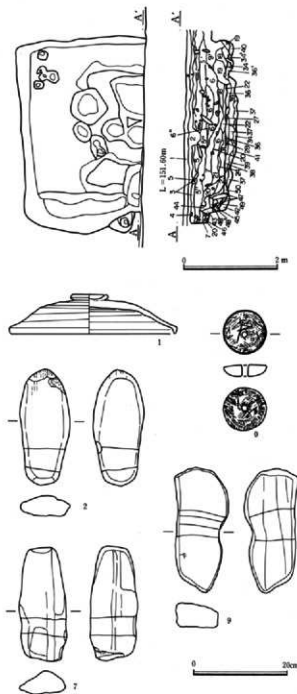
本住居に伴うと判断された出土遺物には西暦700年を前後する時期と考えられる須恵器蓋(1)の他、紡錘車(0)やこも編み石(2~9)が見られた。

一方、覆土中からは古墳時代後期~奈良・平安期

の土師器甕片を中心に6世紀後半~7世紀前半期段階の須恵器の蓋(10)や坏(11)、土師器甕(12、13)の他、こも編み石(14~16)などが見られた。

以上の遺物から、本住居は西暦700年を前後する時

第3章 発見された遺構と遺物



第317図 H-119号住居掘り方及び出土遺物

期の所産と判断され、住居廃棄後早い段階に遺物の投棄が始まったと推定される。

規模 長軸：394cm 短軸：256cm以上 深さ：40cm
 カマド 煙道 幅：63cm 長さ：36cm
 柱穴1 径：28×24cm 深さ：9cm 柱穴2 径：50×27cm 深さ：20cm

(第316図の耕作土・住居覆土・住居掘り方覆土の注記参照のこと)

住居覆土

5'：5層に近くAs-A係かに含む。5''：5層に近いが色調弱い。
 6''：6層に近いが混入物少ない。9'：9層に似るがAs-YP少ない。
 6''層に似るが黒色土に近い漸移層土やや多く含む。19：黒褐色土。
 9'層に近いがローム等少ない。20：淡茶褐色土；下層中心の漸移層土主体。
 21：黒褐色土；漸移層土主体。22：暗茶褐色土；上層中心の漸移層土主体。
 23：明茶褐色土/24：茶褐色土/46：暗茶褐色土；固く焼土化する漸移層土主体。

貼り床

27：黄褐色土；36層に似る。28：明茶褐色土；漸移層土主体。

掘り方覆土

36-38'/40-41：茶褐色土；明黄褐色土；上層中心の漸移層土主体。
 37・38：黄褐色土/39：暗黄褐色土；ローム主体。42：暗黄褐色土；漸移層下層土主体。

カマド覆土

42：淡茶褐色シルト；弱い焼土化見る。44：淡茶褐色シルト主体。
 45：乳茶褐色シルト主体。47：茶褐色土/48：明茶褐色土；上層中心の漸移層土主体。極く弱い焼土化見る。(48'：焼土化進行)。
 49：明褐色焼土主体；45層土と焼土の混生。

カマド掘り方覆土

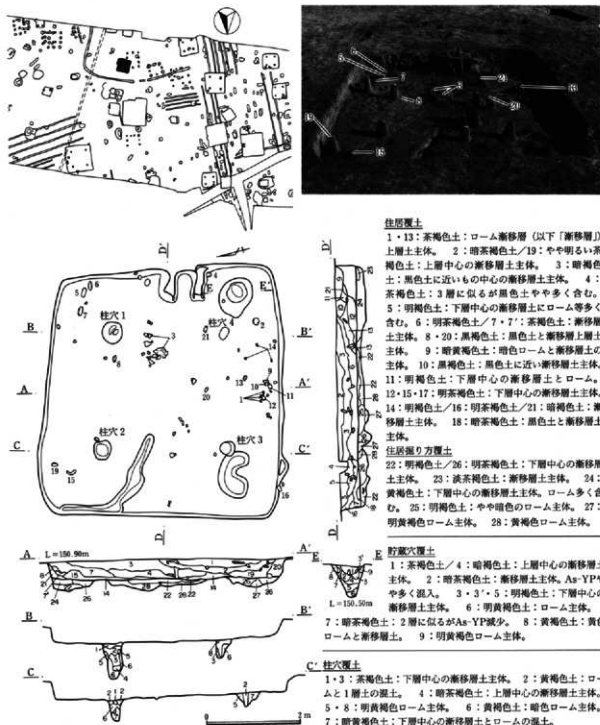
47'：47層に似る。50：暗褐色土。

構造 本住居はその南半部を調査できなかったが、そのプランは方形ををするものと思われる。

東壁際に幅54cm以下、深さ18cm以下を測る周溝状の掘り込み、住居中央には径35～72cm、深さ10cm未満の大小の土坑7基以上が掘削される掘り方を有する。床面は掘り方をロームやローム漸移層土で埋め戻し、ローム漸移層土を用いて貼り床を施している。

カマドは東カマドであるが破壊されており、袖等を確認する事はできなかった。カマドは掘り方を有しこれをローム漸移層土で埋め戻して燃焼面を造っている。燃焼部は壁の内側に設定され、煙道は短い。

床面では北側の柱穴2基を確認することができた。柱穴1は2基のビットからなる。尚、柱穴は何れも掘り込みは浅く、径は小さい。



第318図 H-120号住居

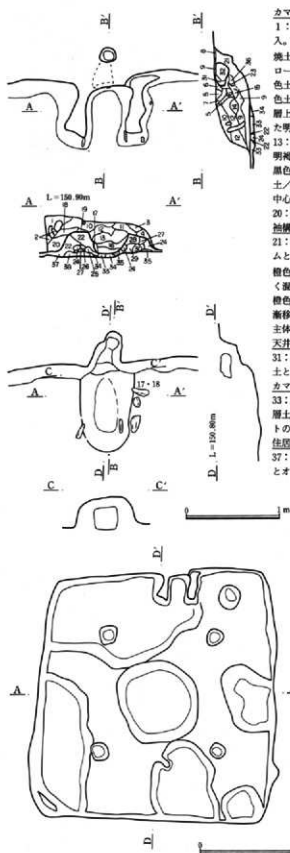
H-120号住居（古墳時代後期，第318～320図，図版125～126・141・142・163）

概要 本住居はD区中南部、後述の11号溝の内側に位置するD区に於いては小型の整穴住居跡であり、7号掘立柱建物と重複してこれに切られている。

本住居の出土遺物の内、本住居に伴うと判断され

た遺物には7世紀前半期の特徴を示す土師器坏（1、2）、同じく6世紀後半期の土師器櫃（3）や6世紀代の土師器小型壺（4）、そしてこも編み石（5～12）が見られた。

第3章 発見された遺構と遺物



第319図 H-120号住居カマド及び掘り方

カマド覆土 (以下「ローム漸移層土」は「漸移層土」とする)

- 1: 明茶褐色土: 漸移層土主体。
- 2: 茶褐色土: 1層に似るがAs-YP多く混入。
- 3・5: 明褐色土: 下層中心の漸移層土主体。
- 4: 明茶褐色土: 弱い焼土化見る漸移層土主体。
- 6: 暗茶褐色土: 下層中心の漸移層土に黒色土・ロームのAs-YPやや多く混入。
- 7: 赤味掛かった茶褐色土: 漸移層土に黒色土・ローム・As-YPやや多く混入。極く弱い焼土化見る。
- 8: 淡赤茶褐色土: 焼土化見る漸移層土主体。
- 9: 暗赤褐色土: 焼土化見る黒色土と漸移層土主体。
- 10: 暗茶褐色土: 漸移層土層土主体。
- 11: やや赤味掛かった明茶褐色土: 漸移層下層土主体。弱い焼土化見る。
- 12: 明褐色土主体。
- 13: 黒褐色土: 7層土ベースに黒色土やや多く混入。
- 14: やや赤味掛かった明褐色土: 弱い焼土化見る漸移層下層土とロームの混土。
- 15: 暗赤褐色土: 黒色土・漸移層土・ロームの混土。焼土化見る。
- 16: 赤味掛かった明茶褐色土/17: 赤味掛かった黄褐色土: 焼土とロームの混土。
- 18: 黄褐色土: 下層中心の漸移層土とロームの混土主体。
- 19: 明褐色土: 7層土と18層土の混土。
- 20: 明茶褐色土: 上層中心の漸移層土主体。

地盤築材

- 21: 淡褐色土: ローム。焼土化進行。
- 22: 暗茶褐色土主体。漸移層土にロームと黒色土やや多く混入。
- 23: 明褐色焼土。
- 24: 明黄褐色ローム。
- 25: 橙色掛かった明褐色土: 焼土化進んだ漸移層下層土に焼土化見るロームやや多く混入。
- 26: 橙色掛かった暗黄褐色土: 22層土と25層土の混土。
- 27: やや橙色掛かった明褐色土: ロームと漸移層土主体。弱く焼土化。
- 28: 茶褐色土: 漸移層土主体。
- 29: 弱く橙色の掛かった明黄褐色土: 弱い焼土化見るローム主体。
- 30: 明褐色土: 漸移層下層土主体。

天井構築材

- 31: 暗茶褐色土: 漸移層土主体。
- 32: 暗褐色土: 焼土化進む漸移層土。焼土とAs-YPやや多く混入。

カマド掘り方覆土

- 33: 黒褐色土: 黒色土主体。弱い焼土化見る。
- 34: 暗褐色土: 32層土と33層土の混土。
- 35: 明黄褐色土: ロームに焼土混入。
- 36: 暗褐色土: シルトの焼土化したらしい暗紫色の焼土と明褐色焼土の混土。

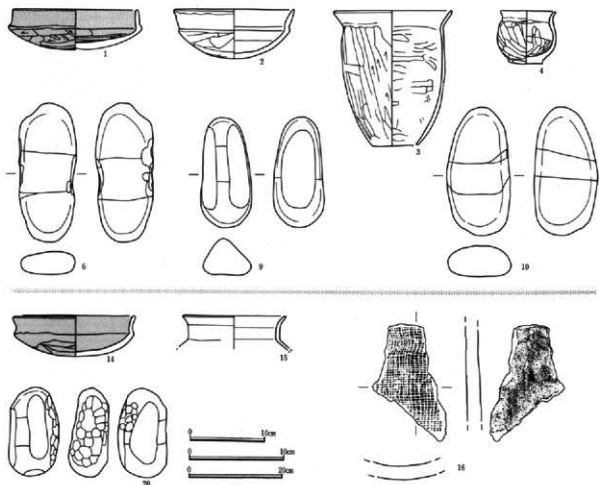
住居掘り方覆土

- 37: 橙褐色土: 焼土主体。21層土に似る。
- 38: 淡黄褐色土: 淡い黄色ロームとオリーブ色の掛かるローム主体。

一方、覆土中からは各種の土器器片を中心に、7世紀前半期の特徴を示す土器器環(14)、同じく6世紀後半期の土器器環(15)の他、女瓦(16)、磨石(20)、台石(13)、こも編み石(17~19, 21)などの出土が見られた。

以上の遺物の状況から、本遺跡は西暦600年を前後する時期の所産と判断され、また、覆土中の遺物の状況から住居廃棄後比較的早い段階から埋没が始まり、少なくとも奈良時代頃までは住居の痕跡が残っていたことが窺われる。

規模 長軸: 516cm 短軸: 442cm 深さ: 40cm
 カマド 幅: 102cm 奥行き: 107cm 左袖 幅: 38cm 長さ: 70cm 高さ: 22cm 右袖 幅: 35cm 長さ: 73cm 高さ: 21cm 燃烧部 径: 32×60cm
 煙道 幅: 8~23cm 高さ: 8~25cm 長さ: 44cm
 カマド掘り方 径: 57×94cm 深さ: 5cm
 柱穴1 径: 46×45cm 深さ: 87cm 柱穴2 径



第320図 H-120号住居出土遺物

：41×36cm 深さ：61cm 柱穴3 径：34×30cm

深さ：77cm 柱穴4 径：41×34cm 深さ：48cm

貯蔵穴 径：84×66cm 深さ：71cm

周溝 幅：12cm 深さ：8cm

床下土坑 径：180×167cm 深さ：14cm

構造 本住居は隅丸方形のプランを呈する。

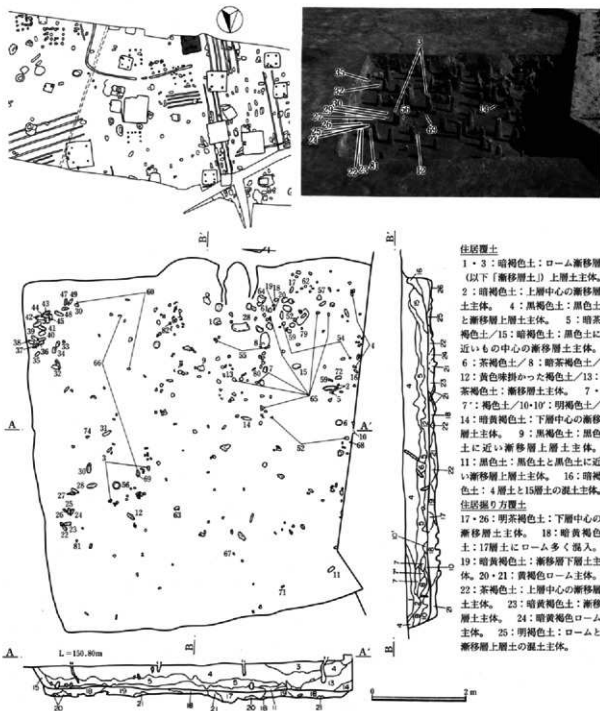
掘り方を有し、掘り方の中央には浅い掘り込みの大きな床下土坑が掘られ、東壁際の北半にも径326×180cm、深さ11cm、北壁際西半に径282×100cm、深さ15cm、西壁際に径145×160cm、深さ11cm、南西コーナーに径85×37cm、深さ15cm、南壁際中央に径144×107cm、深さ19cmの土坑様の掘削が見られた。床面は、こうした構造を持つ掘り方をロームやローム漸移層土で埋め戻して造っている。

カマドは東カマドで東壁のやや南寄りに造られる。掘り方を有し、その手前寄りの左右に板状の礎を立

てて袖石としている。燃焼面はカマド掘り方を黒色土・ローム漸移層土・ローム・シルト等各種の土で埋め戻して造っている。燃焼部は東壁の手前側に設けられ、その両側に袖石を包み込むように奥に向かって黒色土・ローム漸移層土・ローム・焼土等を用いた袖を造っている。煙道の遺存状況は良好で天井部分も残されていたが、燃焼面より10cmの高さから東壁を20cm程掘り込んだ後、垂直に延ばしている。尚、天井材はローム漸移層土で造られていた。

床面に於いては一部攪乱も見られたが、主柱穴4基と貯蔵穴1基を確認している。このうち柱穴は径は小さいがしっかりした掘り込みを持ち、断面観察から柱の径は15cm程と推定される。貯蔵穴はカマド右側に掘削され、下半部は径46×42cmを測り、上半部で広がっている。また、西壁際の北半部には周溝も確認している。

第3章 発見された遺構と遺物

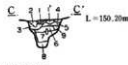
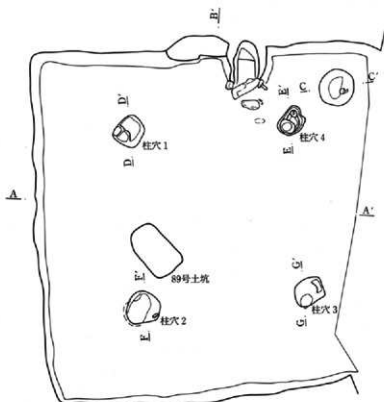


第321図 H-121号住居

H-121号住居(古墳時代後期。第321～325図。図版126・141～143・163)

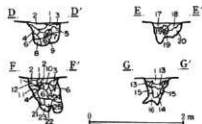
概要 本住居はD区中程の調査区南端に所在するD区に於ける大型の竪穴住居跡のうちの1軒である。南部が路線外に出て調査することができなかった。また、89号土坑が床面に切り込んでいる。

出土遺物は多く見られたが、このうち本住居に伴うと判断された遺物には6世紀前半期から7世紀前半期の特徴を示す土師器の坏(1, 3, 6, 7, 0, 4, 5, 56)や、6世紀後半～7世紀前半にかけての土師器の甕



貯蔵穴覆土

1・1': 茶褐色土/2: 褐色土: ローム漸移層土 (以下「漸移層土」) 主体。 3: 暗黄褐色土: 漸移層土主体。ローム・As・YPや多く含む。 4: 明褐色土: 下層中心の漸移層土にローム・As・YP 多く混入。 5: 暗茶褐色土: 上層中心の漸移層土主体。 6: 暗褐色土: 黒色土に近いもの中心の漸移層土主体。 7: 黒褐色土: 黒色土と漸移層上層土の混土主体。 8: 茶褐色土: ロームに近い漸移層下層土主体。 9: 褐色土: 6層土ベースにローム・漸移層下層土多く混入。



柱穴覆土 (24・25層は別遺構の可能性あり)

1・13: 茶褐色土: ローム漸移層土 (以下「漸移層土」) 主体。 2・21・22: 暗黄褐色土/8: 暗褐色土/10: 暗黄褐色土: 漸移層下層土主体。 3・4・7: 黄褐色土/20・24/23: 明褐色土: 明黄褐色土: ローム主体。 5・19: 暗黄褐色土/6: 茶褐色土/11: 明茶褐色土/25: 淡茶褐色土: ロームと漸移層下層土主体。 9: 明黄褐色土。 12: 黄褐色土: ロームと1・2層土主体。 14: 暗茶褐色土/15: 茶褐色土: 上層中心の漸移層土主体。 16: 黒褐色土: 漸移層上層土主体。 17: 淡茶褐色土/18: 暗黄褐色土: 下層中心の漸移層土主体。

カマド覆土

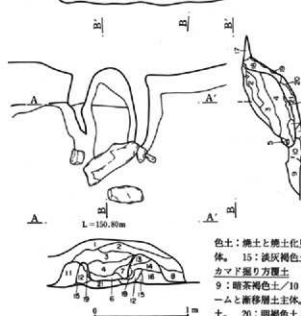
1・8: 茶褐色土: 漸移層土主体。 2: 暗茶褐色土/4: 暗褐色土/6: 暗赤褐色土: 上層中心の漸移層土主体。 4層は弱い焼土化。 6層は焼土化し下に灰層く堆積。 3: 淡赤灰褐色土: 焼土化した灰色シルトか。 5: 明赤茶褐色土: 下層中心の漸移層土主体。弱い焼土化。 7: 暗褐色土: 灰色シルトと漸移層土の混土主体。

油樋蓋柱

11: 暗赤褐色土: 焼土化進むシルト等多く入る漸移層土。 12: 暗褐色土: 焼土と焼土化見る漸移層土主体。 13: 茶褐色土/14: 褐色土: 上層中心の漸移層土主体。 15: 淡灰褐色土: 灰色シルト主体。 16: 明茶褐色土: 下層中心の漸移層土主体。

カマド覆り方覆土

9: 暗茶褐色土/10: 暗茶褐色土: 焼土化見る上層中心の漸移層土主体。 17: 黄褐色土: ロームと漸移層土主体。 18: 灰褐色土: 焼土化進む漸移層土とシルト主体。 19: 明橙褐色土。 20: 明褐色土: 焼土化見る下層中心の漸移層土主体。 21: 暗橙褐色土: やや焼土化進む漸移層土に焼土や多し。 22: 淡橙褐色土: 焼土化した漸移層土と焼土化進むローム主体。



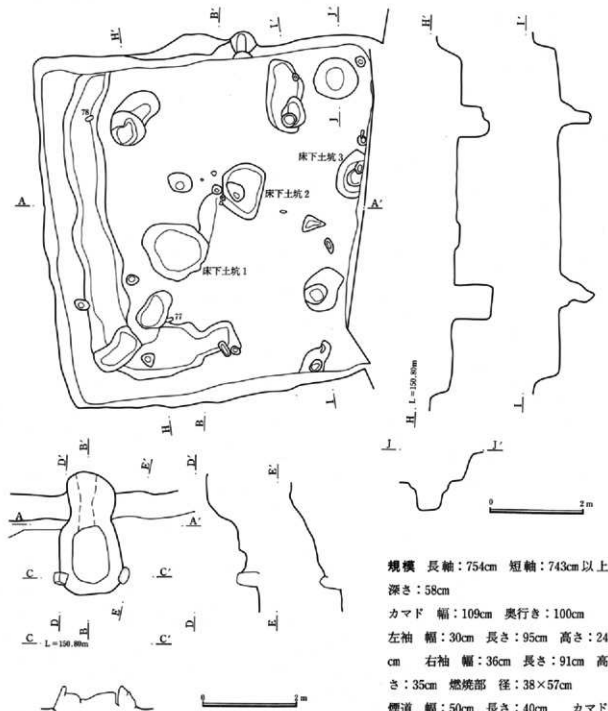
第322図 H-121号住居及びカマド

(8, 9) や胴張甕 (64) の他、台石 (52) や白玉 (82)、そして住居北西隅部を中心に出土したこも編み石 (10~51) がある。

一方、覆土中からは土師器甕片を中心に、6世紀後半から7世紀後半にかけての土師器の坏(53~55、

57, 58, 60, 59, 61)・椀 (62)・甕 (67)・胴張甕 (65)・小型甕 (66)、8世紀前半期の須恵器坏 (69) の他、盤らしき須恵器 (68)、男瓦 (70)、土錘 (71, 79)、こも編み石 (72~78)、刀子 (80)、辻金具らしい鉄製品 (81) などの出土を見た。

第3章 発見された遺構と遺物



第323図 H-121号住居掘り方

以上の所見から、本住居は6世紀後半から西暦600年を前後する時期の長い期間使用されたものと思慮され、住居廃絶後比較的早い段階から埋没が始まり、少なくとも奈良・平安時代頃までその痕跡を留めていたことが窺われる。

規模 長軸：754cm 短軸：743cm以上
深さ：58cm

カマド 幅：109cm 奥行き：100cm

左袖 幅：30cm 長さ：95cm 高さ：24cm
右袖 幅：36cm 長さ：91cm 高さ：35cm
燃焼部 径：38×57cm

煙道 幅：50cm 長さ：40cm カマド
掘り方 径：67×80cm 深さ：9cm

柱穴1 径：68×60cm 深さ：68cm

柱穴2 径：72×69cm 深さ：78cm

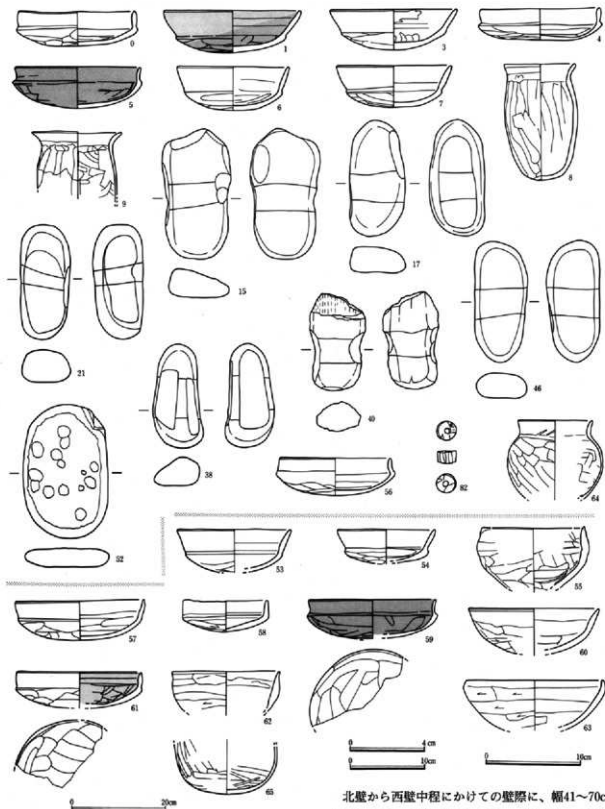
柱穴3 径：68×56cm 深さ：73cm 柱穴4 径

：64×48cm 深さ：65cm 貯蔵穴 径：80×76cm

深さ：62cm 床下土坑1 径：141×122cm 深さ：20

cm 床下土坑2 径：115×86cm 深さ：14cm

床下土坑3 径：104×53cm以上 深さ：10cm

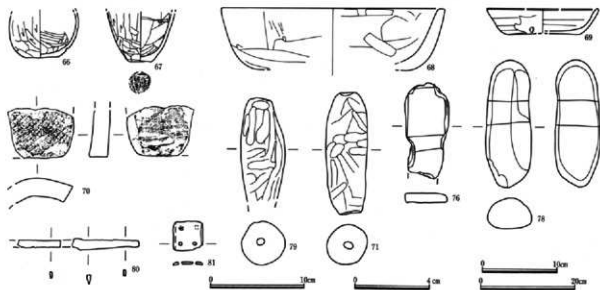


第324図 H-121号住居出土遺物(1)

構造 上述のように本住居は南部を確認できなかったが、プランは方形を呈するものと思慮される。

北壁から西壁中程にかけての壁際に、幅41~70cmを測るテラスを伴う幅60~120cm、深さ数cmの周溝状の掘り込みや、残つかの土坑の掘削される掘り方を有し、これをロームやローム漸移層土で埋め戻して床面を造っている。

第3章 発見された遺構と遺物



第325図 H-121号住居出土遺物(2)

カマドは東カマドで、東壁の中程に造られているものと思われる。カマドは東壁下に縦長の隅丸方形プランの掘り方を有し、その手前よりの両側に礎を立てて袖石としている。燃焼部は東壁の内側に設定され、カマド掘り方を焼土やシルトを含むローム漸移層土等の土壌で埋め戻して燃焼面を造っている。袖は袖石の奥側にローム漸移層土・灰色シルト・焼土等を用いて造り上げている。また、袖石の上には板状の礎が天井石として渡されていた。煙道は燃焼部の奥側から緩傾斜を持って東壁に掘削され、直ぐ

に奥壁に達して垂直方向に上がっている。

床面に於いては主柱穴4基と貯蔵穴1基を確認した。このうち主柱穴は何れもしっかりした掘り方で、掘り込みも深かったが、柱穴1・4では1~2回の掘り直しのあったことが窺われる。また、断面観察から柱材の径は20~30cm程の太いものであったと想定される。一方、貯蔵穴はカマドの右側、恐らくは南東コーナーに近い位置に掘削されている。貯蔵穴はビット様の掘り方を呈するが、上半部はやや開き気味となる。

H-122号住居(古墳時代後期, 第326~330図, 図版127・143~145・163)

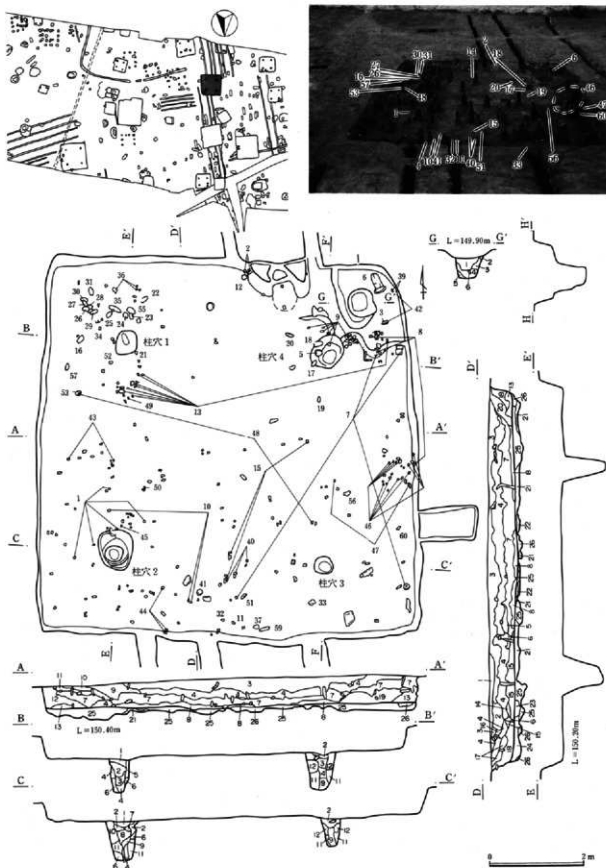
概要 本住居はD区西南部に位置するD区の大型の竪穴住居跡のうちの1軒である。

本住居には一部現代の耕作溝による攪乱が入り、カマドの袖が一部壊されている。

本住居の出土遺物のうち本住居に伴うと判断されたものには6世紀後半期から7世紀前半期の所産と判断される土師器環(1,5,12,4,2,3)と6世紀後半期の土師器の壺(6~9,13)・小型壺(10,11)や須恵器環(14)があり、他に須恵器蓋(15)や住居北西部を中心に出土したこもろみ石(16~33)、砥石(34)・台石(35)などがあつた。

覆土中からもこれらと同時期と判断される土師器の環(36,37,44,38,39,43,40~42)や高環(45)、小型壺(46,47)、須恵器蓋(48)の他、不定形石器(49,50)や磨石(51~53)、有溝砥石(54,60)、石皿(55)など縄文時代の遺物やこもろみ石(56~59)、土製の小玉(61)や土錘(62)、また滑石製の白玉(63-1~12)がまとめて出土している。

以上の点から、本住居は西暦600年を前後する時期の所産と判断され、覆土中の遺物から住居廃棄後早い段階から遺物の投棄が始まり、少なくとも平安時代頃まではその痕跡を留めていたことが推定される。



第326図 H-122号住居

第3章 発見された遺構と遺物



貯蔵穴覆土

1: 茶褐色土/3: 暗茶褐色土/4・6: 暗褐色土: ローム漸移層土(以下「漸移層土」)主体。As-YP多し。 2: 明褐色土: ロームと漸移層下層土。 5: 暗茶褐色土: 漸移層上層土主体。

住居覆土

1: 淡茶褐色土: As-A混入。 2: 黒褐色土/3・20: 茶褐色土/9: 明茶褐色土: 漸移層土主体。 4: 褐色土: 上層中心の漸移層土主体。 5: 暗黄褐色土: 漸移層土と暗色ローム。 6・13: 明褐色土/12: 明茶褐色土: ロームと漸移層土主体。 7: 明褐色土: 漸移層下層土主体。 8: 黄褐色土: ロームと7層土の混土。 10: 茶褐色土: 漸移層土と黒色土主体。 11: 明茶褐色土: 7層土と10層土の混土。 14: 茶褐色土: 下層中心の漸移層土。 15: 明茶褐色土/19: 明褐色土: 下層中心の漸移層土主体。 16: 暗茶褐色土: 漸移層上層土主体。 17: 暗茶褐色土: 黒色土に近いもの

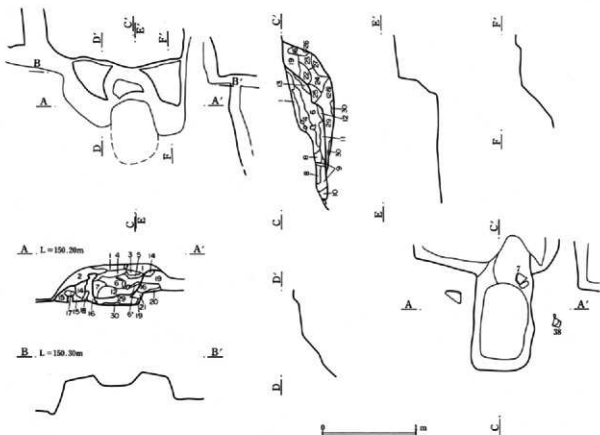
心の漸移層土主体。 18: 黒褐色土: 黒色土と漸移層上層土主体。

住居掘り方覆土

21・23: 黄褐色土: ローム主体。 22: 淡茶褐色土: 暗色ローム主体。 24: 暗茶褐色土: 漸移層土主体。 25: 暗黄褐色土: ロームとロームに近いものの中心の漸移層下層土の混土主体。 26: 淡茶褐色土: 漸移層下層土主体。

柱穴覆土

1: 暗茶褐色土: 漸移層上層土主体。 2: 明褐色土: ローム・As・YP・漸移層土の混土。 3: 明茶褐色土: 漸移層土。 4: 淡茶褐色土/11: 明褐色土: 漸移層土と暗色ロームの混土。 5: 暗黄褐色土: ローム主体。 6: 褐色土/9: 暗褐色土: 上層中心の漸移層土主体。 7: 茶褐色土: 漸移層土主体。 8・12: 明茶褐色土: 下層中心の漸移層土主体。 10: 明褐色土: ロームと下層中心の漸移層土の混土主体。



カマド覆土

1: 明褐色土: 弱い焼土化見る漸移層下層土主体。 2: 暗茶褐色土: 下層中心の漸移層土主体。 3: 褐色土: 1層土に弱い焼土化見る黒色土等多く混入。 4: 暗黄褐色土: ロームと弱い焼土化見る下層中心の漸移層土主体。 5: 暗黄褐色土: ロームと3・4層土の混土。 6: 淡茶褐色土: 弱い焼土化見る漸移層土主体。(6':

焼土とローム多く混入。) 7: 明橙褐色焼土主体。 8: 淡赤茶褐色土/9: 茶褐色土/11: 淡赤褐色土: 焼土化認める漸移層土主体。 10: 淡茶褐色土: 弱い焼土化見る下層中心の漸移層土主体。 12: 明褐色土: 焼土化進んだ漸移層土主体か。 13: 淡橙黄褐色土: 弱い焼土化見るロームと漸移層土。

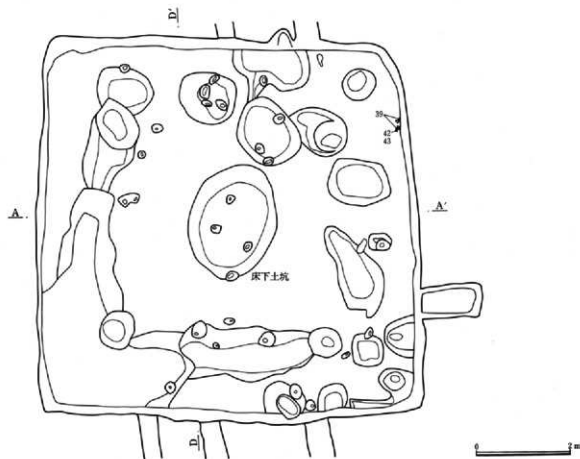
第327回 H-122号住居カマド

規模 長軸：824cm 短軸：816cm 深さ：59cm
 カマド 幅：132cm 奥行き：107cm 左袖 幅：50cm 長さ：80cm 高さ：42cm 右袖 幅：52cm 以上 長さ：74cm 高さ：40cm 燃焼部 径：49×65cm 深さ：4cm 煙道 幅：51cm 長さ：35cm カマド掘り方 径：64×93cm 深さ：13cm 柱穴1 径：51×47cm 深さ：89cm 柱穴2 径：86×73cm 深さ：88cm 柱穴3 径：42×38cm 深さ：90cm 柱穴4 径：76×62cm 深さ：82cm 貯蔵穴 径：62×59cm 深さ：66cm 床下土坑 径：250×185cm 深さ：8cm

構造 本住居は方形に近いプランを呈する。

掘り方を有し、掘り方中央には大きな浅い掘り込みの床下土坑が掘削される。また、壁から80～140cmのライン上に深さ16cm以下の周溝若しくは土坑状の掘り込みが連続的に掘削されている。床面はこうした構造を持つ掘り方をロームやローム漸移層の低位層土を使って埋め戻し造り出している。

カマドは北カマドで北壁の中央よりやや東寄りに造られている。カマドは同じ大型住居のH-121号住居と同様に、壁際に縦長の隅丸方形プランの浅い掘り方を掘削している。この掘り方をローム漸移層



袖溝壁材

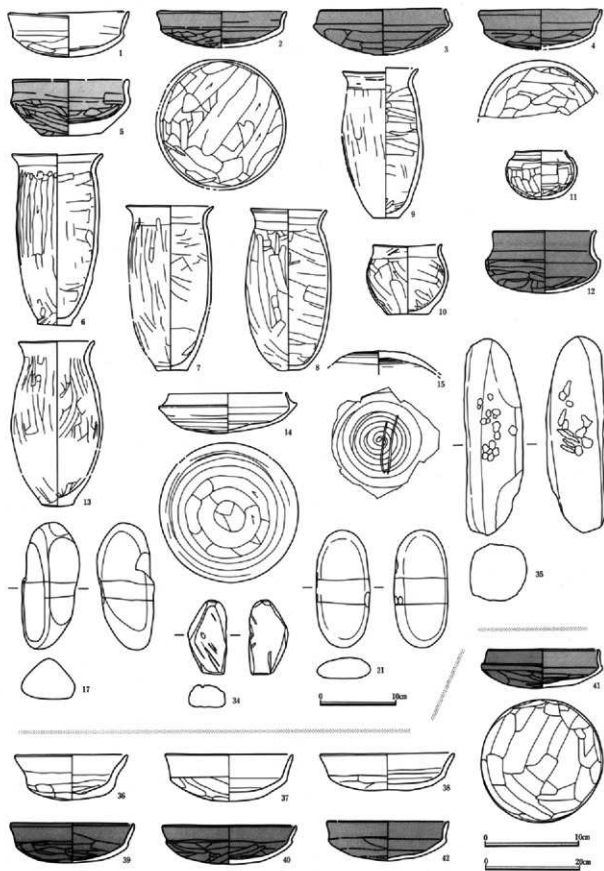
14：暗黄褐色土：ロームと弱い焼土化見る下層中心の漸移層土主体。
 15：茶褐色土：漸移層土主体。 16：淡橙褐色土：ロームと漸移層下層土主体。焼土化進行。 17：黄褐色土：ロームと漸移層下層土。 18：明黄褐色ローム。 19：明茶褐色土：下層中心の漸移層土主体。 20：明黄褐色土：部分的に焼土化するローム主体。

カマド掘り方覆土

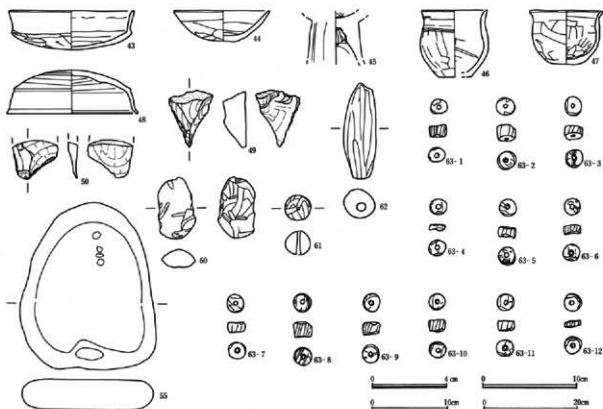
21：茶褐色土/30：暗茶褐色土：焼土化見る漸移層土主体。 22：明褐色土/23・27：明茶褐色土/24：暗褐色土：焼土化進んだ漸移層下層土主体。22→23→24と焼土化進行。 25：明橙褐色土：焼土と焼土化進んだ漸移層土の混土。 26：暗茶褐色土：焼土化進んだ漸移層土主体。 28：淡茶褐色土：灰褐色シルト主体。 29：橙褐色土：焼土化進んだ漸移層土に焼土多く混入。

第328図 H-122号住居掘り方

第3章 発見された遺構と遺物



第329図 H-122号住居出土遺物(1)



第330図 H-122号住居出土遺物(2)

土等の土壌で埋め戻して燃焼面を造り出しているが、燃焼部は北壁の手前側に設定されている。袖は破壊されているようで短い範囲でしか確認できなかったが、袖材は用いなかったようで黒色土粒や焼土粒を混入するロームまたはローム漸移層土等の土壌で造り上げている。天井材の有無は確認できなかった。また、煙道は燃焼面より20cm程上の位置より北壁を18cm程水平方向に掘削して造っており、奥壁で角度を上方に変じて掘削していつているようである。

床面に於いては主柱穴4基と貯蔵穴1基を確認した。このうち柱穴は何れもしっかりした深い掘り込

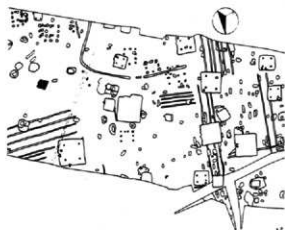
みを有しているが、その径は柱穴1と柱穴3に対し柱穴2と柱穴4は大きく、掘り返しの行われた可能性が考えられる。また覆土の断面には柱痕も観察され、柱材の径は20cm程を測る太さのものであったと想定される。一方貯蔵穴はカマド右側の北東コーナー付近に掘削されている。北東コーナー部分では貯蔵穴の南と西を画するように、やや不整形ではあるが東西160cm、南北180cmの範囲で幅50~80cm、高さ6cm程で床面が盛り上げられており、貯蔵穴はその内側に掘削されている。貯蔵穴の形態は柱穴様で、貯蔵穴本体に特段の構造は認められなかった。

H-133号住居(平安時代、第331図、図版127・145)

概要 本住居はD区東部に位置する小型の竪穴住居跡である。

本住居付近は削平が進み、本住居では床面も削られて確認できなかった。また南西コーナー付近は後述のDd-29グリッド所在土坑によって大きく壊されており、小ピットが幾つか入っていた。

本住居からの出土遺物は僅かで、掘り方に当たる覆土中から土師器片1点、須恵器片5点、布目瓦片1点が出土したに過ぎず、本住居の時期の特定には至らなかったが、この中には西暦900年前後の所産と思われる須恵器環・椀(1,2)が含まれていたため、本住居はそれ以降の所産として把握される。



床下土坑1覆土

1：褐色土：暗褐色土小ブロックとくすんだローム粒・ブロック等を僅かに混入。 2：暗褐色土：1層に比し色調若干暗く、明るいロームブロックと暗いロームブロックを僅かに含む。良く締まり粘性有り。

床下土坑2覆土

1：褐色土：灰黄褐色土粒とロームブロック僅かに含む。やや締まり悪いが粘性有り。 2：黄褐色土：ローム粒主体。褐色土とAs-YP僅かに含む。やや締まり悪い。

規模 長軸：331cm 短軸：328cm 深さ：4cm

カマド 残存 径：64×66cm 掘り方 径：65×57cm 深さ：6cm

床下土坑1 径：115×107cm 深さ：10cm
床下土坑2 径：77×74cm 深さ：12cm

構造 本住居は遺存状況が悪く、構造を明確にできなかったが、本住居は概ね方形のプランを呈する。

本住居は床下土坑2基が掘削される掘り方を有する。掘り方には他にもピットが幾つか見られたが本

ピット覆土

1：暗褐色土：ロームと白色粒子僅かに含む。

住居(掘り方)覆土

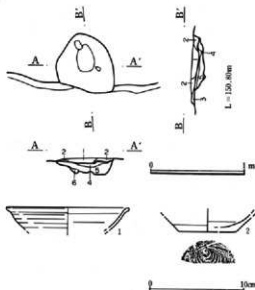
2：暗黄褐色土：くすんだ暗黄褐色土粒主体。褐色土まばらに含む。 3：黄褐色土：地山に近いローム主体。白色粒とAs-YP極く僅かに含む。

カマド覆土

1：灰赤褐色土：暗赤褐色土と塊土僅かに含む。 2：暗褐色土：暗灰黄褐色土等僅かに含む。 3：暗褐色土：ローム等僅かに含む。

カマド掘り方覆土

4：灰赤褐色土主体。暗褐色土粒・暗黄褐色土粒混在。 5：暗褐色土主体。灰黄褐色土等僅かに含む。 6：暗黄褐色土：くすんだローム主体。



第331図 H-133号住居及び出土遺物

住居との関係は特定できなかった。床はこうした掘り方を暗黄褐色土等で埋め戻して造るようである。

カマドは東カマドで東壁中央付近に造られる。浅い掘り方を有し、これを暗褐色土等で埋め戻して燃焼面造っている。

床面は検出されず、柱穴・貯蔵穴も比定することはできなかった。